

薬学部 医療薬学科

専任教員の教育研究活動報告書

令和5年3月



【薬学部】

[医療薬学科]

阿部 肇	1
岡村 恵美子	4
齋藤 一樹	24
柴田 克志	35
関 貴弘	37
寺岡 麗子	49
通山 由美	59
長久保 大輔	73
中村 隆典	80
蓮元 憲祐	85
増田 智先（学部長）	96
矢上 達郎	102
柳澤 振一郎	109
柳澤 吉則	117
山本 直樹	121

角山 圭一	1 2 3
川井 真好	1 3 7
兒島 憲二	1 4 8
寺田 一樹	1 5 3
原野 雄一	1 6 1
山中 理央	1 6 3
山本 泰弘	1 6 7
若林 千里	1 7 6
加藤 史恵	1 7 8
酒井 伸也	1 8 1
田畑 裕幸	1 8 3
中山 優子	1 8 9
村重 諒	1 9 4
安岐 健三	1 9 7
内田 和彦	1 9 9
香山 賢一	2 0 1

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	阿部 肇	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
有機化学の効果的な教育法の工夫	2018 年 4 月～現在	有機化学に関連した科目「基礎化学」「有機化学Ⅰ」「有機化学Ⅱ」「有機化学実習」「薬剤設計学」の講義・実習を実施するにあたり、反応式や分子モデルを多用した予習用の資料、復習用の資料を事前事後に配布する。講義前にはこれから何を学習するか、講義中には周辺事項と関連した意識づけ、講義後には何を復習すべきかのメリハリづけを行うことにより、教育効果の向上を図っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
甲南大学 非常勤講師 山口大学 非常勤講師 薬学部教育改善実施（FD）委員 薬剤師国家試験問題検討委員（物理・化学・生物部会） 有機化学系教科担当教員会議	2023 年～現在 2022 年～現在 2021 年 4 月～現在 2020 年 4 月～2023 年 3 月 2018 年～現在	アドバンストマテリアル（フロンティアサイエンス研究科 分担） 天然物有機化学（理学部 集中講義）

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著・単著	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 事項なし						
Metathesis-Based Stapling of a Pyridine-Acetylene-Phenol Oligomer Having Alkenyl Side Chains after Intermolecular Templatation by Native Saccharides	共著	2018 年 6 月	VCH European Journal of Organic Chemistry 2018 年, 24 号	Hajime Abe, Chihiro Sato, Yuki Ohishi, Masahiko Inouye	3131-3138	
Spontaneous Helix Formation of "meta"-Ethynylphenol Oligomers by Sequential Intramolecular Hydrogen-Bonding Inside the Cavities	共著	2018 年 8 月	米国化学会 The Journal of Organic Chemistry 2018 年, 83 巻, 15 号	Tomoya Hayashi, Yuki Ohishi, So Hee-Soo, Hajime Abe, Shinya Matsumoto, Masahiko Inouye	8724-8730	

Investigation of receptor-mediated cyanocobalamin (vitamin B12) transport across the inner blood-retinal barrier using fluorescence-labeled cyanocobalamin	共著	2018 年 8 月	米国化学会 Molecular Pharmaceutics 2018 年, 15 卷, 8 号	Yuri Kinoshita, Kagayaki Nogami, Ryuta Jomura, Shin-ichi Akanuma, Hajime Abe, Masahiko Inouye, Yoshiyuki Kubo, Ken-ichi Hosoya	3583-3594	
Aromatic Foldamers Recognizing Saccharides to Form Chiral Helices	単著		日本薬学会 薬学雑誌 2019 年, 139 卷, 4 号	阿部肇	591-598	
Enantioselective Solid-Liquid Extraction of Native Saccharides with Chiral BINOL-Based Pyridine-Phenol Type Macrocycles	共著		米国化学会 Organic Letters 2019 年, 21 卷, 16 号	Yuki Ohishi, Mikino Murase, Hajime Abe, Masahiko Inouye	6202-6207	
Preferential Recognition and Extraction to Pentoses over Hexoses by a D6h-Symmetrical Ethynylphenol Macrocyclic with Six Inner Phenolic Hydroxy Groups	共著		米国化学会 The Journal of Organic Chemistry 2020 年, 85 卷, 4 号	Tomoya Hayashi, Yuki Ohishi, Hajime Abe, Masahiko Inouye	1927-1934	
Saccharide Recognition by a Three-Arm-Shaped Host Having Preorganized Three-Dimensional Hydrogen-Bonding Sites	共著		VCH Chemistry a European Journal 2021 年, 27 卷, 2 号,	Yuki Ohishi, Kentaro Masuda, Kazuki Kudo, Hajime Abe, Masahiko Inouye	785-793	
【その他】						
(国際学会発表)						
Tridentate Tetraarene Receptor for Hydroxy Guests		2018 年 9 月 富山	The Third International Symposium on Toyama-Asia-Africa Pharmaceutical Network	Hajime Abe (招待)		
Arylene Ethynylene Foldamers with Pyridine and/or Phenol Units		2019 年 3 月 ソウル	The 2nd Workshop on Aromatic Foldamers 2019 Seoul	Hajime Abe (招待)		
Development of Chain-Type and Macrocyclic-Type Oligomers Consisted of “meta”-Ethynylphenol Units		2018 年 11 月 京都	The 14th International Kyoto Conference on New Aspects of Organic Chemistry (IKCOC-14)	Tomoya Hayashi, Yuki Ohishi, So Hee-Soo, Hajime Abe, Shinya Matsumoto, Masahiko Inouye		
(その他学会発表)						
内孔に 6 個のフェノール性水		2018 年 9 月	第 29 回基礎有機化学討論	林友哉・大石雄		

酸基を持つ大環状エチニルフェノールオリゴマーの合成とゲスト認識		東京	会	基・阿部肇・井上将彦		
内包での sequential な水素結合により自発的にらせん構造を形成するオリゴマーの創製		2018 年 9 月 富山	平成 30 年度有機合成化学北陸セミナー	林友哉・大石雄基・蘇熙洙・阿部肇・松本真哉・井上将彦		
“meta”-エチニルフェノール大環状分子のサイズ選択的なゲスト認識		2019 年 3 月 神戸	日本化学会第 99 春季年会	林友哉・大石雄基・阿部肇・井上将彦		
かご型ピリジン-アセチレンフェノール分子のβ-ガラクトシド選択的会合		2019 年 3 月 神戸	日本化学会第 99 春季年会	工藤和樹・増田賢太郎・大石雄基・阿部肇・井上将彦		
トリアリールメシチレン型ホスト分子の開発		2019 年 5 月 金沢	第 17 回ホスト-ゲスト・超分子化学シンポジウム	阿部肇・中里佳澄・藤江直巳・浅山範久・坂部拓哉		
BINOL 構造を導入したピリジン-アセチレンフェノール大環状ホスト分子によるエナンチオ選択的な天然糖認識		2019 年 5 月 金沢	第 17 回ホスト-ゲスト・超分子化学シンポジウム	大石 雄基・村瀬実希乃・阿部肇・井上 将彦		
“meta”-エチニルフェノール大環状ホスト分子の合成とそのサイズ選択的なゲスト認識		2019 年 5 月 金沢	第 17 回ホスト-ゲスト・超分子化学シンポジウム	林 友哉・大石 雄基・阿部 肇・井上 将彦		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2019 年 12 月 19 日	第 24 回西播・姫路医療セミナー（共催：姫路薬剤師会など）座長
2023 年 8 月 10 日	たつの夏のリコチャレ 2023（主催：たつの市）講義、実験
2024 年 3 月 2 日	姫路獨協大学公開講座 中学生のためのサイエンスラボ 講義、実験

Ⅴ 学内における主な活動

2018 年 4 月～現在	危険物管理委員（2024 年 4 月より委員長・危険物保安監督者）
2019 年 4 月～現在	OSCE 実施委員（2024 年 4 月より委員長）
2021 年 4 月～現在	薬学部教育改善実施（FD）委員
2021 年 4 月～現在	評議員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	特別教授	氏名	岡村 恵美子	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	------	----	--------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
基礎物理学の講義における動画の活用と自作教材の作成	2007 年 4 月～7 月 2008 年 10 月～2009 年 1 月 2009 年 10 月～現在	姫路獨協大学薬学部の 1 年次生を対象にした「基礎物理学」の講義において動画を積極的に活用し、運動の記述を行う物理学の理解を助ける手段とした。動画の活用は、学生を対象に実施されたアンケートにおいて、特に高い評価を得た。さらに、穴埋め式の自作の教材を作成し、復習などに活用させた。
物理化学の講義において、身近な現象を通して物理化学の法則性を理解させる工夫	2008 年 4 月～7 月 2009 年 4 月～7 月 2010 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部の 2 年次生を対象にした「物理化学」の講義において、身近な実例を通して物理化学の法則性を理解させる工夫を行った。講義の中でパワーポイントのスライドや実験によるデモを行い、身近な実例をふんだんに取り入れながら、法則との関連を学生に体感させた。
物理化学の講義のキーワードや演習問題をまとめた自作プリントの作成	2008 年 4 月～7 月 2009 年 4 月～7 月 2010 年 4 月～現在	物理化学の講義において、講義のキーワードをまとめたプリントを毎回作成して学生に配布した。演習問題は、薬剤師国家試験も視野に入れて作成し、学生が問題を解くことで、講義の理解と同時に国家試験対策も兼ねられるように配慮した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
薬学生のための 生物物理化学入門（廣川書店） （共著）	2008 年 11 月 20 日	薬学の土台となる「生物物理化学」を初めて学ぶ薬学生のための教科書として出版された。薬剤師国家試験出題基準や薬学教育モデルコアカリキュラムにも基づくものである。第 5 章「生体内への物質移動」を執筆した。
物理化学実習の手引き	2009 年 6 月 29 日	姫路獨協大学薬学部の 3 年次生を対象にした「物理化学」の実習書である。
物理化学 CBT 対策問題と解説	2009 年 9 月 7 日	薬剤師となるための前段階である薬学共用試験 CBT（computer based testing）に向けて姫路獨協大学薬学部で開講された CBT 補講・物理化学分野の教材である。
CBT 対策と演習「物理化学」 （廣川書店）（共著）	2009 年 10 月 30 日	CBT 合格を目指して、薬学物理化学分野の知識を整理し、演習問題を通して基礎学力を養成する「参考書」兼「問題集」である。第 11 章「拡散・膜透過」、第 14 章「生物物理化学」を執筆した。
基礎実験（物理）実習書（改訂版）	2011 年 9 月 16 日	姫路獨協大学薬学部の 1 年次生を対象にした基礎実験（物理分野）の手引きである。テーマ III「分子模型」の内容を改訂した。
製剤への物理化学（第 2 版） （廣川書店）（共著）	2012 年 2 月 25 日	薬学部学生のための物理化学入門書。第十六改正日本薬局方と薬学教育モデル・コアカリキュラムを考慮し、薬学部初級～中級レベルの物理化学教科書として編集・改訂された。改訂の主要部分に相当する第 4 章「熱力学」を執筆した。

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
物理化学系科目担当教員会議 2009 における講演「六年制における物理系薬学教育の現状と課題：私立新設校の実例」	2009 年 3 月 27 日	日本薬学会第 129 年会会期中に開催された物理化学系科目担当教員会議 2009 において、標記の依頼講演を行った。会議では、薬学部 の六年制教育開始後における物理系薬学の講義と実習の現状と課題を明らかにし、議論のきっかけとすることを目的とした。六年制における物理系教育の現状と課題について、私立新設学部の立場から実例を紹介した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
神戸薬科大学大学院物理化学特論における特別講義	2008 年 4 月 24 日	神戸薬科大学における大学院生対象の講義科目、物理化学特論において、「NMR の基礎と薬学への展開」と題した特別講義を行った。
富山大学大学院医学薬学研究部における特別講義	2009 年 6 月 25 日	富山大学大学院医学薬学研究部において開講されている大学院生対象の講義科目「物性物理化学特論」のなかで、「NMR による膜中薬物の挙動の解析」と題して特別講義を行った。
同志社大学大学院工学研究科における集中講義	2011 年 9 月 14～17 日	同志社大学大学院工学研究科・修士課程学生対象の「応用化学集中講義 I」において、「NMR（核磁気共鳴）分光法—原理、基礎と応用」と題して集中講義を行った。
徳島大学大学院（創薬人育成のための創薬実践道場教育構築事業）における特別講義	2015 年 6 月 25 日	徳島大学大学院（創薬人育成のための創薬実践道場教育構築事業）において、大学院生を対象に、「加齢にともなうアスパラギン酸の異性化と立体配座：水晶体 α A クリスタリンペプチドの高分解能 ^1H -NMR 研究」と題した特別講義を行った。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著別	発行または発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数	備 考
【著書】 Liquid Interfaces in Chemical, Biological, and Pharmaceutical Applications	共著	2001 年 2 月	Marcel Dekker, Inc., New York	© E. Okamura, and M. Nakahara	775-805	第 32 章「NMR Studies on Lipid Bilayer Interfaces Coupled with Anesthetics and Endocrine Disruptors」を執筆
揺らぎ・ダイナミクスと生体機能—物理化学的視点から見た生体分子	共著	2013 年 9 月	化学同人	岡村 恵美子	212-230	第 14 章「生体膜」を執筆
Encyclopedia of Biocolloid and Biointerface Science, Volume 1	共著	2016 年 7 月	John Wiley & Sons, Inc.	E. Okamura	391-402	第 30 章「NMR of Drug Delivery Coupled with Lipid Membrane Dynamics」を執筆

【論文】						
NMR で捉えた膜のなかの分子の動き	共著	2004 年 3 月	化学, 第 59 巻, 3 号	◎岡村恵美子, 中原 勝	66-67	
NMR Study on the Binding of Neuropeptide Achatin-I to Phospholipid Bilayer: The Equilibrium, Location, and Peptide Conformation	共著	2004 年 7 月	Biophysical Journal, 第 87 巻, 1 号	◎T. Kimura, E. Okamura, N. Matubayasi, and M. Nakahara	375-385	
Limited Slowdown of Endocrine-Disruptor Diffusion in Confined Fluid Lipid Membranes	共著	2004 年 12 月	Physical Review Letters, 第 93 巻, 24 号	◎E. Okamura, C. Wakai, N. Matubayasi, Y. Sugiura, and M. Nakahara	248101	2011 Impact factor=7.37
NMR による脂質二分子膜の構造・ダイナミクスと麻酔剤の取り込み・輸送	共著	2005 年 3 月	麻酔と蘇生, 第 41 巻, 1 号	◎岡村恵美子, 中原 勝	21-22	
Real-time In-cell ¹⁹ F NMR Study on Uptake of Fluorescent and Nonfluorescent ¹⁹ F-Octaarginines into Human Jurkat Cells	共著	2005 年 7 月	Chemistry Letters, 第 34 巻, 7 号	◎E. Okamura, K. Ninomiya, S. Futaki, Y. Nagai, T. Kimura, C. Wakai, N. Matubayasi, Y. Sugiura, and M. Nakahara	1064-1065	
Mobility and Location of Anesthetics in Lipid Bilayer Membranes by High-Resolution, High-Field-Gradient NMR	共著	2005 年 9 月	International Congress Series, 第 1283 巻	◎E. Okamura and M. Nakahara	203-206	
Dynamic and 2D NMR Studies on Hydrogen-bonding Aggregates of Cholesterol in Low-polarity Organic Solvents	共著	2006 年 8 月	The Journal of Physical Chemistry B, 110 巻, 31 号	◎C. Giordani, C. Wakai, E. Okamura, N. Matubayasi, and M. Nakahara	15205-15211	2011 Impact factor=3.696
Cholesterol Location and Orientation in Aqueous Suspension of Large Unilamellar Vesicles of Phospholipid Revealed by Intermolecular Nuclear Overhauser Effect	共著	2008 年 3 月	The Journal of Physical Chemistry B, 112 巻, 9 号	◎C. Giordani, C. Wakai, K. Yoshida, E. Okamura, N. Matubayasi, and M. Nakahara	2622-2628	2011 Impact factor=3.696
Drug Binding and Mobility Relating to the Thermal Fluctuation in Fluid Lipid Membranes	共著	2008 年 12 月	The Journal of Chemical Physics, 129 巻, 21 号	◎E. Okamura and N. Yoshii	215102	2011 Impact factor=3.333
Kinetics of Membrane Binding and Dissociation of 5-Fluorouracil by Pulsed Field Gradient ¹⁹ F NMR	共著	2009 年 5 月	Chemical Physics Letters, 474 巻	◎N. Yoshii and E. Okamura	357-361	Impact factor=2.337
高分解能溶液 NMR で捉えた脂質膜のダイナミクスと薬物の分配・輸送	単著	2009 年 5 月	膜, 34 巻, 3 号	岡村恵美子	117-125	
高分解能溶液 NMR による薬物の膜への結合と膜のなかのダ	単著	2009 年 10 月	アンサンブル, 11 巻, 4 号	岡村恵美子	18-21	

イナミクス						
特集「膜の揺らぎと機能への展開：研究の最前線」を企画して	単著	2011 年 1 月	膜 36 巻, 1 号	岡村恵美子	1	
ソフトな脂質膜の揺らぎと薬物透過についての NMR 研究	共著	2011 年 1 月	膜 36 巻, 1 号	◎吉井範行、 <u>岡村恵美子</u>	9-15	
NMR による脂質膜中の薬物の「運動」の解析	共著	2011 年 6 月	オレオサイエンス, 第 11 巻, 6 号	◎吉井範行、 <u>岡村恵美子</u>	213-220	日本油化学会 オレオサイエンス賞受賞論文
Binding of Hydrophobic Fluorinated Bisphenol A to Large Unilamellar Vesicles of Egg Phosphatidylcholine	共著	2011 年 8 月	The Journal of Physical Chemistry B, 115 巻, 38 号	◎N. Yoshii and <u>E. Okamura</u>	11074-11080	2011 Impact factor=3.696
Kinetics of binding and diffusivity of leucine-enkephalin in large unilamellar vesicle by pulsed-field-gradient ¹ H NMR <i>in situ</i>	共著	2011 年 11 月	Biophysics, 7 巻	◎N. Yoshii, T. Emoto, and <u>E. Okamura</u>	105-111	
Physicochemical Mechanism for the Lipid Membrane Binding of Polyarginine: the Favorable Enthalpy Change with Structural Transition from Random Coil to α -Helix	共著	2012 年 10 月	Chemistry Letters, 第 41 巻, 10 号	◎Y. Takechi, C. Mizuguchi, M. Tanaka, T. Kawakami, S. Aimoto, <u>E. Okamura</u> , and H. Saito	1374-1376	
Slow Tumbling but Large Protrusion of Phospholipids in the Cell Sized Giant Vesicle	共著	2013 年 5 月	<i>Chem. Phys. Lett.</i> , 570 巻	◎Y. Takechi, H. Saito, and <u>E. Okamura</u>	136-140	
Lateral Diffusion of Lipids Separated from Rotational and Translational Diffusion of a Fluid Large Unilamellar Vesicle	共著	2013 年 6 月	<i>Colloid Surf. B-Biointerfaces</i> , 106 巻	◎N. Yoshii, T. Emoto, and <u>E. Okamura</u>	22-27	
Uptake of Sevoflurane Limited by the Presence of Cholesterol in the Lipid Bilayer Membrane: A Multinuclear Nuclear Magnetic Resonance Study	共著	2014 年 10 月	<i>J. Oleo Sci.</i> , 63 巻, 11 号	◎ <u>E. Okamura</u> , Y. Takechi, and K. Aki	1149-1157	
Regulation of Phospholipid Protrusion in the Cell Sized Vesicle by Hydrophobic Bisphenol A	共著	2015 年 1 月	<i>Membrane</i> , 40 巻, 1 号	◎Y. Takechi, Y. Shintani, D. Kimoto, and <u>E. Okamura</u>	38-45	日本膜学会 「膜誌論文賞」受賞論文
Staggered side-chain conformers of aspartyl residues prerequisite to transformation from L- α - to D- β -aspartate 58 in human-lens α A-crystallin fragment	共著	2015 年 1 月	<i>Biophys. Chem.</i> , 196 巻	◎K. Aki and <u>E. Okamura</u>	10-15	
D- β -aspartyl residue exhibiting uncommon high resistance to spontaneous	共著	2016 年 2 月	<i>Sci. Rep.</i> , 6 巻	◎K. Aki and <u>E. Okamura</u>	21594	

peptide bond cleavage						
Kinetics of Membrane Binding and Mobility of Drugs by Multinuclear Dynamic NMR in Situ	単著	2016 年 3 月	<i>Journal of the Society of Japanese Women Scientists</i> , 16 巻	<u>E. Okamura</u>	7-14	
Kinetics of the competitive reactions of isomerization and peptide bond cleavage at L- α - and D- β -aspartyl residues in an α A-crystallin fragment	共著	2017 年 1 月	<i>J. Pept. Sci.</i> , 23 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	28-37	
Glycosaminoglycan Binding and Non-endocytic Membrane Translocation of Cell-permeable Octaarginine Monitored by Real Time In-cell NMR Spectroscopy	共著	2017 年 4 月	<i>Pharmaceuticals</i> , 10 巻	© Y. Takechi-Haraya, K. Aki, Y. Tohyama, T. Harano, H. Kawakami, Saito, and <u>E. Okamura</u>	42	
Solution NMR to Quantify Mobility in Membranes: Diffusion, Protrusion, and Drug Transport Processes	単著	2019 年 4 月	<i>Chem. Pharm. Bull.</i> , 67 巻	<u>E. Okamura</u>	308-315	Invited Review
Side-chain conformers to allow conversion from normal to isoaspartate in age-related proteins and peptides	共著	2020 年 7 月	<i>BBA - Proteins and Proteomics</i> , 1868 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	140483	
Real-Time in-Situ ^1H NMR of Reactions in Peptide Solution: Preaggregation of Amyloid- β Fragments Prior to Fibril Formation	共著	2020 年 8 月	<i>Pure and Applied Chemistry</i> , 92 巻	© <u>E. Okamura</u> and K. Aki	1575-1583	
Isomerization of aspartyl residue in amyloid beta fragments: The kinetics by real-time ^1H NMR under neutral and basic conditions	共著	2020 年 10 月	<i>J. Soln. Chem.</i> , 49 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	1293-1303	
NMR による薬物の膜輸送: リン脂質膜内の薬物の拡散, 膜への結合と解離, 細胞膜透過	単著	2022 年 4 月	<i>Netsu Sokutei</i> , 49 巻 2 号	<u>岡村恵美子</u>	72-78	
Real-Time ^1H NMR Reveals Position and Sequence Dependences of Amino Acid Isomerization in Amyloid Beta Fragments in Situ	共著	2022 年 10 月	<i>Journal of Molecular Liquids</i> , 364 巻	©K. Aki and <u>E. Okamura</u>	120050	
【その他、解説記事など】						
柔らかな生体界面の構造と機能: 膜の動きと物質輸送の NMR	単著	2014 年 8 月	<i>Colloid & Interface Communication</i> , 39 巻, 3 号	<u>岡村恵美子</u>	23-25	
細胞と界面化学	単著	2016 年 12 月	<i>化学と工業</i> 69 巻, 12 号	<u>岡村恵美子</u>	1080	
化粧品開発が知って得する, コ	単著	2016 年 10 月	<i>COSMETIC STAGE</i> , 11	<u>岡村恵美子</u>	78-81	

ロイド分散系微粒子ベシクル・リポソームのメカニズム 第1回 ベシクル・リポソームの種類と作り方			巻, 1号			
化粧品開発が知って得する, コロイド分散系微粒子ベシクル・リポソームのメカニズム 第2回 ベシクル・リポソームの測定法	単著	2016年12月	<i>COSMETIC STAGE</i> , 11巻, 2号	岡村恵美子	55-58	
化粧品開発が知って得する, コロイド分散系微粒子ベシクル・リポソームのメカニズム 第3回 ベシクル・リポソームの性質	単著	2017年2月	<i>COSMETIC STAGE</i> , 11巻, 3号	岡村恵美子	58-61	
臨床で役立つ麻酔作用機序: 物理化学の目で見た麻酔薬のふるまい	単著	2021年6月	<i>Life Support and Anesthesia</i> , 28巻, 6号	岡村恵美子	633-641	
加齢によるアスパラギン酸異性体の蓄積とそのメカニズム: 側鎖の立体配座と熱力学的安定性からの考察	単著	2022年8月	<i>溶液化学研究会誌</i> , 2巻	岡村恵美子	7-9	
【受賞】 薬物の in-cell NMR: シグナルの非侵襲検出と輸送解析	単独	2009年6月	第2回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント	岡村恵美子		
NMR による脂質膜中の薬物の「運動」の解析	共同	2012年10月	第11回 日本油化学会 オレオサイエンス賞	吉井範行、岡村恵美子		
Regulation of Phospholipid Protrusion in the Cell Sized Vesicle by Hydrophobic Bisphenol A	共同	2016年5月	日本膜学会 膜誌論文賞	Y. Takechi, Y. Shintani, D. Kimoto, and E. Okamura		
日本油化学会第13回女性科学者奨励賞	単独	2022年4月		岡村恵美子		
【招待講演】 ソフトマターとしての生体モデル膜ナノ空間における分子の自己拡散	共同	2005年4月	電気化学会第72回大会	岡村恵美子、若井千尋、松林伸幸、中原勝		
膜とドラッグデリバリーの高分解能溶液NMR研究	単独	2006年12月	分子科学研究所 第27回CMSセミナー			
NMRの基礎と薬学への展開	単独	2008年4月	神戸薬科大学大学院 特別講義			
微粒子分散系の化学: ベシクル・リポソーム	単独	2008年5月	日本油化学会フレッシュマンセミナー OSAKA (2008)			
Drug Binding and Mobility in Model Cell Membranes in Situ: A Pulsed-Field-Gradient NMR Approach	単独	2008年6月	Special Seminar, University of Pittsburgh, Molecular Biophysics and Structural Biology			
NMRによる膜中薬物の挙動の解析	単独	2009年6月	日本薬学会北陸支部 特別講演会			

Drug Binding and Mobility in Membranes by High-Resolution Solution NMR	単独	2009 年 11 月	第 47 回日本生物物理学会年会			
ドラッグデリバリーの動的NMR解析	単独	2010 年 6 月	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部製剤設計薬学分野セミナー			
水中の脂質二分子膜の構造・ダイナミクスと薬物輸送の溶液NMR研究	単独	2010 年 11 月	第 33 回溶液化学シンポジウム			
ソフトな脂質膜の揺らぎと薬物透過についてのNMR研究	共同	2010 年 11 月	膜シンポジウム 2010	吉井範行、 <u>岡村恵美子</u>		
脂質膜のダイナミクスと薬物分配に関する NMR 解析	単独	2011 年 5 月	日本薬学会第 26 年会			
くすりの動き・吸収に見るコロイド・界面化学	単独	2011 年 7 月	第 29 回関西界面科学セミナー			
微粒子分散系の化学：ベシクル・リボソーム	単独	2012 年 5 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー OSAKA (2012)			
微粒子分散系の化学：ベシクル・リボソーム	単独	2014 年 5 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー OSAKA (2014)			
溶液 NMR によるリボソーム膜の動的構造と薬物輸送研究への展開	単独	2014 年 6 月	第 32 回物性物理化学研究会			
アスパラギン酸の異性化に関わる側鎖の立体配座の高分解能 ^1H -NMR 解析: αA クリスタリン模擬ペプチドを例として	共同	2014 年 12 月	第 7 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
加齢にともなうアスパラギン酸の異性化と立体配座: 水晶体 αA クリスタリンペプチドの高分解能 ^1H -NMR 研究	単独	2015 年 6 月	徳島大学大学院(創薬人育成のための創薬実践道場教育構築事業) 特別講演会			
水晶体タンパク質模擬ペプチド中の Asp 異性化に関わる側鎖の立体配座の NMR 研究	単独	2015 年 6 月	第 15 回日本蛋白質科学会年会 ワークショップ「蛋白質とアミノ酸のキラルサイエンス」			
NMR によるリボソーム膜の構造と薬物保持状態の解析	単独	2015 年 10 月	第 3 回コロイド実用技術講座: 分散・凝集のすべて			
L- α -および D- β -アスパラギン酸含有ペプチドの分解と異性化反応の速度論: リアルタイム NMR と HPLC による解析	共同	2015 年 11 月	第 8 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
Mobility, location, and kinetics of membrane binding and delivery of drugs by solution-state ^{19}F and ^1H NMR	単独	2015 年 11 月	6 th Asian Conference on Colloid and Interface Science			
微粒子分散系の化学：ベシクル・リボソーム	単独	2016 年 6 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー			

ベシクル・リポソームの科学－調製から物性・測定・応用まで－	単独	2016 年 7 月	OSAKA (2016) 第 34 回関西界面科学セミナー			
NMR によるリポソーム膜の構造と薬物保持状態の解析	単独	2016 年 12 月	第 4 回コロイド実用技術講座：分散・凝集のすべて			
溶液 NMR によるリポソーム膜の構造と薬物保持状態の解析	単独	2017 年 8 月	日本薬学会 物性 FG セミナー 2017 「化学構造解析だけじゃもったいない！医薬品開発への NMR の応用」			
溶液 NMR による膜の動的構造と膜を場とした生体反応解析	単独	2017 年 12 月	科学研究費助成事業新学術領域「生命分子システムにおける動的秩序形成と高次機能発現」第 2 回秩序化分子システムワークショップ			
リン脂質 2 重層リポソーム：その構造・ダイナミクスから機能まで	単独	2018 年 5 月	食品ハイドロコロイドセミナー2018			
微粒子分散系の化学：ベシクル・リポソーム	単独	2018 年 6 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー OSAKA (2018)			
高分解能溶液 NMR によるペプチド中の異性化、ペプチド鎖切断、凝集過程のリアルタイム計測： α クリスタリンとアミロイド β ペプチド	共同	2018 年 12 月	第 10 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
アスパラギン酸の異性化及び切断反応における複数残基同時観測と速度論解析～リアルタイム NMR を用いて～	共同	2018 年 12 月	第 10 回「タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会」	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
Real-Time in-Situ NMR of Biologically Relevant Reactions in Peptide Solution: Spontaneous Peptide Bond Cleavage of Aspartyl Isomers and Preaggregation of Amyloid- β Fragments	単独	2019 年 8 月	The 36th International Conference on Solution Chemistry, Xining, China			
Real-Time NMR Spectroscopy of Biologically Relevant Reaction: Preaggregation of Amyloid- β Fragments Prior to Fibril Formation	単独	2019 年 11 月	OKINAWA COLLOIDS 2019, Nago, Okinawa, Japan			
マイクロカプセル・ベシクル・リポソーム	単独	2021 年 11 月	日本油化学会フレッシュマンセミナー：界面と界面活性剤			
Real-time peptide reactions by solution NMR: Preaggregation in amyloid- β fragment and cell entry of	単独	2021 年 12 月	Pacificchem 2021 (virtual)			

membrane-permeable peptide						
Real-time ^{19}F NMR of peptides in solution: Preaggregation of amyloid- β and α -synuclein, and cell entry of membrane-permeable peptides	単独	2022 年 7 月	The 37th International Conference on Solution Chemistry, Bogota, Colombia (virtual)			
【国際会議発表】 Location and Side-Chain Conformation of a Neuropeptide, Achatin-I in Phospholipid Bilayer Membrane: A High-Resolution NMR Study	共同	2004 年 2 月	Biophysical Society 48th Annual Meeting	Tomohiro Kimura、 <u>Emiko Okamura</u> 、Nobuyuki Matubayasi and Masaru Nakahara		
Mobility and Location of Anesthetics in Lipid Bilayer Membranes by High-Resolution, High-Field-Gradient NMR	共同	2005 年 2 月	The 7th International Conference on Basic and Systemic Mechanisms of Anesthesia	<u>Emiko Okamura</u> and Masaru Nakahara		
Molecular Dynamics Study of Size- and Temperature-dependence of Thermodynamic Stability and Structure of SDS Micelle	共同	2007 年 11 月	Joint Conference of JMLG/EMLG Meeting 2007 and 30th Symposium on Solution Chemistry of Japan “Molecular Approaches to Complex Liquids System”	Noriyuki Yoshii, <u>Emiko Okamura</u> and Ssumu Okazaki		
Pulsed-Field-Gradient NMR Method for Quantifying Drug Binding to Model Cell Membranes <i>in Situ</i>	共同	2008 年 6 月	The 82nd ACS Colloid & Surface Science Symposium	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Drug Binding and Mobility Relating to the Thermal Fluctuation in Membranes: A Dynamic NMR Study	共同	2009 年 3 月	Joint International Open Symposium: Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions and Chemistry of Biological Processes Created by Water and Biomolecules	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
First observation of pure lateral diffusion of lipid molecules in a bilayer vesicle by pulsed field gradient NMR spectroscopy	共同	2009 年 12 月	The 3rd International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Simulation of pulsed field gradient NMR spectra of diffusive motion of lipids and drugs restricted by a spherical vesicle. A Monte	共同	2009 年 12 月	The 3rd International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward	Noriyuki Yoshii and <u>Emiko Okamura</u>		

Carlo study			Biological Functions			
Kinetics of Membrane Binding, Diffusivity, and Permeability of Small-Sized Drugs and Peptides by NMR in Situ	共同	2010 年 9 月	International Conference on Nanoscopic Colloid and Surface Science	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Lateral Diffusion of Phospholipid Molecules Separated from the Rotational and the Translational Diffusion of a Fluid Bilayer Vesicle	共同	2010 年 12 月	The 4th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii and <u>Emiko Okamura</u>		
Quantifying Rapid Association and Dissociation of Hydrophobic Fluorinated Bisphenol A to Lipid Bilayer	共同	2012 年 1 月	The 5th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii, Tomomi Emoto, and <u>Emiko Okamura</u>		
Kinetics of binding and diffusivity of leucine-enkephalin in large unilamellar vesicle by pulsed-field-gradient ¹ H NMR	共同	2012 年 1 月	The 5th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Noriyuki Yoshii, Tomomi Emoto, and <u>Emiko Okamura</u>		
Kinetics of membrane binding and mobility of drugs by multinuclear dynamic NMR <i>in situ</i>	共同	2012 年 5 月	International Association of Colloid and Interface Scientists Conference	Noriyuki Yoshii, Tomomi Emoto, and <u>Emiko Okamura</u>		
Physicochemical Mechanism for the Enhanced Ability of Lipid Membrane Penetration of Polyarginine	共同	2012 年 5 月	International Association of Colloid and Interface Scientists Conference	Yuki Takechi, Haruka Yoshii, Masafumi Tanaka, Toru Kawakami, Saburo Aimoto, <u>Emiko Okamura</u> , and Hiroyuki Saito		
Static and Dynamic Behaviors of Drug Delivery to Lipid Bilayer Membrane by NMR and Molecular Dynamics Simulation	共同	2012 年 10 月	World Congress on Oleo Science & 29th ISF Congress	<u>Emiko Okamura</u> and Noriyuki Yoshii		
Molecular Fluctuation of Lipids in Cell Sized Vesicles as Studied by NMR	共同	2012 年 12 月	The 6th International Symposium on Molecular Science of Fluctuations toward Biological Functions	Yuki Takechi, Hiroyuki Saito, and <u>Emiko Okamura</u>		
Motions and Fluctuations of Phospholipid Molecules in Large and Cell Sized Vesicles by NMR	共同	2013 年 7 月	33rd International Conference on Solution Chemistry	<u>Emiko Okamura</u> , Yuki Takechi, Hiroyuki Saito, and Noriyuki Yoshii		

Delivery of Sevoflurane Limited by the Presence of Cholesterol in Lipid Bilayer Membranes: Multinuclear, Dynamic NMR <i>in Situ</i>	共同	2014 年 5 月	105 th AOCs Annual Meeting & Expo	<u>Emiko Okamura</u> and Yuki Takechi		
Real Time in-Cell ¹⁹ F NMR Spectroscopy on the Cell Membrane Permeation of Octaarginine	共同	2014 年 8 月	The XXVI th International Conference on Magnetic Resonance in Biological Systems	Yuki Takechi, Kenzo Aki, Yumi Tohyama, Toru Kawakami, Hiroyuki Saito, and <u>Emiko Okamura</u>		
Mobility, location, and kinetics of membrane binding and delivery of drugs by solution-state ¹⁹ F and ¹ H NMR	単独	2015 年 11 月	6 th Asian Conference on Colloid and Interface Science	<u>Emiko Okamura</u>		Invited
Real-Time in-Situ NMR Observation of Non-Enzymatic Peptide Bond Cleavage and Isomerization of Aspartyl Residue in Crystallin and Amyloid- β Fragments	共同	2016 年 8 月	The XXVII th International Conference on Magnetic Resonance in Biological Systems	Kenzo Aki and <u>Emiko Okamura</u>		
How Sevoflurane Uptake is Regulated: The Effect of Membrane Curvature, Cholesterol, Lipid Composition, and Ion Channel	共同	2016 年 9 月	4th International Kyushu Colloid Colloquium	Kotone Ito, Yukako Nishiguchi, Kenzo Aki, and <u>Emiko Okamura</u>		
Real-Time in-Situ NMR of Biologically Relevant Reactions in Peptide Solution: Spontaneous Peptide Bond Cleavage of Aspartyl Isomers and Preaggregation of Amyloid- β Fragments	単独	2019 年 8 月	The 36th International Conference on Solution Chemistry, Xining, China	<u>Emiko Okamura</u>		Invited
The Kinetics of Amino Acid Isomerization in Amyloid Beta Fragments Quantified by Real-Time ¹ H-NMR	共同	2019 年 8 月	The 36th International Conference on Solution Chemistry, Xining, China	Kenzo Aki, <u>Emiko Okamura</u>		
KINETICS OF PEPTIDE BOND CLEAVAGE AND ISOMERIZATION AT ASPARTYL RESIDUE USING REAL-TIME NMR SPECTROSCOPY	共同	2019 年 9 月	The 4th International Conference on D-Amino Acid Research, Tokyo, Japan	Kenzo Aki, <u>Emiko Okamura</u>		
Side-Chain Conformers of Aspartyl Residues to Allow Conversion from L- α - to D- β - or L- β -Aspartate in Age-Related Proteins and Peptides	共同	2019 年 9 月	The 4th International Conference on D-Amino Acid Research, Tokyo, Japan	<u>Emiko Okamura</u> , Kenzo Aki		
Real-Time NMR Spectroscopy of Biologically Relevant Reaction: Preaggregation of Amyloid- β Fragments Prior to Fibril Formation	単独	2019 年 11 月	OKINAWA COLLOIDS 2019, Nago, Okinawa, Japan	<u>Emiko Okamura</u>		Invited

Real-time peptide reactions by solution NMR: Preaggregation in amyloid- β fragment and cell entry of membrane-permeable peptide	単独	2021 年 12 月	Pacificchem2021 (virtual)	<u>Emiko Okamura</u>		Invited
Real-time ^{19}F NMR of peptides in solution: Preaggregation of amyloid- β and α -synuclein, and cell entry of membrane-permeable peptides	単独	2022 年 7 月	The 37th International Conference on Solution Chemistry, Bogota, Colombia (virtual)	<u>Emiko Okamura</u>		Invited
Cell entry of amphiphilic membrane-permeable peptides and its analogs by real-time ^{19}F NMR	共同	2023 年 7 月	13 th International Congress on Membranes and Membrane Processes (ICOM2023), Makuhari, Chiba, Japan	<u>Emiko Okamura</u> , Kenzo Aki		
【国内学会発表 (招待講演を除く)】 NMR による脂質二分子膜の構造・ダイナミクスと麻酔剤の取り込み・輸送	共同	2004 年 7 月	第 22 回麻酔メカニズム研究会	<u>岡村恵美子</u> 、中原勝		
脂質二分子膜のダイナミクスと薬物の輸送過程の高感度高分解能 NMR 解析	共同	2005 年 3 月	日本薬学会第 125 年会	<u>岡村恵美子</u> 、若井千尋、松林伸幸、中原勝		
NMR で捉えた脂質二分子膜のダイナミクスと”環境ホルモン”の輸送	共同	2005 年 3 月	日本化学会第 85 春季年会	<u>岡村恵美子</u> 、若井千尋、松林伸幸、中原勝		
高感度高磁場勾配 NMR による二分子膜のダイナミクスと薬物の膜内輸送	共同	2005 年 5 月	日本膜学会第 27 年会	<u>岡村恵美子</u> 、若井千尋、松林伸幸、中原勝		
高分解能 ^{19}F -NMR による蛍光標識および非標識 ^{19}F -オクタアルギニンの細胞への取り込み過程のリアルタイム計測	共同	2005 年 8 月	第 18 回バイオメディカル分析科学シンポジウム	<u>岡村恵美子</u> 、二宮啓子、二本史朗、永井康晴、木村智大、若井千尋、松林伸幸、杉浦幸雄、中原 勝		
ヒト生細胞とペプチドの相互作用に関する高分解能 in-situ in-cell NMR spectroscopy	共同	2005 年 11 月	膜シンポジウム 2005	<u>岡村恵美子</u> 、二宮啓子、二本史朗、永井康晴、木村智大、若井千尋、松林伸幸、杉浦幸雄、中原 勝		
アルギニンペプチドと細胞の水溶液における相互作用の NMR 研究	共同	2005 年 11 月	第 28 回溶液化学シンポジウム	<u>岡村恵美子</u> 、二宮啓子、二本史朗、永井康晴、木村智大、若井千尋、松林伸幸、杉浦幸雄、中原 勝		
リン脂質二分子膜の熱揺らぎによるナトリウムイオン透過の ^{23}Na -NMR 解析	共同	2006 年 3 月	日本化学会第 86 春季年会	木下智子、 <u>岡村恵美子</u> 、松林伸幸、中原勝		
熱揺らぎによる Na^+ イオンのリン脂質二分子膜透過機構の ^{23}Na -NMR 解析	共同	2006 年 5 月	日本膜学会第 28 年会	木下智子、 <u>岡村恵美子</u> 、松林伸幸、中原勝		
熱揺らぎによるリン脂質二分子膜の Na^+ イオン透過の in	共同	2006 年 11 月	第 29 回溶液化学シンポジウム	木下智子、 <u>岡村恵美子</u> 、松林伸幸、中原		

situ ^{23}Na -NMR 解析				勝		
Cholesterol aggregate formation in low-polarity organic solvents mimicking the hydrophobic core of lipid bilayer studied by diffusion and 2D NMR	共同	2006 年 11 月	第 29 回溶液化学シンポジウム	Cristiano Giordani, Chihiro Wakai, <u>Emiko Okamura</u> , Nobuyuki Matubayasi, and Masaru Nakahara		
Diffusion and 2D NMR studies on cholesterol aggregates formed in low-polarity organic solvents mimicking the hydrophobic core of lipid bilayer	共同	2007 年 3 月	日本化学会第 87 春季年会	Giordani Cristiano, 若井千尋、 <u>岡村 恵美子</u> 、松林 伸幸、中原 勝		
分子動力学シミュレーションによる SDS ミセルの熱力学的安定性と構造についての研究	共同	2007 年 9 月	第 60 回コロイドおよび界面化学討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u> 、岡崎 進		
磁場勾配 NMR 法による抗がん剤 5-フルオロウラシルの結合量のその場定量計測	共同	2008 年 3 月	日本化学会第 88 春季年会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
5-フルオロウラシルと脂質膜との相互作用に関する分子動力学シミュレーションによる研究	共同	2008 年 3 月	日本化学会第 88 春季年会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
磁場勾配 NMR を利用した薬物の結合量のその場定量	共同	2008 年 3 月	日本薬学会第 128 年会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
NMR その場観測と分子動力学シミュレーションによる 5-フルオロウラシルの脂質二分子膜への結合に関する研究	共同	2008 年 5 月	日本膜学会第 30 年会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
高分解能溶液 NMR と分子動力学シミュレーションで捉えた 5-フルオロウラシルのリン脂質二分子膜への結合	共同	2008 年 8 月	第 30 回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
Binding of 5-fluorouracil to soft lipid bilayer membrane by multinuclear dynamic NMR and molecular dynamics simulation	共同	2008 年 9 月	The 61th Divisional Meeting on Colloid and Surface Chemistry, The Chemical Society of Japan	Noriyuki Yoshii and <u>Emiko Okamura</u>		
生体膜への分子の結合に関する NMR および分子動力学計算による研究	共同	2008 年 9 月	第 2 回分子科学討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
動的多核 NMR と分子動力学計算による薬物の脂質二分子膜への結合解析	共同	2008 年 11 月	膜シンポジウム 2008	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
薬剤分子の脂質膜への結合に関する動的 NMR および分子動力学計算による研究	共同	2008 年 11 月	第 31 回溶液化学シンポジウム	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		

脂質膜と薬剤分子との相互作用に関する分子動力学計算	共同	2008 年 11 月	第 22 回 分子シミュレーション討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
¹⁹ F パルス磁場勾配 NMR による脂質膜に結合した薬剤分子の交換に関する研究	共同	2009 年 3 月	日本薬学会 第 129 年会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
薬剤分子の脂質膜への親和性および拡散についての分子動力学および Monte Carlo 法による研究	共同	2009 年 9 月	第 62 回コロイドおよび界面化学討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
リン脂質ベシクルへの抗がん剤 5-フルオロウラシルの結合・解離の速度論：パルス磁場勾配 NMR による in situ 定量解析	共同	2009 年 9 月	第 62 回コロイドおよび界面化学討論会	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
分子動力学および Monte Carlo 計算による薬剤分子の脂質膜への親和性および拡散についての研究	共同	2009 年 9 月	第 3 回分子科学討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
NMR、分子動力学および Monte Carlo 計算による薬物の膜への結合と拡散	共同	2009 年 11 月	膜シンポジウム 2009	<u>岡村 恵美子</u> 、吉井 範行		
薬剤分子とベシクルとの結合・解離や拡散運動についての NMR、分子動力学およびモンテカルロ計算による研究	共同	2009 年 11 月	第 32 回溶液化学シンポジウム	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
分子動力学およびモンテカルロ法による薬剤分子とベシクルとの相互作用についての研究	共同	2009 年 11 月	第 23 回分子シミュレーション討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
Binding, Dissociation, and Diffusivity of 5-Fluorouracil to Lipid Bilayer Membranes by NMR and Computer Simulation	共同	2009 年 12 月	第 31 回生体膜と薬物の相互シンポジウム	<u>Emiko Okamura</u> 、 <u>Noriyuki Yoshii</u>		
薬物とベシクルとの結合・解離に関する分子動力学およびモンテカルロ計算	共同	2010 年 3 月	文部科学省「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」プロジェクト次世代ナノ統合シミュレーションソフトウェアの研究開発第 4 回公開シンポジウム	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
脂質ベシクルに運動が制限された分子の拡散挙動についてのモンテカルロ計算	共同	2010 年 5 月	日本膜学会第 32 年会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
磁場勾配 NMR による膜のなかの分子拡散と膜への結合・解離の速度論	単独	2010 年 8 月	文科省科研費補助金特定領域研究「分子高次系機能解明のための分子科学—先端計測法の開拓による素過程的理解」第 9 回ミ			

			ニ公開シンポジウム 「イオンチャネル KcsA の機能制御と構 造変化の関係を解明 する計測法」			
球状ベシクル上の脂質分 子の側方拡散係数	共同	2010 年 11 月	第 33 回溶液化学シン ポジウム	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
ベシクル上の脂質分子の 側方拡散係数	共同	2010 年 11 月	第 24 回分子シミュレ ーション討論会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
高分解能 NMR による水中 のベシクルへの薬物の結 合・解離と拡散過程の解 析：低分子からペプチドま で	共同	2010 年 11 月	第 32 回生体膜と薬物 の相互作用シンポジ ウム	<u>岡村 恵美子</u> 、吉 井 範行		
分子動力学シミュレーション による生体膜中の薬物の結合 構造	共同	2012 年 5 月	日本膜学会第 34 年 会	吉井 範行、 <u>岡村 恵美子</u>		
細胞サイズリポソーム中の脂 質分子の揺らぎ	共同	2012 年 9 月	新学術領域研究「揺ら ぎと生体機能」・「水を 主役とした ATP エネ ルギー変換」合同公開 シンポジウム「ゆらぎ と水・生命のエネル ギーと機能の分子機 構を探る」	武知 佑樹、山崎 昌一、斎藤 博 幸、 <u>岡村 恵美子</u>		
溶液 NMR を用いた細胞サイズ ベシクルの評価	共同	2012 年 11 月	膜 シン ポ ジ ウ ム 2012	武知 佑樹、斎藤 博幸、 <u>岡村 恵美 子</u>		
細胞サイズベシクルの構造と 動態に関する溶液 NMR 研究	共同	2012 年 11 月	第 35 回溶液化学シン ポジウム	武知 佑樹、斎藤 博幸、 <u>岡村 恵美 子</u>		
細胞サイズベシクルの高濃度 調製と溶液 NMR による物性解 析	共同	2012 年 11 月	第 34 回生体膜と薬 物の相互作用シン ポジウム	武知 佑樹、斎藤 博幸、 <u>岡村 恵美 子</u>		
NMR 核オーバーハウザー効果か ら見た細胞サイズベシクル中 におけるリン脂質分子のダイ ナミクス	共同	2013 年 3 月	日本化学会第 93 春季 年会	武知 佑樹、斎藤 博幸、 <u>岡村 恵美 子</u>		
曲率の小さな細胞モデル膜中 のリン脂質分子のダイナミク ス	共同	2013 年 5 月	日本膜学会第 35 年 会	武知 佑樹、斎藤 博幸、 <u>岡村 恵美 子</u>		
疎水性物質による細胞サイズ ベシクル膜の揺らぎの抑制	共同	2013 年 11 月	膜 シン ポ ジ ウ ム 2013	武知 佑樹、 <u>岡村 恵美子</u>		
細胞サイズベシクル膜の揺ら ぎにわたる疎水性物質やイ オンの影響	共同	2013 年 11 月	第 35 回生体膜と薬 物の相互作用シン ポジウム	武知 佑樹、 <u>岡村 恵美子</u>		
疎水性物質による細胞サイズ ベシクル膜中リン脂質の突出 運動の制御	共同	2014 年 3 月	日本化学会第 94 春季 年会	武知 佑樹、 <u>岡村 恵美子</u>		
オクタアルギニンの物理的膜 透過に関するリアルタイム in cell NMR 研究	共同	2014 年 5 月	日本膜学会第 36 年 会	武知佑樹、安岐健 三、通山由美、川 上徹、斎藤博幸、		

In cell NMR によるオクタアルギニンペプチドの細胞内輸送のリアルタイム計測と速度論	共同	2014 年 9 月	第 65 回コロイドおよび界面化学討論会	<u>岡村恵美子</u> 武知佑樹、安岐健三、通山由美、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
α A クリスタリン模擬ペプチドにおける $\alpha \rightarrow \beta$ -Asp 異性化におよぼす Asp 側鎖の立体配座の高分解能 $^1\text{H-NMR}$ 解析	共同	2014 年 10 月	第 64 回日本薬学会近畿支部大会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
水晶体タンパク質模擬ペプチド中の Asp 異性化におよぼす Asp 側鎖の立体配座の高分解能 $^1\text{H-NMR}$ による解析	共同	2014 年 11 月	第 37 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
コレステロールによる麻酔剤セボフレンの取り込み制御に関する動的核MR研究	共同	2014 年 11 月	膜シンポジウム 2014	<u>岡村恵美子</u> 、武知佑樹、安岐健三		
アスパラギン酸の異性化に関わる側鎖の立体配座： α A クリスタリン模擬ペプチドの高分解能 $^1\text{H-NMR}$ 解析	共同	2015 年 3 月	日本薬学会 第 135 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
キネティクスに基づく細胞へのオクタアルギニンの物理的膜透過メカニズム	共同	2015 年 5 月	日本膜学会第 37 年会	武知 (原矢) 佑樹、安岐健三、通山由美、原野雄一、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイムNMR測定によるL- α -およびD- β -アスパラギン酸異性体含有ペプチドの分解速度の解析	共同	2015 年 11 月	第 38 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
アスパラギン酸異性体の異性化とペプチド鎖分解の速度論解析	共同	2016 年 3 月	日本化学会第 96 春季年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
膜表面におけるペプチドの反応の in situ リアルタイム計測を指向したNMRによる速度論	共同	2016 年 5 月	日本膜学会第 38 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
加齢にともなうアスパラギン酸の異性化と立体配座に関する高分解能NMR 研究: 水晶体タンパク質 α A クリスタリンペプチドを例として	共同	2016 年 6 月	油化学関連シンポジウム in 姫路	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
ペプチド結合切断反応のリアルタイム NMR 計測にもとづく異常型 D-アスパラギン酸蓄積のメカニズム	共同	2016 年 6 月	油化学関連シンポジウム in 姫路	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
脂質二重膜へのセボフレン吸収に関する要因の比較：溶液 NMR 研究	共同	2016 年 9 月	日本油化学会 第 55 回年会	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
水晶体タンパク質 α クリスタリンにおける異常型 D- β -アスパラギン酸の蓄積メカニズム：リアルタイム NMR によるペプチド結合切断の速度論を通して	共同	2016 年 11 月	第 39 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		

溶液 NMR による麻酔剤・セボフレン取り込みの影響因子: 膜の曲率、コレステロール、脂質組成、イオンチャネル	共同	2016 年 11 月	第 39 回溶液化学シンポジウム	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
溶液 NMR によるリポソームへのセボフレン取り込みに影響を与えるファクターの比較	共同	2016 年 12 月	膜シンポジウム 2016	西口友佳子、伊藤琴音、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
Accumulation Mechanism of Uncommon D-β-Aspartyl Residue in Lens α-crystallin by Kinetics of Spontaneous Peptide Bond Cleavage and Isomerization	共同	2017 年 3 月	日本化学会第 97 春季年会	Kenzo Aki and <u>Emiko Okamura</u>		
D-β-Asp の安定性～リアルタイム NMR を用いたペプチド鎖切断の速度論解析～	共同	2017 年 3 月	日本薬学会 第 137 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
イオン・疎水分子・チャネルが酸性・中性リン脂質膜に与える影響の比較研究	共同	2017 年 5 月	日本膜学会第 39 年会	日高明史、津倉康徳、伊藤琴音、西口友佳子、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム in-cell NMR によるオクタアルギニンペプチドの細胞膜透過機構	共同	2017 年 10 月	第 40 回溶液化学シンポジウム	武知 (原矢) 佑樹、安岐健三、通山由美、原野雄一、川上徹、斎藤博幸、 <u>岡村恵美子</u>		
温度・表面曲率・脂質組成による二分子膜の動態変化と薬物吸収の溶液 NMR	共同	2018 年 9 月	日本油化学会第 57 回年会	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR を用いたアスパラギン酸およびグルタミン酸の異性化の同時計測と速度論解析: アミロイドβフラグメントペプチドを例に	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR によるアミロイドβ変異体の凝集初期過程の比較研究: CD スペクトルと NMR スペクトル観測	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	宇地原結、巨勢紀羽、西田哲朗、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR によるアミロイドβ変異体の凝集初期過程の比較研究: NMR シグナル強度の変化	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	西田哲朗、巨勢紀羽、宇地原結、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
リアルタイム NMR によるアミロイドβ変異体の凝集初期過程の比較研究: NMR 化学シフト変化	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部大会	巨勢紀羽、西田哲朗、宇地原結、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
温度・表面曲率・脂質組成が与える膜の動態と薬物輸送: 多核 NMR による相関解析	共同	2018 年 11 月	膜シンポジウム 2018	伊藤琴音、西口友佳子、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
¹ H-NMR を用いたアミロイドβフラグメント中における異性化の複数残基同時測定と速度論	共同	2019 年 3 月	日本化学会第 99 春季年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
コレステロール含有リン脂質	共同	2019 年 5 月	日本膜学会第 41 年	中川大志、森 彩		

二分子膜の動的構造に及ぼす飽和・不飽和脂肪酸の影響と薬物吸収			会	衣、八幡紘未、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
コレステロール含有リン脂質膜の動態と薬物吸収—飽和・不飽和脂肪酸の効果に関する NMR 解析—	共同	2019 年 9 月	日本油化学会第 58 回年会	森 彩衣、八幡紘未、中川大志、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
アミロイド β フラグメント中におけるアミノ酸の異性化～ $^1\text{H-NMR}$ による複数アミノ酸残基同時測定と速度論解析～	共同	2019 年 10 月	第 42 回溶液化学シンポジウム	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
NMR による膜の動態と薬物吸収：コレステロールによる阻害と不飽和脂肪酸による吸収改善	共同	2019 年 11 月	膜シンポジウム 2019	岡村恵美子、森彩衣、八幡紘未、中川大志、安岐健三		
アミロイド β 断片中におけるアミノ酸異性化の速度の比較～リアルタイム $^1\text{H NMR}$ による複数残基同時測定を用いて～	共同	2020 年 3 月	日本薬学会第 140 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
アスパラギン酸残基の異性化と側鎖の立体配座	共同	2020 年 10 月	第 70 回日本薬学会関西支部大会	安岐健三、高木脩平、 <u>岡村恵美子</u>		
ペプチドが関与する反応のリアルタイム in-situ NMR：溶液系から細胞系まで	共同	2021 年 6 月	日本膜学会第 43 年会	安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
脂質膜表面の運動状態と麻酔剤セボフレンの吸収に関する多核 NMR 解析：コレステロールによる吸収阻害と脂肪酸による吸収改善	共同	2021 年 9 月	日本油化学会第 60 回年会	森 彩衣、八幡紘未、中川大志、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
細胞膜透過機構の解明を目指した実験と溶液理論の接点の一例	共同	2022 年 6 月	日本膜学会第 44 年会	原野雄一、安岐健三、 <u>岡村恵美子</u>		
両親媒性ペプチド・ペネトラチンとその置換体の細胞への取り込み：In-cell NMR による検討	共同	2022 年 11 月	膜シンポジウム 2022	<u>岡村恵美子</u> 、安岐健三		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1980 年 7 月～現在	日本薬学会会員
1983 年 4 月～現在	日本化学会会員
1986 年 6 月～現在	日本化学会コロイドおよび界面化学部会会員
1991 年 4 月～現在	日本膜学会会員
1996 年 4 月～現在	溶液化学研究会会員
2000 年 7 月～現在	麻酔メカニズム研究会会員
2001 年 7 月～現在	麻酔メカニズム研究会 評議員
2002 年 7 月～現在	日本化学会コロイドおよび界面化学部会 関西支部委員

2004 年 1 月～現在	Biophysical Society (USA) 会員
2004 年 4 月～現在	日本生物物理学会会員
2005 年 2 月	第 7 回国際麻酔メカニズムカンファレンス (The Seventh International Conference on Basic and Systemic Mechanisms of Anesthesia)・奈良・国内組織委員会委員
2007 年 4 月～現在	日本薬学会 近畿支部 委員
2007 年 4 月～現在	日本薬学会 物理化学系教員会議 委員
2007 年 4 月～2009 年 3 月	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員
2007 年 6 月～現在	American Chemical Society 会員
2009 年 4 月～2011 年 3 月	日本薬学会 近畿支部幹事
2009 年 5 月～現在	日本膜学会 「膜」誌編集委員
2009 年 6 月	第 2 回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント 受賞
2010 年 2 月～2012 年 1 月	日本薬学会 代議員
2010 年 4 月～現在	京都大学化学研究所共同利用・共同研究拠点 現象解析専門小委員会委員
2010 年	日本膜学会 膜シンポジウム 2010 運営委員長
2012 年 3 月～2014 年 2 月	日本化学会コロイドおよび界面化学部会 関西支部長
2012 年 10 月	第 11 回 日本油化学会 オレオサイエンス賞 受賞
2013 年 3 月～2015 年 2 月	日本化学会 コロイドおよび界面化学部会賞選考委員会委員
2013 年 4 月～現在	日本油化学会 関西支部幹事
2013 年 5 月～2015 年 5 月	日本膜学会 評議員
2014 年 4 月～現在	日本油化学会 代議員
2015 年	The 6th The Asian Conference on Colloid and Interface Science (ACCIS 2015) : National Advisory Committee
2015 年 4 月～2017 年 3 月	日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
2015 年 5 月～2019 年 5 月, 2023 年 6 月～現在	日本膜学会 理事
2016 年	日本膜学会第 38 年会 副組織委員長
2016 年	日本油化学会「油化学関連シンポジウム in 姫路」世話人
2016 年	第 34 回 物性物理化学研究会世話人
2016 年	日本油化学会第 55 回年会 実行委員
2016 年 3 月～2018 年 3 月	日本薬学会 物理系薬学部会 世話人
2016 年 5 月	日本膜学会 膜誌論文賞 受賞
2017 年	日本膜学会第 39 年会 組織委員長
2017 年	第 35 回 物性物理化学研究会世話人
2017 年	第 40 回溶液化学シンポジウム 実行委員長
2017 年 4 月～現在	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員
2018 年	日本油化学会第 57 回年会 実行委員
2018 年 4 月～現在	日本油化学会 界面科学部会 関西支部 幹事
2019 年	The 36th International Conference on Solution Chemistry : International Academic Committee
2019 年 4 月～現在	溶液化学研究会 運営委員
2019 年 5 月～2023 年 5 月	日本女性科学者の会 理事
2019 年 5 月～2021 年 6 月	日本膜学会 副会長
2021 年 4 月～現在	日本油化学会 学術専門委員会委員
2021 年 6 月～2023 年 6 月	日本膜学会「膜」誌編集委員長
2021 年 6 月～2023 年 6 月	日本膜学会 会長
2022 年 4 月	日本油化学会 第 13 回女性科学者奨励賞 受賞
2022 年 11 月～現在	日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
2023 年	13 th International Congress on Membranes and Membrane Processes (ICOM2023) : Organizing Committee

V 学内における主な活動

2007 年 4 月～2008 年 5 月	姫路獨協大学 国際交流センター運営委員会委員
2007 年 4 月～2010 年 3 月	姫路獨協大学 入学試験教科委員会委員
2007 年 4 月～2012 年 3 月	姫路獨協大学 セクシャルハラスメント人権委員会委員
2007 年 4 月～2012 年 3 月	薬学部セクシャルハラスメント委員会委員
2012 年 4 月～2021 年 3 月	姫路獨協大学 教育改善実施 (FD) 委員会委員
2012 年 4 月～	薬学部国試対策卒試委員会委員
2012 年 4 月～	薬学部カリキュラム委員会委員
2012 年 4 月～	薬学部第三者評価委員
2013 年 4 月～2015 年 3 月	姫路獨協大学 入学試験教科委員会委員
2013 年 11 月	姫路獨協大学 シニアオープンカレッジ講師
2015 年 4 月～2017 年 3 月	姫路獨協大学 評議員
2017 年 4 月～2021 年 3 月	薬学部 FD 委員会委員
2017 年 4 月～現在	薬学部共通機器委員会委員
2019 年 4 月～現在	姫路獨協大学 全学自己点検評価委員会委員
2023 年 4 月～2024 年 2 月	姫路獨協大学薬学部 第 12 回卒後教育セミナー 企画担当

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	齋藤 一樹	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
課題に対する多方面からの教育指導 「分析化学Ⅱ」 「薬学基礎演習」	2016 年度後期以降	学生が最も苦手とする pH 等の計算問題の学習効果向上を図るために、まず「分析化学Ⅱ」の講義でスタンダードな知識を教授した上で、「薬学基礎演習（分析化学）」で滴定曲線との対応を学ばせることで、pH や酸・塩基平衡の概念を多方面からイメージさせて理解できるようにさせた。
講義内容の復習しやすさの追求 「分析化学Ⅱ」 「薬学基礎演習」 「分析化学実習」	2016 年度後期以降	卒業・国試受験までに数多くの科目を履修しなければならない学生にとって、講義直後・定期試験前・卒業前に講義内容を簡便に復習できるようなシステムを与えてあげることは重要である。 そこで、①なるべく指定教科書に沿った講義進行を実施し、②毎講義後には復習課題を解かせて提出させた。また、③定期試験前には、必ず模擬試験を実施することにより、知識の整理を促した。 さらに、2018 年度後期以降には、「分析化学実習」の中に、講義科目の教義内容と実習の技術内容とを明確に結びつけるような演習の時間を設けた。
社会から要請の強い研究倫理指導に対する対応 「物理・化学系統合演習（PBL）」	2018 年度後期以降	これまで、特に講義等として明確に取り上げられてこなかった「研究倫理」「情報検索」等の問題について、社会的な要請にも鑑みて、「物理・化学系統合演習（PBL）」の主担当として、グループ作業等の PBL 演習前に、それらの問題を扱う合同講義時間を設けた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
「分析化学Ⅱ」・「機器分析」における 復習課題プリント	2016 年度後期以降	その日の講義内容の理解度促進・知識定着を目的に、毎回講義毎に「復習課題」を作成・配布し、提出させた。その解答から学生個々の理解度などを判定し、その後の講義や指導に役立てた。また、採点した答案は、定期試験の実施までには丁寧に添削して返却し、定期試験前の勉強に役立てることができるようにした。
「分析化学実習」における実習書	2016 年度以降	分析化学実習は 2017 年度に大幅に改訂し、薬学教育の新たなカリキュラム積極的に対応させるようにした。実習用プリントは、単に実験を行うためのマニュアルに止まらずにそれまで行ってきた講義の内容を想起させ、知識の定着などを容易に行えるように配慮した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
薬局実務実習 病院実務実習	2017 年度以降	薬学部実務実習の一環として、初回訪問・中盤訪問等をはじめ、適宜担当学生の実習先を訪れ、実習先の先生方と綿密な打合せを行って実習における学習効果促進・問題解決などにあたった。

平成 29 年度兵庫県高等学校教育研究会 科学部会・生物部会合同講演会 招待講演 「細胞膜上のレセプター（受容体）の 構造解析 ～新たな制がん剤の設計 に向けて～」	2017 年 7 月 5 日	兵庫県高等学校教育研究会からの招きを受けて、兵庫県高等学校教 諭の前で最新のバイオ研究の一端を紹介・解説した。
姫路市男女共同参画推進センター“あ いめっせ”主催 2021 理工チャレンジ事業「ひめじリコ チャレ応援 2021」第 2 回日程	2021 年 8 月 19 日	姫路市男女共同参画推進センター“あいめっせ”が主催する 2021 理工チャレンジ事業「ひめじリコチャレ応援 2021」に協力し、姫 路市内の中学校に通う女子生徒 15 名を招いて「新型コロナ禍のニ ュースによく出てくる『PCR 検査』ってなんだろう？」というテー マで体験学習を実施した。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名 称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 Prothoracicotrophic Hormone. (Chapter 55)	共 著	2016 年	Academic Press, <i>Handbook of Hormones: Comparative Endocrinology for Basic and Clinical Research</i> , eds. Yoshio Takei, Hironori Ando, Kazuyoshi Tsutsui	©Tadafumi Konogami, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka	407 頁～ 409 頁	
Design of a system for monitoring ubiquitination activities of E2 enzymes using engineered RING finger proteins. (Chapter 6)	共 著	2018 年 8 月	Humana Press, <i>Methods in Molecular Biology on "Zinc Finger Proteins: Methods and Protocols"</i> , ed. Jia Liu (1867 巻)	©Kazuhide Miyamoto*, <u>Kazuki Saito</u>	75 頁～ 87 頁	
【論文】 Molecular basis of wing coloration in a Batesian mimic butterfly, <i>Papilio polytes</i> .	共 著	2013 年 11 月	Springer Nature, <i>Scientific Reports</i> (3 巻)	©Hideki Nishikawa, Masatoshi Iga, Junichi Yamaguchi, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka, Yutaka Suzuki, Sumio Sugano, Haruhiko Fujiwara	記事番号 3184	
Application of plug-plug technique to ACE experiments for discovery of peptides binding to a larger target protein: A model study of calmodulin-binding fragments selected from a digested mixture of reduced BSA.	共 著	2014 年 3 月	John Wiley & Sons, <i>ELECTROPHORESIS</i> (35 巻, 6 号)	© <u>Kazuki Saito</u> , Mamiko Nakato, Takaaki Mizuguchi, Shinji Wada, Hiromasa Uchimura, Hiroshi Kataoka, Shigeyuki Yokoyama, Hiroshi Hirota, Yoshiaki Kiso	846 頁～ 854 頁	

Concise preparation of an active recombinant PTH dimer using the <i>Brevibacillus</i> secretion system.	共著	2014年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2013	©Yiwen Yang, Tadafumi Konogami, Tamari Hoshikawa, Masatoshi Iga, Juri Hikiba, Mari H. Ogihara, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	385 頁～ 386 頁	
プロテオーム時代の創薬に向けた plug-plug ACE 法の利用	単著	2014年10月	日本電気泳動学会, 生物物理化学 電気泳動 (58 巻, 2 号) 特集: 最新の電気泳動技術		71 頁～ 73 頁	
Studies on identification of active sites of an inhibitory cyclic peptide against EGF receptor dimerization.	共著	2015年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2014	©Takaaki Mizuguchi, Yukako Yamazaki, Kazuya Kobayashi, Honami Ooe, Mika Iida, Ryunosuke Ninomiya, <u>Kazuki Saito</u> , Kenichi Akaji, Hirokazu Tamamura	163 頁～ 164 頁	
Activation of silkworm Torso, a recently-identified receptor for prothoracicotrophic hormone.	共著	2015年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2014	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	179 頁～ 180 頁	
Preparation of insect prothoracicotrophic hormone with complicated disulfide-bond structure, by the heterologous expression in <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共著	2015年10月	John Wiley & Sons, Protein Science (24 巻, S1 号)	© <u>Kazuki Saito</u> , Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Yusuke Yamashita, Masatoshi Iga, Tamari Hoshikawa, Hiroshi Kataoka	58 頁	
Role of the disulfide bridges in the transmembrane region of the insect prothoracicotrophic-hormone receptor, Torso.	共著	2015年10月	John Wiley & Sons, Protein Science (24 巻, S1 号)	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	59 頁	
Ligand-dependent responses of the silkworm prothoracicotrophic hormone receptor, Torso, are maintained by unusual intermolecular disulfide bridges in the transmembrane region.	共著	2016年3月	Springer Nature, Scientific Reports (6 巻)	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka*, <u>Kazuki Saito</u>	記事番号 22437	
The silkworm prothoracicotrophic hormone receptor, Torso, has a unique disulfide-bond-linked structure required for its ligand-dependent functions.	共著	2016年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2015	©Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>	37 頁～ 38 頁	

Secretory expression of cabbage armyworm prothoracicotropic hormone in <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共著	2016年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2015	©Yusuke Yamashita, Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Tamari Hoshikawa, Masatoshi Iga, Hiroshi Kataoka, Kazuki Saito	179 頁～ 180 頁	
Highly sensitive detection of E2 activity in ubiquitination using an artificial RING finger.	共著	2017年3月	John Wiley & Sons, Journal of Peptide Science (23 巻, 3 号)	©Kazuhide Miyamoto, Miho Sumida, Mayumi Yuasa-Sunagawa, Kazuki Saito	222 頁～ 227 頁	
Identification of ecdysteroidogenic enzyme genes and their expression during pupal diapause in the cabbage armyworm <i>Mamestra brassicae</i> .	共著	2017年6月	John Wiley & Sons, Insect Molecular Biology (26 巻, 3 号)	©Mari H. Ogiwara, Hiroaki Ikeda, Nobuto Yamada, Juri Hikiba, Takayoshi Nakaoka, Yoshinori Fujimoto, Yutaka Suzuki, Kazuki Saito, Akira Mizoguchi, Hiroshi Kataoka	286 頁～ 297 頁	
人工ユビキチンリガーゼの分子設計法の開発 ユビキチン化活性に基づくがん診断に向けてー	共著	2017年7月	日本分析化学会, 分析化学 (66 巻 6 号) 特集: 医療に貢献する分析化学	©宮本和英, 砂川真弓, 齋藤一樹	393 頁～ 402 頁	
The zinc finger domain of RING finger protein 141 reveals a unique RING fold.	共著	2017年8月	John Wiley & Sons, Protein Science (26 巻, 8 号)	©Kazuhide Miyamoto, Airi Uechi, Kazuki Saito	1681 頁～ 1686 頁	
The unique N-terminal zinc finger of Synaptotagmin-like protein 4 reveals FVVE structure.	共著	2017年12月	John Wiley & Sons, Protein Science (26 巻, 12 号)	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Kazuki Saito	2451 頁～ 2457 頁	
Cellular effects of artificial ubiquitin ligases on cancer cells.	共著	2018年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2017	©Mayumi Sunagawa, Ayumi Yamashita, Kazuki Saito, Kazuhide Miyamoto*	124 頁～ 125 頁	
Detection of E2 activities in cancer cells using an artificial E3 ligase.	共著	2018年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2017	©Ayumi Yamashita, Kazuki Saito, Kazuhide Miyamoto*:	152 頁～ 153 頁	
Solution structure of the PHD finger from the human KIAA1045 protein.	共著	2018年5月	John Wiley & Sons, Protein Science (27 巻, 5 号)	©Kazuhide Miyamoto, Ayumi Yamashita, Kazuki Saito	987 頁～ 992 頁	
Concise machinery for monitoring ubiquitination activities using novel artificial RING fingers.	共著	2018年8月	John Wiley & Sons, Protein Science (27 巻, 8 号)	©Kazuhide Miyamoto, Kazuki Saito	1354 頁～ 1363 頁	筆頭総説記事として掲載 その号の表紙絵に採用
Unique auto-ubiquitination activities of artificial RING fingers in cancer cells.	共著	2018年9月	John Wiley & Sons, Protein Science (27 巻, 9 号)	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Mayumi Sunagawa, Kazuki Saito	1704 頁～ 1709 頁	
Unique RING finger structure from the human HRD1 protein.	共著	2019年2月	John Wiley & Sons, Protein Science (28 巻, 2 号)	©Kazuhide Miyamoto*, Yukari Taguchi, Kazuki Saito	448 頁～ 453 頁	

Preparation of the silkmoth prothoracicotropic hormone receptor, Torso, a receptor tyrosine kinase with a novel dimer structure.	共著	2019年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2018	©Airi Uechi, Shoko Nakamichi, Yuma Yamabana, Mayumi Sunagawa, Yuri Ishigaki, Kazuhide Miyamoto, <u>Kazuki Saito</u>	32 頁	
Detection of ubiquitination activities of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共著	2019年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2018	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Mayumi Sunagawa, <u>Kazuki Saito</u>	62 頁	
Exploring amino acid residues for regulating E2 specificity of artificial RING fingers.	共著	2019年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2018	©Ayumi Yamashita, <u>Kazuki Saito</u> , Kazuhide Miyamoto	63 頁	
Zinc finger domain of the human DTX protein adopts a unique RING fold.	共著	2019年6月	John Wiley & Sons, Protein Science (28 巻, 6 号)	©Kazuhide Miyamoto*, Yuma Fujiwara, <u>Kazuki Saito</u>	1151 頁～ 1156 頁	
Auto-ubiquitination of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共著	2020年3月	日本ペプチド学会, Peptide Science 2019	©Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Yukari Taguchi, <u>Kazuki Saito</u>	149 頁～ 150 頁	
Solution structure of the zinc finger domain of human RNF144A ubiquitin ligase.	共著	2020年8月	John Wiley & Sons, Protein Science (29 巻, 8 号)	©Kazuhide Miyamoto*, Kaori Migita, <u>Kazuki Saito</u>	1836 頁～ 1842 頁	
Application of recombinant human pyruvate kinase in recombinase polymerase amplification.	共著	2023年11月	Elsevier, Journal of Bioscience and Bioengineering (136 巻, 5 号)	©Kenji Kojima, Kenta Morimoto, Kevin Maafu Juma, Teisuke Takita, <u>Kazuki Saito</u> , Itaru Yanagihara, Shinsuke Fujiwara, Kiyoshi Yasukawa*	341 頁～ 346 頁	
【その他】						
【招待講演】 Screening for inhibitory compounds against cytochrome P450 enzymes in ecdysone biosynthesis.	共同	2014年9月	12th International Symposium on Cytochrome P450	Juri Hikiba, Yoshinori Fujimoto, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka		
プロテオーム時代の創薬に向けた plug-plug ACE 法の利用	単独	2014年10月	第65回日本電気泳動学会総会 シンポジウム「最新の電気泳動技術 30 の話題」	<u>齋藤一樹</u>		
チロシンキナーゼ型レセプターの新たな活性化メカニズムの解明を目指して	単独	2019年3月	日本薬学会 第139年会 一般シンポジウム「物理系薬学部会シンポジウム～健康・医療・創薬に貢献する物理系薬学研究の最前線～」	<u>齋藤一樹</u>		
【国際学会発表】 Concise preparation method of an active recombinant PTH dimer using the <i>Brevibacillus</i> secretion system.	共同	2013年11月	4th Asia-Pacific International Peptide Symposium (APIPS 2013), 50th Japanese Peptide Symposium	Yiwen Yang, Tadafumi Konogami, Tamari Hoshikawa, Masatoshi Iga, Juri Hikiba, Mari H. Ogihara, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>		

Preparation of insect prothoracicotropic hormone with complicated disulfide-bond structure, by the heterologous expression in <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共同	2015 年 7 月	The 29th Annual Symposium of the Protein Society	<u>Kazuki Saito</u> , Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Yusuke Yamashita, Masatoshi Iga, Tamari Hoshikawa, Hiroshi Kataoka		
Role of the disulfide bridges in the transmembrane region of the insect prothoracicotropic-hormone receptor, Torso.	共同	2015 年 7 月	The 29th Annual Symposium of the Protein Society	Tadafumi Konogami, Yiwen Yang, Mari H. Ogihara, Juri Hikiba, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>		
Preparation of cabbage armyworm prothoracicotropic hormone in a soluble bioactive form, using secretory expression system of <i>Brevibacillus choshinensis</i> .	共同	2016 年 3 月	1st Joint Symposium on Integrated Biosciences between Zhejiang University and The University of Tokyo	Yusuke Yamashita, Tadafumi Konogami, Tamari Hoshikawa, Mari H. Ogihara, <u>Kazuki Saito</u> , Hiroshi Kataoka		
Torso, an insect prothoracicotropic hormone receptor, possessing a very unique dimeric structure as a receptor tyrosine kinase.	共同	2016 年 5 月	The 16th Akabori Conference: Japanese-German Symposium on Peptide Science	Tadafumi Konogami, Hiroshi Kataoka, <u>Kazuki Saito</u>		
Measuring E2 activities by artificial RING fingers in cancer cells.	共同	2017 年 12 月	Consortium of Biological Sciences 2017 (ConBio2017)	Mayumi Sunagawa, Arisa Nakatani, <u>Kazuki Saito</u> , Kazuhide Miyamoto		
Molecular design of artificial RING fingers for detecting ubiquitination activities.	共同	2018 年 2 月	62nd Annual Meeting of the Biophysical Society	Kazuhide Miyamoto, Ayumi Yamashita, <u>Kazuki Saito</u>		
Preparation of the silkworm prothoracicotropic hormone receptor, Torso, which is a receptor tyrosine kinase with novel dimer structure.	共同	2018 年 12 月	10th International Peptide Symposium / 55th Japanese Peptide Symposium	Airi Uechi, Shoko Nakamichi, Yuma Yamabana, Mayumi Sunagawa, Yuri Ishigaki, Kazuhide Miyamoto, <u>Kazuki Saito</u>		
Detection of ubiquitination activities of artificial RING fingers in human breast cancer cells.	共同	2018 年 12 月	10th International Peptide Symposium / 55th Japanese Peptide Symposium	Kazuhide Miyamoto, Arisa Nakatani, Mayumi Sunagawa, <u>Kazuki Saito</u>		
Exploring amino acid residues for regulating E2 specificity of artificial RING fingers.	共同	2018 年 12 月	10th International Peptide Symposium / 55th Japanese Peptide Symposium	Ayumi Yamashita, <u>Kazuki Saito</u> , Kazuhide Miyamoto		
【国内学会発表】 脱皮不全系統のカイコを用いたエクジソン中間体の探索	共同	2013 年 10 月	第38回日本比較内分泌学会大会・第40回日本神経内分泌学会学術集会合同大会	伊賀正年, 中村立樹, 齋藤一樹, 引場樹里, 藤本善徳, 木内信, 片岡宏誌		
カイコ蛹期におけるエクジステロイドの変動及び生合成・代謝酵素の解析	共同	2014 年 3 月	平成26年度蚕糸・昆虫機能利用学術講演会	荻原麻理, 引場樹里, 齋藤一樹, 片岡宏誌		

リフォールディングによるヨトウガPTTHの作製とその活性	共同	2014年3月	日本農芸化学会 2014年度大会	星川珠莉, 伊賀正年, 齋藤一樹, 片岡宏誌		
二量体化に着目した新規作用機序のEGFレセプター阻害薬研究	共同	2014年7月	創薬懇話会 2014	水口貴章, 二宮龍之介, 飯田美佳, 大江保奈美, 山崎由香子, 小林数也, 齋藤一樹, 赤路健一, 玉村啓和		
大腸菌では調製しづらかった昆虫前胸腺刺激ホルモンのブレビバチルス菌を用いた発現	共同	2014年8月	第46回若手ペプチド夏の勉強会	楊易文, 此上祥史, 伊賀正年, 星川珠莉, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
昆虫培養細胞を用いた前胸腺刺激ホルモンレセプターTorsoの活性化実験	共同	2014年8月	第46回若手ペプチド夏の勉強会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
EGFレセプター二量阻害環状ペプチドの活性部位に関する研究	共同	2014年10月	第51回ペプチド討論会	水口貴章, 山崎由香子, 小林数也, 大江保奈美, 飯田美佳, 二宮龍之介, 齋藤一樹, 赤路健一, 玉村啓和		
昆虫前胸腺刺激ホルモンPTTHによるレセプターTorsoの活性化	共同	2014年10月	第51回ペプチド討論会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
カイコ雌蛹におけるエクジソン代謝と卵発育制御	共同	2015年3月	第59回日本応用動物昆虫学会大会	荻原麻理, 引場樹里, 齋藤一樹, 片岡宏誌		
変異系統のカイコに含まれるステロイド類の分析によるNm-g機能の探索	共同	2015年3月	第59回日本応用動物昆虫学会大会	伊賀正年, 中村立樹, 齋藤一樹, 木内信, 石神健, 藤本善徳, 片岡宏誌		
昆虫前胸腺刺激ホルモンのレセプターTorsoはジスルフィド結合を介して二量化している	共同	2015年3月	日本農芸化学会 2015年度大会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
カイコ前胸腺刺激ホルモンのレセプターTorsoは、リガンド依存的な機能に必要な特有のジスルフィド架橋構造を有する	共同	2015年11月	第52回ペプチド討論会	此上祥史, 楊易文, 荻原麻理, 引場樹里, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
ヨトウガ前胸腺刺激ホルモンのブレビバチルス菌による分泌発現	共同	2015年11月	第52回ペプチド討論会	山下雄佑, 此上祥史, 楊易文, 星川珠莉, 伊賀正年, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
ブレビバチルス菌を用いたカイコ前胸腺刺激ホルモンの大量調製法の確立	共同	2016年3月	日本農芸化学会 2016年度大会	此上祥史, 山下雄佑, 楊易文, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
人工ユビキチンリガーゼによる急性前骨髄性白血病の抑制効果	共同	2016年11月	第33回関西地区ペプチドセミナー	中谷有沙, 砂川真弓, 齋藤一樹, 宮本和英		優秀発表賞受賞
活性型ヨトウガリコンビナントPTTHの調製	共同	2017年3月	平成29年度蚕糸・昆虫機能利用学術講演会(日本蚕糸学会第87回大会)	山下雄佑, 此上祥史, 荻原麻理, 齋藤一樹, 片岡宏誌		

ユビキチン化活性の検出に用いる人工ユビキチンリガーゼの設計法	共同	2017年5月	第77回分析化学討論会	宮本和英, 砂川真弓, 齋藤一樹		
人工ユビキチンリガーゼを用いたがん細胞のユビキチン化活性の測定	共同	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会	砂川真弓, 中谷有沙, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工E3 リガーゼを用いるがん細胞のE2 活性の検出	共同	2017年11月	第54回ペプチド討論会	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工ユビキチンリガーゼのがん細胞における効果	共同	2017年11月	第54回ペプチド討論会	砂川真弓, 山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工ユビキチンリガーゼを活用したユビキチン化活性の検出	共同	2017年12月	新アミノ酸分析研究会 第7回学術講演会	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
人工RING フィンガーを用いた簡便なE2 活性の検出法 ～E2 特異性を担うアミノ酸残基の探索～	共同	2017年12月	第34回関西地区ペプチドセミナー	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		優秀ポスター賞受賞
人工ユビキチンリガーゼを用いる特異的なE2 活性検出の検討	共同	2018年5月	第78回分析化学討論会	宮本和英, 山下歩美, 齋藤一樹		
膜貫通領域のジスルフィド架橋で二量化しているチロシンキナーゼ型レセプターTorso の大量調製	共同	2018年5月	第65回日本生化学会近畿支部例会	上地愛理, 砂川真弓, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工ユビキチンリガーゼのE2 特異性を担うアミノ酸残基の探索	共同	2018年8月	第31回バイオメディカル分析科学シンポジウム (BMAS2018)	山下歩美, 齋藤一樹, 宮本和英		
複雑なジスルフィド構造を有するカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH の、プレバチルス菌を用いた大量調製	共同	2018年9月	第91回日本生化学会大会	石垣悠里, 下田佳苗, 此上祥史, 片岡宏誌, 宮本和英, 齋藤一樹		
プレバチルス菌を用いたカイコガ前胸腺刺激ホルモンの大量調製法の確立 ～複雑なジスルフィド構造を有するリコンビナントタンパク質の発現・調製～	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	石垣悠里, 下田佳苗, 此上祥史, 片岡宏誌, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工RING フィンガーが有するE2 特異的認識能の検討	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	山下歩美, 田口由加里, 齋藤一樹, 宮本和英		
これまでになかった二量化様式のチロシンキナーゼ型レセプター・Torso の大量調製法の確立	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	上地愛理, 中道祥子, 砂川真弓, 宮本和英, 齋藤一樹		
乳がん細胞のユビキチン化に関するE2 活性の検出	共同	2018年12月	新アミノ酸分析研究会 第8回学術講演会	宮本和英, 中谷有沙, 齋藤一樹		
細胞膜貫通領域のジスルフィド架橋を介して二量化しているチロシンキナーゼ型レセプター・Torso の大量調製	共同	2018年12月	第35回関西ペプチドセミナー	上地愛理, 中道祥子, 山端裕真, 砂川真弓, 石垣悠里, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工分子 ARF を用いるユビキチン結合酵素活性の検出	共同	2019年3月	日本薬学会 第139年会	宮本和英, 中谷有沙, 山下歩美, 齋藤一樹		

あらかじめジスルフィド架橋で二量化したチロシンキナーゼ型レセプター・Torso の大量調製	共同	2019 年 3 月	日本薬学会 第139 年会	中道祥子, 上地愛理, 山端裕真, 石垣悠里, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工分子 ARF が有するユビキチン結合酵素の特異的認識能の改変	共同	2019 年 3 月	日本薬学会 第139 年会	田口由加里, 齋藤一樹, 宮本和英		学生優秀発表賞受賞
人工ユビキチンリガーゼを活用した乳がん細胞の E2 活性検出	共同	2019 年 5 月	第79 回分析化学討論会	宮本和英, 中谷有沙, 齋藤一樹		
複雑なジスルフィド構造を有するカイコガ前胸腺刺激ホルモンの大量調製法の確立 ～分泌型発現系を備えたブレバチルス菌の利用～	共同	2019 年 5 月	第66 回日本生化学会近畿支部例会	下田佳苗, 石垣悠里, 此上祥史, 片岡宏誌, 宮本和英, 齋藤一樹		
人工分子 ARF を活用したユビキチン結合酵素活性の特異的検出	共同	2019 年 8 月	第32 回バイオメディカル分析科学シンポジウム	黒涼菜, 田口由加里, 齋藤一樹, 宮本和英		星野賞 (優秀発表賞) 受賞
人工分子 ARF を活用した乳がん細胞のユビキチン化活性検出	共同	2019 年 8 月	第32 回バイオメディカル分析科学シンポジウム	宮本和英, 黒涼菜, 田口由加里, 中谷有沙, 齋藤一樹		
自己ユビキチン化能を有する人工 RING finger の作製法	共同	2019 年 9 月	第71 回日本生物工学会	宮本和英, 中谷有沙, 齋藤一樹		
ブレバチルス菌を用いたカイコガ前胸腺刺激ホルモンの分泌発現とその構造確認	共同	2019 年 9 月	第92 回日本生化学会	下田佳苗, 石垣悠里, 此上祥史, 宮本和英, 片岡宏誌, 齋藤一樹		
Auto-ubiquitination of artificial ring fingers in human breast cancer cells.	共同	2019 年 10 月	第56 回ペプチド討論会	宮本和英, 中谷有沙, 田口由加里, 齋藤一樹		
人工分子 ARF を活用するユビキチン化活性の検出法	共同	2020 年 1 月	令和元年度分析イノベーション交流会	宮本和英, 中谷有沙, 黒涼菜, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモンレセプターTorso の安定発現細胞株の樹立	共同	2021 年 5 月	第67 回日本生化学会近畿支部例会	今井寛人, 石垣悠里, 兒島憲二, 齋藤一樹		
ブレバチルス分泌発現系で得られる複数分子種の組換えカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTH の円二色性スペクトル解析	共同	2021 年 5 月	第67 回日本生化学会近畿支部例会	平田康祐, 兒島憲二, 石垣悠里, 下田佳苗, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTH の定量的活性評価に向けたそのチロシンキナーゼ型レセプターTorso の自己リン酸化アッセイ法の確立	共同	2021 年 5 月	第67 回日本生化学会近畿支部例会	網田遼, 今井寛人, 石垣悠里, 中道祥子, 横田紗代子, 山端裕真, 平田康祐, 兒島憲二, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTH の組換え体分子種間のジスルフィド架橋構造の差違 ～LC-MS および LC-MS/MS を用いた検討～	共同	2021 年 5 月	第67 回日本生化学会近畿支部例会	小松侑記, 岡屋林, 平田康祐, 下田佳苗, 石垣悠里, 兒島憲二, 齋藤一樹		
ブレバチルス分泌発現系で調製したときに生じるカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTH 組換え体の 4 つの分子種	共同	2021 年 11 月	第94 回日本生化学会大会	兒島憲二, 岡田歩実, 平田康祐, 小松侑記, 岡屋林, 下田佳苗, 石垣悠里, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTH 組換え体分子種の性状解析	共同	2022 年 3 月	日本農芸化学会2022 年度大会	兒島憲二, 石垣悠里, 平田康祐, 岡田歩実, 岡屋琳, 下田佳苗, 齋藤一樹		

レセプター阻害薬の探索を指向した生細胞ベース表面プラズモン共鳴測定法の開発	共同	2022年3月	日本薬学会第142年会	杉本晃平, 児島憲二, 平田康祐, 石垣悠里, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモンPTTHをブレビバチルス分泌発現系で調製したときに生じる性質の似通った2つの分子種	共同	2022年11月	第95回日本生化学会大会	児島憲二, 石垣悠里, 岡田歩実, 具庸賑, 田頭吉之助, 森藤美帆, 齋藤一樹		
ブレビバチルス分泌発現系で得られるカイコガ前胸腺刺激ホルモンPTTHの2つの分子種はジスルフィド架橋構造が異なる	共同	2023年3月	日本農芸化学会2023年度大会	児島憲二, 石垣悠里, 岡田歩実, 田頭吉之助, 齋藤一樹		
ブレビバチルス菌で分泌発現したときに得られるカイコガPTTHの二種類の組換体	共同	2023年5月	第69回日本生化学会近畿支部例会	田頭吉之助, 石垣悠里, 森藤美帆, 岡田歩実, 小松侑記, 平田康祐, 児島憲二, 齋藤一樹		
リガンド刺激に伴うチロシンキナーゼ型レセプターTorso活性化の検出	共同	2023年5月	第69回日本生化学会近畿支部例会	森藤美帆, 児島憲二, 石垣悠里, 福田雅, 谷口慶樹, 齋藤一樹		
リコンビナントヒトビルビン酸キナーゼのリコンビナーゼポリメラーゼ増幅法への応用	共同	2023年10月	日本農芸化学会中部・関西支部合同大会	森本健太, 児島憲二, Kevin Maafu Juma, 滝田禎亮, 齋藤一樹, 柳原格, 藤原伸介, 保川清		
ナノディスク作製に向けたカイコガPTTHレセプター組換体の調製	共同	2023年10月	第96回日本生化学会大会	児島憲二, 石本直大, 松井多暉, 北村洸樹, 谷口慶樹, 福田雅, 今井寛人, 石垣悠里, 齋藤一樹		
ヒトビルビン酸キナーゼM1をATP再生酵素とするリコンビナーゼポリメラーゼ増幅法	共同	2024年3月	日本農芸化学会2024年度大会	児島憲二, 森本健太, Kevin Maafu Juma, 滝田禎亮, 齋藤一樹, 柳原格, 藤原伸介, 保川清		
【競争的資金】スクリーニング技術を利用したEGFレセプター阻害ペプチドの系統的構造最適化	単独	2012年4月～ 2015年3月	科学研究費助成事業・基盤研究(C)	研究代表者		
昆虫前胸腺刺激ホルモンレセプターによるリガンド認識の分子基盤の構築	単独	2015年4月～ 2016年3月	科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究	研究代表者		
ジスルフィド架橋を多く数含むペプチドホルモンPTTHの効率的大量調製法の確立～NMRを用いた立体構造解析・相互作用解析に向けて～	単独	2018年度	姫路獨協大学・特別研究助成	研究代表者		
特異的な害虫駆除を目指した昆虫PTTH受容体によるリガンド認識機構の解明	単独	2019年度	ひょうご科学技術協会・学術研究助成金	研究代表者		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

IV 学会等および社会における主な活動

2011年8月～2013年7月	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会・書面審査委員
2013年12月～2015年11月	日本学術振興会 科学研究費委員会・専門委員
2016年8月～2017年7月	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会・書面審査員／書面評価員
2017年5月～2017年7月	日本学術振興会 卓越研究員候補者選考委員会・書面審査員
2019年7月～2020年9月	日本学術振興会 特別研究員等審査会・専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査委員及び国際事業委員会・書面審査員／書面評価員
2022年7月～2023年6月	日本学術振興会 特別研究員等審査会・専門委員、卓越研究員候補者選考委員会・書面審査委員及び国際事業委員会・書面審査員／書面評価員
2023年6月～2024年3月	姫路市新産業創出支援補助金事業・評価委員
～現在	日本薬学会・終身会員（日本薬学会近畿支部・委員）
～現在	日本化学会・会員
～現在	日本生化学会・会員（2021年9月～ 評議員）
～現在	日本蛋白質科学会・会員
～現在	日本ペプチド学会・会員
～現在	赤堀コンファレンス協会・会員

V 学内における主な活動

2017年4月～2021年3月	評議員
2018年2月～2024年3月	危険物保安監督者（危険物管理委員会委員）
2018年7月～2024年3月	広報委員会専門部会委員
2021年4月～2024年3月	学生委員・奨学生選考委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	柴田克志	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義概要の作成と教育用DVDの使用。（身体の科学および分子生物学の授業について）	2010年4月～現在	各講義は指定教科書に沿って行うが、全てを網羅するのではなくテーマごとに要点を絞って講義内容が全学生に理解しやすいように授業を行っている。講義内容の理解と記憶の定着のため、各授業のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。また、講義には教育用DVDを用いて、動画による学生の関心・理解度を高めるようにも工夫している。
2. 小テストによる学生の講義内容の理解度把握	2010年4月～現在	講義済みの内容については、復習テストとして前回の講義内容についての小テストを行っている。このように学生の学力評価を適宜おこなう事により、学習効率の向上を図るとともに学生の理解度を把握し迅速に講義内容・方法にフィードバック出来るように工夫している。
3. 「学生による授業評価」の活用	2010年4月～現在	毎学期の後半に行われる授業評価アンケートの結果に基づいて授業が適切に行われているかどうかの判断を行い、全学生が授業を理解し学習効果を向上させるべく、次学期以降の講義内容・方法の改善に役立てている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 身体の科学および分子生物学の授業の補助教材作成（ワークノート、小テスト）	2010年4月～現在	講義内容の理解と記憶の定着のため、各講義では授業のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。また、講義済みの内容の復習として小テストを適宜行っている。
2. 分子生物学実習書	2013年4月～現在	実験内容の立案、計画および予備実験による条件検討を行うとともに、実習書や配布資料などの教材を作成し配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数	備 考
論文						
Kinetochores stretching-mediated rapid silencing of the spindle-assembly checkpoint required for failsafe chromosome segregation.	共著	2021	Curr Biol.	Uchida KSK, Jo M, Nagasaka K, Takahashi M, Shindo N, Shibata K, Tanaka K, Masumoto H, Fukagawa T, Hirota T.	31: 1581-91	
VEGF-C/Flt-4 axis in tumor cells contributes to the progression of oral squamous cell carcinoma via upregulating VEGF-C itself and contactin-1 in an autocrine manner.	共著	2018	Am J Cancer Res.	Shigetomi S, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Fujii R, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Shimoda M, Kameyama K, Ozawa H, Tomita T, Ogawa K.	8:2046-63.	

Lipopolysaccharide-induced inflammation or unilateral ureteral obstruction yielded multiple types of glycosylated Lipocalin 2.	共著	2016	J Inflamm (Lond).	Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Fujimura A, Koshimizu TA.	3:7.	
Identification of protein arginine N-methyltransferase 5 (PRMT5) as a novel interacting protein with the tumor suppressor protein RASSF1A.	共著	2015	Biochem Biophys Res Commun.	Sakai N, Saito Y, Fujiwara Y, Shiraki T, Imanishi Y, Koshimizu TA, Shibata K.	467:778-84.	
Subcellular localization and internalization of the vasopressin V1B receptor.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	765:291-9.	
Pharmacological lineage analysis revealed the binding affinity of broad-spectrum substance P antagonists to receptors for gonadotropin-releasing peptide.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Arai K, Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	749: 98-106.	
Restoration of E-cadherin expression by selective Cox-2 inhibition and the clinical relevance of the epithelial-to-mesenchymal transition in head and neck squamous cell carcinoma.	共著	2014,	J Exp Clin Cancer Res.	Fujii R, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Shigetomi S, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Ozawa H, Tomita T, Kameyama K, Fujii M, Ogawa K.	33:e40.	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1991年4月～現在	日本循環器学会会員
1993年4月～現在	日本薬理学会会員
2007年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員

Ⅴ 学内における主な活動

2007年4月～現在	組換えDNA実験安全管理委員会委員
2008年4月～現在	健康管理室運営委員会委員
2008年4月～現在	生命倫理委員会委員
2017年4月～現在	自己評価委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	関 貴弘	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 講義における資料の工夫	2022 年 7 月～現在	「疾患薬理学I」、「疾患薬理学II」の主担当とオムニバス講義の薬理学の部分を担当している。パワーポイントを用いたプレゼンテーションの形で講義を行っている。ハンドアウトを配布しているが、ただ、配布したものを見ながら講義を聞くだけでは、あまり頭に入らないため、重要ポイントに余白を空けておき、講義中にその余白を埋めさせることで、理解度を高める工夫を行っている。また、アニメーションや動画を活用して、視覚的に分かりやすく、学生が興味を引くような資料作製を行っている。また、全ての講義を録画し、クラスルームで視聴できるようにすることで復習に役立てることと、e-ラーニングと講義後半で講義関連の練習問題を提示し、学んだ内容の定着を促す工夫も行っている。
② 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2022 年 10 月～現在	「薬理学実習」の実習全般と「模擬薬局実習」の一部の実習に関わっている。薬理学実習では、動物を扱った実習を行うため、操作手順を動画で示したり、実際にデモンストレーションを行うところをスクリーンに写したりすることで、実際に学生自身がこれから行う操作を示し、視覚的に理解できるようにする。模擬薬局実習でも同様に無菌操作に関するデモンストレーションや動画をスクリーンに写している。これを行った後で実際に学生に捜査をさせると、ある程度自分のやるべきことが理解できているため、集中して実習に取り組むことができる。
2 作成した教科書、教材、参考書		
疾患薬理学I 講義資料・講義動画	2022 年 9 月～現在	いずれも、講義前にクラスルームにアップロードし、PC を用いて講義を視聴することも可能としている。また、講義動画も作製し、クラスルームにアップロードして復習に役立てている。
疾患薬理学II 講義資料・講義動画	2023 年 4 月～現在	
その他オムニバス講義の資料・動画	2022 年 7 月～現在	
薬理学実習の実習書	2023 年 4 月～現在	実習の手順を細かく記載した実習書を作製している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
薬学教育推進委員としての活動	2022 年 7 月～現在	薬学教育推進委員として、国家試験対策・CBT 対策に取り組んできた。特に 2023 年 4 月からは薬学教育推進委員長として、これらの対策を主導し、予備校との交渉やオムニバス講義の日程調整、模擬試験やオムニバス講義の定期試験の実施、そしてその結果の分析、そして保護者との面談や説明会を行っている。

II 研究活動

下線：本人、*：責任著者

【著書】

1. Seki T*: Cerebellar Biochemistry/Pharmacology. In “*Trials for Cerebellar Ataxias. From Cellular Models to Human Therapies.*” Edited by Soong BW, Manto M, Brice A, Plust SM, pp 83-114, Springer, New York, 2023
2. Seki T*, Katsuki H: Chapter 26: Mammalian microautophagy: mechanism and roles in disease. In “*Autophagy Health and Disease 2nd edition.*” Edited by Rothermel B, Diwan A, pp 385-397, Elsevier, Amsterdam, 2021

3. 関 貴弘*: 初代培養小脳プルキンエ細胞への遺伝子導入. **実験医学別冊「ウイルスベクターによる遺伝子導入実験ガイド」** 平井宏和, 日置寛之, 小林和人 編, pp 113-119, 羊土社, 東京, 2020
 4. 佐藤公道*, 関 貴弘, 南 雅文: ノシセプチン/orphanin FQ に関する研究. 「**オピオイドの基礎と臨床**」 鎮痛薬・オピオイドペプチド研究会 編, pp 106-112, 株式会社ミクス, 東京, 2000
 5. 佐藤公道*, 南 雅文, 家永裕賀, 中川貴之, 関 貴弘, 小野木達弘, 青木康英, 片尾謙利, 勝又清至: オピオイド受容体の構造—受容体構造とリガンド選択性—. 「**オピオイド—適正使用と最近の進歩—**」 鎮痛薬・オピオイドペプチド研究会 編, pp 135-145, 株式会社ミクス, 東京, 1997
- 【総説・その他】
1. 関 貴弘*: D-システインの脊髄小脳失調症発症予防薬候補としての可能性. **全国脊髄小脳失調症・多系統萎縮症友の会ニュース** 253: 7-13, 2021
 2. 関 貴弘*: D-システインは硫化水素産生を介して培養小脳プルキンエ細胞の樹状突起 発達を促進する. **硫酸と工業** 73:11-18, 2020
 3. 関 貴弘*: 培養小脳プルキンエ細胞を用いた脊髄小脳失調症予防薬の探索. **日本薬理学雑誌** 154:310-314, 2019
 4. 関 貴弘*: 硫化水素産生を介した D-システインの小脳保護薬としての有用性. **日本薬理学雑誌** 154:133-137, 2019
 5. 関 貴弘*: 蛍光観察によるシャペロン介在性オートファジー活性の評価. **日本薬理学雑誌** 145: 206-210, 2015
 6. Sakai N*, Saito N, Seki T: Molecular pathophysiology of neurodegenerative disease caused by γ PKC mutations. **World Journal of Biological Psychiatry**, 12(Suppl 1): 95-98, 2011
 7. Seki T*, Adachi N, Abe-Seki N, Shimahara T, Takahashi H, Yamamoto K, Saito N, Sakai N: Elucidation of the molecular mechanism and exploration of novel therapeutics for spinocerebellar ataxia caused by mutant protein kinase C γ . **Journal of Pharmacological Sciences**, 116:239-247, 2011
 8. 関 貴弘*: 最新の話題: アルツハイマー病は感染する?. **日本薬理学雑誌** 138: 169, 2011
 9. 関 貴弘*: 最新の話題: うつ病と MAPK phosphatase-1 (MKP-1) . **日本薬理学雑誌** 138: 46, 2011.
 10. 天野 託*, 関 貴弘, 松林弘明, 笹 征史, 酒井規雄: 薬物依存における脳内報酬系細胞の機能変化に関する電気生理学的検討. **日本薬理学雑誌** 126: 35-42, 2005
 11. 佐藤公道*, 関 貴弘, 南 雅文: オピオイド受容体. **蛋白質・核酸・酵素** (増刊号 最先端創薬—戦略的アプローチから先端医療まで) 45: 985-990, 2000
- 【原著論文】
1. Kurauchi Y*, Ryu S, Tanaka R, Haruta M, Sasagawa K, Seki T, Ohta J, Katsuki H: Goreisan regulates cerebral blood flow according to barometric pressure fluctuations in female C57BL/6J mice. **Journal of Pharmacological Sciences**, 154:47-51, 2024
 2. Atef Y, Kinoshita K, Ichihara Y, Ushida K, Hirata Y, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H*: Therapeutic effect of allicin in a mouse model of intracerebral hemorrhage. **Journal of Pharmacological Sciences**, 153:208-214, 2023
 3. Idera A, Sharkey LM, Kurauchi Y, Kadoyama K, Paulson HL, Katsuki H, Seki T*: Wild-type and pathogenic forms of ubiquitin 2 differentially modulate components of the autophagy-lysosome pathways. **Journal of Pharmacological Sciences**, 152:182-192, 2023
 4. Nakanishi S, Kinoshita K, Kurauchi Y, Seki T, Kimura Y, Suzuki M, Suzuki K, Koyama H, Kagechika H, Katsuki H*: Acyclic retinoid peretinoin reduces hemorrhage-associated brain injury in vitro and in vivo. **European Journal of Pharmacology**, 954:175899, 2023
 5. Yamada Y, Fukaura-Nishizawa M, Nishiyama A, Ishii A, Kawata T, Shirakawa A, Tanaka M, Kondo Y, Takeo T, Nakagata N, Miwa T, Takeda H, Orita Y, Motoyama K, Higashi T, Arima H, Seki T, Kurauchi Y, Katsuki H, Higaki K, Minami K, Yoshikawa N, Ikeda R, Matsuo M, Irie T, Ishitsuka Y*: Different solubilizing ability of cyclodextrin derivatives for cholesterol in Niemann–Pick disease type C treatment. **Clinical and Translational Medicine**, 13:e1350, 2023
 6. Kurauchi Y*, Ohta Y, Matsuda K, Sanematsu W, Devkota HP, Seki T, Katsuki H: Matcha tea powder's Antidepressant-like effect through the activation of the dopaminergic system in mice is dependent on social isolation stress. **Nutrients**, 15:581, 2023
 7. Ueda E, Ohta T, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Katsuki H, Seki T*: D-Cysteine activates chaperone-mediated autophagy in cerebellar Purkinje cells via the generation of hydrogen sulfide and Nrf2 activation. **Cells**, 11:1230, 2022
 8. Atef Y, Kinoshita K, Ichihara Y, Ushida K, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H*: Distinct pharmacological profiles of monosulfide and trisulfide in an experimental model of intracerebral hemorrhage in mice. **Biological & Pharmaceutical Bulletin**, 45:1699-1705, 2022

9. Yamada Y*, Miwa T, Nakashima M, Shirakawa A, Ishii A, Namba N, Kondo Y, Takeo T, Nakagata N, Motoyama K, Higashi T, Arima H, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H, Okada Y, Ichikawa A, Higaki K, Hayashi K, Minami K, Yoshikawa N, Ikeda R, Ishikawa Y, Kajii T, Tachii K, Takeda H, Orita Y, Matsuo M, Irie T, Ishitsuka Y*: Fine-tuned cholesterol solubilizer, mono-6-O- α -D-maltosyl- γ -cyclodextrin, ameliorates experimental Niemann-Pick disease type C without hearing loss. *Biomedicine & Pharmacotherapy*, 55:113698, 2022
10. Maeda H*, Ichimizu S, Watanabe H*, Hamasaki K, Chikamatsu M, Murata R, Yumoto N, Seki T, Katsuki H, Otagiri M, Maruyama T*: Cell-penetrating albumin enhances the sublingual delivery of antigens through micropinocytosis. *International Journal of Biological Macromolecules*, 221:1439-1452, 2022
11. Kinoshita K, Yoshimizu A, Ichihara Y, Ushida K, Kotani S, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H*: A Nurr1 ligand C-DIM12 attenuates brain inflammation and improves functional recovery after intracerebral hemorrhage in mice. *Scientific Reports*, 12:11009, 2022
12. Yoshimizu A, Kinoshita K, Ichihara Y, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H*: Hydroxychloroquine improves motor function and affords neuroprotection without inhibition of inflammation and autophagy in mice after intracerebral hemorrhage. *Journal of Neuroimmunology*, 362:577786, 2022
13. Ohta T, Morikawa Y, Sato M, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H, Seki T*: Therapeutic potential of D-cysteine against in vitro and in vivo models of spinocerebellar ataxia. *Experimental Neurology*, 343:113791, 2021
14. Hori Y, Tsutsumi R, Nasu K, Boateng A, Ashikari Y, Sugiura M, Nakajima M, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H, Seki T*: Aromatic-turmerone analogs protect dopaminergic neurons in midbrain slice cultures through their neuroprotective activities. *Cells*, 10:1090, 2021
15. Sato M, Ohta T, Morikawa Y, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H, Seki T*: Ataxic phenotype and neurodegeneration are triggered by the impairment of chaperone-mediated autophagy in cerebellar neurons. *Neuropathology and Applied Neurobiology*, 47:198-209, 2021
16. Yamada Y, Ishitsuka Y*, Kondo Y, Nakahara S, Nishiyama A, Takeo T, Nakagata N, Motoyama K, Higashi T, Arima H, Kamei S, Shuto T, Kai H, Hayashino Y, Sugita M, Kikuchi T, Hirata F, Miwa T, Takeda H, Orita Y, Seki T, Ohta T, Kurauchi Y, Katsuki H, Matsuo M, Higaki K, Ohno K, Matsumoto S, Era T, Irie T: Differential mode of cholesterol inclusion with 2-hydroxypropyl-cyclodextrins impacts safety margin in treating Niemann-Pick disease type C. *British Journal of Pharmacology*, 178:2727-2746, 2021
17. Matsumoto K, Kinoshita K, Hijioka M, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Masuda T, Otsuki S, Katsuki H*: Nicotine promotes angiogenesis in mouse brain after intracerebral hemorrhage. *Neuroscience Research*, 170:284-294, 2021
18. Fukaura M, Ishitsuka Y*, Shirakawa S, Ushihama N, Yamada Y, Kondo Y, Takeo T, Nakagata N, Motoyama K, Higashi T, Arima H, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H, Higaki K, Matsuo M, Irie T*: Intracerebroventricular treatment with 2-hydroxypropyl- β -cyclodextrin decreased cerebellar and hepatic glycoprotein nonmetastatic melanoma protein B (GPNMB) expression in Niemann-Pick disease type C model mice. *International Journal of Molecular Sciences*, 22: 452, 2021
19. Sato M, Ueda E, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H, Seki T*: Glucocorticoids negatively regulates chaperone mediated autophagy and microautophagy. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 528:199-205, 2020
20. Noda D, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Interactions between rat cortico-striatal slice cultures and neutrophil-like HL60 cells under thrombin challenge: Toward elucidation of pathological events in intracerebral hemorrhage. *Journal of Pharmacological Sciences*, 142: 116-123, 2020
21. Matsumoto K, Kinoshita K, Yoshimizu A, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Laquinimod and 3,3'-diindolylethane alleviate neuropathological events and neurological deficits in a mouse model of intracerebral hemorrhage. *Journal of Neuroimmunology*, 342:577195, 2020
22. Obayashi H, Nagano Y*, Takahashi T, Seki T, Tanaka S, Sakai N, Matsumoto M, Maruyama H: Histone deacetylase 10 knockout activates chaperone-mediated autophagy and accelerates the decomposition of its substrate. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 523: 246-252, 2020
23. Kurauchi Y, Yoshimaru Y, Kajiwara Y, Yamada T, Matsuda K, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Na⁺, K⁺-ATPase inhibition causes hyperactivity and impulsivity in mice via dopamine D2 receptor-mediated mechanism. *Neuroscience Research*, 146:54-64, 2020
24. Oshima M, Seki T*, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H: Reciprocal regulation of chaperone-mediated autophagy/microautophagy and exosome release. *Biological & Pharmaceutical Bulletin*, 42:1394-1401, 2019
25. Sato M, Seki T*, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H: Rapamycin activates mammalian microautophagy. *Journal of Pharmacological Sciences*, 140: 01-204, 2019
26. Tsutsumi R, Hori Y, Seki T*, Kurauchi Y, Sato M, Oshima M, Hisatsune A, Katsuki H: Involvement of exosomes in dopaminergic neurodegeneration by microglial activation in midbrain slice cultures. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 511:427-433, 2019

27. Kurauchi Y, Devkota HP, Hori K, Nishihara Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Anxiolytic activities of Matcha tea powder, extracts, and fractions in mice: Contribution of dopamine D1 receptor- and serotonin 5-HT_{1A} receptor-mediated mechanisms. *Journal of Functional Foods*, 59: 301-308, 2019
28. Ichimizu S, Watanabe H, Maeda H, Hamasaki K, Ikegami K, Chuang VTG, Kinoshita R, Nishida K, Shimizu T, Ishima Y, Ishida T, Seki T, Katsuki H, Futaki S, Otagiri M, Maruyama T*: Cell-penetrating mechanism of intracellular targeting albumin: Contribution of macropinocytosis induction and endosomal escape. *Journal of Controlled Release*, 304:156-163, 2019
29. Kurauchi Y, Yamada T, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Chronic memantine administration prevents ouabain-induced hyperactivity in mice via maintenance of Na⁺, K⁺-ATPase activity in hippocampus. *Journal of Pharmacological Sciences*, 140: 295-299, 2019
30. Kinoshita K, Matsumoto K, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: A Nurrl agonist amodiaquine attenuates inflammatory events and neurological deficits in a mouse model of intracerebral hemorrhage. *Journal of Neuroimmunology*, 330:48-54, 2019
31. Kurauchi Y, Haruta M, Tanaka R, Sasagawa K, Ohta J, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Propranolol prevents cerebral blood flow changes and pain-related behaviors in migraine model mice. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 508:445-450, 2019
32. Seki T*, Sato M, Kibe Y, Ohta T, Oshima M, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H: Lysosomal dysfunction and early glial activation are involved in the pathogenesis of spinocerebellar ataxia type 21 caused by mutant transmembrane protein 240. *Neurobiology of Disease*, 120:34-50, 2018
33. Seki T*, Sato M, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H: D-Cysteine promotes dendritic development in primary cultured cerebellar Purkinje cells via hydrogen sulfide production. *Molecular and Cellular Neuroscience*, 93:36-47, 2018
34. Yamakawa T, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Endogenous nitric oxide inhibits, whereas awakening stimuli increase, the activity of a subset of orexin neurons. *Biological & Pharmaceutical Bulletin*, 41:1859-1865, 2018
35. Kurauchi Y, Noma K, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Na⁺, K⁺-ATPase inhibition induces neuronal cell death in rat hippocampal slice cultures: Association with GLAST and glial cell abnormalities. *Journal of Pharmacological Sciences*, 138: 167-175, 2018
36. Nakazono A, Adachi N*, Takahashi H, Seki T, Hamada D, Ueyama T, Sakai N, Saito N*: Pharmacological induction of heat shock proteins ameliorates toxicity of mutant PKC γ in spinocerebellar ataxia type 14. *Journal of Biological Chemistry*, 293 14758-14774, 2018
37. Takahashi S, Hisatsune A, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H*: Polysulfide protects midbrain dopaminergic neurons from MPP⁺-induced degeneration via enhancement of glutathione biosynthesis. *Journal of Pharmacological Sciences*, 137:47-54, 2018
38. Miyahara T, Adachi N, Seki T, Hide I, Tanaka S, Saito N, Irifune M, Sakai N*: Propofol induced diverse and subtype-specific translocation of PKC families. *Journal of Pharmacological Sciences*, 137: 20-29, 2018
39. Fujita I, Nobunaga M, Seki T*, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H: Cystamine-mediated inhibition of protein disulfide isomerase triggers aggregation of misfolded orexin-A in the Golgi apparatus and prevents extracellular secretion of orexin-A. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 489:164-170, 2017
40. Anan J, Hijioka M, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Cortical hemorrhage-associated neurological deficits and tissue damage in mice are ameliorated by therapeutic treatment with nicotine. *Journal of Neuroscience Research*, 95:1838-1849, 2017
41. Hijioka M, Anan J, Ishibashi H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Koga T, Yokomizo T, Shimizu T, Katsuki H*: Inhibition of leukotriene B₄ action mitigates intracerebral hemorrhage-associated pathological events in mice. *The Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics*, 360: 399-408, 2017
42. Sato M, Seki T*, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katsuki H: Fluorescent-based evaluation of chaperone-mediated autophagy and microautophagy activities in cultured cells. *Genes to Cells*, 21: 861-873, 2016
43. Dulla YA, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Shudo K, Katsuki H*: Regulatory mechanisms of vitamin D3 on production of nitric oxide and pro-inflammatory cytokines in microglial BV-2 cells. *Neurochemical Research*, 41:2848-2858, 2016
44. Takaoka Y, Takahashi M, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Shudo K, Katsuki H*: Retinoic acid receptor agonist Am80 inhibits CXCL2 production from microglial BV-2 cells via attenuation of NF- κ B signaling. *International Immunopharmacology*, 38: 367-376, 2016
45. Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Na⁺, K⁺-ATPase dysfunction causes cerebrovascular endothelial cell degeneration in rat prefrontal cortex slice cultures. *Brain Research*, 1644:249-257, 2016
46. Kamigaki M, Hide I*, Yanase Y, Shiraki H, Harada K, Tanaka Y, Seki T, Shirafuji T, Tanaka S, Hide M, Sakai N: The Toll-like receptor 4-activated neuroprotective microglia subpopulation survives via granulocyte macrophage colony-stimulating factor and JAK2/STAT5 signaling. *Neurochemistry International*, 93: 82-94, 2016

47. Takahashi S, Hisatsune A, Kurauchi Y, Seki T, Katsuki H*: Insulin-like growth factor 1 specifically up-regulates expression of modifier subunit of glutamate-cysteine ligase and enhances glutathione synthesis in SH-SY5Y cells. *European Journal of Pharmacology*, 771:99-106, 2016
48. Hijioka M, Anan J, Matsushita H, Ishibashi H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Katsuki H*: Axonal dysfunction in internal capsule is closely associated with early motor deficits after intracerebral hemorrhage in mice. *Neuroscience Research*, 106: 38-46, 2016
49. Fujibayashi T, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Shudo K, Katsuki H*: Mitogen-activated protein kinases regulate expression of neuronal nitric oxide synthase and neurite outgrowth via non-classical retinoic acid receptor signaling in human neuroblastoma SH-SY5Y cells. *Journal of Pharmacological Sciences*, 129:119-126, 2015
50. Kiyofuji K, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Mishima S, Katsuki H*: A natural compound macelignan protects midbrain dopaminergic neurons from inflammatory degeneration via microglial arginase-1 expression. *European Journal of Pharmacology*, 760:129-135, 2015
51. Ramani B, Harris GM, Huang R, Seki T, Murphy GG, Costa Mdo C, Fischer S, Saunders TL, Xia G, McEachin RC, Paulson HL*: A knockin mouse model of spinocerebellar ataxia type 3 exhibits prominent aggregate pathology and aberrant splicing of the disease gene transcript. *Human Molecular Genetics*, 24:1211-1224, 2015
52. Takahashi H, Adachi N, Shirafuji T, Danno S, Ueyama T, Vendruscolo M, Shuvaev AN, Sugimoto T, Seki T, Hamada D, Irie K, Hirai H, Sakai N, Saito N*: Identification and characterization of PKC γ , a kinase associated with SCA14, as an amyloidogenic protein. *Human Molecular Genetics*, 24:525-533, 2015
53. Yamamoto K, Seki T*, Yamamoto H, Adachi N, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N: Dereglulation of the actin cytoskeleton and macropinocytosis in response to phorbol ester by the mutant protein kinase C gamma that causes spinocerebellar ataxia type 14. *Frontiers in Physiology*, 5:126, 2014
54. Nobunaga M, Obukuro K, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Tsutsui M, Katsuki H*: High fat diet induces specific pathological changes in hypothalamic orexin neurons in mice. *Neurochemistry International*, 78: 61-66, 2014
55. Matsushita H, Hijioka M, Ishibashi H, Anan J, Kurauchi Y, Hisatsune A, Seki T, Shudo K, Katsuki H*: Suppression of CXCL2 upregulation underlies the therapeutic effect of the retinoid Am80 on intracerebral hemorrhage in mice. *Journal of Neuroscience Research*, 92: 1024-1034, 2014
56. Tanaka S*, Miyagi T, Dohi E, Seki T, Hide I, Sotomaru Y, Saeki Y, Antonio Chiocca E, Matsumoto M, Sakai N: Developmental expression of GPR3 in rodent cerebellar granule neurons is associated with cell survival and protects neurons from various apoptotic stimuli. *Neurobiology of Disease*, 68: 215-227, 2014
57. Seki T, Gong L, Williams AJ, Sakai N, Todi SV, Paulson HL*: JosD1, a membrane-targeted deubiquitinating enzyme, is activated by ubiquitination and regulates membrane dynamics, cell motility, and endocytosis. *Journal of Biological Chemistry*, 288: 17145-17155, 2013
58. Ogawa K, Seki T (Co-first author), Onji T, Adachi N, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N*: Mutant γ PKC that causes spinocerebellar ataxia type 14 upregulates Hsp70, which protects cells from the mutant's cytotoxicity. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 440:25-30, 2013
59. Fujiwara M, Yamamoto H, Miyagi T, Seki T, Tanaka S, Hide I, Sakai N*: Effects of the chemical chaperone 4-phenylbutylate on the function of the serotonin transporter (SERT) expressed in COS-7 cells. *Journal of Pharmacological Sciences*, 122:71-83, 2013
60. Yamamoto H, Tanaka S, Tanaka A, Hide I, Seki T, Sakai N*: Long-term exposure of RN46A cells expressing serotonin transporter (SERT) to a cAMP analog up-regulates SERT activity and is accompanied by neural differentiation of the cells. *Journal of Pharmacological Sciences*, 121: 25-38, 2013
61. Yan HD, Ishihara K*, Seki T, Hanaya R, Kurisu K, Arita K, Serikawa T, Sasa M: Inhibitory effects of levetiracetam on the high-voltage-activated L-type Ca²⁺ channels in hippocampal CA3 neurons of spontaneously epileptic rat (SER). *Brain Research Bulletin*, 90:142-148, 2013
62. Seki T*, Yoshino KI, Tanaka S, Dohi E, Onji T, Yamamoto K, Hide I, Paulson HL, Saito N, Sakai N: Establishment of a novel fluorescence-based method to evaluate chaperone-mediated autophagy in a single neuron. *PLoS ONE*, 7: e31232, 2012
63. Dohi E, Tanaka S*, Seki T, Miyagi T, Hide I, Takahashi T, Matsumoto M, Sakai N: Hypoxic stress activates chaperone-mediated autophagy and modulates neuronal cell survival. *Neurochemistry International*, 60:431-442, 2012
64. Harada K, Hide I*, Seki T, Tanaka S, Nakata Y, Sakai N: Extracellular ATP differentially modulates Toll-like receptor 4-mediated cell survival and death of microglia. *Journal of Neurochemistry*, 116:1138-1147, 2011
65. Shuvaev AN, Horiuchi H, Seki T, Goenawan H, Irie T, Iizuka A, Sakai N, Hirai H*: Mutant PKC γ in spinocerebellar ataxia type 14 disrupts synapse elimination and long-term depression in Purkinje cells in vivo. *The Journal of Neuroscience*, 31: 14324-14334, 2011

66. Seki T, Abe-Seki N, Kikawada T, Takahashi H, Yamamoto K, Adachi N, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N*: Effect of trehalose on the properties of mutant γ PKC, which causes spinocerebellar ataxia type 14, in neuronal cell lines and cultured Purkinje cells. *Journal of Biological Chemistry*, 285: 33252-33264, 2010
67. Seki T, Takahashi H, Yamamoto K, Ogawa K, Onji T, Adachi N, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N*: Congo red, and amyloid-inhibiting compound, alleviates various types of cellular dysfunction triggered by mutant protein kinase $C\gamma$ that causes spinocerebellar ataxia type 14 (SCA14) by inhibiting oligomerization and aggregation. *Journal of Pharmacological Sciences*, 114:206-216, 2010
68. Yamamoto K, Seki T, Adachi N, Takahashi T, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N*: Mutant protein kinase $C\gamma$ that causes spinocerebellar ataxia type 14 (SCA14) is selectively degraded by autophagy. *Genes to Cells*, 15: 425-437, 2010
69. Nobukuni M, Mochizuki H, Okada S, Kameyama N, Tanaka A, Yamamoto H, Amano T, Seki T, Sakai N*: The C-terminal region of serotonin transporter is important for its trafficking and glycosylation. *Journal of Pharmacological Sciences*, 111:392-404, 2009
70. Seki T, Shimahara T, Yamamoto K, Abe N, Amano T, Adachi N, Takahashi H, Kashiwagi, K, Saito N, Sakai N*: Mutant γ PKC found in spinocerebellar ataxia type 14 induces aggregate-independent maldevelopment of dendrites in primary cultured Purkinje cells. *Neurobiology of Disease*, 33:260-273, 2009
71. Adachi N, Kobayashi T, Takahashi H, Kawasaki T, Shirai Y, Ueyama T, Matsuda T, Seki T, Sakai N, Saito N*: Enzymological analysis of mutant protein kinase $C\gamma$ causing spinocerebellar ataxia type 14 and dysfunction in Ca^{2+} homeostasis. *Journal of Biological Chemistry*, 283: 19854-19863, 2008
72. Seki T, Takahashi H, Adachi N, Abe N, Shimahara T, Saito N, Sakai N*: Aggregate formation of mutant protein kinase $C\gamma$ found in spinocerebellar ataxia type 14 impairs ubiquitin-proteasome system and induces endoplasmic reticulum stress. *European Journal of Neuroscience*, 26:3126-3140, 2007
73. Okii N, Amano T, Seki T, Matsubayashi H, Mukai H, Ono Y, Kurisu K, Sakai N*: Fragmentation of protein kinase N (PKN) in the hydrocephalic rat brain. *Acta Histochemica et Cytochemica*, 40: 113-121, 2007
74. Seki T, Irie N, Nakamura K, Sakaue H, Ogawa W, Kasuga M, Yamamoto H, Ohmori S, Saito N, Sakai N*: Fused protein of δ PKC activation loop and PDK1-interacting fragment (δ AL-PIF) functions as a pseudosubstrate and an inhibitory molecule for PDK1 when expressed in cells. *Genes to Cells*, 11:1051-1070, 2006
75. Mochizuki H, Seki T, Adachi N, Saito N, Mishima HK, Sakai N*: R659S mutation of γ PKC is susceptible to cell death: Implication of this mutation/polymorphism in the pathogenesis of retinitis pigmentosa. *Neurochemistry International*, 49: 669-675, 2006
76. Hiramoto K, Kawakami H*, Inoue K, Seki T, Maruyama H, Morino H, Matsumoto M, Kurisu K, Sakai N: Identification of a new family of spinocerebellar ataxia type 14 (SCA14) in the Japanese SCA population by the screening of PRKCG exon 4. *Movement Disorders*, 21:1355-1360, 2006
77. Seki T, Adachi N, Ono Y, Mochizuki H, Hiramoto K, Amano T, Matsubayashi H, Matsumoto M, Kawakami H, Saito N, Sakai, N*: Mutant protein kinase $C\gamma$ found in spinocerebellar ataxia type 14 is susceptible to aggregation and causes cell death. *Journal of Biological Chemistry*, 280: 29096-29106, 2005
78. Seki T, Matsubayashi H, Amano T, Shirai Y, Saito N, Sakai N*: Phosphorylation of PKC activation loop plays an important role in receptor-mediated translocation of PKC. *Genes to Cells*, 10:225-239, 2005
79. Mochizuki H, Amano T, Seki T, Matsubayashi H, Mitsuhashi C, Morita K, Kitayama S, Dohi T, Mishima KH, Sakai N*: Role of C-terminal region in the functional regulation of rat serotonin transporter (SERT). *Neurochemistry International*, 46:93-105, 2005
80. Hirano K, Seki T, Sakai N, Kato Y, Hashimoto H, Uchida S, Yamada S*: Effects of continuous administration of paroxetine on ligand binding site and expression of serotonin transporter protein in mouse brain. *Brain Research*, 1053:154-161, 2005
81. Seki T, Matsubayashi H, Amano T, Kitada K, Serikawa T, Sasa M, Sakai N*: Adenoviral gene transfer of aspartoacylase ameliorates tonic convulsions of spontaneously epileptic rats. *Neurochemistry International*, 45:171-178, 2004
82. Matsubayashi H, Inoue A, Amano T, Seki T, Nakata Y, Sasa M, Sakai N*: Involvement of $\alpha 7$ and $\alpha 4\beta 2$ type postsynaptic nicotinic acetylcholine receptors in nicotine-induced excitation of dopaminergic neurons in the substantia nigra. A patch clamp and single-cell PCR study using acutely dissociated nigral neurons. *Molecular Brain Research*, 129: 1-7, 2004
83. Amano T, Aihua Z, Matsubayashi H, Seki T, Serikawa T, Sasa M, Sakai N*: Antiepileptic effects of single and repeated oral administrations of S-312-d, a novel calcium channel antagonist, on tonic convulsions in spontaneously epileptic rats. *Journal of Pharmacological Sciences*, 95:355-362, 2004
84. Matsubayashi H, Amano T, Seki T, Sasa M, Sakai N*: Postsynaptic $\alpha 4\beta 2$ and $\alpha 7$ type nicotinic acetylcholine receptors contribute to the local and endogenous acetylcholine-mediated synaptic transmission in nigral dopaminergic neurons. *Brain Research*, 1005:1-8, 2004

85. Matsubayashi H, Amano T, Seki T, Sasa M, Sakai N*: Electrophysiological characterization of nicotine-induced excitation of dopaminergic neurons in the rat substantia nigra. *Journal of Pharmacological Sciences*, 93: 143-148, 2003
86. Shiwa T, Amano T, Matsubayashi H, Seki T, Sasa M, Sakai N*: Perospirone, a novel antipsychotic agent, hyperpolarizes rat dorsal raphe neurons via 5-HT1A receptor. *Journal of Pharmacological Sciences*, 93: 114-117, 2003
87. Amano T*, Matsubayashi H, Seki T, Sasa M, Sakai N: Repeated administration of methamphetamine causes hypersensitivity of D2 receptor in rat ventral tegmental area. *Neuroscience Letters*, 347:89-92, 2003
88. Seki T*, Matsubayashi H, Amano T, Kitada K, Serikawa T, Sakai N, Sasa M: Adenoviral gene transfer of aspartoacylase into the tremor rat, a genetic model of epilepsy, as a trial of gene therapy for inherited epileptic disorder. *Neuroscience Letters*, 328:249-252, 2002
89. Ide S, Sakano K, Seki T, Awamura S, Minami M, Satoh M*: Endomorphin-1 discriminates the μ -opioid receptor from δ - and κ -opioid receptors by multiple binding domains. The Japanese *Journal of Pharmacology*, 83:306-311, 2000
90. Seki T, Awamura S, Kimura C, Ide S, Sakano K, Minami M, Nagase H, Satoh M*: Pharmacological properties of TRK-820 on cloned μ -, δ - and κ -opioid receptors and nociceptin receptor. *European Journal of Pharmacology*, 376:159-167, 1999
91. Nakamoto H, Soeda Y, Seki T, Watanabe T, Satoh M*: Possible involvement of descending serotonergic systems in antinociception by centrally administered elcatonin in mice. *Biological & Pharmaceutical Bulletin*, 22: 691-697, 1999
92. Seki T, Minami M, Kimura C, Uehara T, Nakagawa T, Satoh M*: Bremazocine recognizes the difference in four amino acid residues to discriminate between a nociceptin/orphanin FQ receptor and opioid receptors. *The Japanese Journal of Pharmacology* 77: 301-306, 1998
93. Seki T, Minami M, Nakagawa T, Ienaga Y, Morisada A, Satoh M*: DAMGO recognizes four residues in the third extracellular loop to discriminate between μ - and κ -opioid receptors. *European Journal of Pharmacology*, 350:301-310, 1998
94. Minami M, Nakagawa T, Seki T, Onogi T, Aoki Y, Katao Y, Katsumata S, Satoh M*: A single residue, Lys¹⁰⁸, of the δ -opioid receptor prevents the μ -opioid-selective ligand [D-Ala²,N-MePhe⁴,Gly-ol⁵]enkephalin from binding to the δ -opioid receptor. *Molecular Pharmacology*, 50: 1413-1422, 1996

【学会発表】(本人発表分のみ)

(招待講演・シンポジウム・ワークショップなど)

1. 関 貴弘: 神経変性疾患の治療・予防標的としてのシャペロン介在性オートファジー (シンポジウム: リソソーム膜の多彩な機能を担う LAMP2 タンパク質). **第96回日本生化学大会**, 福岡, 2023
2. 関 貴弘: AAV ベクターを活用した脊髄小脳失調症共通の発症機序解明と治療薬探索 (シンポジウム: アデノ随伴ウイルスベクターの最先端 —基礎研究から臨床応用まで). **第64回日本神経病理学会総会 学術研究会・第66回日本神経化学学会大会 合同大会**, 神戸, 2023
3. 関 貴弘: 脊髄小脳失調症の共通の治療標的としてのシャペロン介在性オートファジー (シンポジウム: アデノ随伴ウイルス(AAV) ベクターを用いた神経疾患の創薬研究・遺伝子治療の動向). **第96回日本薬理学会年会**, 横浜, 2022
4. 関 貴弘: 脊髄小脳失調症治療の現状と発症予防薬の探索. **次世代薬理学セミナー2021 in 名古屋**, 名古屋, 2021
5. 関 貴弘, 堀ユリア, 堤 麗帆, 佐藤正寛, 倉内祐樹, 香月博志: 活性化ミクログリア由来 exosome によるドパミン神経変性 (ワークショップ: 細胞外小胞研究の最前線). **第42回日本分子生物学会年会**, 福岡, 2019
6. 関 貴弘: D-Cysteine は脊髄小脳失調症の治療薬・予防薬となりうるか?. **第43回西日本薬理学研究会**, 大分県九重町, 2019
7. 関 貴弘: 培養小脳プルキンエ細胞を用いた脊髄小脳失調症予防薬の効率的な探索 (シンポジウム: 若手研究者による難治性神経変性疾患克服への新たなアプローチ). **第92回日本薬理学会年会**, 大阪, 2019
8. 関 貴弘: 硫化水素産生を介した D-システインの小脳保護薬としての有用性 (シンポジウム: 硫化水素をはじめとした生理活性イオウ研究の新展開). **第92回日本薬理学会年会**, 大阪, 2019
9. 関 貴弘: 変異 γ PKC による脊髄小脳失調症発症の分子メカニズム解明と治療薬探索 (学術奨励賞受賞講演). **第84回日本薬理学会年会**, 横浜, 2011
10. 関 貴弘, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) の原因となる変異 γ PKC は初代培養小脳プルキンエ細胞樹状突起の縮小とスパインの減少を引き起こす. **生理学研究所シナプス研究会 2009 「シナプス機能と病態」**, 愛知県岡崎市, 2009

(一般発表 (国際学会))

11. Seki T, Sato M, Konno A, Hirai H, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katuski H: D-Cysteine enhances the dendritic development of primary cultured cerebellar Purkinje cells via the production of hydrogen sulfide. *The 4th International Conference of D-Amino Acid Research (IDAR2019)*, Tokyo, 2019

12. Seki T, Oshima M, Kurauchi Y, Hisatsune A, Katuski H. Disturbance of intracellular lipid storage in cell models of several types of spinocerebellar ataxia. *18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology (WCP2018)*, Kyoto, 2018
 13. Seki T, Sato M, Oshima M, Tsutsumi R, Kurauchi Y, Hisatsune A, Konno A, Hirai H, Katsuki H: Transmembrane protein 240 (TMEM240), a causal protein for spinocerebellar ataxia type 21, regulates membrane trafficking and intracellular lipid accumulation. *Neuroscience 2015 (45th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, Chicago (USA), 2015
 14. Seki T, Todi SV, Sakai N, Paulson HL. Ubiquitin-mediated regulation and functional roles of the deubiquitinating enzyme JosD1. *Neuroscience 2013 (43rd Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, San Diego (USA), 2013
 15. Seki T, Yamamoto K, Ogawa K, Onji T, Tanaka S, Hide I, Paulson HL, Saito N, Sakai N: Effects of the SCA14 disease protein γ PKC on cellular protein quality control systems. *Ataxia Investigators Meeting 2012 (AIM2012)*, San Antonio (USA), 2012
 16. Seki T, Yoshino KI, Ogawa K, Onji T, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N: Mutant γ PKC causing spinocerebellar ataxia type 14 (SCA14) preferably interacts with heat shock cognate protein 70 (Hsc70) and affects its translocation to lysosome. *Neuroscience 2010 (40th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, San Diego (USA), 2010
 17. Seki T, Yamamoto K, Ogawa K, Tanaka S, Hide I, Saito N, Sakai N: Effect of mutant γ PKC causing spinocerebellar ataxia type 14 on autophagic protein degradation. *5th International Symposium on Autophagy*, Otsu, 2009
 18. Seki T, Yamamoto K, Saito N, Sakai N: Disaccharide trehalose alleviated various dysfunctions of primary-cultured cerebellar Purkinje cells triggered by the mutant γ PKC found in spinocerebellar ataxia type 14. *Neuroscience 2008 (38th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, Washington DC (USA), 2008
 19. Seki T, Abe N, Yamamoto K, Shimahara T, Adachi N, Saito N, Sakai N: Aggregate formation and cytotoxic effect of mutant protein kinase C γ found in spinocerebellar ataxia 14 was prevented by disaccharide trehalose. *Neuroscience 2007 (37th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, San Diego (USA), 2007
 20. Seki T, Shimahara T, Adachi N, Saito N, Sakai N: Aggregate formation of mutant γ PKC found in SCA14 impairs the ubiquitin-proteasome system and induces ER stress. *Neuroscience 2006 (36th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, Atlanta (USA), 2006
 21. Seki T, Shimahara T, Adachi N, Saito N, Sakai N: Aggregate formation of mutant γ PKC found in SCA14 impairs ubiquitin-proteasome system. *6th Annual Meeting of International College of Geriatric Phychoneuropharmacology (ICGP2006)*, Hiroshima, 2006
 22. Seki T, Shimahara T, Adachi N, Saito N, Sakai N: Ubiquitin-proteasome system was impaired by the aggregate formation of mutant protein kinase C gamma found in spinocerebellar ataxia type 14. *20th International Union of Biochemistry and Molecular Biology international meeting (IUBMB2006)*, Kyoto, 2006
 23. Seki T, Adachi N, Ono Y, Mochizuki H, Hiramoto K, Amano T, Matsubayashi H, Matsumoto M, Kawakami H, Saito N, Sakai N: Mutant protein kinase C γ (γ PKC) found in spinocerebellar ataxia type 14 (SCA14) tends to aggregate in the cytoplasm and cause cell death. *Neuroscience 2005 (35th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, Washington DC (USA), 2005
 24. Seki T, Matsubayashi H, Amano T, Saito N, Sakai N: Pseudosubstrate of 3-phosphoinositide-dependent protein kinase 1 (PDK1) regulates PKC functions. *Neuroscience 2004 (34th Annual Meeting of Society for Neuroscience)*, San Diego (USA), 2004
- (一般発表 (国内学会))
25. 関 貴弘, 堀ユリア, Alex Boateng, 杉浦正晴, 倉内祐樹, 香月博志: Aromatic-turmerone 類縁体は Nrf2 活性化を介してドーパミン神経を保護する. *第143回日本薬理学会近畿部会*, 名古屋, 2023
 26. 関 貴弘, 植田恵梨香, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: D-システインによる小脳神経のシャペロン介在性オートファジー活性化. *日本薬学会第143年会*, 札幌, 2023
 27. 関 貴弘, 植田恵梨香, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: D-Cysteine は硫化水素産生及び Nrf2 活性化を介してシャペロン介在性オートファジーを活性化する. *第142回日本薬理学会近畿部会*, 東大阪, 2022
 28. 関 貴弘, 太田智子, 森川友里, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: D-システインの慢性投与は脊髄小脳失調症1型モデルマウスの症状進展を抑制する. *第44回日本神経科学大会*, 神戸 (ハイブリッド開催), 2021
 29. 関 貴弘, 佐藤正寛, 太田智子, 森川友里, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: 小脳神経細胞におけるシャペロン介在性オートファジーの活性低下は運動障害と神経変性を誘導する. *第94回日本薬理学会年会*, 札幌 (ハイブリッド開催), 2021
 30. 関 貴弘, 佐藤正寛, 太田智子, 森川友里, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: 小脳神経細胞における miRNA を用いた LAMP2A ノックダウンは運動障害と神経変性を誘導する. *第43回日本神経科学大会*, 神戸 (オンライン開催), 2020
 31. 関 貴弘, 堀ユリア, 堤 麗帆, 佐藤正寛, 倉内祐樹, 香月博志: 炎症性ドーパミン神経障害における分泌小胞 exosome の関与. *第93回日本薬理学会年会*, 横浜 (誌上開催), 2020

32. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: 初代培養小脳プルキンエ細胞を用いた in vitro 脊髄小脳失調症モデルに対する D-cysteine の効果. **第72 回日本薬理学会西南部会**, 那覇, 2019
33. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: 初代培養小脳 Purkinje 細胞の樹状突起発達に対する D-cysteine の効果. **第60 回日本組織細胞化学会・学術集会**, 神戸, 2019
34. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 香月博志: D-cysteine は脊髄小脳失調症原因タンパク質を発現する初代培養小脳プルキンエ細胞の樹状突起発達低下を改善する. **Neuro2019 (第42 回日本神経科学大会・第62 回日本神経化学会大会 合同大会)**, 新潟, 2019
35. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: D-cysteine が培養小脳プルキンエ細胞の樹状突起発達に及ぼす影響. **第41 回日本神経科学大会**, 神戸, 2018
36. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: D-Cysteine は硫化水素産生を介して、培養小脳 Purkinje 細胞の樹状突起発達を促進する. **第133 回日本薬理学会近畿部会**, 広島, 2018
37. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: D-cysteine が初代培養小脳 Purkinje 細胞の樹状突起発達に及ぼす影響. **第71 回日本酸化ストレス学会・第18 回日本NO 学会合同学術集会 合同大会**, 京都, 2018
38. 関 貴弘, 木部友貴, 太田智子, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: 脊髄小脳失調症の原因となる変異 transmembrane protein 240 の小脳神経細胞への発現は神経細胞死を起こさずにグリオーシス及び運動機能障害を引き起こす. **日本薬学会第138 年会**, 金沢, 2018
39. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: D-Cysteine が初代培養小脳プルキンエ細胞の樹状突起発達に及ぼす影響. **ConBio2017 (2017 年度生命科学系学会合同年次大会)**, 神戸, 2017
40. 関 貴弘, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: D-Cysteine が初代培養小脳 Purkinje 細胞の樹状突起発達に及ぼす影響. **第70 回日本薬理学会西南部会**, 鹿児島, 2017
42. 関 貴弘, 木部友貴, 大島 睦, 佐藤正寛, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: 脊髄小脳失調症の原因となる変異 transmembrane protein 240 は細胞内脂質代謝と小脳プルキンエ細胞の形態を調節する. **第40 回日本神経科学大会**, 千葉, 2017
43. 関 貴弘, 佐藤正寛, 大島 睦, 木部友貴, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: 脊髄小脳失調症 21 型原因タンパク質 transmembrane protein240 (TMEM240) は小胞形成とオートファジー・リソソーム系の機能異常を引き起こす. **第39 回日本分子生物学会年会**, 横浜, 2016
44. 関 貴弘, 藤田一成, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: プロテインジスルフィドイソメラーゼ阻害が視床下部オレキシン神経に及ぼす影響. **第69 回日本薬理学会西南部会**, 松山, 2016
45. 関 貴弘, 佐藤正寛, 木部友貴, 今野 歩, 平井宏和, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: 脊髄小脳失調症 21 型の原因となる変異 TMEM240 が神経形態に及ぼす影響. **第89 回日本薬理学会年会**, 横浜, 2016
46. 関 貴弘, 佐藤正寛, 大島 睦, 堤 麗帆, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 今野 歩, 平井宏和, 香月博志: 脊髄小脳失調症 21 型原因タンパク質 TMEM240 は細胞内脂質蓄積とリソソーム系タンパク質分解を制御する. **第38 回日本神経科学大会**, 神戸, 2015
47. 関 貴弘, 佐藤正寛, 河原麻奈美, 大島 睦, 堤 麗帆, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: Molecular properties of TMEM240, a causative protein of SCA21. **第56 回日本神経学会学術大会**, 新潟, 2015
48. 関 貴弘, 佐藤正寛, 河原麻奈美, 大島 睦, 堤 麗帆, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: 脊髄小脳失調症 21 型原因タンパク質 TMEM240 の特性. **第88 回日本薬理学会年会**, 名古屋, 2015
49. 関 貴弘, 佐藤正寛, 河原麻奈美, 倉内祐樹, 久恒昭哲, 香月博志: シャペロン介在性オートファジー及びミクロオートファジーの細胞レベルでの可視化. **第37 回日本分子生物学会**, 横浜, 2014
50. 関 貴弘, 田中 茂, 土肥栄祐, 秀 和泉, 酒井規雄, 香月博志: 蛍光イメージングによる神経細胞でのシャペロン介在性オートファジー活性の可視化. **日本薬学会第134 年会**, 熊本, 2014
51. 関 貴弘, Sokol V. Todi, 酒井規雄, Henry L. Paulson, 香月博志: 脱ユビキチン化酵素 JosD1 は細胞形態、細胞移動及びエンドサイトーシスを制御する. **第87 回日本薬理学会年会**, 仙台, 2014
52. 関 貴弘, Sokol V. Todi, 酒井規雄, Henry L. Paulson, 香月博志: 脱ユビキチン化酵素 JosD1 の活性制御機構と細胞機能. **第36 回日本分子生物学会**, 神戸, 2013
53. 関 貴弘, 吉野健一, 田中 茂, 土肥栄祐, 隠地智也, 秀 和泉, Henry L. Paulson, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 蛍光イメージングを用いた神経細胞でのシャペロン介在性オートファジー活性の解析. **第43 回日本精神神経薬理学会**, 宜野湾, 2013

54. 関 貴弘, Sokol V. Todi, 酒井規雄, Henry L. Paulson, 香月博志: 脱ユビキチン化酵素 JosD はユビキチンによる活性調節を受ける. **第123 回日本薬理学会近畿部会**, 名古屋, 2013
55. 関 貴弘, Sokol V. Todi, 酒井規雄, Henry L. Paulson, 香月博志: 脱ユビキチン化酵素 JosD の機能的役割. **Neuro2013 (第36 回日本神経科学大会・第56 回日本神経化学学会大会・第23 回日本神経回路学会大会 合同大会)**, 京都, 2013
56. 関 貴弘, 吉野健一, 隠地智也, 田中 茂, 秀 和泉, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 新規活性評価法を用いたシャペロン介在性オートファジー活性に対する脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) の原因となる変異 γ PKC の影響. 第 84 回日本薬理学会年会, 横浜 (紙上開催), 2011
57. 関 貴弘, 吉野健一, 隠地智也, 田中 茂, 秀 和泉, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) の原因となる変異 γ PKC は heat shock cognate protein 70 (Hsc70) と結合し、そのリソソームへのトランスロケーションを抑制する. **BMB2010 (第33 回 日本分子生物学会年会・第83 回日本生化学学会大会合同大会)**, 神戸, 2010
58. 関 貴弘, 吉野健一, 小川弘太, 隠地智也, 田中 茂, 秀 和泉, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) の原因となる変異 γ PKC は heat shock cognate protein 70 (Hsc70) と結合し、そのリソソームへのトランスロケーションに影響を及ぼす. **Neuro2010 (第53 回日本神経化学学会大会・第33 回日本神経科学大会・第20 回日本神経 回路学会大会 合同大会)**, 神戸, 2010
59. 関 貴弘, 山本和央, 小川弘太, 隠地智也, 田中 茂, 秀 和泉, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) を引き起こす変異 γ PKC がオートファジー性タンパク質分解に及ぼす影響. **第32 回日本分子生物学会年会**, 横浜, 2009
60. 関 貴弘, 山本和央, 小川弘太, 田中 茂, 秀 和泉, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) を引き起こす変異 γ PKC によりシャペロン介在性オートファジーが活性化される. **第32 回日本神経科学大会**, 名古屋, 2009
61. 関 貴弘, 小川弘太, 田中 茂, 秀 和泉, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 遺伝性脊髄小脳失調症 14 型で見出された変異 γ PKC のリソソーム系タンパク質分解に及ぼす影響. **第82 回日本薬理学会年会**, 横浜, 2009
62. 関 貴弘, 山本和央, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 初代培養小脳プルキンエ細胞において、二糖類トレハロースは脊髄小脳失調症 14 型で発見された変異 γ PKC により引き起こされる様々な機能異常を改善した. **BMB2008 (第31 回 日本分子生物学会年会・第81 回 日本生化学学会大会 合同大会)**, 神戸, 2008
63. 関 貴弘, 山本和央, 小川弘太, 足立直子, 高橋英之, 齋藤尚亮, 酒井規雄: アミロイド染色色素 Congo red は脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) の原因である変異 γ PKC のオリゴマー及び凝集体形成を抑制する. **第114 回日本薬理学会近畿部会**, 神戸, 2008
64. 関 貴弘, 安部奈々, 山本和央, 齋藤尚亮, 酒井規雄: トレハロースは神経系培養細胞や初代培養小脳プルキンエ細胞において、脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) で発見された変異 γ PKC による様々な細胞機能異常を軽減する. 第 31 回日本神経科学大会, 東京, 2008
65. 関 貴弘, 山本和央, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 初代培養小脳プルキンエ細胞において、二糖類トレハロースは脊髄小脳失調症 14 型で発見された変異 γ PKC により引き起こされる様々な機能異常を改善した. **第81 回日本薬理学会年会**, 横浜, 2008
66. 関 貴弘, 島原隆行, 安部奈々, 山本和央, 足立直子, 高橋英之, 柏木香保里, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) で見いだされた変異 γ PKC が初代培養プルキンエ細胞に及ぼす影響. **BMB2007 (第30 回 日本分子生物学会年会・第80 回 日本生化学学会大会 合同大会)**, 横浜, 2007
67. 関 貴弘, 島原隆行, 安部奈々, 山本和央, 足立直子, 柏木香保里, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 遺伝性脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) で見いだされた変異 γ PKC が初代培養プルキンエ細胞に及ぼす影響. **Neuro2007 (第30 回日本神経科学大会・第50 回日本神経化学学会大会・第17 回日本神経回路学会大会 合同大会)**, 横浜, 2007
68. 関 貴弘, 高橋英之, 足立直子, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) の原因となる変異プロテインキナーゼ C γ は微小管依存的に細胞毒性を示す凝集体を形成する. **第80 回日本薬理学会年会**, 名古屋, 2007
69. 関 貴弘, 島原隆行, 足立直子, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 遺伝性脊髄小脳失調症 14 型 (SCA14) で発見された変異 γ PKC はユビキチン・プロテアソーム系の機能を低下させる. **第29 回日本神経科学大会**, 京都, 2006
70. 関 貴弘, 島原隆行, 足立直子, 松林弘明, 天野 託, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 脊髄小脳失調症 14 型で発見された変異プロテインキナーゼ C γ による細胞毒性へのユビキチン・プロテアソーム系の関与. **第79 回日本薬理学会年会**, 横浜, 2006
71. 関 貴弘, 足立直子, 小野巧貴, 望月英毅, 平本恵子, 天野 託, 松林弘明, 松本昌泰, 川上秀史, 齋藤尚亮, 酒井規雄: 直遺伝性脊髄小脳変性症 14 型 (SCA14) で発見された変異 γ PKC の分子生物学的特性. **第28 回日本分子生物学会年会**, 福岡, 2005
72. 関 貴弘, 天野 託, 松林弘明, 中村恭子, 阪上 浩, 小川 渉, 春日雅人, 大森志保, 齋藤尚亮, 酒井規雄: γ PKC のトランスロケーションと発現量の調節に関する PDK1 の役割 -PDK1 ノックアウト細胞を用いた検討-. **第108 回日本薬理学会近畿部会**, 西宮, 2005

73.	関 貴弘, 足立直子, 平本恵子, 望月英毅, 松林弘明, 天野 託, 斎藤尚亮, 酒井規雄: 遺伝性脊髄小脳変性症 14 型 (SCA14) で発見された変異プロテインキナーゼ C γ は凝集体を形成する. 第28 回日本神経科学大会 , 横浜, 2005
74.	関 貴弘, 足立直子, 平本恵子, 望月英毅, 松林弘明, 天野 託, 斎藤尚亮, 酒井規雄: 遺伝性脊髄小脳変性症 (SCA) で発見された変異プロテインキナーゼ C γ は凝集体を形成する. 第78 回日本薬理学会年会 , 横浜, 2005
75.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 山本秀幸, 斎藤尚亮, 酒井規雄: 3-Phosphoinositide-dependent protein kinase-1 (PDK1) の偽基質による PKC の機能調節. 第106 回日本薬理学会近畿部会 , 京都, 2004
76.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 斎藤尚亮, 酒井規雄: 3-Phosphoinositide-dependent protein kinase 1 (PDK1) の偽基質による PKC の機能調節. Neuro2004 (第27 回日本神経科学大会・第47 回日本神経化学学会大会合同大会) , 大阪, 2004
77.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 斎藤尚亮, 酒井規雄: 受容体を介した PKC トランスロケーションに対する PKC activation loop のリン酸化の役割. 第77 回日本薬理学会年会 , 大阪, 2004
78.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 斎藤尚亮, 酒井規雄: The role of PKC activation loop phosphorylation in its receptor-mediated translocation. 第26 回日本分子生物学会年会 , 神戸, 2003
79.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 斎藤尚亮, 酒井規雄: 受容体を介した PKC トランスロケーションに対する PKC activation loop のリン酸化の役割. 第26 回日本神経科学大会 , 名古屋, 2003
80.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 北田一博, 芹川忠夫, 笹 征史: 酒井規雄 組換えアデノウイルス側脳室内投与による aspartoacylase 遺伝子導入の自然発症てんかんラット (SER) 強直性けいれんに対する抑制効果. 第76 回日本薬理学会年会 , 福岡, 2003
81.	関 貴弘, 松林弘明, 天野 託, 北田一博, 芹川忠夫, 笹 征史: 組換えアデノウイルス側脳室内投与による aspartoacylase 遺伝子導入の Tremor rat 欠神用発作に対する抑制効果. 第75 回日本薬理学会年会 , 熊本, 2002
82.	関 貴弘, 南 雅文, 木村千晶, 佐藤公道: Human nociceptin/orphanin FQ 受容体におけるオピオイドリガンドのアゴニストおよびアンタゴニスト活性. 第19 回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウム , 静岡県三島市, 1998
83.	関 貴弘, 南 雅文, 中川貴之, 森貞亜紀子, 佐藤公道: DAMGO による μ/κ オピオイド受容体間識別に関与するアミノ酸残基の決定. 第18 回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウム , 京都, 1997
84.	関 貴弘, 南 雅文, 勝又清至, 中川貴之, 家永裕賀, 佐藤公道: DAMGO によるオピオイド受容体 μ, κ サブタイプ間識別に関与するアミノ酸残基の決定. 日本薬学会第117 年会 , 町田市, 1997
85.	関 貴弘, 南 雅文, 勝又清至, 中川貴之, 家永裕賀, 佐藤公道: オピオイド μ/κ キメラ受容体に対する DAMGO の結合選択性. 第90 回日本薬理学会近畿部会 , 津市, 1996

Ⅲ 研究・研究業績活動 (※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用)

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

【学会会員】	
1996 年 8 月～現在	日本薬理学会会員 (2011 年 4 月より学術評議員)
1996 年 10 月～現在	日本薬学会会員
2001 年 4 月～現在	日本神経科学学会会員
2001 年 9 月～現在	日本神経精神薬理学会会員 (2023 年 11 月より評議員)
2003 年 7 月～現在	日本分子生物学会会員
2004 年 4 月～現在	Society for Neuroscience (北米神経科学会) 会員
【社会における主な活動】	
2012 年 2 月～4 月	Grant application の審査委員 (Ataxia UK)
2014 年 4 月～2016 年 3 月	日本学術振興会科学研究費補助金 第一段審査委員 (薬理系薬学) (平成 28 年度科研費審査員表彰)
2020 年 4 月～2022 年 3 月	文部科学省 科学技術・学術政策研究所科学技術予測センター専門調査員
2020 年 10 月～現在	Cells (MDPI) Section Editor (Autophagy section)
2023 年 4 月～現在	日本薬学会関西支部 幹事

V 学内における主な活動

2022 年 7 月～現在	薬学教育推進委員（2023 年 4 月より委員長）
2022 年 7 月～現在	OSCE 実施委員
2023 年 4 月～現在	薬学教育支援室 協力員
2023 年 4 月～現在	共通機器管理委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	寺岡 麗子	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
【神戸薬科大学】 ①大学院における教育 神戸薬科大学大学院薬学研究科の 研究指導及び講義	1995 年-2018 年	研究室で行う論文抄読会において各自の研究分野又はその周辺の学術論文の内容について報告・紹介させ、自分の研究での活用、プレゼンテーション能力の向上及び客観的な論文評価能力を培った。また、定期的に研究テーマについて報告させ、現在の自分の研究内容について進展状況や問題点を多面的に把握できるよう指導を行った。学会にも積極的に参加し、プレゼンテーション及びディスカッションの能力が向上に努めた。講義では研究成果やトピックス的な内容を紹介した。
②学部における教育 情報リテラシー	2006 年 4 月-2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部の 1 年次の学生に情報リテラシーの講義・演習を行った。ネットワーク使用上のマナーやソフトウェア使用上のルールやマナーを守ることに重点を置き、インターネットを利用した情報の収集、開示、データベースの使用法、プレゼンテーションやレポート作成に必要な word, excel, powerpoint の使用法などに関する基礎的知識や技能について講義し、演習を行った。
薬剤学・製剤学実習	2014 年 9 月～2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部 3 年次の薬剤学・製剤学実習の製剤関連実習の指導を後期に行った。顆粒、錠剤の製造や粉体の物性測定及び製剤試験法について、実際の製剤機械や製剤試験機を用いて行っている。
薬剤設計学	2008 年 9 月～2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部の 3 年次に薬剤設計学の講義を行った。実際に市販されている製剤の写真を多く用いた powerpoint 資料を用いて講義を行い、剤形についての理解を高めるようにしていた。この講義資料は、印刷物として講義前に配付している。また、講義内容の小テストを数回行い、講義内容が把握できるようにした。
医薬品開発 I	2011 年 4 月～2017 年 3 月	神戸薬科大学薬学部の 6 年次に医薬品開発 I の講義を分担して行った。薬価、ジェネリック医薬品、オーファンドラッグについて powerpoint 資料を用いて講義を行った。
卒業研究 I, II	2009 年 12 月～2018 年 3 月	神戸薬科大学薬学部 4～6 年次の学生に卒業研究 I, II の指導を行った。製剤学研究室に所属された 4～6 年次の学生に一つのテーマに関して卒業実験又は文献調査を指導した。また、英語論文を読み、まとめて発表させている。終了時には各自の成果をまとめて報告書として提出させ、製本し、学生にも配布しており、研究室及び学内報告会で成果を口述発表させた。
【姫路獨協大学】 薬剤学（旧 薬剤学 I）	2018 年 4 月～	薬剤学（旧 薬剤学 I）の講義を分担した。講義で使用する資料を学生にすべて配布及び配信し、講義を行った。また、練習問題を利用し、講義の内容の理解が進むようにした。

日本薬局方（旧 薬剤学Ⅱ）	2018 年 9 月～	日本薬局方（旧 薬剤学Ⅱ）の講義を分担した。最新の局方通則や製剤総則など講義に必要な部分を冊子にして配布及び配信した。また、講義で使用する資料を学生にすべて配布及び配信し、講義を行った。更に、復習を促すために練習問題や講義に関連している国家試験問題などを配付し、講義の内容の理解が進むようにした。
製剤学	2021 年 9 月～	製剤学の講義を担当した。講義で使用する資料を学生にすべて配布及び配信し、講義を行った。更に、復習を促すために練習問題や講義に関連している国家試験問題などを配付したりして講義の内容の理解が進むようにした。
先端薬物療法論	2018 年 12 月～2022 年 12 月	6 年次の「先端薬物療法論」の講義を分担して行った。がん疼痛薬物療法に用いられる貼付剤の適正使用について、配付した資料を用いて、わかりやすく説明した。評価は提出したレポートの内容で行った。
薬剤系総合演習	2018 年 9 月～	薬剤系統合演習において、薬剤学（旧 薬剤学Ⅰ）に関連する分野について TBL 形式の演習を行った。この形式の演習では予習が必要となり、また、t-RAT 形式の学習ではグループとして問題に取り組むため、出題した問題の理解度の向上に繋がった。更に学生毎に医療現場で処方される薬物について、課題を出し、調べた結果をまとめて発表させ、レポートを提出させた。
模擬薬局実習	2018 年 9 月～	4 年次の模擬薬局実習を分担して行っている。無菌製剤の調製では、ビデオや教員の実技を見て、医療用具の基礎的な使用方法をまず説明し、その後実際の製剤を用いて調製ができるようになるまで指導している。この評価はルーブリックを用いて行っている。
薬学総合演習Ⅰ	2024 年 2 月	グループで長期実務実習で出会った薬物治療を振り返り、医療現場で処方される薬物の作用機序や製剤学的な工夫などを調査し、また、与えられた課題についても考え、まとめて発表させている。
薬学総合演習Ⅱ&Ⅲ	2018 年 9 月～	担当分野に関連する国家試験や模擬試験の問題を利用して、これまで習得した学習内容の振り返りを行い、科学的根拠に基づいた課題発見・解決能力を向上させた。
薬学応用演習Ⅱ	2019 年 4 月～	薬学専門科目について基礎知識を振り返り、薬学・医療に関する総合的な知識を修得するための思考力を養った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
① 薬剤学・製剤学実習テキスト	2008 年 9 月～2018 年 3 月	薬剤学・製剤学実習テキスト
② 薬剤学（旧 薬剤学Ⅰ）の講義資料	2018 年 4 月～	薬剤学Ⅰの講義資料、演習問題
③ 日本薬局方（旧 薬剤学Ⅱ）の講義資料	2018 年 9 月～	薬剤学Ⅱの講義資料、演習問題
④ 総合薬学演習の講義資料	2018 年 9 月～	総合薬学演習Ⅲの演習問題
⑤ 薬学応用演習Ⅱの講義資料		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み	2017/9/2-3	第 2 回日本薬学教育学会大会 八巻耕也，池田宏二，上田久美子，土生康司，中山喜明，武田紀彦，森脇健介，和田昭盛，小山淳子，児玉典子，北河修治
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築	2018/9/1-2	第 3 回日本薬学教育学会大会 上田久美子，八巻耕也，土生康司，寺岡麗子，宮田 興子，中山

		尋量, 北河修治
4 その他教育活動上特記すべき事項		
その他	2007 年 7 月-現在に至る	認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 近畿にタスクフォースとして年 2 回程度参加し, 認定実務実習指導薬剤師養成に関わっている。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著者 の別	発行 または 発表の 年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ 記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
【論文】 Effects of mixing procedure itself on the structure, viscosity, and spreadability of white petrolatum and salicylic acid ointment and the skin permeation of salicylic acid	共 著	2015	Chem. Pharm. Bull. Vol. 63	Kitagawa S., Fujiwara M., Okinaka Y., Yutani R., <u>Teraoka R.</u>	43-48	
Microemulsion using polyoxyethylene sorbitan triolate and its usage for skin delivery of resveratrol to protect skin against UV-induced damage	共 著	2015	Chem. Pharm. Bull. Vol. 63	Yutani R., <u>Teraoka R.</u> , Kitagawa S.	741-745	
Efficient skin delivery of resveratrol by microemulsion using pentaglycerol monolaurate as a surfactant component	共 著	2015	Int. J. Adv. Nanoma. Vol. 1	Kitagawa S., Azuma K., Yutani R., <u>Teraoka R.</u>	5-12	
Differences in the rheological properties and mixing compatibility with heparinoid cream of brand name and generic steroidal ointments: The effects of their surfactants	共 著	2016	Results Pharma. Sci. Vol. 6	Kitagawa S., Yutani R., Kodani R., <u>Teraoka R.</u>	7-14	
Prominent efficiency in skin delivery of resveratrol by novel sucrose oleate microemulsion	共 著	2016	J. Pharm. Pharmacol. Vol. 68	Yutani R., Komori Y., Tekeuchi A., <u>Teraoka R.</u> , Kitagawa S.	46-55	
Differences in the rheological properties and mixing compatibility with heparinoid cream of brand name and generic steroidal ointments: The effects of their surfactants	共 著	2016	Results Pharma Sci. Vol. 6	Kitagawa S., Yutani R., Kodani R., <u>Teraoka R.</u>	7-14	
1 日 1 回貼り替え型フェン タニルクエン酸塩貼付剤 (フェントステープ) の薬 物残存量に影響を与える要 因	共 著	2016	日本緩和医療薬学 雑誌 Vol. 9	寺岡 麗子, 中 山 みずえ, 堅 ゆりか, 上田 華世, 湯谷 玲 子, 沼田 千賀 子, 岡本 禎 晃, 平野 剛,	25-32	

				富田 猛, 平井 みどり, 北河 修治		
フィルムドレッシング材に よる 1 日 1 回型フェンタ ニルクエン酸塩経皮吸収型 製剤の半量投与	共 著	2017	医療薬学 Vol. 43	寺岡麗子, 三 宅真衣, 伊藤 真依, 塩野朋 香, 沼田千賀 子, 中山みず え, 岡本禎晃, 平井みどり, 湯谷玲子, 北 河修治, 坂根 稔康	671-679	
Photostability of risperidone in tablets	共 著	2018	KONA Vol. 35	Fujisawa Y., Takahashi Y., <u>Teraoka</u> <u>R.</u> , Kitagawa S.	209-215	
実践報告「チーム基盤型学 習を用いた分野横断統合演 習の構築の試み」	共 著	2018	薬学教育 Vol. 1	上田久美子, 寺岡麗子, 八 巻耕也, 土生 康司, 宮田興 子, 北河修治	2017-012	
Novel strategy for improving the bioavailability of curcumin based on a newmembrane transport mechanism that directly involves solid particles	共 著	2018	Eur J. Pharm. Biopharm. Vol.122	Kimura S., Kiriyaama A., Araki K., Yoshizumi M., Enomura M., Inoue D., Furubayashi T., Yutani R., <u>Teraoka</u> <u>R.</u> , Tanaka A., Kusamori K., Katsumi H., Yamamoto A., Iga K., Sakane T.	1-5	
Utility of solid-state UV/Vis spectra on the evaluation of photostability of indomethacin crystals	共 著	2018	Chem. Pharm. Bull. Vol. 66	Kiguchiya A., <u>Teraoka</u> <u>R.</u> , Sakane T.	892-895	
Comparative Evaluation of the Photostability of Carbamazepine Polymorphs and Cocrystals	共 著	2019	Crystals, 9	Yutani R., Haku, R., <u>Teraoka R.</u> , Tode C., Koide T., Kitagawa S., Sakane T., Fukami T.	553 https://doi.org/10.3390/cryst9110553	
A New Method for Classification of Salts and Cocrystals Using Solid-State UV Spectrophotometry	共 著	2019	Chem. Pharm. Bull. Vol. 67	Kiguchiya A., <u>Teraoka</u> <u>R.</u> , Sakane T., Yonemochi E.	945-952	
Improving the Solid-State Photostability of Furosemide by Its Cocrystal Formation	共 著	2019	Chem. Pharm. Bull. Vol. 67	<u>Teraoka R.</u> , Fukami T., Furuishi T., Nagase H., Ueda H., Tode C., Yutani R., Kitagawa S., Sakane T.	940-944	
固体UV吸収スペクトルによ る低分子化合物の光安定性 の評価	共 著	2023	薬学雑誌 vol. 143	木口屋祥仁, 寺岡麗子,	77-84	

				古林呂之, 坂根稔康		
【資料】 薬学教育早期体験学習におけるピア評価の試み	共 著	2018	神戸薬科大学研究 論集Libra	上田久美子, 寺岡麗子, 竹 内敦子, 安岡 由美, 内田吉 昭, 八巻耕也, 土生康司, 宮 田興子, 中山 尋量, 北河修 治	1-11	学会 発表
【その他】 レボフロキサシン-サッカ リン Cocrystal の光安定性	共 同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	馬淵はな, 長 瀬弘昌, 都出 千里, 湯谷玲 子, 寺岡麗子, 北河修治		学会 発表
平衡相対湿度がアムロジピ ン口腔内崩壊錠の製剤特性 に及ぼす影響	共 同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	岡田 和也, 東 城 守夫, 湯谷 玲子, 寺岡 麗 子, 北河 修治		学会 発表
ステロイド軟膏剤の先発 品, 後発品のレオロジー特 性及びクリーム剤との混合 性の違い - 界面活性剤の影響 -	共 同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	小谷隆一, 内 田梓, 湯谷玲 子, 寺岡麗子, 北河修治		学会 発表
ステロイド軟膏剤のレオロ ジー特性に及ぼす添加物の 影響	共 同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会 (神戸)	内田 梓, 小谷 隆一, 山下優 太, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北 河修治		学会 発表
ショ糖オレイン酸エステル マイクロエマルジョンを利用 したレスベラトロールの 効率的皮膚デリバリー	共 同	2015 年 5 月	日本膜学会第 37 年 会 (東京)	湯谷玲子, 小 守佑果, 寺岡 麗子, 北河修 治		学会 発表
先発, 後発ステロイド軟膏 剤のレオロジー特性と油性 クリーム剤との混合性	共 同	2015 年 5 月	日本薬剤学会第 30 年会 (長崎)	西垣彰人, 湯 谷玲子, 寺岡 麗子, 北河修 治		学会 発表
フロセミド/ニコチンアミ ド Cocrystal の結晶多形の 光安定性	共 同	2015 年 5 月	日本薬剤学会第 30 年会 (長崎)	野田有貴子, 寺岡麗子, 湯 谷玲子, 北河 修治		学会 発表
マイクロエマルジョンの構 成成分の違いによるレスベ ラトロールの皮膚デリバリ ーへの影響	共 同	2015 年 5 月	日本薬剤学会第 30 年会 (長崎)	俵 周平, 湯谷 玲子, 寺岡麗 子, 北河修治		学会 発表
各種白色ワセリンのレオロ ジー特性の違いと混合操作 の影響	共 同	2015 年 8 月	第 18 回近畿薬剤師 学術大会 (神戸)	三宅真唯, 猪 原振一, 湯谷 玲子, 寺岡麗 子, 北河 修治		学会 発表
ヘパリン類似物質含有油性 クリーム剤の先発品, 後発 品のレオロジー特性とステ ロイド軟膏剤との混合性	共 同	2015 年 8 月	第 18 回近畿薬剤師 学術大会 (神戸)	近野詩乃, 大 石真央, 湯谷 玲子, 寺岡麗 子, 北河修治		学会 発表
ポリフェノールの皮膚デリ バリー改善に有用なマイク ロエマルジョン成分の検討 ー補助界面活性剤が皮膚デ リバリーに与える影響ー	共 同	2015 年 9 月	日本油化学会第 54 回年会 (名古屋)	信野亜由美, 片岡 悠, 湯谷 玲子, 寺 岡麗子, 北河 修治		学会 発表
ポリグリセリンオレイン酸 エステルを用いたマイクロ エマルジョンによるレスベ ラトロールの皮膚デリバリ ー	共 同	2015 年 9 月	日本油化学会第 54 回年会 (名古屋)	小池和彦, 湯 谷玲子, 寺岡 麗子, 北 河修治		学会 発表

被覆材を用いたフェントス® テープ 1 mg 貼付剤の用量調節 I	共同	2015年10月	第9回日本緩和医療薬学会年会（横浜）	三宅真衣, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 沼田千賀子, 岡本禎晃, 平野剛, 富田 猛, 平井みどり, 北河修治		学会発表
被覆材を用いたフェントス® テープ 1 mg 貼付剤の用量調節 II	共同	2015年10月	第9回日本緩和医療薬学会年会（横浜）	伊藤真依, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 沼田千賀子, 岡本禎晃, 平野剛, 富田 猛, 平井みどり, 北河修治		学会発表
シクロデキストリン包接化によるエピガロカテキンガレートの経皮吸収性改善	共同	2015年10月	第65回日本薬学会近畿支部総会・大会（大阪）	宮成明歩, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
ロビナビル・リトナビル配合内用液または配合錠とアバカビル硫酸塩・ラミブジン配合錠の同時簡易懸濁法適用について	共同	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会（横浜）	坪田有加, 松尾理世, 寺岡麗子, 矢倉裕輝, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
シクロデキストリン包接化によるケルセチンの皮膚移行性の改善	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会（横浜）	中部由香莉, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
フィルムコーティング剤の吸湿特性が錠剤の外観変化に及ぼす影響	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会（横浜）	濱端綾太, 松島由貴, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表
ジメチルイソプロピルアズレンを含有する軟膏剤の先発品、後発品のレオロジー特性と混合操作によるその特性の違い	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会（横浜）	近野詩乃, 大石真央, 山本有紀, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ステロイド軟膏剤の先発品と後発品とヒルドイドソフト軟膏との混合性—ステロイド軟膏剤に含有される界面活性剤の影響—	共同	2016年3月	日本薬学会第136年会（横浜）	大石真央, 近野詩乃, 西垣彰人, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
白色ワセリンの製品間でのレオロジー特性の違いと混合操作の影響	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会（岐阜）	三真唯, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
ジフルブレドナート含有軟膏剤の先発品と後発品のレオロジー特性と混合操作の影響	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会（岐阜）	猪原振一, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
種々の補助界面活性剤を用いたマイクロエマルジョンによるポリフェノールの皮膚デリバリー改善効果の比較	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会（岐阜）	堤 夕実, 信野 亜由美, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
種々の界面活性剤を用いたマイクロエマルジョンによるレスベラトロールの皮膚デリバリー改善	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会（岐阜）	浅田めぐみ, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治		学会発表
シプロフロキサシンとそのサッカリン塩の光安定性比較	共同	2016年5月	日本薬剤学会第31年会（岐阜）	宮崎智子, 安藤未裕, 寺岡麗子, 都出千里, 長瀬弘昌, 湯谷玲子, 北河修治		学会発表

Half Dose Administration Using Once-a-Day Fentanyl Patch 12.5 μ g/h with Film Dressings	共同	2016年6月	9th World Research Congress of the European Association for Palliative Care (Dublin)	Teraoka R., Miyake M., Okamoto Y., Nakayama M., Numata C., Hirai M., Yutani R., Kitagawa S		学会発表
2-ヒドロキシプロピル- γ -シクロデキストリンとエトキシジクリコールによるクエルセチンの経皮吸収性改善	共同	2016年9月	第33回シクロデキストリンシンポジウム (香川)	清水和香, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
亜鉛華単軟膏のレオロジー特性とアズノール軟膏との混合性	共同	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 (京都)	佐藤麻衣子, 田路隆了, 田原花奈子, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
ドルテグラビルナトリウム錠の簡易懸濁時の錠剤崩壊性, チューブ通過性および安定性について	共同	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 (京都)	松尾理世, 出口千裕, 寺岡麗子, 倉裕輝, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
フェンタニル3日用テープ剤の先発品と後発品の溶出性, 皮膚透過性及び貼付済みテープ剤中のフェンタニル残存率の比較	共同	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 (京都)	武田真伊子, 中山加菜恵, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 沼田千賀子, 岡本禎晃, 大槻裕朗, 高子優子, 平井みどり, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
Transnasal delivery of the peptide to the brain	共同	2017年3月	International Symposium on Drug Delivery and Pharmaceutical Sciences (Kyoto)	Sakane T., Yutani R., Teraoka R., Tanaka A., Takemura Y., Taketa K., Takayama K., Hayashi Y., Kusamori K., Katsumi H.,	delivery	学会発表
攪拌操作に伴う白色ワセリンのレオロジー特性の経時的变化	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会 (仙台)	田路隆了, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康		学会発表
鼻腔内投与によるCPN-116の脳内送達	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会 (仙台)	坂根稔康, 田中晶子, 竹村有希, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 武田康嗣, 高山健太郎, 草森浩輔, 勝見英正, 林良雄, 山本昌		学会発表
シプロフロキサシンサッカリン塩結晶多形の新規調製方法とその物理化学的特性および光安定性	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会 (仙台)	松川美佐子, 宮崎智子, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 都出千里, 坂根稔康		学会発表
プルリフロキサシンとサッカリン塩及び種々の有機酸塩の光安定性及び熱安定性	共同	2017年3月	日本薬学会第137年会 (仙台)	土居千沙, 寺岡麗子, 湯谷玲子, 出千		学会発表

				里, 坂根稔康		
市販リマブロストアルファ デクス錠の分解速度の湿度 依存性	共 同	2017 年 5 月	日本薬剤学会第 32 年会 (さいたま)	松本祐樹, 寺 岡麗子, 湯谷 玲子, 坂根稔 康		学会 発表
Microemulsions using sucrose laurate with various cosurfactants and their application to intradermal delivery of (-)-epicatechin	共 同	2017 年 5 月	6th FIP Pharmaceutical Sciences World Congress 2017 Stockholm (Sweden)	Yutani R., Tsutsumi Y., Teraoka R., Sakane T.		学会 発表
New preparation method for two crystal forms of ciprofloxacin saccharinate and their photostability and hygroscopic property	共 同	2017 年 5 月	6th FIP Pharmaceutical Sciences World Congress 2017 Stockholm (Sweden)	Teraoka R., Matsukawa M., Miyazaki T., Yutani R., Tode C., Sakane T.		学会 発表
在宅中心静脈栄養法を適用 するための注射剤混合高カ ロリー輸液の安定性評価 ーエルネオノ輸液にリンデ ロン注を混合した場合ー	共 同	2017 年 7 月	医療薬学フォーラ ム 2017 第 25 回ク リニカルファーマ シーシンポジウム (鹿児島)	中山加菜恵, 寺岡麗子, 黒 田英津 子, 青木菜摘, 入江穂花, 湯 谷玲子, 坂根 稔康		学会 発表
他剤との混合に伴うワセリ ン軟膏からのサリチル酸の 経皮吸収性の変化	共 同	2017 年 7 月	医療薬学フォーラ ム 2017 第 25 回ク リニカルファーマ シーシンポジウム (鹿児島)	田原花奈子, 宍戸康剛, 湯 谷玲子, 寺岡 麗子, 北河修 治, 坂根稔康		学会 発表
経鼻ルートを紹介した薬物の 頸部リンパ節ターゲッティ ング と速度論解析	共 同	2017 年 7 月	医療薬学フォーラ ム 2017 第 25 回ク リニカルファーマ シーシンポジウム (鹿児島)	古林呂之, 井 上大輔, 田中 晶子, 勝見英 正, 山本 昌, 湯谷玲子, 寺 岡麗子, 坂根 稔康		学会 発表
Direct Nose to Brain Delivery of CNS Drugs: The Effect of Glymphatic System on Drug Distribution in Brain Parenchyma	共 同	2017 年 10 月	第 11 回次世代を担 う若手医療薬科学 シンポジウム (京 都)	Inoue D., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R., Teraoka R., Sakane T., Furubayashi T.		学会 発表
Effects of mixing with other ointments and creams on rheological properties of salicylic acid ointment and skin permeation of salicylic acid	共 同	2017 年 10 月	第 11 回次世代を担 う若手医療薬科学 シンポジウム (京 都)	Yutani R., Tawara K., Shishido Y., Teraoka R., Kitagawa S., Sakane T.		学会 発表
テノホビルのプロドラッグ を含有する 2 種類の抗 HIV 薬の簡易懸濁法適用の可否	共 同	2017 年 11 月	第 27 回日本医療薬 学会年会 (千葉)	出口千裕, 寺 岡麗子, 矢倉 裕輝, 湯谷玲 子, 坂根稔康		学会 発表
ワセリンを基剤とする軟膏 剤の特性に及ぼす攪拌操作 及び温度の影響	共 同	2017 年 11 月	第 27 回日本医療薬 学会年会 (千葉)	三木奏人, 田 路隆了, 湯谷 玲子, 寺岡麗 子, 坂根稔康		学会 発表
Direct Nose to Brain Delivery of CNS Drugs: The effect of Glymphatic System on Pharmacokinetics and	共 同	2017 年 11 月	2017 AAPS Annual Meeting and Exposition (SanDiego)	Inoue D., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R.,		学会 発表

Brain Distribution of Sulpiride after Nasal Application				Teraoka R., Sakane T., Furubayashi T.		
Measurement of dissolution profiles of powdery drugs by Raman spectroscopy and its application to prediction of nasal drug absorption	共同	2017年11月	AAPS Annual Meeting and Exposition (SanDiego)	Furubayashi T., Izumi N., Inoue D., Moriyama K., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R., Teraoka R., Sakane T.		学会発表
Direct delivery of CNS drugs to the brain by nasal application III: Pharmacokinetic analysis of the effect of glymphatic system on drug delivery to brain parenchyma	共同	2017年11月	日本薬物動態学会 第32回年会(東京)	Inoue D., Tanaka A., Katsumi H., Yamamoto A., Yutani R., Teraoka R., Sakane T., Furubayashi T.		学会発表
他剤との混合に伴うサリチル酸ワセリン軟膏のレオロジー特性と経皮吸収性の変化	共同	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会(千葉)	湯谷玲子, 田原花奈子, 宍戸康剛, 寺岡麗子, 北河修治, 坂根稔康		学会発表
α -Galactosylceramide の鼻粘膜透過性改善を目指した製剤最適化に関する検討	共同	2018年3月	日本薬学会第138年会(金沢)	古林 呂之, 小林 正樹, 松原 嘉子, 井上 大輔, 田中 晶子, 勝見 英正, 山本 昌, 湯谷 玲子, 寺岡 麗子, 坂根 稔康		学会発表
種々のカルバマゼピン-ジカルボン酸共結晶の光安定性比較	共同	2018年3月	日本薬学会第138年会(金沢)	羽澤知穂, 寺岡麗子, 都出千里, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
薬物の口腔粘膜を介した吸収: 鼻腔内投与後の薬物吸収との比較	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会(姫路)	松田芳明, 遠山裕太, 田中晶子, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康 1		学会発表
酸化チタン含有フィルムコーティング膜中の可塑剤が錠剤の製剤特性に及ぼす影響	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会(姫路)	瀬分修平, 寺岡麗子, 松島由貴, 田中晶子, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
混合調剤がサリチル酸ワセリン軟膏の特性および主薬の皮膚透過性に及ぼす影響	共同	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会(神戸)	宍戸康剛, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康		学会発表
亜鉛華単軟膏のレオロジー特性と混合性に及ぼす保存温度の影響	共同	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会(神戸)	加藤 薫, 湯谷玲子, 寺岡麗子, 坂根稔康		学会発表
テノホビルアラフェナミドフマル酸塩を含有するデシコビ配合錠の簡易懸濁法適用時の安定性	共同	2018年11月	第28回日本医療薬学会年会(神戸)	寺岡麗子, 矢倉裕輝, 出口千裕, 湯谷玲子, 坂根稔康		学会発表
簡易懸濁法適用に粉碎が必要な抗HIV薬の懸濁液の調	共同	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会(福岡)	寺岡麗子, 橋本佳那子, 高		学会発表

製について		月		橋 稔、河野 奨、白木 孝、 矢倉裕輝		
LC-MS/MS による注射剤混合 高カロリー輸液の成分変化 の分析	共 同	2021 年 9 月	日本医用マスマス ペクトル学会第 46 回 年会	竹内 敦子、 都出 千里、 伊藤 紗恵子 松川 美佐子、 小山 紗矢、 谷田 佳香、 白木 孝 黒田 英津子、 中山 優子、寺 岡 麗子		学会 発表
ラミブジン・アバカビル硫 酸塩配合錠の先発品と後発 品の簡易懸濁法の適用性の 比較	共 同	2022 年 3 月	日本薬学会第 142 年会（名古屋）	松川 美佐子、 矢倉 裕輝、柳 澤 吉則、中山 優子、寺岡 麗 子		学会 発表
ブロムヘキシン塩酸塩注射 液の安定性に関する検討		2023 年 11 月	第 33 回医療薬学会 年会（仙台）	寺岡麗子、竹 内敦子、都出 千里、松川美 佐子、中山優 子		学会 発表
医薬品原薬及び製剤の安定 性		2018 年 7 月	第 208 回北摂地域 薬剤師交流研修会 (2018/7/14)	寺岡麗子		講演
経皮吸収型持続性疼痛治療 剤の適正使用 ―フェント ステーブを中心に―		2017 年 3 月	第 4 回薬科大学と 臨床現場を繋ぐセ ミナー（薬剤師向 け）(2017/3/4)	寺岡麗子		講演
経皮吸収型持続性疼痛治療 剤の適正使用について		2023 年 6 月	飯能地区薬剤師会 学術講演会 (2023/6/27)	寺岡麗子		講演

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

平成 13 年 1 月－令和 2 年 12 月	日本医療薬学会認定薬剤師（認定薬剤師第 01－0040 号）
平成 13 年 1 月－現在に至る	日本医療薬学会の指導薬剤師として委嘱された
平成 13 年 4 月－令和 3 年 3 月	シクロデキストリン学会評議員
平成 16 年 4 月－令和 2 年 3 月	独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員
平成 16 年 4 月－令和元年 3 月	日本薬局方原案審議委員会委員

Ⅴ 学内における主な活動

平成 30 年 4 月－現在に至る	OSCE 実施委員会 委員
平成 30 年 4 月－現在に至る	指導薬剤師のためのワークショップ 委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	通山 由美	大学院における研究指導担当 の有無（有・無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 「身体の科学」に関して	2006. 4～2007. 8	教養科目であり、対象が文系から理系学生まで広いため、身近な例を多く含んだパワーポイントとプリントを作成して、私達の身体に関する基本事項（身体の科学1）と生体防御機構（身体の科学2）を科学的にとらえ、理解できるように工夫した。
2. 「早期体験学習」に関して	2007. 4～2014. 7	病院、薬局、福祉施設、製薬会社の見学や救急救命訓練など、体験型、経験重視型の学習を多くおこない、薬学部、新1年生が、将来、薬剤師として医療を担うという自覚を高めるよう促した。一方で、体験の後、グループで感想を話しあい、その結果をまとめて発表する機会を設け、自覚とコミュニケーション能力を高める機会とした。また定期的に訪問先である、病院や薬局の薬剤師の意見を取り入れる勉強会を開いて次年度以降、よりよい成果が得られるようにしている。
3. 「生化学1」に関して	2008. 4 ～	生体分子の基本的な化学構造と性質、代謝について、薬学生向けに編纂された教科書の記述に基づき、パワーポイントで図解による理解を含め、参考プリントや演習課題で、知識が定着するように工夫している。
4. 「免疫学」、「臨床免疫学」に関して （医療保健学部）	2007. 10～2011. 1	医療保健学部1年生を対象にした基礎医学の講義であることより、生体防御機構とその破綻による疾患について、基本事項を理解できるよう、実際に医療現場で出会う事例を多く示したパワーポイントを作成し、さらに理解を深めるプリントによる演習をおこなって、知識が定着するように工夫している。
5. 「免疫学」に関して （薬学部）	2010. 4 ～	薬学部の4年次学生を対象に、免疫系のしくみを基礎から応用まで統合的に理解する事を目標とした。薬学生向けに編纂された教科書の記述に基づき、パワーポイントで図解による理解を含め、参考プリントおよび演習課題で、知識が定着するように工夫している。
6. 「基礎実験（生物）」に関して （薬学部）	2007. 4～	顕微鏡観察の基本的技能と心構えを身につけることを目的とし、末梢血中の白血球、および細胞分裂中の染色体の観察法を指導している。自分で顕微鏡を取り扱って標本を観察し、スケッチすることにより、顕微鏡観察の基本技能を修得するとともに、観察を通して考えを深める姿勢を養うよう工夫している。
7. 「生化学実習」に関して （薬学部）	2009. 9～	実験を通して生化学の理解を深め、生体分子の取り扱いに関する基本技能を身につけることを目的として、タンパク質の定量解析、SDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動、さらに抗原と抗体の特異的結合を利用したウェスタンブロッティングをおこなっている。学生が興味をもって実験に取り組み、データを解析できるよう、原理の説明に特に配慮して図を作成し、丁寧に説明するよう工夫している。

8. 「生物・衛生・生薬系統合演習 (PBL)」に関して (薬学部)	2009. 9～	る。 生物・衛生・生薬系統合演習の生化学分野を担当している。各小グループが1種類の分子標的治療薬を担当し、開発の背景や経緯、分子作用機序について情報を収集するとともに、当該治療法の問題点や改善方法を話しあい最終日に発表する。十分な議論をおこなえるよう時間配分し、治療薬の分子薬理作用機序について、自ら考えることを通して理解を深められるように工夫した。
9. 「薬学概論」に関して (薬学部)	2015. 4～2018. 5	薬剤師をめざすにあたっての基本的な知識と心構えを身につける事を目標としている。学生間での意見交換時間を設けると共に、感想文の作成やその発表を通して、参加型学習を進める工夫をしている。
10. 「生化学」に関して (看護学部)	2016. 10～	将来の看護師に必要な生化学的知識の修得を目的として、糖質、脂質、核酸、タンパク質について、わかりやすい模式図作成して、分子構造と機能に関する理解を深めるよう工夫した。
11. 「早期臨床体験」に関して	2020. 4～～2022. 7	薬学部の1年生が、将来、薬剤師として医療を担うという自覚を高めるよう、チーム医療や災害医療について実践例を紹介すると共に、各事例に対する意見交換の機会を設けて、コミュニケーション力を高めるよう工夫した。
12. 共通部分 学生による授業評価の活用	2006. 4～	授業評価アンケートの結果に基づいて、授業の理解度と授業方法が適切であるか否かを確認し、次学期以降の授業内容と授業方法の改善に役立てている。とりわけ1の「身体の科学」に関しては、大講義室を使用したため、聞こえにくさや見えにくさに関する指摘もあり、その調整にも工夫をした。また2の「早期体験学習」に関しては、訪問先へのアクセス方法などを考慮して学生毎の訪問施設の選定に工夫した。また、3の「生化学1」と4の「免疫学」、「臨床免疫学」に関しては、専門的、難解な用語が多いとの指摘もあり、基本事項から、具体的な例をあげて説明するように工夫している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントとサブノート式演習プリントの作成 「身体の科学1」、「身体の科学2」、「生化学1」、「免疫学」、「臨床免疫学」 「基礎実験(生物)」、「生化学実習書」、「薬学概論」	2006. 4～	講義内容に沿った、図解式のパワーポイントと、必須事項や、重要な化学式について、学生が記入できる形式のサブノート、および講義内容の単元毎の演習プリントを作成した。
「コンパス生化学」南江堂 分担 5章 タンパク質 p77-p95	2015～	薬学教育モデル・コアカリキュラム-平成25年度改訂版に沿った教科書として、「コンパス生化学」(南江堂)の5章、タンパク質(p77-p95)を分担執筆した。
「コンパス生化学 改訂第2版」 南江堂 分担 5章 タンパク質 p79-p86 & p91-p105	2019～	2015年初版の教科書「コンパス生化学」(南江堂)の改訂にあたり、5章 タンパク質について、新たにコラムを加えるなど、理解がさらに深まるように内容を変更して(p79-p86とp91-p105)、分担執筆した。

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
大学院講義 福井大学 医学研究科	2009. 11. 18 2016. 10. 12	医学研究科・大学院博士課程の学生を対象に、以下のタイトルで講義をおこなった。 「マクロファージの多彩な機能食作用と骨溶解の分子メカニズム」 「食細胞による生体防御機構：好中球の NETs 形成とマクロファージによる食作用」
立命館大学 薬学研究科	2015. 7. 10	薬学研究科・学院博士課程の学生を対象に、分子病態学特論として、「食細胞による生体防御機構」に関する講義をおこなった。
福井大学 医学部 特別講義	2009. 11. 19 2016. 10. 13	医学部・医学科の学生を対象に、以下のタイトルで、免疫学の特別講義をおこなった。 「食細胞の多彩な機能」 「食細胞による生体防御機構」
特別授業 兵庫県立上郡高校	2011. 12～2016. 3.	上郡高校において、「生命科学探究類型」の生徒を対象とした特別授業および実験学習を、年2回、実施した。
教育講演 西播磨高等学校生物部会	2017. 5. 18	西播磨地区の高等学校の生物担当の教諭を対象に、「細胞解析技術の最近の進歩と利用：細胞レベルでのゲノム編集」というタイトルで教育講演をおこなった。
兵庫県高等学校教育研究会科学部会・生物部会	2017. 7. 5	平成 29 年度兵庫県高等学校教育研究会において、科学部会および生物部会所属の教諭を対象に、1) 共焦点レーザー顕微鏡による観察（標本作成から解析まで）と、2) SDS-PAGE 電気泳動の指導をおこなった。
薬剤師向けの卒後教育	2016. 2. 14	2015 年度 姫路獨協大学薬学部 卒後教育セミナーにおいて、「免疫は、どのように病原体を見分けているのでしょうか？」とのタイトルで、薬剤師向けの卒後教育講義を担当した。
教員免許状更新講習	2014. 8. 7	平成 26 年度の教員免許状講習において、小学校・中学校・高等学校の教諭を対象に、“からだを守る免疫と環境のいい関係”というテーマの講習を企画し、「私たちの体を守る免疫のしくみ」について講義をおこなった。
CASTクラブ第 26 回例会	2007. 9. 20	ひょうご科学技術協会、西播磨テクノポリス圏域の研究開発型交流会、CASTクラブ第 26 回例会において、“走る、食べる、溶かす “巧妙な白血球の七変化の追跡”とのタイトルで基調講演をおこなった。
地域薬剤師会主催の学術発表会 兵庫県病院薬剤師会西播支部学術発表会	2007. 4. 19	地域の薬剤師会主催の学術発表会において以下のタイトルで講演をおこなった。「補体依存性ファゴサイトーシスにおけるチロシンキナーゼ Syk の機能」
西播医療セミナー	2015. 4. 23	「好中球による NETosis と疾患について」

ホスピス・在宅ケア研究会 神戸フォーラムでの講演	2018. 7. 21	我々はどうのように生かされているのか? 一個体を生かす細胞死のありさまと題して、細胞が自ら死にゆくシステムについて講演をおこなった。
姫路市シニアオープンカレッジでの講演	2019. 10. 16	「免疫のしくみ：感染やがんと戦うメカニズム」と題して、私たちの免疫細胞がどのようにして病原菌やがん細胞と戦っているのか、最近話題の、がんを標的とした免疫治療法も含めて紹介した。
姫路獨協大学 播磨会 市民教養講座での講演	2021. 9. 14	新型コロナウイルス感染症と闘う免疫のしくみ
姫路獨協大学 「薬学教育シンポジウム:地域医療を支える薬剤師をめざして」での講演	2023. 1. 10	薬学教育のこれまでとこれから
	2023. 3. 12	感染を防御する免疫のしくみ:新型コロナウイルス感染症からの学び
令和4年度 姫路文学館友の会研修講座での講演	2023. 11. 4	薬剤師の役割: 社会への貢献、医療への貢献
姫路獨協大学 「薬学教育セミナー:健康社会に貢献する薬剤師をめざして」での講演	2023. 12. 6	身近な街路樹であるシマトネリコとヤマモモから、3種類の溶媒で可溶化する成分を抽出し、3種類の微生物に対する抗菌活性を計測する研究を指導した。
特別授業 兵庫県立姫路西高等学校スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 国際理学科の研究指導	2024. 3. 9	中学生対象の公開講座において、「細胞の中をのぞいてみよう」と題して、「細胞の機能とタンパク質について」講義すると共に、SDS ポリアクリルアミド電気泳動法を利用した細胞内タンパク質の分離実験を指導した。
姫路獨協大学 公開講座「中学生のためのサイエンスラボ」における講演と指導		

II 研究活動

[学術論文・総説] 2004 ～2020

(英文)

1. **Tohyama Y**, Takano T, Yamamura H. B cell response to oxidative stress. **Curr Pharm Des.** 2004 ; 10(8) : 835-839 *Review*
2. Miah SMS, Sada K, Tuazon PT, Ling J, Maeno K, Kyo S, Qu X, **Tohyama Y**, Traugh JA, Yamamura H. Activation of Syk protein-tyrosine kinase in response to osmotic stress requires the interaction with p21-activated protein kinase Pak2/g-PAK. **Mol Cell Biol** 2004 ; 24(1):71-83

3. He J, Tohyama Y, Yamamoto K, Kobayashi M, Shi Y, Takano T, Noda C, Tohyama K, Yamamura H. Lysosome is a primary organelle in B cell receptor-mediated apoptosis: an indispensable role of Syk in lysosomal function. **Genes to Cells** 2005 ; 10: 23-35
4. Matsusaka M, Tohyama Y, He J, Shi Y, Hazama R, Kadono T, Kurihara R, Tohyama K, Yamamura H. Protein-tyrosine kinase, Syk is required for CXCL12-induced polarization of B cells. **Biochem Biophys Res Commun** 2005 ; 328(4): 1163-1169
5. Shi Y, Tohyama Y, Kadono T, He J, Shahjahan Miah SM, Hazama R, Tanaka C, Tohyama K, Yamamura H. Protein-tyrosine kinase, Syk is required for pathogen engulfment in complement-mediated phagocytosis. **Blood** 2006 ; 107(11): 4554-4562
6. Kurihara R, Tohyama Y, Matsusaka S, Naruse H, Kinoshita E, Tsujioka T, Katsumata Y, Yamamura H. Effects of peripheral cannabinoid receptor ligands on motility and polarization in neutrophil-like HL60 cells and human neutrophils. **J Biol Chem** 2006 ; 281(18): 12 908-12918 *Paper of the Week* に選出
7. Tohyama Y, Yamamura H. Complement-mediated phagocytosis—the role of Syk. **IUBMB Life**. 2006 ; 58(5-6) : 304-308 *Review*
8. Noda C, He J, Takano T, Tanaka C, Kondo T, Tohyama K, Yamamura H., Tohyama Y. Induction of apoptosis by epigallocatechin-3-gallate in human lymphoblastoid B cells. : **Biochem Biophys Res Commun** 2007; 362:951-957.
9. Kondo T, Okuno N, Naruse H, Kishimoto M, Tasaka T, Tsujioka T, Matsuoka A, Sugihara T, Tohyama Y, Tohyama K. Validation of the revised 2008 WHO diagnostic criteria in 75 suspected cases of myeloproliferative neoplasm. **Leuk Lymphoma**. 2008; 49(9): 1784-91.
10. Hazama R, Qu X, Yokoyama K, Tanaka C, Kinoshita E, He J, Takahashi S, Tohyama K, Yamamura H, Tohyama Y. ATP-induced osteoclast function; the formation of sealing-zone like structure and the secretion of lytic granules via microtubule-deacetylation under the control of Syk. **Genes to Cells** 2009; 14:871-884
11. Tohyama Y, Yamamura H. Protein-Tyrosine Kinase, Syk: A Key Player in Phagocytic Cells. **J Biochem**. 2009 ; 145(3) :267-73 *Review*
12. Matsuoka A, Tochigi A, Kishimoto M, Nakahara T, Kondo T, Tsujioka T, Tasaka T, Tohyama Y, Tohyama K. Lenalidomide induces cell death in an MDS-derived cell line with deletion of chromosome 5q by inhibition of cytokinesis. **Leukemia**. 24: 748-55 2010.
13. Kajimoto T, Sawamura S, Tohyama Y, Mori Y, Newton AC. Protein kinase C {delta}-specific activity reporter reveals agonist-evoked nuclear activity controlled by Src family of kinases. **J Biol Chem**. 285 (53):41896-910 2010
14. Yokoyama K, Kaji H, He J, Tanaka C, Hazama R, Kamigaki T, Ku Y, Tohyama K, Tohyama Y. Rab27a negatively regulates phagocytosis by prolongation of the actin-coating stage around phagosomes. **J Biol Chem**. 286 (7):5375-82 2011
15. Tanaka C, Kaji H, He J, Hazama R, Yokoyama K, Kinoshita E, Tsujioka T, Tohyama K, Yamamura H, Nishio H, Tohyama Y. Rab27b regulates c-kit expression by controlling the secretion of stem cell factor. **Biochem Biophys. Res Commun**. 419(2):368-73 2012
16. Tsujioka T, Matsuoka A, Tohyama Y, Tohyama K. Approach to New Therapeutics: Investigation by the Use of MDS-derived Cell Lines. **Curr Pharm Des**. 18(22):3204-14 2012 *Review*
17. Tsujioka T, Yokoi A, Kishimoto M, Kuyama A, Suemori S, Tohyama Y, Tohyama K. Effects of DNA methyltransferase inhibitors (DNMTIs) on MDS-derived cell lines. **Exp Hematol** 41: 189-197, 2013

18. Kuroda Y, Kato-Kogoe N, Tasaki E, Murata E, Ueda K, Abe M, Miyamoto K, Nakase I, Futaki S, Tohyama Y, Hirose M. Oligopeptides derived from autophosphorylation sites of EGF receptor suppress EGF-stimulated responses in human lung carcinoma A549 cells. *Eur J Pharmacol* 698: 87–94, 2013
19. Nurputra DK, Lai PS, Harahap NI, Morikawa S, Yamamoto T, Nishimura N, Kubo Y, Takeuchi A, Saito T, Takeshima Y, Tohyama Y, Tay SK, Low PS, Saito K, Nishio H. Spinal Muscular Atrophy: From Gene Discovery to Clinical Trials. *Ann Hum Genet* 77: 435–463, 2013
20. Ejlerskov P, Rasmussen I, Nielsen TT, Bergström AL, Tohyama Y, Jensen PH, Vilhardt F. Tubulin Polymerization Promoting Protein (TPPP/p25 α) promotes unconventional secretion of α -synuclein through exophagy by impairing autophagosome-lysosome fusion. *J Biol Chem* 288: 17313–17335, 2013
21. Kawakami T, He J, Morita H, Yokoyama K, Kaji H, Tanaka C, Suemori S, Tohyama K, Tohyama Y. Rab27a is essential for the formation of neutrophil extracellular traps (NETs) in neutrophil-like differentiated HL60 cells *PLoS One* 9(1): e84704 (doi: 10.1371/journal.pone.0084704.), 2014
22. Yamamoto T, Sato H, Lai PS, Nurputra DK, Harahap NI, Morikawa S, Nishimura N, Kurashige T, Ohshita T, Nakajima H, Yamada H, Nishida Y, Toda S, Takanashi JI, Takeuchi A, Tohyama Y, Kubo Y, Saito K, Takeshima Y, Matsuo M, Nishio H. Intragenic mutations in SMN1 may contribute more significantly to clinical severity than SMN2 copy numbers in some spinal muscular atrophy (SMA) patients. *Brain Dev* 36: 914–920, 2014
23. Tsujioka T, Yokoi A, Itano Y, Takahashi K, Ouchida M, Okamoto S, Kondo T, Suemori S, Tohyama Y, Tohyama K. Five-aza-2'-deoxycytidine-induced hypomethylation of cholesterol 25-hydroxylase gene is responsible for cell death of myelodysplasia/leukemia cells. *Sci Rep* 5: 16709 (doi: 10.1038/srep16709.), 2015
24. Kuroda Y, Kato-Kogoe N, Tasaki E, Yuasa-Sunagawa M, Yamanegi K, Nakasyo K, Nakase I, Futaki S, Tohyama Y, Hirose M. Suppressive effect of membrane-permeable peptides derived from autophosphorylation sites of the IGF-1 receptor on breast cancer cells. *Eur J Pharmacol* 765: 24–33, 2015
25. Harahap NI, Nurputra DK, Ar Rochmah M, Shima A, Morisada N, Takarada T, Takeuchi A, Tohyama Y, Yanagisawa S, Nishio H. Salbutamol inhibits ubiquitin-mediated survival motor neuron protein degradation in spinal muscular atrophy cells. *Biochem Biophys Res* 4: 351–356, 2015
26. Okamoto S, Tsujioka T, Suemori SI, Kida JI, Kondo T, Tohyama Y, Tohyama K. Withaferin A suppresses the growth of myelodysplasia and leukemia cell lines by inhibiting cell cycle progression. *Cancer Sci* 107: 1302–1314, 2016
27. Takechi-Haraya Y, Aki K, Tohyama Y, Harano Y, Kawakami T, Saito H, Okamura E. Glycosaminoglycan Binding and Non-Endocytic Membrane Translocation of Cell-Permeable Octaarginine Monitored by Real-Time In-Cell NMR Spectroscopy. *Pharmaceuticals* (Basel) 10 (2): pii: E42 (doi: 10.3390/ph10020042.), 2017
28. Kida JI, Tsujioka T, Suemori SI, Okamoto S, Sakakibara K, Takahata T, Yamauchi T, Kitanaka A, Tohyama Y, Tohyama K. An MDS-derived cell line and a series of its sublines serve as an in vitro model for the leukemic evolution of MDS. *Leukemia* 32(8):1846–1850, 2018 (doi: 10.1038/s41375-018-0189-7.)
29. Morita H, Matsuoka A, Kida JI, Tabata H, Tohyama K, Tohyama Y. KIF20A, highly expressed in immature hematopoietic cells, supports the growth of HL60 cell line. *Int J Hematol.* 108(6): 607–614, 2018(doi: 10.1007/s12185-018-2527-y.)
30. Tabata H, Morita H, Kaji H, Tohyama K, Tohyama Y. * Syk facilitates phagosome-lysosome fusion by regulating actin-remodeling in complement-mediated phagocytosis. *Sci Rep* 10: 22086, 2020 (doi:10.1038/s41598-020-79156-7)
31. Tabata H, Morita H, Kouyama K, Tohyama Y. Complement dependent TNF α production in neutrophil-like HL60 cells. *Biochem Biophys Res* 34: 101465, 2023 (doi: 10.1016/j.bbrep.2023.101465.)

(和文)

1. 通山由美 補体依存性ファゴサイトーシスの分子機構-チロシンキナーゼ Syk の新たな機能 **生化学** 2006;78:878-882 み
にれびゅう
2. 通山由美 骨溶解の分子作用機序 臨床検査増刊号;ホルモンの病態異常と臨床検査;医学書院 2008;52:11, 1336,
3. 通山由美 Syk の発見から臨床応用まで 炎症と免疫 特集【低分子抗炎症薬の進歩】2012;20:3, 272-277

[学会発表] 2004 ~2020

1. 野田千征子、通山由美、Jinsong He、高野智子、Yuhong Shi、山村博平 Involvement of mitochondrial dysfunction in (-)-Epigallocatechin gallate-induced apoptosis 第77回日本生化学会大会 (2004 横浜)
2. Tohyama Y., Shi Y, Tohyama K, Yamamura H Protein-tyrosine kinase, Syk is required for engulfment of pathogen in complement-mediated phagocytosis 第47回米国血液学会 (The 47th ASH Annual Meeting) (2005 Atlanta USA)
3. 通山由美 食作用における Syk の機能-補体依存性食作用における役割 21世紀 COE「蛋白質のシグナル伝達機能」平成17年度第2回研究発表会 (2005 神戸)
4. 門野友美、通山由美、松阪諭、山村博平 チロシンキナーゼ Syk はケモカイン CXCL12 による細胞極性の形成に必須である 第52回日本生化学会近畿支部例会 (2005 神戸)
5. Yuhong Shi、通山由美、門野友美、陌間亮一、Jinsong He、山村博平補体依存性食作用におけるチロシンキナーゼ Syk の機能解析 第78回日本生化学会大会 (2005 神戸)
6. 栗原リナ、通山由美、勝又義直、山村博平 カンナビノイド受容体2 (CB2) リガンドの好中球極性化 第78回日本生化学会大会 (2005 神戸)
7. 通山由美 マクロファージにおける食胞輸送機構の解析-補体依存性食作用における Syk の機能 第50回神戸大学バイオサイエンス研究会 (2006 神戸)
8. Tohyama Y., Qu X Yamamura H Protein-tyrosine kinase, Syk is required for bone resorbing activity by the mechanism of controlling the stability of tubulin 第20回国際生化学・分子生物学会議 (20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBB Congress) (2006 京都)
9. 陌間亮一、田中千都、山村博平、通山由美、リソソームの制御を介した骨吸収に必須の Syk の機能 第80回日本生化学会大会 (2007 横浜)
10. 梶本武利、通山由美、Alexandra C. Newton FRETを用いたプロテインキナーゼC δ 活性検出レポーターの開発と分子種特異的機能解析への応用 第81回日本生化学会大会 (2008 神戸)
11. 田中千都、通山由美、巨核球分化における Rab27B の機能解析 日本薬学会第129回年会 (2009 京都)
12. 陌間亮一、山村博平、通山由美 ATP/P2X₇ シグナリングを介した破骨細胞による骨吸収機構の解析: 微小管のアセチル化を制御するチロシンキナーゼ Syk の新たな機能 第82回日本生化学会大会、(神戸, 2009. 10. 22)
13. YOKOYAMA Kuniol, TOHYAMA Yumi Rab27a acts as a regulator of phagocytosis by controlling the transfer of pathogen from actin cups to incorporated phagosomes 第39回日本免疫学会大会、(大阪, 2009. 12. 2)

14. 田中千都 通山由美 巨核球分化における Rab27b の機能解析 -c-kit の発現調節への関与- The role of Rab27B in megakaryocytic differentiation of CMK cells-effects on the expression of c-kit- **第130回日本薬学会大会**、(岡山, 2010. 3. 30)
15. 松岡亮仁, 通山薫, 通山由美 5 番染色体長腕に局在するモータータンパク質 Kinesin family member 20A (KIF20A) の機能解明 第57回日本生化学会近畿支部例会 (奈良先端科学技術大学院大学, 2010. 5. 22)
16. 陌間 亮一, 通山由美 破骨細胞においてATP/P2X₂受容体シグナルにより誘導される微小管のアセチル化制御を介した骨吸収の分子機構の解析 第28回日本骨代謝学会学術集会学術集会 (東京, 2010. 7. 21-7. 23)
17. Yumi Tohyama, Hirohei Yamamura ATP-induced bone resorption in osteoclasts: the formation of sealing-zone like structure and the secretion of lytic granules via Syk dependent deacetylation of alpha tubulin 第14回 国際免疫学会議 (神戸, 2010. 8. 22-8. 27)
18. Hiroaki Kaji, Yumi Tohyama Rab27a acts as a regulator of phagocytosis by controlling the transfer of pathogen from phagocytic cup to incorporated phagosome 第14回 国際免疫学会議 (神戸, 2010. 8. 22-8. 27)
19. 菊田香苗, 松川聡子, 通山由美, 赤桐里美, 植野洋志 ヒト単核白血球における GAD65 発現の解析 日本生物高分子学会大会 (兵庫県立大学, 2010. 9. 10-11)
20. 梶本武利, 澤村晴志朗, 通山由美, 森泰生, Alexandra C. Newton δ 分子種選択的PKC活性化レポーターを用いたPKC δ の細胞内局所における活性化制御機構の解析 第118回日本薬理学会近畿部会 (大阪, 2010. 11. 19)
21. He Jinsong, 近藤敏範, 田中千都, 通山薫, 通山由美 Cannabinoid receptor2 negatively regulates the chemokine-induced migration of immune cells by suppression of intracellular vesicular transport (カンナビノイド受容体2は細胞内小胞輸送の抑制により免疫細胞のケモカイン誘発遊走を陰性制御する) 第83回日本生化学会大会 第33回日本分子生物学会年会合同大会 (神戸, 2010. 12. 7-12. 10)
22. 加地 弘明, 田中千都, 何勁松, 通山由美 マクロファージによる補体レセプター(CR3)を介したCandida Albicans貪食機構の解明 第131回日本薬学会学術集会 (静岡, 2011. 3. 28-3. 31 掲載のみ)
23. 田中千都, 通山由美 巨核球分化におけるRab27bの機能解析 第131回日本薬学会学術集会 (静岡, 2011. 3. 28-3. 31 掲載のみ)
24. 黒田義弘, 村田恵理, 上田康陽, 田崎絵美, 小越菜保子, 安部峰大, 宮本和英, 中瀬生彦, 二木史朗, 通山由美, 廣瀬宗孝 細胞透過性オリゴペプチドによる A549 ヒト肺線がん細胞に対する細胞増殖抑制、細胞毒性、及びアポトーシスへの影響 第131回日本薬学会学術集会 (静岡, 2011. 3. 28-3. 31 掲載のみ)
25. 通山由美 「マクロファージの多彩な機能」 第65回兵庫県生物学会大会 記念講演 (姫路, 2011. 5. 15)
26. 田中千都, 通山由美 Rab27b による c-kitの発現調節を介した巨核球分化/成熟のメカニズムの検討 第58回日本生化学会近畿支部例会 (関西医大, 2011. 5. 21)
27. 菊田香苗, 松川聡子, 松田覚, 通山由美, 赤桐里美, 植野洋志 ヒト白血球系細胞におけるグルタミン酸脱炭酸酵素GADの発現の解析 第58回日本生化学会近畿支部例会 (関西医大, 2011. 5. 21)
28. 菊田香苗, 松川聡子, 通山由美, 松田覚, 赤桐里美, 植野洋志 GAD65のスプライシングバリエント (30 kDa, 80 kDa) の発現 日本生物高分子学会大会 (金沢工業大学, 2011. 9. 15-16)
29. He Jinsong, 横山邦雄, 田中千都, 加地弘明, 通山由美 Rab27aは好中球とマクロファージの間で異なった様式で補体に仲介される貪食作用を調節する 第84回日本生化学会大会 (京都, 2011. 9. 21-9. 24)

30. 菊田香苗, 松川聡子, **通山由美**, 松田覚, 赤桐里美, 植野洋志 グルタミン酸デカルボキシラーゼ (GAD) の選択的スプライシング機構の解明 第84回日本生化学会大会 (京都, 2011. 9. 21-24)
31. 黒田義弘, 村田恵理, 上田康陽, 田崎絵美, 小越菜保子, 安部峰大, 宮本和英, 中瀬生彦, 二木史朗, **通山由美**, 廣瀬宗孝 EGFR の自己リン酸化部位由来ペプチドの A549 ヒト肺腺がん細胞における効果 第 84 回日本生化学会大会 (京都, 2011. 9. 21-24)
32. **Yumi Tohyama(通山由美)**, Kunio Yokoyama(横山邦雄), Kaoru Tohyama(通山薫) Rab27a negatively regulates phagocytosis during the actin-coating stage in HL60-derived macrophages 第 73 回日本血液学会学術集会 (名古屋, 2011. 10. 14-10. 16)
33. 加地弘明, 通山薫, **通山由美** マクロファージにより補体受容体を介して貪食されたカンジダ菌の細胞内殺菌メカニズムに関する基礎検討 第58回日本臨床検査医学会学術集会 (岡山, 2011. 11. 17-11. 20)
34. 森田寛之, 川上辰三, 加地弘明, **通山由美** 好中球におけるRab27Aの機能の検討 “ミエロペルオキシダーゼ (MPO) の動態制御を介した補体依存性の貪食とNets形成における必須の機能” 第85回日本生化学会大会 (福岡, 2012. 12. 14-16)
35. 加地弘明, 通山薫, **通山由美** マクロファージに貪食されたカンジダ菌の殺菌機構におけるチロシンキナーゼSykの機能 第 59回日本臨床検査医学会学術集会 (京都, 2012. 11. 29-12. 2)
36. **通山由美**, 加地弘明, 通山薫 Rab27a promotes phagosome maturation and neutrophil extracellular traps (NETs) formation 第41回日本免疫学会学術集会 (神戸, 2012. 12. 5-12. 7)
37. 川上辰三, 森田寛之, 加地弘明, **通山由美** 好中球の NETosis における低分子量Gタンパク質Rab27Aの機能解析 第62回日本薬学会近畿支部大会 (武庫川女子大学薬学部, 2012. 10. 20)
38. 大口千穂, 川上辰三, 波多野亜紀, 森田寛之, 加地弘明, **通山由美** 補体を介した食作用におけるチロシンキナーゼSykの機能 好中球様に分化した白血球細胞株HL60による検討 第62回日本薬学会近畿支部大会 (武庫川女子大学薬学部, 2012. 10. 20) ポスター賞受賞!
39. 川上辰三, 大口千穂, 波多野亜紀, 加地弘明, **通山由美** 好中球のNetosisにおけるSykの機能の検討 第59回日本生化学会近畿支部例会 (京都大, 2012. 5. 19)
40. 菊田香苗, 松川聡子, **通山由美**, 松田覚, 赤桐里美, 植野洋志 ヒト白血球培養細胞におけるグルタミン酸デカルボキシラーゼの発現様式の解析 第64回日本ビタミン学会大会 (岐阜, 2012. 6. 22-23)
41. 菊田香苗, **通山由美**, 松川聡子, 松田覚, 赤桐里美, 植野洋志 ヒト白血球とその培養細胞におけるグルタミン酸デカルボキシラーゼに関する研究 第85回日本生化学会大会 (福岡, 2012. 12. 14-16)
42. 川上辰三, 森田寛之, 加地弘明, **通山由美** Neutrophil extracellular traps (NETs) 形成におけるRab27aの機能の検討 第 60回日本生化学会近畿支部例会 (大阪大学吹田キャンパス, 2013. 5. 18)
43. Dian Kesumapramudya Nurputra, Hiroyuki Morita, Hisahide Nishio, **Yumi Tohyama** Abnormal acetylation status of α -tubulin in fibroblasts derived from SMA patients 第 60 回日本生化学会近畿支部例会 (大阪大学 吹田キャンパス, 2013. 5. 18)
44. **通山由美** 食細胞による生体防御機構 第 1 回楠会シグナル伝達シンポジウム (神戸ポートピアホテル, 2013. 8. 3)
45. 森田寛之, 朝本茂友, 加地弘明, **通山由美** 好中球の補体依存性貪食と NETs 形成における PKC δ の機能の検討 第 86 回日本生化学会大会 (パシフィコ横浜, 2013. 9. 11-13)

46. 黒田義弘, 小越菜保子, 田崎絵美, 中瀬生彦, 二木史朗, 通山由美, 廣瀬宗孝 IGF-1R の自己リン酸化部位由来ペプチドが MCF-7 ヒト乳がん細胞に及ぼす影響 第 86 回日本生化学会大会 (パシフィコ横浜, 2013. 9. 11-13)
47. 朝本茂友, 森田寛之, 加地弘明, 通山由美 補体を介した食作用における PKC δ の機能解析 好中球様に分化した白血病細胞株 HL60 による検討 第 63 回日本薬学会近畿支部大会 (同志社女子大学薬学部, 2013. 10. 12)
48. 加地 弘明, 通山 薫, 通山 由美 マクロファージによる補体介在性 Candida Albicans 食食における Syk の関与とその役割 第60回日本臨床検査医学会学術集会 (神戸, 2013. 10. 31-11. 3)
49. 武知佑樹, 安岐健三, 通山由美, 川上徹, 斎藤博幸, 岡村恵美子 オクタアルギニンの物理的膜透過に関するリアルタイム in cell NMR研究日本膜学会第 3 6 年会 (早稲田大学 2014年5月12-13日)
50. 山口博文, 森田寛之, 綾部圭一郎, 岡本秀一郎, 通山由美 好中球様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 におけるビメンチンの機能の検討 第 61 回日本生化学会近畿支部例会 (京都産業大学, 2014.5.17)
51. Dian Kesumapramudya Nurputra, Hiroyuki Morita, Hisahide Nishio, Yumi Tohyama SMN is essential for the HDAC6 mediated tubulin-deacetylation in fibroblasts 第 61 回日本生化学会近畿支部例会 (京都産業大学, 2014.5.17)
52. 柳原弘明, 本岡亜弥子, 山口博文, 森田寛之, 通山由美 好中球様分化プロセスにおける PKC δ の機能解析 (PKC δ ノックダウン型ヒト白血病細胞株 HL60 による検討) 第 64 回日本薬学会近畿支部大会 (京都薬科大学 2014.10.11)
53. 山口博文, 綾部圭一郎, 森田寛之, 通山由美 補体を介した食作用における中間径フィラメント, ビメンチンの機能解析 第 64 回日本薬学会近畿支部大会 (京都薬科大学 2014.10.11)
54. 森田寛之, 山口博文, 岡本秀一郎, 通山由美 補体依存性食作用における中間径フィラメント, ビメンチンの機能の解析 (好中球様に分化したヒト白血病細胞株, HL60 による検討) 第 87 回日本生化学会大会 (京都, 2014.10.18)
55. Tohyama Yumi, Kawakami Tatsumi, Morita Hiroyuki, Suemori Shin-ichiro, Tohyama Kaoru Essential role of Rab27a in the formation of neutrophil extracellular traps (NETs) 第76回日本血液学会学術集会 (大阪国際会議場, 2014.10.31)

56. Dian Kesumapramudya Nurputra, Hiroyuki Morita, Hisahide Nishio, Yumi Tohyama HDAC6 may be a new target of SMN downstream regulation in the microtubule dynamics of SMA fibroblasts 日本人類遺伝学会第59回大会 (東京(タワーホール船堀), 2014 1120)
57. Tohyama Yumi, Tohyama Kaoru Role of Rab27a in highly-reactive oxygen species-related neutrophil extracellular traps (NETs) formation 第43回日本免疫学会学術集会 (国立京都国際会館 2014.12.11)
58. 武知(原矢)佑樹, 安岐健三, 通山由美, 原野雄一, 川上徹, 斎藤博幸, 岡村恵美子 キネティクスに基づく細胞へのオクタアルギニンの物理的膜透過メカニズム 日本膜学会第 37 年会(早稲田大学 西早稲田キャンパス 2015. 5. 14 -15)
59. 森田寛之, 福井彩乃, 小山可奈子, 有馬太陽, 通山由美 Kinesin family member 20A(KIF20A)の多核化と細胞分裂への関与 第62回日本生化学会近畿支部例会 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 2015. 5. 16)
60. 川井真好, 通山由美 *Staphylococcus aureus* の好中球に対する抵抗性の変化 第62回日本生化学会近畿支部例会 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 2015. 5. 16)
61. 福井彩乃, 森田寛之, 小山可奈子, 有馬太陽, 田畑裕幸, 通山由美 Kinesin family member 20A (KIF20A) の細胞分裂と細胞分化における機能の検討 第65回日本薬学会近畿支部大会 (大阪大谷大学 2015. 10. 17)
62. 森田寛之, 福井彩乃, 小山可奈子, 有馬太陽, 田畑裕幸, 通山由美 Kinesin family member 20A (KIF20A) の細胞増殖と細胞分化における機能の検討 第88回日本生化学会大会 (神戸, 2015. 12. 01)
63. 森田寛之, 有馬太陽, 佐々木彪曜, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美 KIF 20A (Kinesin family member 20A) の分化と細胞分裂への影響 第63回日本生化学会 近畿支部例会 (神戸薬科大学, 2016. 5. 21)
64. 川井真好, 通山由美 *Staphylococcus aureus* の温度刺激による抵抗性の変化 第63回日本生化学会 近畿支部例会 (神戸薬科大学, 2016. 5. 21)
65. 島亜衣, 森田寛之, 西尾久英, 通山由美 脊髄性筋萎縮症 (SMA) のヒト神経細胞モデル作製と表現型の解析 第63回日本生化学会 近畿支部例会 (神戸薬科大学, 2016. 5. 21)
66. 島亜衣, 森田寛之, 通山由美, 西尾久英 脊髄性筋萎縮症(SMA)モデル神経細胞では神経突起様構造の伸長が抑制される 第2回日本筋学会学術集会 (国立精神・神経医療研究センター, 2016. 8. 5-6)
67. 森田寛之, 有馬太陽, 佐々木彪曜, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美 細胞分化および増殖における Kinesin family member 20A (KIF20A) の機能の検討 第89回日本生化学会大会 (仙台 仙台国際センター, 2016. 9. 25-27)
68. 有馬太陽, 森田寛之, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美 白血球細胞株, HL60 における KIF 20A (Kinesin family member 20A) の機能の検討 第66回日本薬学会近畿支部大会 (大阪薬科大学, 2016. 10. 15)
69. 佐々木彪曜, 島亜衣, 森田寛之, 田畑裕幸, 西尾久英, 通山由美 脊髄性筋萎縮症(SMA)原因遺伝子, SMN のヒト神経細胞モ

デルにおける機能の解析 第66回日本薬学会近畿支部大会（大阪薬科大学，2016. 10. 15）

70. 森田寛之, 千崎智暁, 西尾久英, 通山由美 脊髄性筋萎縮症の原因遺伝子 *SMN1* のヒト神経芽腫細胞における機能の解析 第64回日本生化学会 近畿支部例会（大阪大学 豊中キャンパス, 2017. 5. 27）
71. 川井真好, 泉谷優衣, 炭村一樹, 迫谷有希子, 通山由美 高温処理 *Staphylococcus aureus* の生存能力の獲得 第64回日本生化学会 近畿支部例会（大阪大学 豊中キャンパス, 2017. 5. 27）
72. 川井 真好, 迫谷 有希子, 通山 由美 高温処理 *Staphylococcus aureus* の生存能力の獲得 環境微生物系学会合同大会 2017（東北大学川内北キャンパス, 2017. 8. 29-31）
73. 杉谷朋美, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成機構に関わる新規シグナル分子の解析 第67回日本薬学会近畿支部大会（兵庫医療大学, 2017. 10. 14）ポスター賞受賞！
74. 千崎智暁, 森田寛之, 田畑裕幸, 西尾久英, 通山由美 SMN(Survival motor neuron protein) のヒト神経芽腫細胞における機能の解析 第67回日本薬学会近畿支部大会（兵庫医療大学, 2017. 10. 14）
75. 田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美 チロシンキナーゼ Syk によるファゴソームの酸性化と殺菌能の調節 第90回日本生化学会大会（神戸ポートアイランド, 2017. 12. 6-9）
76. 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成機構における Protein S100-A8 の機能の解析 第65回日本生化学会 近畿支部例会（兵庫医科大学, 2018. 5. 26）
77. 川井真好, 通山由美 高温処理による *Staphylococcus aureus* の生存能力への影響 第65回日本生化学会 近畿支部例会（兵庫医科大学, 2018. 5. 26）
78. 田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美 チロシンキナーゼ Syk によるファゴソームの酸性化の調節 第91回日本生化学会大会（国立京都国際会館, 2018. 9. 24-26）
79. 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 食細胞（好中球様・マクロファージ様細胞）における Protein S100-A8, Protein S100-A9 の機能解析: 好中球様・マクロファージ様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 による検討 第91回日本生化学会大会（国立京都国際会館, 2018. 9. 24-26）
80. 岸信彦, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 食作用依存性のMPO活性化におけるチロシンキナーゼSykの機能解析:好中球様に分化したヒト白血病細胞株HL60による検討 第68回日本薬学会近畿支部大会（姫路獨協大学, 2018. 10. 13）
81. 西川達也, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美 好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成における Protein S100-A8 の機能解析 第68回日本薬学会近畿支部大会（姫路獨協大学, 2018. 10. 13）
82. 大野華子, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美ファゴゾーム形成プロセスにおけるチロシンキナーゼSykの機能解析:マクロファージ様に分化したヒト白血病細胞株HL60による検討 第68回日本薬学会近畿支部大会（姫路獨協大学, 2018. 10. 13）
83. 田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美 チロシンキナーゼSykによるファゴソーム成熟機構の調節 第66回日本生化学会 近畿支部例会（京都大学 宇治キャンパス 宇治おうばくプラザ, 2019. 5. 25）
84. 田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美 チロシンキナーゼ Syk はファゴソーム膜におけるF-アクチン形成を調節する 第92回日本生化学会大会（パシフィコ横浜, 2019. 9. 18-20）
85. 柴田知明, 田畑裕幸, 通山由美 CRISPR-Cas9を利用したシグナル分子ノックアウト細胞の構築とTNF- α 産生への影響-ヒト白血病細胞株HL60を用いた検討 第69回日本薬学会関西支部大会（神戸薬科大学, 2019. 10. 12）台風にて紙上開催
86. Yumi Tohyama, Hiroyuki Tabata, Kaoru Tohyama :Syk plays an essential role in phagosome-lysosome fusion by facilitating actin-remodeling in complement mediated phagocytosis 61st ASH(American Society of Hematology) Annual Meeting, (Orange

County Convention Center, Orlando, FL, USA, 2019.12.7-10)

87. Hiroyuki Tabata, Yumi Tohyama : Protein - Tyrosine Kinase, Syk accelerates phagosome maturation by depolymerizing F - Actin in complement - mediated phagocytosis ASBMB (American Society for Biochemistry and Molecular Biology Annual 2020 Meeting (Online, USA, 2020.4.6)
88. 田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美 好中球様細胞における補体刺激依存的な TNF α 産生 - ヒト白血病細胞株 HL60 細胞を用いた検討 第 67 回日本生化学会 近畿支部例会 (奈良先端科学技術大学院大学 WEB 会議システムによる開催, 2021.5.29)
89. 香山 賢一, 田畑 裕幸, 通山 由美 S100A8、S100A9 の発現制御と細胞外放出機構の解析 : 好中球様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 における検討 第 94 回日本生化学会大会 (WEB 会議システムによる開催, 2021.11.3-5)
90. 境あかり, 田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美 補体受容体刺激による炎症性サイトカイン TNF- α 産生機構の解析-ヒト白血病細胞株 HL60 による検討 第 71 回日本薬学会関西支部大会 (近畿大学, WEB 会議システムによる開催, 2021.10.9)
91. 田中葉月, 田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美 SMN(Survival motor neuron protein) のヒト神経芽腫細胞 (SK-N-BE(2)c) における機能の解析 第 71 回日本薬学会関西支部大会 (近畿大学, WEB 会議システムによる開催, 2021.10.9)
92. 田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美 補体刺激は好中球様細胞に TNF α を産生させる - ヒト白血病細胞株 HL60 細胞を用いた検討 - 第 68 回日本生化学会 近畿支部例会 (滋賀医科大学, 2022.5.28)
93. 香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美 S100A8、S100A9 の NETs 形成における機能の解析 第 68 回日本生化学会 近畿支部例会 (滋賀医科大学, 2022.5.28)
94. 松井啓斗, 香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美 脊髄性筋萎縮症(spinal muscular atrophy : SMA) のモデル細胞の作成 ヒト神経芽腫細胞(SK-N-BE(2)c)を用いた検討 第 72 回日本薬学会関西支部大会 (摂南大学枚方キャンパス 2022.10.8)
95. 香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美 好中球様に分化した HL60 細胞における S100A8 および S100A9 の機能の解析 第 95 回日本生化学会大会 (名古屋国際会議場, 2022.11.9-11)
96. 香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美 SMA モデル細胞の作製を通した SMN の機能の検討 : ヒト神経芽腫細胞株 SK-N-BE(2)-C における検討 第 69 回日本生化学会 近畿支部例会 (京都大学, 2023.5.27)
97. 香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美 好中球様に分化した HL60 細胞における S100A8、S100A9 の機能及び制御の解析 第 96 回日本生化学会大会 (福岡国際会議場・マリンメッセ福岡 B 館, 2023.10.31-11.2)

Ⅲ 研究・研究業績活動 (※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用)

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1994 年～現在	日本生化学会会員 , 評議員 (2006～), 代議員 (2013, 2014～2015 2018～2019、2020～2021、2022～2023)
1999 年～現在	日本免疫学会会員
2006 年～現在	米国血液学会会員
2006 年～現在	米国生化学・分子生物学会会員
2007 年～現在	日本薬学会会員 代議員 (2011～2012, 2015～2016)
2007 年～2008 年	日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員

2007 年～2008 年	姫路市総合計画策定審議会 第3 分科会委員
2009 年～現在	姫路文学館 和辻哲郎文化賞推薦会委員
2010 年～現在	姫路市環境審議会委員
2013 年～2014 年	日本学術振興会特別研究員等審査会 専門委員
2014 年～2015 年	独立行政法人医薬基盤研究所 医薬推進研究評価委員会 専門委員
2014 年～2016 年	姫路市地域夢プラン審査委員
2015 年～2016 年	国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 開発振興部成果管理委員会専門委員
2017 年～2022 年	姫路市大学発まちづくり研究助成事業 審査委員
2018 年～2020 年	日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員
2019 年～現在	日本生化学会「生化学」誌 企画委員会委員

V 学内における主な活動

2007 年～20011	附属図書館運営委員
2007 年～2014 年	組換え DNA 安全管理委員会委員
2007 年～2014 年	組換え DNA 実験安全主任者
2012 年～2014 年	評議員
2015 年 4 月～2019 年 3 月	学部長 （その他、役職に伴う併任委員）
2019 年 4 月～2023 年 3 月	ハラスメント人権委員
2023 年 4 月～現在	学習支援センター長

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	長久保 大輔	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	--------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 講義における資料の工夫	2018 年 4 月～現在	薬学部 2 年生担当の「食品栄養学」、薬学部 3 年生担当の「公衆衛生学 II」では、教科書の要点を学生が理解しやすいように抜粋・再構成したパワーポイントのスライドを準備し、学生たちにはレジメとして配布した。また、演習問題を準備し、授業内容の復習や理解の定着化を目的として、適宜授業中に実施、もしくは自習用資料とした。2018 年度入学の学生から食品栄養学はカリキュラム改訂に伴い、科目名が「衛生薬学Ⅰ」に変更となっている。また、同様に 2018 年度入学の学生から公衆衛生学 II はカリキュラム改訂に伴い、科目名が「衛生薬学Ⅲ」に変更となっている。 2020 年度においては、新型コロナウイルス感染症によるコロナ禍のため、本学が全学的に対面形式の代わりとなる遠隔形式での授業方針となったことから、遠隔配信用に資料等の修正を適宜行い、対応した。 2021 年度以降、授業が対面形式に戻った折からは改良点として、学生に配布するレジメには、学生が授業への集中度を保つように穴埋め箇所を多数施した。また、毎回の授業終了時には確認テストを実施し、授業内容の復習や理解の定着を図った。
② 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2018 年 10 月～現在	薬学部 3 年生担当の「公衆衛生学実習」においては、教員による実演や、動画も用いて学生がイメージしながら実習のポイントを整理できるようにすると共に、事故防止などの安全に対する意識の徹底に努めた。 2020 年度においては、新型コロナウイルス感染症によるコロナ禍のため、対面での実習の制限を余儀なくされたことにより、遠隔形式での対応を行った。具体的には実験の操作方法の動画（当方で専用のものを撮影）と、それに基づいた計算により、学生が実体験した感覚に近いイメージを構築し、理解度を深め、実際に行う際にもすぐに対応できるような取組みとした。 2018 年度入学の学生から科目名が「衛生薬学実習」に変更となっている。 2021 年度以降、実習が対面形式に戻った折からは、コロナ禍で作成したオリジナルの動画を有効に活用し、実習の手順をより理解しやすくする工夫を加えた。
③ 学習した知識に基づき、学生の自由な発想力を高めるための工夫	2018 年 11 月～現在	薬学部 3 年生担当の「衛生領域 PBL」においては、2018 年におきた衛生薬学に関連する新聞記事をテーマとし、衛生領域の学習の中で学んだ内容に関連させて 3～4 人のグループによる発表の形式で行った。発表に際しては、これまでの学習の復習に留まるだけではなく、実際に身近で起きているリアルな事例を扱うことで、学生が興味を高め、学生ごとの自由な発想に基づく視点と、オリジナリティのあるプレゼンテーションが生まれるように努めた。
	2019 年 9 月～現在	2019 年度からは、「衛生領域 PBL」の内容を見直し、特に乱用薬

	2020 年 2 月 19 日 2020 年 9 月～10 月 2021 年 9 月～現在	物に着目して多面的な観点から調査・発表に取り組む内容とした。3～4人のグループ単位による調査と発表の形式は2018年度と同様のスタイルとした。また、担当する実習科目である「公衆衛生学実習」においても乱用薬物の分析法について調査する時間を設け、PBLとの連動を図ることで、より広範な内容を学生各自が自主的に取り組めるように意図した。 薬学部5年生配当の演習科目である「薬学総合演習Ⅰ」を担当した。5年生が学外の薬局・病院で実習を行う「実務実習」で得た学生ごとに異なる千差万別の知見や学修成果の中から、テーマに合う体験を抽出してもらうため、PBL形式の演習を行った。テーマに沿った学生間の討論に基づき、実務実習の振り返りを行い、その中から潜在的な問題点などを発見し、解決策を論じる内容とした。学会のポスター発表のような形式で、全ての学生が発表し、十分な時間に自由な討論が出来るようにしたことや、幅広い内容のトピックスを選定したことで、実体験に基づく説得力のある発表などが随所で散見できた。また、他者の体験から新たな気づきが発見される事例も数多く認められた。 2020年度の「衛生領域PBL」は、新型コロナウイルス感染症によるコロナ禍のため、対面形式での演習（調査や発表会）ではなく、遠隔形式での演習を実施した。各グループの発表は、Zoomにより遠隔形式にて行ったが、学生各位の調査や連携は直接会うことが出来ない中でも指示内容を明確にしたことにより十分なものが準備されており、対面形式と遜色のない発表会を執り行うことができた。 2021年度以降の「衛生領域PBL」では、履修学生の人数が漸減している状況に対応して、学生同士の質疑応答のための時間を十分確保することで、各グループに割り当てられた課題についての議論を深めるための工夫を行なった。
2 作成した教科書、教材、参考書		
① 公衆衛生学実習（現：衛生薬学実習）の実習書の作成	2018 年 10 月 2019 年 10 月 2020 年 10 月 2021 年 10 月～現在	薬学部3年生配当の実習科目「公衆衛生学実習」におけるテキスト兼手順書として、『公衆衛生学実習書』を薬学部 衛生・微生物学研究室の 川井眞好 准教授と分担・協力して作成した。 2019 年度も、2018 年度と同様に『公衆衛生学実習書』を作製した。改訂のポイントとして 2019 年度は薬物の乱用が引き起こす健康への影響についての討論の項目を盛り込み、実習に関連した乱用薬物の分析法や規制に関する事項を含む内容とした。 2020 年度も、前年度までと同様に『衛生薬学実習書』（公衆衛生学実習からの科目名の変更）を作製した。改訂のポイントとして 2020 年度は遠隔形式の実習をスムーズに行うための対応を盛り込んだ。 2021 年度以降、実習が対面形式に戻った折からは、遠隔前の形式の実習の内容に戻して、年度ごとの微調整を加えた『衛生薬学実習書』を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
【FD・SD 研修会への参加履歴】		
FD・SD 研修会への参加 (於：滋賀医科大学)	2016 年 1 月 19 日	タイトル：「教育方法改善に関する FD・SD 研修会：アクティブ・ラーニングを促す 30 の教育技法」
FD・SD 研修会への参加 (於：滋賀医科大学)	2017 年 3 月 1 日	タイトル：「講義・実習中のスマートフォン等の使用に関する FD・SD 研修会」
本学・薬学部前期 FD 活動への参加	2019 年 9 月 5 日	タイトル：「各領域の PBL（問題基盤型学習）の紹介－課題とその解決に向けて－」
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2019 年 12 月 18 日	タイトル：「DP への到達を測定、価値判断するためのアウトカム、評価計画の策定と現行科目との関連性の検討」
本学・薬学部前期 FD 活動への参加	2020 年 9 月 18 日	タイトル：「遠隔授業の課題と効果的な授業方法」 ファシリテーターとして参加
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2021 年 3 月 3 日	タイトル：「多様な学習歴で入学する学生への効果的な教育方法について－進級率の向上をめざして－」 ファシリテーターとして参加
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2021 年 9 月 25 日	タイトル：「薬学部・現行カリキュラムの問題点の共有」
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2022 年 3 月 4 日	タイトル：「カリキュラムの変更に向けた問題点の解決」
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2022 年 8 月 31 日	タイトル：「学力向上に向けた学年内の意見交換」 ファシリテーターとして参加
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2023 年 3 月 3 日	タイトル：「薬学教育モデル・コアカリキュラム（令和 4 年度改訂）の理解に向けて」
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2023 年 9 月 1 日	タイトル：「新しい本学の薬学教育カリキュラムの編成」
本学・薬学部後期 FD 活動への参加	2024 年 2 月 29 日	タイトル：「令和 4 年度薬学教育改訂新コア・カリキュラムに対応したシラバスの整備について」
【その他】		
公私立大学実験動物施設協議会 「実験動物管理者の教育訓練」修了	2021 年 7 月 26 日	教訓 21-211 号

II 研究活動

著書・論文等の名称	種・ 類・ 別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記 入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						

【論文】 Upregulated CCL28 expression in the nasal mucosa in experimental allergic rhinitis: Implication for CD4 ⁺ memory T cell recruitment.	共著	2016, Apr	Cellular Immunology, Vol. 302	©Nagakubo D, Yoshie O, Hirata T.	58 - 62	
Autoimmunity associated with chemically induced thymic dysplasia.	共著	2017, Aug	International Immunology, Vol. 29 (No. 8)	©Nagakubo D, Swann J, Birmelin S, Boehm T	385 - 390	
Genetic and non-genetic determinants of thymic epithelial cell number and function.	共著	2017, Sep	Scientific Reports, Vol. 7 (No. 1)	©Nagakubo D, Krauth B, Boehm T.	Article number: 10314	
The ERM protein moesin regulates CD8 ⁺ regulatory T cell homeostasis and self-tolerance.	共著	2017, Nov	Journal of Immunology, Vol. 199 (No. 10)	©Satooka H, Nagakubo D , Sato T, Hirata T.	3418 - 3426	
CCL28-deficient mice have reduced IgA antibody-secreting cells and an altered microbiota in the colon.	共著	2018, Jan	Journal of Immunology, Vol. 200 (No. 2)	©Matsuo K, Nagakubo D , Yamamoto S, Shigeta A, Tomida S, Fujita M, Hirata T, Tsunoda I, Nakayama T, Yoshie O.	800 - 809	
A CCR4 antagonist enhances DC activation and homing to the regional lymph node and shows potent vaccine adjuvant activity through the inhibition of regulatory T-cell recruitment.	共著	2018, Mar	Journal of Pharmacological Sciences, Vol. 136 (No. 3)	©Yamamoto S, Matsuo K, Nagakubo D , Higashiyama S, Nishiwaki K, Oiso N, Kawada A, Yoshie O, Nakayama T.	165 - 171	
Fundamental parameters of the developing thymic epithelium in the mouse.	共著	2018, Jul	Scientific Reports, Vol. 8 (No. 1)	©Hirakawa M, Nagakubo D , Kanzler B, Avilov S, Krauth B, Happe C, Swann JB, Nusser A, Boehm T.	Article number: 11095	
CCR4 Is critically involved in skin allergic inflammation of BALB/c mice.	共著	2018, Aug	Journal of Investigative Dermatology, Vol. 138 (No. 8)	©Matsuo K, Nagakubo D , Komori Y, Fujisato S, Takeda N, Kitamatsu M, Nishiwaki K, Quan YS, Kamiyama F, Oiso N, Kawada A, Yoshie O, Nakayama T.	1764 - 1773	

A novel Siglec-F+ neutrophil subset in the mouse nasal mucosa exhibits an activated phenotype and is increased in an allergic rhinitis model.	共著	2020, June	Biochemical and Biophysical Research Communications, Vol. 526 (No. 3)	©Matsui M [#] , Nagakubo D[#] , Satooka H, Hirata T.	599 - 606	(# Equal contribution)
Retracing the evolutionary emergence of thymopoiesis.	共著	2020, Nov	Science Advances, Vol. 6 (No. 48)	©Swann JB, Nusser A, Morimoto R, Nagakubo D , Boehm T.	eabd9585	
A novel role for bone marrow-derived cells to recover damaged keratinocytes from radiation-induced injury.	共著	2021, Mar	Scientific Reports, Vol. 11 (No. 1)	©Okano J, Nakae Y, Nakagawa T, Katagi M, Terashima T, Nagakubo D , Nakayama T, Yoshie O, Suzuki Y, Kojima H.	Article number: 5653	
CCR4 involvement in expansion of Th17 cells in a mouse model of psoriasis.	共著	2021, Aug	Journal of Investigative Dermatology, Vol. 141 (No. 8)	©Matsuo K, Kitahata K, Kaibori Y, Arima Y, Iwama A, Ito M, Hara Y, Nagakubo D , Quan YS, Kamiyama F, Oiso N, Kawada A, Yoshie O, Nakayama T.	1985 - 1994	
Limits to in vivo fate changes of epithelia in thymus and parathyroid by ectopic expression of transcription factors Gcm2 and Foxn1.	共著	2022, Aug	Scientific Reports, Vol. 12 (No. 1)	© Nagakubo D , Hirakawa M, Iwanami N, Boehm T.	Article number: 13554	
CCR4 plays a pivotal role in Th17 cell recruitment and expansion in a mouse model of rheumatoid arthritis.	共著	2022, Dec	International Immunology, Vol. 34 (No. 12)	©Honzawa T, Matsuo K, Hosokawa S, Kamimura M, Kaibori Y, Hara Y, Nagakubo D , Oiso N, Kawada A, Otsuka A, Yoshie O, Nakayama T.	635 - 642	
CCR3 blockage elicits polyploidization associated with the signatures of epithelial-mesenchymal transition in carcinoma cell lines.	共著	2023, Jan	Cancer Gene Therapy Vol. 30 (No. 1)	©Kaibori Y, Nagakubo D[*] .	137 - 148	(* Corresponding author)

The altered production and property of saliva induced by ingesting fermented food ingredients affect the oral microbiome composition in mice.	共著	2023, Jan	Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry Vol. 87 (No. 2)	©Kaibori Y, Yamashita K, Nagakubo D* .	228 - 235	(* Corresponding author)
CCL28: A Promising Biomarker for Assessing Salivary Gland Functionality and Maintaining Healthy Oral Environments	共著	2024, Feb	Biology Vol. 13 (No. 3)	©Kaibori Y, Tamoto S, Okuda S, Matsuo K, Nakayama T, Nagakubo D* .	Article number: 147	(* Corresponding author)
【その他：①総説】 アレルギー性鼻炎における CD4 ⁺ T 細胞の動態制御機構	単著	2017 年 11 月	アレルギーの臨床 12 月号 Vol. 37 (No. 507)		60 - 62	
Oral Microbiota: The Influences and Interactions of Saliva, IgA, and Dietary Factors in Health and Disease.	共著	2023, Sep	Microorganisms, Vol. 11 (No. 9)	© Nagakubo D* , Kaibori Y	Article number: 2307	(* Corresponding author)
【その他：②科研費】 アレルギー性鼻炎の病態形成に関わる免疫細胞浸潤機構の解明とその制御	研究代表者	2017 年 4 月 ～ 2020 年 3 月	科研費・基盤研究 (C)			3,700 千円 (直接経費)
大腸粘液産生制御と創薬を目指した分子基盤の構築	研究代表者	2020 年 4 月 ～ 2023 年 3 月	科研費・基盤研究 (C)			3,400 千円 (直接経費)
【その他：③助成金】 アレルギー性鼻炎の包括的理解に向けた新規モデルマウスの開発	研究代表者	2019 年 4 月 ～ 2020 年 3 月	姫路獨協大学 平成 31 年度特別研究助成			300 千円 (直接経費)
アレルギー疾患の病態制御の確立に向けた検討	研究代表者	2020 年 4 月 ～ 2021 年 3 月	姫路獨協大学 令和 2 年度特別研究助成			300 千円 (直接経費)
唾液産生を促進する新規の有効成分含有食品の創出	研究代表者	2020 年 8 月 ～ 2021 年 3 月	姫路市 産学協同研究助成			2,000 千円 (直接経費)
口腔環境改善に作用する有効成分の探索と製品化	研究代表者	2021 年 8 月 ～ 2022 年 3 月	姫路市 産学協同研究助成			2,000 千円 (直接経費)
論文タイトル： The altered production and property of saliva induced by ingesting fermented food ingredients affect the oral microbiome composition in mice.	研究代表者	2022 年度	姫路市 研究成果公開支援助成金			42,134 円 (直接経費)

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
該当せず			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1996 年 4 月～現在	日本分子生物学会会員
1998 年 4 月～現在	日本生化学会会員
1998 年 11 月～現在	日本免疫学会会員
1999 年 3 月～現在	日本癌学会会員
2017 年 2 月～現在	日本薬学会会員
2018 年 5 月～現在	日本薬学会関西支部委員
2022 年 4 月～現在	日本農芸化学会会員
2022 年 4 月～現在	日本口腔ケア学会会員（2022 年 4 月～現在：評議員）
2022 年 9 月～現在	American Society for Biochemistry and Molecular Biology （米国生化学分子生物学会） Regular Membership

Ⅴ 学内における主な活動

2019 年 4 月～現在	動物実験委員会 委員
2019 年 4 月～2020 年 3 月	薬学教育推進委員会 委員長
2020 年 4 月～2021 年 3 月	入試教科委員会 委員
2021 年 4 月～2023 年 3 月	姫路獨協大学薬学部教育改善実施委員会（FD委員会） 委員
2021 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部自己点検・評価委員会 委員長
2021 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部薬学教育評価対応ワーキンググループ リーダー
2023 年 3 月 4 日	中学生対象“姫路獨協大学公開講座”「DNA の姿を見てみよう！」開催 （後援：姫路市／姫路市教育委員会）
2023 年 4 月～現在	姫路獨協大学薬学部情報システム整備委員会 委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	中村隆典	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 学生の理解度向上のための取り組み	2013 年～現在	生薬学、天然物化学、漢方処方学は、薬学における基礎から臨床までの総合的な学問である。生薬学では、薬の元となった薬用植物の現物を検証することで、植物学的観点より薬学を学ぶ。また、天然物化学は、薬学的な薬理成分の構造、性質を生薬学実習で実験を通して学ぶ。漢方処方学では、生薬学と天然物化学の総合的な知識を応用し、臨床における薬学を考察出来るように系統立てて学ぶ。この3つの科目を連動させることで、より薬学を理解し臨床現場での薬学的知識の理解度を深める。
② 理解度確認のための取り組み		今回の合議には小テストを実施し、理解度と復習を兼ねて、詳細な解説を加えている。また、薬用植物においては現物の写真を交え、限りなく植物を想定できる問題としている。
③ 授業評価アンケートの活用		次年度には、アンケートによる授業評価を反映した講義を行うようにしている。また、自由文における学生の評価も大切に扱うようにしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特筆すべき事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2013」参加	2013 年 7 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介）
第 28 回「ひめじぐるめらんど」参加	2014 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介）
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2014」参加	2014 年 5 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「国際フロンティア産業メッセ 2014」参加	2014 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
第 29 回「ひめじぐるめらんど」参加	2015 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2015」参加	2015 年 5 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「国際フロンティア産業メッセ 2015」参加	2015 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
第 30 回「ひめじぐるめらんど」参加	2016 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「国際フロンティア産業メッセ 2016」参加	2016 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「豊穰の国・はりま」大物産展	2016 年 10 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2016」参加	2016 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発）
第 31 回「ひめじぐるめらんど」参加	2017 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表（ハーブティー、新種の食用菊の紹介）

「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2017」参加	2017 年 9 月	介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発) 大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「国際フロンティア産業メッセ 2017」参加	2017 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
第 32 回「ひめじぐるめらんど」参加	2018 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「国際フロンティア産業メッセ 2018」参加	2018 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
第 1 回「ひめじ花と緑のガーデンフ ェア」参加	2018 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2018」参加	2018 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「ひめじぐるめらんど・2023」参加	2023 年 4 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「国際フロンティア産業メッセ 2023」参加	2023 年 9 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
「企業・大学・学生マッチング in HIMEJI 2023」参加	2023 年 11 月	大学発地産地消商品開発発表 (ハーブティー、新種の食用菊の紹 介、姫路城サクラ酵母からの日本酒開発、キク酵母からの日本酒 開発)
4 その他教育活動上特記すべき事項		
中学生トライやる・ウィーク	2013 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
高校生インターンシップ	2013 年 8 月	薬用植物園管理体験 (飾磨高等学校)
高校生インターンシップ	2013 年 10 月	薬用植物園管理体験 (上郡高等学校)
高校生インターンシップ	2013 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
中学生トライやる・ウィーク	2014 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2014 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
高校生インターンシップ	2014 年 8 月	薬用植物園管理体験 (飾磨高等学校)
高校生インターンシップ	2014 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
高校生インターンシップ	2014 年 12 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)
高校生インターンシップ	2015 年 3 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校全日制)
中学生トライやる・ウィーク	2015 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
高校生インターンシップ	2015 年 8 月	薬用植物園管理体験 (飾磨高等学校)
中学生トライやる・ウィーク	2015 年 9 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
高校生インターンシップ	2015 年 10 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)
高校生インターンシップ	2015 年 11 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校多部制)
高校生インターンシップ	2016 年 2 月	薬用植物園管理体験 (飾磨工業高等学校全日制)
中学生トライやる・ウィーク	2016 年 6 月	薬用植物園管理体験 (広嶺中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2016 年 6 月	薬用植物園管理体験 (安室中学校)
中学生トライやる・ウィーク	2016 年 6 月	薬用植物園管理体験 (白鷺学校)
高校生インターンシップ	2016 年 10 月	薬用植物園管理体験 (相生産業高等学校)

高校生インターンシップ	2016 年 11 月	薬用植物園管理体験（飾磨工業高等学校多部制）
高校生インターンシップ	2017 年 3 月	薬用植物園管理体験（飾磨工業高等学校全日制）
中学生トライやる・ウィーク	2017 年 6 月	薬用植物園管理体験（広嶺中学校）
中学生トライやる・ウィーク	2017 年 6 月	薬用植物園管理体験（安室中学校）
中学生トライやる・ウィーク	2017 年 6 月	薬用植物園管理体験（白鷺学校）
高校生インターンシップ	2017 年 10 月	薬用植物園管理体験（相生産業高等学校）
高校生インターンシップ	2017 年 11 月	薬用植物園管理体験（飾磨工業高等学校多部制）
中学生トライやる・ウィーク	2018 年 6 月	薬用植物園管理体験（広嶺中学校）
中学生トライやる・ウィーク	2018 年 6 月	薬用植物園管理体験（安室中学校）
高校生インターンシップ	2018 年 7 月	薬用植物園管理体験（夢前高等学校）
高校生インターンシップ	2018 年 7 月	薬用植物園管理体験（飾磨高等学校）
姫路市理工チャレンジ事業	2018 年 8 月	薬学部体験学習（市内女子中学生対象）
高校生インターンシップ	2018 年 10 月	薬用植物園管理体験（相生産業高等学校）
高校生インターンシップ	2018 年 11 月	薬用植物園管理体験（飾磨工業高等学校多部制）

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 Can an Inhibitor of DNA Polymerase β Enhance the Formation of Comet Tail ?	共著	2013	Genes and Environment, 35 (2)	C. Odajima, ◎T. Nakamura, M. Miura, K. Yamazaki, G. Honda, Y. Kikuchi, A. Yamamoto, Y. F. Sasaki	46-52	
Role of Nucleotide Excision Repair or Base Excision Repair in Movement of Various n-Alkylated Bases, Investigated by the Comet Assay.	共著	2014	Genes and Environment, 36 (1)	C. Odajima, ◎ T. Nakamura , M. Nakamura, M. Miura, K. Yamasaki, G. Honda, Y. Kikuchi, A. Yamamoto, Y. F. Sasaki	10-16	
酸化ストレス度評価 (d-ROMs テスト) からみた禁煙治療の有 効性の検討.	共著	2015	人間ドック, 30 (1)	堀江弘子, 岩切 龍一, 黒木茂 高, 岩本英里, 古賀さやか, 田 代貴也, 小野尚 文, 江口尚久, ◎中 村隆典, 柳澤振 一郎, 駒田富佐 夫, 江口有一郎	30-37	
Chemical Constituents and their DPPH Radical Scavenging Activity of Nepalese Crude Drug Begonia picta	共著	2015	Rec. Nat. Prod. Vol. 9 :3	K. R. Joshi, H. P. Devkota, ◎T. Nakamura, T. Watanabe, S. Yahara	446-450	
世界文化遺産姫路城の桜花由 来の天然酵母による地酒の開	共著	2016	兵庫自治学, Vol. 22	朴杓汝, ◎中村 隆典, 更家信,	109-114	

発				川井真好		
Acylated triterpene saponins from the stem bark of <i>Acer nikoense</i> (Aceraceae).	共著	2016	Chem. Pharm. Bull., 64	S. Kurimoto, Y. Suyama, N. Tanaka, Y. Kashiwada, © T. Nakamura	924-929	
The Power of the Comet Assay to Detect Low Level Genotoxicity and DNA Repair Factors Affecting its Power.	共著	2017	MOJ Toxicology, 3 (2)	Kawaguchi, S.; Sasaki, Y. F.; ©Nakamura, T.	00049. DOI:10.15406/mojt.2017.03.00049.	
Can connarus rubber extract inhibit the induction of insulin resistance by hyperglycemia?	共著	2020	MOJ Toxicology, 6(1)	Satomi Kawaguchi, Riki Kawasaki, Ryo Murashige, Kayoko Yamazaki, Shin ichiro Kurimoto, Takanori Nakamura, Yu F Sasaki	6-10	
Is Genotoxicity of Peroxisome Proliferator-Activated Receptor Agonists Due to Oxidative Stress Via Agonistic Pathways?	共著	2021		Kojima H, Nakamura T, Matsumoto K, Hasegawa A, Saito T, Sato K, Honma T, Yamamoto A, Arai H, Kadoma Y, Kawaguchi S, Kikuchi Y, and Sasaki YF	DOI:10.23880/act-16000226	
Teuchamaedol A, a new neo-clerodane diterpenoid from the aerial parts of <i>Teucrium chamaedrys</i>	共著	2022	Tetrahedron Letters 100	Shin-ichiro Kurimoto, Koji Wakabayashi, Yu F. Sasaki, Takanori Nakamura, Takaaki Kubota	153890	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2007 年 4 月～現在	日本薬学会会員
2007 年 5 月～現在	日本生薬学会会員
2011 年 4 月～現在	生薬・天然物化学教科担当教員
2014 年 4 月～現在	日本生薬学会代議員
2014 年 4 月～現在	日本生薬学会関西支部委員

Ⅴ 学内における主な活動

2007 年 4 月～現在	就職委員会委員
2007 年 4 月～現在	薬草植物園管理
2007 年 4 月～現在	共用試験対策委員 (OSCE)
2007 年 4 月～現在	実務実習委員
2015 年 4 月～現在	広報委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	蓮元 憲祐	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
③ 講義における資料の工夫 右記に2022年の「学生による授業評価」アンケート結果に基づく教育活動自己評価を転記する。	2022 年	■ 前期・医薬品情報学 1. 現状の説明 薬学部における「医薬品情報学」教育は、臨床現場での実践を目指し、薬学部医療薬学科の学生を対象におこなった。医薬品情報を得る方法、その活用の仕方を基礎として、医薬品が適正に使用されるための総合的な医薬品情報を創造しうする方法またその知識を身につけることを目標にした。 2. 点検・評価の結果（長所と問題点） 「学生による授業評価」アンケート結果より、すべての評価項目で、この前期の「医薬品情報学」科目の評価は、同形態の平均値を上回っていた。更に、昨年度の「医薬品情報学」の評価よりもすべての評価項目で改善が認められた。また、自由記述の「この授業の良かったところ」でも「課題が多く、復習しやすい」、「分かりやすく授業されている」、「熱心」などの声があり、学生からこの授業に対して評価が高かった。 3. 改善の具体的方策 昨年度、「レジュメの画質が粗い」との指摘を受け、レジュメの印刷をする際には、レジュメを印刷したものをコピー機でコピーするのではなく、レジュメのデータ（PDF）を一旦、USB メモリに保存して、それをコピー機に USB 端子に繋ぎ、レジュメを作成するように改善した。そのため、今年度はそのような学生からの要望もなかった。 ■ 後期・臨床試験管理学 1. 現状の説明 薬学部における「臨床試験管理学」教育は、医療倫理を基盤とした臨床試験における薬剤師の理解を目指し、薬学部医療薬学科の学生を対象におこなった。臨床試験への適切な対応を取るために、医薬品開発の経緯、関与組織、関連する法律・規制に関する知識を身につけることを目標にした。 2. 点検・評価の結果（長所と問題点） 「学生による授業評価」アンケート結果より、嬉しいことに昨年度の評価とは異なり、すべての評価項目で、この後期の「臨床試験管理学」科目の評価は、同形態の平均値、また全体平均を上回っていた。また、自由記述の「この授業の良かったところ」では「要点がまとめられており、理解

		しやすかった」、「問題を毎回、出題そして解説して下さった」などの声があり、学生からこの授業に対して評価が高かった。また昨年度の評価において「改善すべきところ」について、1人の学生から「共用試験の CBT 前に講義を終わらせて欲しい」という評価もあったので、この点について今年度改善するようにした。 3. 改善の具体的方策 この科目は、今年度2回目の担当したこともあり、スライドも更に分かりやすいように改善したことなどもあり、今年度はこれを利用して後期開講開始から授業を始めることで CBT 前に講義を終わらせることができ、改善を行った。
④ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫 1. 立命館大学薬学部「医療薬学実習 A」	2016 年-2021 年	■ TDM セクションを担当した。その中で、TDM の考え方は病院薬剤師だけではなく、薬局薬剤師にとっても応用可能であることを、自分自身が臨床実務で経験した事例をケーススタディとして取り上げて、授業実践した。 (ケーススタディ) 16 時に A さん (26 歳男性、身長 172 cm、体重 67 kg、既往歴なし、併用薬なし) が自家用車で来局。昨日から体調が悪かったが、今日の昼過ぎから急に発熱したため、会社を早退し自宅近くのクリニックを受診した。医師からインフルエンザと診断され、下記の内容の処方箋を持って来られた。 A さんの持参した処方箋の内容 Rp. 1) タミフルカプセル 75 1 回 1 カプセル (1 日 2 カプセル) 1 日 2 回朝夕食後服用 5 日分 処方箋に書かれた医師のコメント: 1 回目はなるべく早く服用させて下さい。 患者への適切な服用タイミングを学生に考えさせた。課題を与えるにあたって、タミフルカプセル 75 の血中濃度推移と薬物動態パラメータを参考にさせた。 上記の他、TDM 実習中でのファーマコゲノミクス演習の教育など、これら一連の教育研究については、日本薬学教育学会より評価され、「2019 年度教育研究奨励賞」を受賞した。 ■ 本演習ではあくまで「学習者参画型学習」の手法にこだわり、グループワークで各自の気づきを共有することを大切に演習を行った。またこの中の一コマで薬剤師業務における実際のコミュニケーション場面 (来局者応対、病棟での初回面談など) を模擬的に行い、その様子を動画で撮影した。そしてこの動画を教材として授業内で使い、学生に薬剤師とし
2. 立命館大学薬学部「コミュニケーション演習」	2016 年-2021 年	

3. 姫路獨協大学薬学部「医療薬学系統合演習（PBL）」	2021 年～	での適切なコミュニケーションについてグループ内で議論・発表させて、学生の演習への積極的な参加を促す授業を実践した。 ■ 薬剤師業務を行う上で遭遇するジレンマをもとにした「モラルディレンマ授業」を行った。またその際の学生のパフォーマンスについての評価を、ルーブリック評価表を作成し、これを用いて評価において客観性を持たせるよう工夫した。また立命館大学薬学部時の薬学応用演習での「モラルディレンマ授業」において行った授業実践、特に学生のパフォーマンスの評価については、第 23 回 FD フォーラムで登壇者として招かれて口頭発表し、多くの方の関心を得た。
2 作成した教科書、教材、参考書		
【作成した教科書】 1. 折井孝男編「みてわかる薬学図解 医薬品情報学」改訂 5 版 2. 「模擬薬局実習（計数調剤・調剤薬監査）」実習書 3. 「医薬品情報学（患者からの情報収集）」SOAP 作成のためのビデオ教材	2023 年 4 月初版 2021 年～ 2021 年～	折井孝男編 <u>蓮元憲祐</u>・分担執筆「7 章-3 先発医薬品と後発医薬品・バイオシミラーの比較・評価」 南山堂 pp.291-295 担当されていた前任者の実習書を全面改訂して、新たに「計数調剤・調剤薬監査」の実習書を作成した。学生の事前学習に最適な課題を作成するだけでなく、なぜ、このような業務を行うのか、その目的についても学生が理解できるように配慮した。 薬剤師が患者から情報収集また服薬指導を行った際の記録方法として POS に基づく SOAP 作成がある。学生が模擬的に SOAP 作成を行うため、「初回面談」また「服薬指導」の 2 つの場面を設定して、動画を撮り、それを「医薬品情報学」の一コマで学生に視聴してもらい、SOAP を記載してもらった。また、学生が書いた SOAP は添削をして、フィードバックした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1. 「臨床準備教育における治療薬物モニタリングでのファーマコゲノミクス演習の教育効果と卒後教育における課題」：『改訂薬学コア・カリキュラムを見据えた実践的薬剤師教育 ～新時代の薬剤師への探求～』 2. 「高度な臨床能力を持つ医療人を目指した学習プログラムの開発と実践及び客観的評価系の構築」：『日本薬学教育学会奨励賞受賞講演』 3. 「薬学教育の視点からの学生のパフォーマンス評価の取り組み」：『学生のパフォーマンス評価を考える：工学教育と薬学教育を中心に』 4. 「患者に優しい製剤：ジェネリック医薬品の現状と取り組み」：『ジェネリック医薬品に関	2023 年 6 月 2020 年 9 月 2018 年 3 月 2016 年 6 月	第 3 回兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会・薬系 5 大学連携学術大会、Web 開催（兵庫県薬剤師会館） 第 5 回日本薬学教育学会、Web 開催（帝京大学） 大学コンソーシアム京都・第 23 回 FD フォーラム、京都産業大学 医療薬学フォーラム 2016/第 24 回クリニカルファーマシンポジウム、滋賀

する大学での事前学習での取り組み』		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
■ 優れた教育指導方法の実践 私は薬剤師が専門性を発揮できる分野の一つである治療薬物モニタリング (Therapeutic Drug Monitoring; TDM) に関する臨床準備教育において、独自性の高い学習プログラムの開発と実践を行い、その教育効果を客観的に評価してきた。右記にその成果を概説する。		<u>1. 学生の臨床意識向上を目指した臨床準備教育における TDM 教育の実践</u> 本学で実施している臨床準備教育における TDM 教育では、様々な背景を有する具体的な症例を提示して、最適な投与計画を検討するケーススタディに力を入れている。特に、一般に TDM が実施されることが多い病院内でのケースだけでなく、薬局においても TDM の考え方を取り入れた投与設計・服薬指導を可能とするような臨床的応用力を養う学習プログラムとなっている。 このような独自の学習プログラムの教育効果を評価するために、リフレクションシートとアンケートを行った。リフレクションシートでは、受講した学生自身が実習内容を振り返り（省察、リフレクション）することにより、個々の学生がどのような点でつまづいたのかを明確にできるという利点に加え、実習全体としてどのような点が有益であったのかを確認できる。今回の調査研究では、8 割以上の学生で実践的ケーススタディの有用性について回答が得られており、講義形式の実習に比べて学習効率が高い可能性が示された。 <u>2. 臨床準備教育におけるファーマコゲノミクス (Pharmacogenomics; PGx) 解析演習の実践</u> 本学の臨床準備教育における TDM 教育では、上述のケーススタディに加えて、近年注目が集まっている PGx に基づく個別化投与設計にも注力している。ここでの教育効果は、提示された症例についての実践的なレポートと関連するループリックにより評価した。結果として、PGx の処方提案への応用に関する認識が顕著に向上し、高い学習効果が得られることを見いだした。 これらの一連の教育研究については、日本薬学教育学会より評価され、「<u>日本薬学教育学会 2019 年度教育研究奨励賞</u>」を受賞した。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著者・共著者の別	発行または発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
【著書】 折井孝男編「みてわかる薬学 図解 医薬品情報学」改訂5版	共著	2023年4月初版	南山堂	折井孝男編 <u>蓮元憲祐</u> ・分担執筆	「7 章-3 先発医薬品と後発医薬品・バイオシミラーの比較・評価」pp.291-295
【総説】 1. 「高度な臨床能力を持つ医療人を目指した学習プログラムの開発と実践及び客観的評価系の構築」 2. 「ファーマコゲノミクスと薬物の治療効果」	単著	2022年	『薬学教育』6巻	<u>蓮元憲祐</u>	https://doi.org/10.24489/jjphe.2022-002
【論文】(2016年以降) 1. 「調剤薬局に来院する高齢患者の低栄養リスクの現状に関する観察的横断研究」 2. 「臨床準備教育における治療薬物モニタリング(TDM)実習でのファーマコゲノミクス演習の教育効果」 3. 「大学生および高校生の医療医薬品およびヘルスケア商品利用に関する実態調査」 4. 「学生の臨床意識向上を目指した実務実習事前学習における治療薬物モニタリング(TDM)教育」 5. “Comparison of	単著	2023年	『兵薬界』	<u>蓮元憲祐</u>	
	共著	<i>in press</i>	『医療薬学』	犬塚博貴、河邊貴宏、宮野美里、森田久美子、廣瀬隆、森田みゆき、楠富伊織、山下祥史、椛田昇治、土井瑠奈、徳永朋美、小川愛、横井正之、 <u>蓮元憲祐</u>	https://doi.org/10.24489/2022-043
	共著	2022年	『薬学教育』6巻	<u>蓮元憲祐</u> 、平 大樹、北川智也、横井正之、上島 智、岡野友信、角本幹夫	
	共著	2020年	『薬局薬学』12巻2号	荒井國三、浦田航希、橋本昌子、 <u>蓮元憲祐</u> 、谷山徹、卯尾伸哉	95-107 頁
	共著	2019年	『薬学教育』3巻	<u>蓮元憲祐</u> 、平 大樹、横井正之、角本幹夫、岡野友信	https://doi.org/10.24489/jjphe.2018-031
	共著	2018	<i>J Pharm</i>	<u>Hasumoto K</u> , Thomas	doi:10.1177/0897190018786614

Community Pharmacy Practice in Japan and US State of Illinois”		年	<i>Pract.</i>	RK, Yokoi M, and Arai K.	
6. “Pharmaceutical stability of colloidal saccharated iron oxide injection in normal saline”	共著	2018 年	<i>J Pharm Health Care Sci.</i> 4 巻 21 号	Hira D, Suzuki A, Kono Y, Shimokawa K, Matsuoka S, <u>Hasumoto K</u> , Kawahara H, Onoue M, Fujita T, Okano T, and Kakumoto M.	doi:10.1186/s40780-018-0116-0.
7. 「健診医療機関向け緊急連絡サービスシステム「街蛍」の開発」	共著	2018 年	『IT ヘル スケ ア』 13 巻 1 号	横井正之、中曽根亜純、加藤敏春、金井誠、中曽根暁子、 <u>蓮元憲祐</u>	130-133 頁
8. 「保険薬局における漢方薬の使用と服薬指導の実態調査」—漢方薬の生涯教育の提案のために—	共著	2017 年	『医療薬学』 43 巻 7 号	橋本加奈、柴田実香、玉田美香、木村嘉明、佐々木陽平、 <u>蓮元憲祐</u> 、荒井國三	373-380 頁
9. 「立命館大学薬学部における実務実習事前学習の取り組み」	共著	2017 年	『滋賀縣薬会誌』 174 巻	<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、角本幹夫、岡野友信	29-32 頁
10. 「4 年次医療系実習における TDM の取り組み」	共著	2017 年	『立命館高等教育研究』 17 号	<u>蓮元憲祐</u> 、角本幹夫	217-228 頁
【学会発表】(2016 年以降)					
1. 「薬学生と薬局薬剤師との間における簡易懸濁法の有用性に関する認識の相違」	共同発表	6 月 2023 年		中山七海、平 大樹、横井正之、清水岳人、宇野光裕、神森浩司、加藤史恵、 <u>蓮元憲祐</u>	第 6 回フレッシュヤーズ・カンファランス、京都
2. 「薬局におけるコミュニケーションツールとしての Tablet 端末の評価」	共同発表	11 月 2021 年		横井正之、須藤 寛、竹中陽香、鈴木すみれ、鈴木達彦、平 大樹、 <u>蓮元憲祐</u>	日本プライマリ・ケア連合学会 第 34 近畿地方会、Web 開催（大阪）
3. 「薬学部臨床準備教育での TDM 実習におけるファーマコゲノミクス (PGx) 演習の教育効果」	共同発表	1 月 2021 年		平 大樹、北川智也、横井正之、上島 智、岡野友信、角本幹夫、 <u>蓮元憲祐</u>	第 42 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、Web 開催（大阪）
4. 「CRISPR/Cas9 システムを用いたアンジオテンシン II 受容体ノックアウト細胞の樹立と評価」	共同発表	10 月 2020 年		本山瑞季、池尻朱里、伊達和輝、小島美駒、齋藤 僚、平 大樹、上島 智、 <u>蓮元憲祐</u> 、岡野友信、角本幹夫	第 30 回日本医療薬学会年会、Web 開催（名古屋） 第 70 回日本薬学会関西支部大会、

5. 「薬局薬剤師の学術大会参加経験と研究意識の関心の調査の中間報告」	共同発表	10月2020年		庄村元希、向山一郎、平大樹、 <u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、田城孝雄	Web開催（立命館大学）
6. 「薬局薬剤師の研究活動に対する意識調査」	共同発表	9月2020年		庄村元希、横井正之、和田勝志、浮貝真子、村田健太郎、高瀬真宏、向山一郎、鈴木達彦、平大樹、 <u>蓮元憲祐</u>	第5回日本薬学教育学会、Web開催（帝京大学）
7. 「薬学生と保険調剤薬局薬剤師との間における簡易懸濁法の有用性に関する認識の相違」	共同発表	3月2020年		<u>蓮元憲祐</u> 、平大樹、横井正之、上島智、岡野友信、清水岳人、宇野光裕、神森浩司、角本幹夫	日本薬学会第140年会、京都
8. 「薬学部臨床準備教育におけるファーマコゲノミクス(PGx)演習の教育効果」	共同発表	3月2020年		北川智也、平大樹、横井正之、上島智、岡野友信、角本幹夫、 <u>蓮元憲祐</u>	日本薬学会第140年会、京都
9. 「CRISPR/Cas9システムによるアンジオテンシンⅡ受容体ノックアウト細胞の樹立と評価」	共同発表	3月2020年		池尻朱里、小島美駒、齋藤 僚、平大樹、上島智、 <u>蓮元憲祐</u> 、岡野友信、角本 幹夫	日本薬学会第140年会、京都
10. 「薬局における研究活動への意識醸成手段としての実務実習期間中の研究活動の評価」	共同発表	12月2019年		中村早紀、柏原彩帆、吉川夏未、丹羽今日子、田城孝雄、平大樹、 <u>蓮元憲祐</u> 、横井正之	日本プライマリ・ケア連合学会 第33回近畿地方会、姫路
11. 「地域の薬局において一包化を行う際に薬剤師の製剤評価が必要な薬剤の調査」	共同発表	12月2019年		柏原彩帆、中村早紀、吉川夏未、丹羽今日子、田城孝雄、平大樹、 <u>蓮元憲祐</u> 、横井正之	日本プライマリ・ケア連合学会 第33回近畿地方会、姫路
12. 「医療用医薬品およびヘルスケア商品利用に関する実態調査」	共同発表	9月2019年		荒井國三、浦田航希、橋本昌子、 <u>蓮元憲祐</u> 、谷山徹、卯尾伸哉	日本社会薬学会第38年会、松山大学
13. 「医療人に必須の死生観や倫理観の涵養を目指した「薬学応用演習」の実践とその教育効果」	共同発表	8月2019年		<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、平大樹、谷浦秀夫、稲津哲也	第4回日本薬学教育学会大会、大阪大学
14. 「薬局実習中に、研究活動を行うことによる薬学生の研究活動に対する意識変化調査」	共同発表	8月2019年		横井正之、柏原彩帆、中村早紀、吉川夏未、丹羽今日子、田城孝雄、平大樹、 <u>蓮元憲祐</u>	第4回日本薬学教育学会大会、大阪大学
15. 「糖尿病網膜症マネジメントに関する薬局薬剤師の現状と今後の課題」	共同発表	8月2019年		小川 愛、廣瀬 隆、平大樹、田城孝雄、横井正之、 <u>蓮元憲祐</u>	第3回フレッシュヤーズ・カンファ

16. 「実務実習前後におけるかかりつけ薬局・薬剤師に対する薬学生の意識変化」	共同発表	8月2019年	廣瀬 隆、小川 愛、横井正之、田城孝雄、平大樹、 <u>蓮元憲祐</u>	ランス、帝京大学
17. 「抗てんかん薬の神経系への副作用評価を目的とした分子生物学的検討」	共同発表	6月2019年	下川滉介、平 大樹、上島 智、 <u>蓮元憲祐</u> 、岡野友信、角本幹夫	日本薬学会第139年会、千葉 第28回日本医療薬学会年会、神戸
18. 「患者が考える『かかりつけ薬局』の機能と薬剤師の認識の差の調査」	共同発表	3月2019年	廣瀬 隆、小川 愛、平大樹、田城孝雄、村松宗、横井正之、 <u>蓮元憲祐</u>	第3回日本薬学教育学会大会、昭和大学
19. 「実務実習前後での薬学生の簡易懸濁法に対する認識の変化」	共同発表	11月2018年	<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、平 大樹、角本幹夫、岡野友信	
20. 「『薬学応用演習』におけるモラルディレンマ授業の取り組み」-特にモラルディレンマ課題の開発と授業実践に関して-	共同発表	9月2018年	<u>蓮元憲祐</u> 、谷浦秀夫、稲津哲也	ITヘルスケア学会 第12回学会、川崎 日本薬学会第138年会、金沢
21. 「検診医療機関向けの緊急連絡サービスシステムの開発」	共同発表	6月2018年	横井正之、加藤敏治、金井 誠、中曽根暁子、 <u>蓮元憲祐</u>	日本薬学会第138年会、金沢
22. 「薬学生に対するファーマコゲノミクス (PGx) 教育の実施とその効果」	共同発表	3月2018年	松岡芹佳、平 大樹、 <u>蓮元憲祐</u> 、鈴木あさ美、角本幹夫、岡野友信	
23. 「コロイド性含糖酸化鉄注射剤フェジンは生理食塩液希釈により不安定化するか？」	共同発表	3月2018年	下川滉介、鈴木あさ美、平 大樹、河野裕允、 <u>蓮元憲祐</u> 、河原宏之、尾上雅英、藤田卓也、角本幹夫、岡野友信	日本薬学会第138年会、金沢 第27回日本医療薬学会年会、千葉
24. 「薬学生が簡易懸濁法を現場で実施したい動機となる要因の調査」	共同発表	3月2018年	<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、平 大樹、角本幹夫、岡野友信	第11回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム、京都
25. 「日本とアメリカの薬局実務に関する比較検討」	共同発表	11月2017年	<u>蓮元憲祐</u> 、吉田綾乃、玉田美香、柴田実香、横井正之、Roger K Thomas、荒井國三	第2回日本薬学教育学会大会、名古屋市立大学
26. 「希釈溶媒によるコロイド性含糖酸化鉄注射剤フェジンの製剤学的安定性への影響解析」	共同発表	10月2017年	下川滉介、鈴木あさ美、平 大樹、 <u>蓮元憲祐</u> 、河原宏之、尾上雅英、角本幹夫、岡野友信	
27. 「保険薬局における漢方薬の使用と	共同	9月	荒井國三、橋本加奈、	第2回日本薬学教育学会大会、名古屋市立大学

服薬指導の実態調査」-漢方薬の生涯教育の提案のために-	発表	2017年		柴田実香、玉田美香、木村嘉明、佐々木陽平、 <u>蓮元憲祐</u>	
28. 「4 年次医療系実習における TDM の取り組み」-特に「PGx 解析とテーラーメイド医療」に関して	共同発表	9 月 2017 年		<u>蓮元憲祐</u> 、平 大樹、横井正之、角本幹夫、岡野友信	日本薬学会第 137 年会、仙台
29. 「ヒューマニズム、倫理観、使命感等の涵養を目指した「薬学応用演習」の取り組みの紹介」	共同発表	3 月 2017 年		浅野真司、 <u>蓮元憲祐</u> 、稲津哲也、谷浦秀夫、服部尚樹	日本薬学会第 137 年会、仙台
30. 「立命館大学薬学部における事前学習としての簡易懸濁法の取り組み」	共同発表	3 月 2017 年		<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、角本幹夫、岡野友信	第 26 回日本医療薬学会年会、京都
31. 「立命館大学薬学部における実務実習事前学習の取り組みと学生の満足度 -(錠剤) 計数調剤での工夫について」	共同発表	9 月 2016 年		<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、角本幹夫、岡野友信	第 1 回日本薬学教育学会大会、京都薬科大学
32. 「一回生を対象とした参加型のコミュニケーション演習について」	共同発表	8 月 2016 年		浅野真司、 <u>蓮元憲祐</u> 、富山直樹	第 1 回日本薬学教育学会大会、京都薬科大学
33. 「立命館大学薬学部における実務実習事前学習の取り組みと学生の満足度」	共同発表	8 月 2016 年		<u>蓮元憲祐</u> 、横井正之、角本幹夫、岡野友信	
【国内・招待講演】 (2016 年以降)					
1. 「臨床準備教育における治療薬物モニタリングでのファーマコゲノミクス演習の教育効果と卒後教育における課題」:『改訂薬学コア・カリキュラムを見据えた実践的薬剤師教育～新時代の薬剤師への探求～』	単独発表	6 月 2023 年		<u>蓮元憲祐</u>	第 3 回兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会・薬系 5 大学連携学術大会、Web 開催 (兵庫県薬剤師会館)
2. 「高度な臨床能力を持つ医療人を目指した学習プログラムの開発と実践及び客観的評価系の構築」:『日本薬学教育学会奨励賞	単独発表	9 月 2020 年		<u>蓮元憲祐</u>	第 5 回日本薬学教育学会、Web 開催 (帝京大学)

受賞講演』 3. 「薬学教育の視点からの学生のパフォーマンス評価の取り組み」：『学生のパフォーマンス評価を考える：工学教育と薬学教育を中心に』 4. 「患者に優しい製剤：ジェネリック医薬品の現状と取り組み」：『ジェネリック医薬品に関する大学での事前学習での取り組み』	共同発表	3月 2018年		蓮元憲祐、鳥居朋子	大学コンソーシアム京都・第23回FDフォーラム、京都産業大学
	単独発表	6月 2016年		蓮元憲祐	医療薬学フォーラム2016/第24回クリニカルファーマシーシンポジウム、滋賀

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
該当事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1. 関西広域連合登録者試験委員（令和3年5月1日～現在に至る）	関西広域連合が行う、登録者試験問題の作成及び事務局との試験問題の調整に従事。
2. 日本薬学会関西支部委員（令和5年5月15日～現在に至る）	日本薬学会関西支部の学術大会、講演会等の広報、運営に従事。

Ⅴ 学内における主な活動

1. 実務実習委員会委員（立命館大学薬学部、2016年4月～2021年3月）	委員の先生方と実習生の情報を共有して、実務実習が円滑に行われるようにした。
2. 国家試験・CBT対策委員会委員（立命館大学薬学部、2016年4月～2021年3月）	委員の先生方と国家試験・CBT対策のプログラムを立案して実行し、高い合格率が得られるようにした。また私の担当として、必要に応じて学生と個別面談を行い、丁寧な学修指導を行った。
3. 学生委員（立命館大学薬学部、2018年4月～2021年3月）	主に進級できなかった学生、その保護者と3者面談を行い、学修指導を行った。また普段の学生生活において、困っている学生についても必要に応じて、面談して相談に応じた。
4. 薬学部自己点検・評価委員（姫路獨協大学薬学部、2021年4月～2023年3月）	薬学部における教育活動に関する事項や授業評価、また研究活動について自己点検・評価し、その結果を委員長とともに、薬学部教育改善実施（FD）委員会に報告または提案を行った。
5. 薬学共用試験 OSCE 実施委員（姫路獨協大学薬学部、副実施委員長：2021年4月～2023年3月、モニター員：2021年4月）	薬学共用試験 OSCE を公平かつ厳正に実施するにあたり、ステーションの運営だけでなく全体のコーディネートも行った。また2023年4月からは、これまでの副実施委員長としての経験を活かして、実施委員長に就任した。

～2023 年 3 月、実施委員長： 2023 年 4 月～現在にいたる)	
6. 薬学教育支援室・副室長（姫路 獨協大学薬学部、2022 年 10 月 ～現在にいたる)	薬学共用試験（CBT、OSCE）や薬剤師国家試験対策の充実に係わる提 案を行うとともに、学生に対する個別の学修相談と支援の企画と支援等 を行っている。
7. 薬学部予算管理委員（姫路獨協 大学薬学部、2023 年 4 月～現在 にいたる)	年度毎に薬学部における予算配分について、検討を行い、教授会に諮っ ている。

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	増田 智先	大学院における研究指導担当 資格の有無（ ）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑤ 講義における資料の工夫 ①-1. 生物薬剤学（3 年時後期）	2021 年 4 月以降	生物薬剤学の全ての情報を均等に整理した教科書が不足する中、複数の参考図書に基づいて、講義資料は全て自作している。配布資料は可能な限り自作のパワーポイントプレゼンテーション資料と同じ内容を 4-UP で作成している。また、各スライドに使用する色は原則 3 種までとし、スライド内のフォントサイズはタイトル（36 ポイント）、見出し（24 ポイント）、注釈（18 ポイント）のように統一し、出力版として縮小する場合でも十分に判別ができるような工夫をしている。 なお、講義ごとに学生からアンケートを回収し、色使い、文字の選択、内容、など資料に関する意見がある場合には速やかに取り入れ、次回講義時に反映し、その効果について再度学生からの意見を求めるなど、学生と一緒に作り上げる資料を目指している。
①-2. 薬物動態学（4 年次前期）		薬物動態学の講義では主に高等学校数学における微分・積分を多用する。数学、特に演算の苦手な学生が多いため、公式を導く過程よりも繰り返し公式を用いて解答を算出する練習に重点化した講義を展開している。しかし、講義資料については、復習の中で式の導出過程が理解できるように step by step に過程がわかりやすいように作成している。なお、毎回新たに学んだ公式ならびに概念を忘れないように、前回の復習を取り入れるとともに、全ての公式がどの領域で用いるのか、共通した考え方があるのかをまとめながら、最終回（15 回目）に向かって毎回の講義で積み重なっていくようなレイアウト設計としている。学生の計算力獲得に注力した本科目では、講義の度に小テストを実施し、前回学んだ演算方法の復習を行うとともに、公式の活用する機会の提供に注力している。全ての講義資料及び練習問題の解答と解説は速やかに Google Classroom にアップし、学生が閲覧できるように工夫している。 なお、講義ごとに学生からアンケートを回収し、色使い、文字の選択、内容、など資料に関する意見がある場合には速やかに取り入れ、次回講義時に反映し、その効果について再度学生からの意見を求めるなど、学生と一緒に作り上げる資料を目指している。
①-3. 薬物動態学実習（4 年次前期）		薬物動態学実習は生物薬剤学、薬物動態学で学んだ内容の一部を実際の実験系で体験し、その理解を深めることを目的としている。実習書（資料）は、実習項目の解説に加えて、虫食いのドリル形式にしてあり、算出したパラメータを直接記入して完成させるような工夫としており、同一班の学生同士で相談しながら互いに教え合える材料とすることを目的として作成している。同時に、レポートキットも配布し、パラメータの算出を要する実習項目については、片対数グラフや実習グラフの容姿も挟み込み、一覧表雛形を含めて、そのキットを完成させることができれば同時にレポートも完成するような工夫をしている。

①-4. 薬学概論（1年次前期）		入学して間も内1年次生を対象にこれからの6年間にわたる薬学教育の概要を教育するため、広く浅く、を念頭に時事情報を交えながら解説するような工夫をしている。 なお、講義ごとに学生からアンケートを回収し、色使い、文字の選択、内容、など資料に関する意見がある場合には速やかに取り入れ、次回講義時に反映し、その効果について再度学生からの意見を求めるなど、学生と一緒に作り上げる資料を目指している。
⑥ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2021年4月以降	実習内容の事前説明に加えて模範となる実習経過およびその結果を見本として、実習開始後数時間経ってから学生に開示し、先ずは予想通りの結果を導き出すための手順などを身につけることを念頭とした組み立てとしている。また、身近なところで手に入るものを実験材料を選択するなど、学生の興味を引くような内容としている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントとサブノート式演習プリントの作成 「生物薬剤学」「薬物動態学」「薬学概論」「薬物動態学実習」	2021年4月以降	講義内容に沿った図解式のパワーポイントと、学生が記入する形式のサブノート、及び講義内容の單元ごとの演習プリント（講義ごとに課す課題とした復習）を作成した。
「生物薬剤学 改訂第4版」南江堂 分担、TDMと薬物投与設計 P257-P280	2022年7月以降	薬学教育モデル・コアカリキュラム（平成25年度改訂版、令和4年度改訂版）に沿った教科書として分担執筆した。
「医学大辞典 第3版」医学書院 分担、	2022年7月以降	医学、薬学の分野における辞典として複数の項目について解説文を分担執筆した。
「ここからはじめる検査値X処方箋の読み方 第2版」じほう 分担	2019年8月	臨床薬学における臨床症例の処方箋に基づく病態解析ならびに薬物治療の調整を視野にする参考図書として分担編著した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
無し		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
薬学部教育改善（FD）委員会	2021年4月以降	2023年4月以降は委員長
OSCE実施委員	2021年4月～2023年3月	教養試験（実技、OSCE）の実施委員としてステーション副責任者として一部の科目を担当した。
3ポリシーの改訂	2023年4月以降	薬学教育モデル・コアカリキュラム（令和4年度改訂）を念頭にした薬学教育カリキュラムの改訂、それに合わせた3ポリシーの改訂に責任者として携わった。

II 研究活動

【原著論文・英文】2019年～2023年

- Yoneshima Y, Tanaka K, Shiraishi Y, Hata K, Watanabe H, Harada T, Otsubo K, Iwama E, Inoue H, Masuda S, Nakanishi Y & Okamoto I: Safety and efficacy of PD-1 inhibitors in non-small cell lung cancer patients positive for antinuclear antibodies. **Lung Cancer**, 130): 5-9 (2019).
- Yamamoto Y, Masuda S, Nakase H, Matsuura M, Maruyama S, Hisamatsu T, Suzuki Y & Matsubara K: Influence of Pharmaceutical Formulation on the Mucosal Concentration of 5-Aminosalicylic Acid and N-Acetylmethylamine in Japanese Patients with Ulcerative Colitis.

Biol Pharm Bull, 42 (1): 81-86 (2019).

3. Watanabe H, Uchida M & Masuda S: [Clinical Pharmacology Research for Promoting Individualized Cancer Chemotherapy]. *Yakugaku Zasshi*, 139 (6): 901-909 (2019).
4. Suetsugu K, Mori Y, Yamamoto N, Shigematsu T, Miyamoto T, Egashira N, Akashi K & Masuda S: Impact of CYP3A5, POR, and CYP2C19 Polymorphisms on Trough Concentration to Dose Ratio of Tacrolimus in Allogeneic Hematopoietic Stem Cell Transplantation. *Int J Mol Sci*, 20 (10): E2413 (2019).
5. Saito M, Chen-Yoshikawa TF, Suetsugu K, Okabe R, Takahagi A, Masuda S & Date H: Pirfenidone alleviates lung ischemia-reperfusion injury in a rat model. *J Thorac Cardiovasc Surg*, 158 (1): 289-296 (2019).
6. Fukuda M, Suetsugu K, Tajima S, Katsube Y, Watanabe H, Harada N, Yoshizumi T, Egashira N, Mori M & Masuda S: Neutrophil Gelatinase-Associated Lipocalin Is Not Associated with Tacrolimus-Induced Acute Kidney Injury in Liver Transplant Patients Who Received Mycophenolate Mofetil with Delayed Introduction of Tacrolimus. *Int J Mol Sci*, 20 (12): E3103 (2019).
7. Tsuchiya Y, Suetsugu K, Yamamoto N, Kobayashi D, Tsuji T, Watanabe H, Egashira N & Masuda S: Simultaneous determination of plasma concentration of 12 oral molecular-targeted drugs by ultra-performance liquid chromatography-tandem mass spectrometry. *Jap J Ther Drug Monit*, 36 (3): 105-116 (2019).
8. Uchida M, Nakamura T, Watanabe H, Kato K, Miyamoto T, Akashi K & Masuda S: Usefulness of medication instruction sheets for sharing information on cancer chemotherapy within the health care team. *Pharmazie*, 74 (9): 566-569 (2019).
9. Tajima S, Fu R, Shigematsu T, Noguchi H, Kaku K, Tsuchimoto A, Okabe Y & Masuda S: Urinary Human Epididymis Secretory Protein 4 as a Useful Biomarker for Subclinical Acute Rejection Three Months after Kidney Transplantation. *Int J Mol Sci*, 20 (19): E4699 (2019).
10. Ishida S, Morikawa H, Watanabe H, Tsuji T, Sugio T, Mori Y, Miyamoto T, Masuda S, Akashi K & Egashira N: Increasing Diluent Volume Decreases Bendamustine-Induced Venous Irritation without Reducing the Therapeutic Efficacy. *Biol Pharm Bull*, 43 (3): 488-492 (2020).
11. Ishida S, Masuguchi K, Kawashiri T, Tsuji T, Watanabe H, Akiyoshi S, Kubo M, Masuda S & Egashira N: Effects of Diluent Volume and Administration Time on the Incidence of Anaphylaxis Following Docetaxel Therapy in Breast Cancer. *Biol Pharm Bull*, 43 (4): 663-668 (2020).
12. Nakamura T, Fukuda M, Matsukane R, Suetsugu K, Harada N, Yoshizumi T, Egashira N, Mori M & Masuda S: Influence of POR*28 Polymorphisms on CYP3A5*3-Associated Variations in Tacrolimus Blood Levels at an Early Stage after Liver Transplantation. *Int J Mol Sci*, 21 (7): E2287 (2020).
13. Zhang M, Tajima S, Shigematsu T, Fu R, Noguchi H, Kaku K, Tsuchimoto A, Okabe Y, Egashira N & Masuda S: Donor CYP3A5 Gene Polymorphism Alone Cannot Predict Tacrolimus Intrarenal Concentration in Renal Transplant Recipients. *Int J Mol Sci*, 21 (8): (2020).
14. Shigematsu T, Suetsugu K, Yamamoto N, Tsuchiya Y & Masuda S: Comparison of four commercial immunoassays used in measuring the concentration of tacrolimus in blood, and their cross-reactivity to its metabolites. *Ther Drug Monit*, 42 (3): 400-406 (2020).
15. Yamamoto Y, Nakase H, Matsuura M, Maruyama S & Masuda S: CYP3A5 Genotype as a Potential Pharmacodynamic Biomarker for Tacrolimus Therapy in Ulcerative Colitis in Japanese Patients. *Int J Mol Sci*, 21 (12): E4347 (2020).
16. Tanihara Y., Masuda S. & Inui K[†]: Inhibitory effects of vandetanib on creatinine transport via renal organic cation transporter OCT2. *Eur J Pharm Sci*, 158): 105666 (2020)
17. Suetsugu K., Yamamoto N., Shigematsu T., Kobayashi D., Tsuchiya Y., Nakayama Y., Tsuji T., Watanabe H., Kanaya A., Masuda S. & Egashira N[†]: [Significant Changes Associated with the Transition from Outsourcing to In-hospital Therapeutic Drug Monitoring of Novel Antiepileptics]. *YAKUGAKU ZASSHI*, 140 (8): 1035-1040 (2020)
18. Mei T[†], Noguchi H., Suetsugu K., Hisadome Y., Kaku K., Okabe Y., Masuda S. & Nakamura M.: Effects of Concomitant Administration of Vonoprazan Fumarate on the Tacrolimus Blood Concentration in Kidney Transplant Recipients. *Biol Pharm Bull*, 43 (10): 1600-1603 (2020)
19. Hata K[†], Suetsugu K., Egashira N., Makihara Y., Itoh S., Yoshizumi T., Tanaka M., Kohjima M., Watanabe H., Masuda S. & Ieiri I.: Association of lenvatinib plasma concentration with clinical efficacy and adverse events in patients with hepatocellular carcinoma. *Cancer Chemother Pharmacol*, 86 (6): 803-813 (2020)

20. Harada N[¶], Yoshizumi T., Yoshiya S., Takeishi K., Toshima T., Itoh S., Ikegami T., Fukuda M., Masuda S. & Mori M.: Use of Mycophenolate Mofetil Suspension as Part of Induction Therapy After Living-Donor Liver Transplant. *Exp Clin Transplant*, 18 (4): 485-490 (2020)
21. Matsukane R[¶], Watanabe H, Minami H, Hata K, Suetsugu K, Tsuji T, Masuda S. Okamoto I, Nakagawa T, Ito T, Eto M, Mori M, Nakanishi Y & Egashira N: Continuous monitoring of neutrophils to lymphocytes ratio for estimating the onset, severity, and subsequent prognosis of immune related adverse events. *Sci Rep*, 11 (1): 1324 (2021)
22. Fu Rao, Tajima S[¶], Shigematsu T, Zhang M, Tsuchimoto A, Egashira N, Ieiri Ichiro & Masuda S.: Establishment of an experimental rat model of tacrolimus-induced kidney injury accompanied by interstitial fibrosis. *Toxicol Lett*, 341): 43-50 (2021)
23. Matsuda Y[¶], Nakagawa S., Yano I., Masuda S., Imai S., Yonezawa A., Yamamoto T., Sugimoto M., Tsuda M., Tsuzuki T., Omura T., Nakagawa T., Chen-Yoshikawa T. F., Nagao M., Date H. & Matsubara K.: Effect of Itraconazole and Its Metabolite Hydroxyitraconazole on the Blood Concentrations of Cyclosporine and Tacrolimus in Lung Transplant Recipients. *Biol Pharm Bull*, 45 (4): 397-402 (2022)
24. Hirata M[¶], Yagi S., Ito T., Masano Y., Miyachi Y., Yao S., Sonoda M., Masuda S., Haga H. & Hatano E.: Impact of very early introduction of everolimus on liver regeneration after partial liver transplantation in rats. *J Hepatobiliary Pancreat Sci*, 30 (7): 882-892 (2023)
25. Nies AT[¶], König J, Leuthold P, Damme K, Winter S, Haag M, Masuda S., Kruck S, Daniel H, Spanier B, Fromm MF., Bedke J, Inui K, Schwab M & Schaeffeler E: Novel drug transporter substrates identification: An innovative approach based on metabolomic profiling, in silico ligand screening and biological validation. *Pharmacological Research*, 196): 106941 (2023)

【総説・英文】2019年～2023年

26. Fu R, Tajima S, Suetsugu K, Watanabe H, Egashira N & Masuda S[¶]: Biomarkers for individualized dosage adjustments in immunosuppressive therapy using calcineurin inhibitors after organ transplantation. *Acta Pharmacol Sin*, 40 (2): 151-159 (2019).
27. Brunet M[¶], van Gelder T, Asberg A, Haufröid V, Hesselink DA, Langman L, Lemaitre F, Marquet P, Seger C, Shipkova M, Vinks A, Wallemacq P, Wieland E, Woillard JB, Barten MJ, Budde K, Colom H, Dieterlen MT, Elens L, Johnson-Davis KL, Kunicki PK, MacPhee I, Masuda S. Mathew BS, Millan O, Mizuno T, Moes DAR, Monchaud C, Noceti O, Pawinski T, Picard N, van Schaik R, Sommerer C, Vetthe NT, de Winter B, Christians U & Bergan S: Therapeutic Drug Monitoring of Tacrolimus-Personalized Therapy: Second Consensus Report. *Ther Drug Monit*, 41 (3): 261-307 (2019).
28. Zhang W, Egashira N & Masuda S[¶]: Recent Topics on The Mechanisms of Immunosuppressive Therapy-Related Neurotoxicities. *Int J Mol Sci*, 20 (13): E3210 (2019)
29. Tajima S, Yamamoto N & Masuda S[¶]: Clinical prospects of biomarkers for the early detection and/or prediction of organ injury associated with pharmacotherapy. *Biochemical Pharmacology*, 170): 113664 (2019).
30. Kajinami K[¶], Tsukamoto K, Koba S, Inoue I, Yamakawa M, Suzuki S, Hamano T, Saito H, Saito Y, Masuda S. Nakayama T, Okamura T, Yamashita S, Kagawa T, Kaneyama J, Kuriyama A, Tanaka R & Hirata A: Statin Intolerance Clinical Guide 2018. *J Atheroscler Thromb*, 27): 375-396 (2020).
31. Yamada T, Zhang M & Masuda S[¶]: Significance of ethnic factors in immunosuppressive therapy management after organ transplantation. *Ther Drug Monit*, 42 (3): 369-380 (2020).
32. Bergan S[¶], Brunet M, Hesselink DA, Johnson-Davis KL, Kunicki PK, Lemaitre F, Marquet P, Molinaro M, Noceti O, Pattanaik S, Pawinski T, Seger C, Shipkova M, Swen JJ, van Gelder T, Venkataramanan R, Wieland E, Woillard JB, Zwart TC, Barten MJ, Budde K, Dieterlen MT, Elens L, Haufröid V, Masuda S. Millan O, Mizuno T, Moes Dirk J. A. R., Oellerich M, Picard N, Salzmann L, Tönshoff B, van Schaik R H. N., Vetthe NT, Vinks AA, Wallemacq P, Åsberg A & Langman LJ.: Personalized Therapy for Mycophenolate: Consensus Report by the International Association of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology. *Ther Drug Monit*, 43 (2): 150-200 (2021)
33. Lemaitre F. [¶], Budde K., Van Gelder T., Bergan S., Lawson R., Noceti O., Venkataramanan R., Elens L., Moes Djar, Hesselink D. A., Pawinski T., Johnson-Davis K. L., De Winter B. C. M., Pattanaik S., Brunet M., Masuda S. & Langman L. J.: Therapeutic drug monitoring and dosage adjustments of immunosuppressive drugs when combined with nirmatrelvir/ritonavir in patients with COVID-19. *Ther Drug Monit*, 45 (2): 191-199 (2023)

【原著・和文】2019年～2023年

34. 辻 敏和¹, 永田 健一郎, 佐々木 恵一, 末次 王卓, 渡邊 裕之, 金谷 朗子 & 増田 智先: アイトラッキング手法を用いた薬剤師の視線動向に基づく調剤エラーの発生メカニズムの解明. *医療薬学*, 45 (9): 493-503 (2019)
35. 末次 王卓¹, 山本 奈々絵, 重松 智博, 小林 大介, 土谷 祐一, 中山 由理恵, 辻 敏和, 渡邊 裕之, 金谷 朗子, 増田 智先 & 江頭 伸昭: 新規抗てんかん薬血中濃度測定の内製化による効果. *YAKUGAKU ZASSHI*, 140 (8): 1035-1040 (2020)

【総説・和文】2019年～2023年

36. 増田 智先¹, 佐藤 滋, 谷川原 祐介: TDMガイドライン(4)免疫抑制薬TDM標準化ガイドライン2018臓器移植編. *日本病院薬剤師会雑誌* 55: 9, 1041-1046 (2019).
37. 谷川原 祐介, 増田 智先¹, 上杉 美和, 梶原 望渡, 河崎 陽一, 川尻 雄大, 竹内 裕紀, 内藤 隆文, 布田 伸一, 福土 将秀, 本間 真人, 松田 裕也, 見野 靖晃, 村木 優一, 山本 由貴, 佐藤 滋, 伊藤 泰平, 小倉 靖弘, 菅原 寧彦, 陳 豊史, 鳴海 俊治, 新岡 丈典, 原田 浩, 播本 憲史, 福嶋 教偉, 三浦 昌朋, 和田 恭一, 渡井 至彦, 日本TDM学会・日本移植学会免疫抑制薬TDM標準化ガイドライン策定委員会, 一般社団法人日本TDM学会 & 一般社団法人日本移植学会: 免疫抑制薬TDM標準化ガイドライン 2018 臓器移植編 Executive Summary. *TDM研究* 36 (1): 19-42 (2019).
38. 梶波 康二¹, 塚本 和久, 木庭 新治, 井上 郁夫, 山川 正, 鈴木 重明, 濱野 忠則, 齋藤 英胤, 斎藤 嘉朗, 増田 智先, 中山 健夫, 岡村 智教, 山下 静也, 加川 建弘, 金山 純二, 栗山 明, 田中 瑠美, 平田 あや & スタチン不耐診療指針作成ワーキンググループ. スタチン不耐に関する診療指針2018. 2018/12/19 edn. 1-37 (日本動脈硬化学会, 東京, 2019).
39. 増田 智先¹: 薬物による腎障害発症のメカニズムと尿中バイオマーカー 鎮痛消炎剤を例に. *筑紫* 43 (3): 30-33 (2019)
40. 渡邊 裕之¹, 秦 晃二郎, 池田 宗彦, 益口 賢, 田川 慎二, 南 晴奈 & 増田 智先: 【免疫チェックポイント阻害薬の副作用 (irAE)-わかってきたこと-】九州大学病院におけるチーム医療に基づいたirAEマネジメント. *癌の臨床* 64 (5): 307-314 (2019)
41. 渡邊 裕之¹, 内田 まやこ & 増田 智先: 第2回病院薬剤師が実践するリバーストランスレーショナルリサーチの最前線～分子標的探索と個別化医療への挑戦～ がん薬物療法の適正化推進に向けた臨床薬学的研究. *薬学雑誌* 139 (6): 901-909 (2019).
42. 増田 智先¹: 検体検査の精度管理 血中薬物濃度測定結果の品質保証に向けて. *日本病院薬剤師会雑誌* 59 (5): 476-480 (2023)

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
無し			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

日本薬学会	2014年～医療薬科学部会常任世話人; 2015年～代議員; 2019年佐藤記念国内賞選考委員長
日本薬物動態学会	2016年～代議員
日本薬剤学会	2017年～代議員
日本医療薬学会	2013年～2019年代議員、指導薬剤師 (2001年～)
日本 TDM 学会	2014年～理事; 2010年～ TDM 標準化ガイドライン策定委員会 免疫抑制薬 WG 委員長
日本臨床薬理学会	2010年～ 評議員; 2015年総務委員; 2018年～2020年学術委員
日本腎臓学会	会員
日本移植学会	2016年～ 移植関連検査委員会委員、2019年～ 代議員
日本臨床腫瘍学会	会員
日本感染症学会	会員
日本臓器保存生物医学会	会員
日本臨床化学会	会員、TDM 専門委員
ASCPT	American Society for Clinical Pharmacology and Therapeutics (米国臨床薬理学会) 正会員
APS	American Physiological Society (米国生理学会) 正会員
IATDMCT	International Association of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology (国際 TDM 学会) 正会員

	・ Immunosuppressive drugs committee [member 2013~; Vice Chair 2019~; Chair 2021~] ・ TDM Journal editorial board committee [member 2017~] ・ Director of Education [council 2023~]
BPS	British Pharmacological Society (英国薬理学会) 正会員
科学雑誌編集委員等	Journal of Pharmaceutical Science (外国人編集委員) British Journal of Clinical Pharmacology (外国人編集委員) International Journal of Molecular Sciences (学術編集委員) Therapeutic Drug Monitoring (編集委員)
(一社) 福岡県病院薬剤師会	会長 (2015 年 6 月～2019 年 6 月)
(一社) TDM 品質管理機構	理事 (2016 年 4 月～)
(一社) 日本病院薬剤師会	感染制御専門薬剤師認定委員 (2011 年 4 月～2014 年 3 月)、国際交流委員会審査員 (2006 年度～2016 年度)
厚生労働省薬剤師国家試験委員	実務領域実務複合班長 (2019 年 4 月～2020 年 3 月)、実務領域実務領域副主任 (2020 年 4 月～2024 年 3 月)
厚生労働省医道審議会	専門委員 (2023 年 3 月～2025 年 2 月)
(公財) 薬学研究奨励財団	研究助成等選考委員 (2020 年 4 月～2022 年 12 月)

V 学内における主な活動

2021 年～	動物実験施設管理運営委員、動物実験委員
2022 年～	薬学部個人情報保護委員
2023 年～	学部長 (その他、役職に伴う併任委員)
2021 年～2022 年	OSCE 実施委員

所 属	薬 学 部 医療薬学科	職 名	教授	氏名	矢上 達郎	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
--------	----------------	--------	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
①理解度向上への工夫 基礎生物学 生理学 基礎生物学実習	2006 年 4 月以降 2006 年 4 月以降 2006 年 9 月以降	基礎生物学と生理学の関連が分るように、両者の内容を交差させながら講義した。さらに、ノートを提出させ、すぐれたノートを講義において取り上げ長所を顕彰することにより、学生のノート作製技術および意欲を高めることができた。1 年前期補講から予習・講義・復習の習慣付けを継続し、繰り返し学習で知識の定着を図った。オフィスアワー以外でも質問を受け付けることにより、学習意欲を高めることができた。実習では、基礎生物学・生理学の講義内容に対応した課題を与え、実験器具・装置の知識を付加した。顕微鏡観察・解剖・ピペット操作等で全員に実技をさせた。考察のための講義およびレポート提出を義務付けたので、実習体験を通して実感させることができた。
実用薬学英語 I	2007 年～2016 年	2 年前期の薬学英語 I では、基礎生物学・生理学の講義プリント英語版を作製し、英語で説明した。さらに、ノートを提出させ、すぐれたノートを講義において取り上げ長所を顕彰することにより、学生のノート作製技術および意欲を高めることができた。1 年前期補講から予習・講義・復習の習慣付けを継続し、繰り返し学習で知識の定着を図った。オフィスアワー以外でも質問を受け付けることにより、学習意欲を高めることができた。
生理学実習	2007 年 9 月以降	実習では、基礎生物学・生理学の講義内容に対応した課題を与え、実験器具・装置の知識を付加した。顕微鏡観察・解剖・ピペット操作等で全員に実技をさせた。考察のための講義およびレポート提出を義務付けたので、実習体験を通して実感させることができた。最後に試験を行い、講義に関する知識の定着を図った。
生物系 PBL 薬理系 PBL	2008 年～2018 年 2019 年～	基礎生物学と生理学での講義内容の範囲内で薬理学に繋がる課題を与え、所定の時間でプレゼン・質疑応答させ、講義に関する知識の定着を図った。
薬学応用演習	2015 年 4 月以降	3・4 年生を対象に生理学・機能形態学に関する復習を行い、知識の定着を図った。
薬学総合演習	2014 年 4 月以降	5・6 年生を対象に生理学・機能形態学に関する復習を行い、知識の定着を図った。
②学生による授業評価の活用	2006 年 4 月以降	授業評価の結果は講義後に返されるため、翌年の受講生にしか反映できないという問題があった。大学のアンケートとは別に全講義アンケートをとり、見直し講義を 3 回行い当該学生に対し反映した。理解度の低い箇所を前回よりも噛み砕いて説明し、それでもわかりにくい場合には動画を用いて説明した。学生からの要望により、国家試験の過去問題を見直し講義で行い、講義内容との関連付けを行うことにより、受講意欲を高めることができた。
2 作成した教科書、教材、参考書		

基礎生物学 生理学 基礎生物学実習 薬学英語 I 生理学実習 薬学応用演習 薬学総合演習 薬理学	2006 年 4 月以降 2006 年 4 月以降 2006 年 4 月以降 2007 年 4 月以降 2007 年 4 月以降 2015 年 4 月以降 2014 年 4 月以降 2018 年 4 月以降	薬学生のための基礎生物：2019 年 3 月 廣川書店 ISBN 978-4-567-44130-8：第 10 章哺乳動物の器官や組織の間で行われる情報交換執筆担当 教科書の補完も兼ねて、講義用プリントを毎回作製した。薬学国家試験の見地から重要度に応じて印を入れたので、学生にとって学習すべき優先順位が判断できるようになった。プリントは前週の講義時に配布しているので、予習および講義ノート作製を促すことができ、出席率向上にも繋がった。小テストはプリント中の重用ポイントから翌週に出題するので、学生に復習を促すことができた。実習用プリントは、課題の説明ばかりでなく、レポートの書き方も含めた。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
病院・薬局訪問	2011 年 4 月～	薬学部実務実習の一環として、学生の実習先の病院・薬局に訪問し、進捗状況を確認し、問題が起きてないかチェックした。
卒業研究発表会	2013 年 4 月～	発表会にて座長を務め、学生に発表および討議の場を設けた。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
1. The combination treatment of etoposide and 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J_2 induced synergistic anti-tumor effect against renal cell carcinoma via PPAR γ independent pathways.	共著	2014 年 3 月	Mol. Clin. Oncol. 2	©Yamamoto Y, Koma H, Hiramatsu H, Abe M, Murakami K, Ohya A, <u>Yagami T.</u>	292-296	
2. Hydrogen peroxide mediated the neurotoxicity of an antibody against plasmalemmal neuron-specific enolase in primary cortical neurons.	共著	2015 年 7 月	Neurotoxicology 49	©Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T.</u>	86-93	
3. Localization of 14-3-3 δ/ξ on the neuronal cell surface.	共著	2015 年 11 月	Exp Cell Res. 338	©Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T.</u>	149-161	
4. Synergistic effects of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J_2 on the anti-tumor activity of doxorubicin in renal cell carcinoma.	共著	2016 年 11 月	Biochem Biophys Rep. 9	©Yamamoto Y, Koma H, Yamamoto Y, Nishii A, <u>Yagami T.</u>	61-66	
5. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J_2 induced neurotoxicity via suppressing phosphoinositide 3-kinase.	共著	2017 年 2 月	Neuropharmacology. 113	©Koma H, Yamamoto Y, Nishii A, <u>Yagami T.</u>	416-425.	
6. Anti-heat shock 70 kDa protein antibody induced neuronal cell death.	共著	2017 年 4 月	Biol Pharm Bull. 40	©Yamamoto Y, Koma H, Yamamoto Y, Nishii A, <u>Yagami T.</u>	402-412	
7. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J_2 enhances anticancer activities independently of VHL status in renal cell carcinomas.	共著	2019 年 2 月	Biochem Biophys Rep. 18	©Koma H, Yamamoto Y, Kumagai H, <u>Yagami T.</u>	100608	
8. 4,4-Diisothiocyanatostilbene Disulfonic Acid Enhanced 15-Deoxy - $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin	共著	2019 年 11 月	Biol Pharm Bull. 42	©Koma H, Yamamoto Y, Kumagai H, <u>Yagami T.</u>	1913-1920	

J ₂ -induced Neuronal Apoptosis.						
9. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ inhibits cell migration on renal cell carcinoma via down-regulation of focal adhesion kinase signaling.	共著	2020 年 1 月	Biol Pharm Bull. 43	©Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T.</u>	153-157	
10. Anti-Neuron-Specific Enolase Antibody Induced Neuronal Cell Death in a Novel Fashion.	共著	2020 年 5 月	Mol Neurobiol. 57	©Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T.</u>	2265-2278	
11. A plausible involvement of plasmalemmal voltage-dependent anion channel 1 in the neurotoxicity of 15-deoxy - $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ .	共著	2020 年 11 月	Brain and Behaviour 10	© <u>Koma H</u> , Yamamoto Y, Okamura N, <u>Yagami T.</u>	e01866	
【英文総説】 1. The Role of Secretory Phospholipase A2 in the Central Nervous System and Neurological Diseases	共著	2014 年 4 月	Mol Neurobiol. 49	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	863-876	
2. Pathophysiological roles of cyclooxygenases and prostaglandins in the central nervous system	共著	2016 年 9 月	Mol Neurobiol. 53	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	4754-4771	
3. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in neurodegenerative diseases and cancers	共著	2017 年 2 月	Oncotarget	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	9007-9008	
4. Physiological and pathological roles of 15-deoxy - $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in the central nervous system and neurological diseases.	共著	2018 年 3 月	Mol Neurobiol. 55	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	2227-2248	
5 Pathophysiological Roles of Intracellular Proteases in Neuronal Development and Neurological Diseases	共著	2019 年 5 月	Mol Neurobiol. 56	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	3090-3112	
【和文総説】 1. Effects of neurodegenerative mediators, cyclopentenone prostaglandins, on the ubiquitin-proteasome system.	共著	2019 年 4 月	Medical Science Digest 45	© <u>Yagami T.</u> , Yamamoto Y, Koma H.	81-84	
【国際学会】 1. A plausible involvement of plasmalemmal voltage-dependent anion channel in the neurotoxicity of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂	共同発表	2018 年 7 月	WPC2018	©Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T.</u>	P02-1-86	
2. Synergistic effects of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ and anticancer agents on renal cell carcinomas	共同発表	2018 年 7 月	WPC2018	© Fujita T, Asanoma Y, Shirai W, Hashimoto E, Echigo T, <u>Yoneda Y.</u> , <u>Kumagai H.</u> , <u>Yamamoto Y.</u> , <u>Koma H.</u> , <u>Yagami T.</u>	P01-3-33	
【国内学会】 1. Hypoxia-induced upregulation of RNA-binding protein in VHL-deficient renal cell	共同発表	2014 年 3 月	The 134 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Takahashi M, Yamawaki C, Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T.</u> , Nakamura T.	30pml-134. e	

carcinoma cell line						
2. An antibody against plasmalemmal neurone-specific enolase, a plasmalemmal target for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -PGJ ₂ , induced neuronal cell death via hydrogen peroxide.	共同発表	2014 年 3 月	The 134 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	© Yamamoto Y, Kohma H, Ohya A, Murakami K, Hisamatsu S, Kobayashi Y, Nakamura T, *Yagami T.	28amM-169	
3. L-type voltage-dependent calcium channel is involved in secretory phospholipase A ₂ s-induced neuronal apoptosis	共同発表	2014 年 3 月	J Pharmacol Sci. 124 (Sup 1)	© Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H, Murakami K, Ohya A, Hisamatsu S, Kobayashi Y.	119P	
4. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ enhanced anti-tumor effects of topoisomerase II inhibitors against renal cell carcinoma	共同発表	2014 年 3 月	J Pharmacol Sci. 124 (Sup 1)	© Yamamoto T, Kubo M, Tamura K, Shimada E, Hyuga Y, Tanaka S, Satoi S, Murakami K, Oya A, Hisamura S, Kobayashi Y, Yamamoto Y, Koma H, *Yagami T.	278P (学会特別賞受賞)	
5. An anti-HSP70 antibody, a marker of brain ischemia, induced neuronal cell death via H ₂ O ₂	共同発表	2014 年 9 月	Neuro2014	© Yagami T, Yamamoto Y, Kohma H, Ohta E.	01- I -6-4	
6. A plausible involvement of 15-deoxy-D ^{12,14} -prostaglandin J ₂ and thromboxane A ₂ in the amyloid β -enhanced circling behavior.	共同発表	2015 年 3 月	The 88 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H, Ohta E.	P2-44	
7. Hypoxia-induced upregulation of hnRNP A2/B1 in 786-O renal cell carcinoma cells	共同発表	2015 年 3 月	The 135 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Maruchi S, Takahashi M, Yamawaki C, Yamamoto Y, Koma H, Yagami T, Nakamura T.	26PB-pm229	
8. Hypoxia-induced upregulation of hnRNP A2/B1 in 786-O renal cell carcinoma cells	共同発表	2015 年 3 月	The 135 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Maruchi S, Takahashi M, Yamawaki C, Yamamoto Y, Koma H, Yagami T, Nakamura T.	26PB-pm229	
9. Enolase was expressed on the cell surface of renal cell carcinoma.	共同発表	2015 年 3 月	The 135 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	©Ohta E, Yamamoto Y, Koma H, Takahashi M, Yamada C, Nakamura T, *Yagami T.	26PB-pm228	
10. c-Jun N-terminal kinase contributed to the neurotoxicity of anti-neuron specific enolase antibody	共同発表	2016 年 3 月	The 89 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yamamoto Y, *Yagami T, Koma H, Nishi A.	2-P-9	
11. 14-3-3 δ / ξ was identified as a membrane target for 15-deoxy-D ^{12,14} -prostaglandin J ₂	共同発表	2016 年 3 月	The 89 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H, Nishi A.	3-0-25	

12. Involvement of VHL-HIF in hypoxia-induced upregulation of hnRNP A2/B1 in human renal cell carcinoma	共同発表	2016 年 3 月	The 136 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society	Izawa M, Takahashi M, Uematsu T, Yamamoto Y, Koma H, <u>Yagami T</u> , Nakamura T.	27AB-pm263	
13. The anti-metastatic effect of 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ on the renal cell carcinoma	共同発表	2016 年 3 月	The 136 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Nishi A, Takahashi M, Nakamura T, *Yagami T.	27AB-pm262	
14. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ exhibited neurotoxicity via suppressing phosphoinositide 3-kinase	共同発表	2017 年 3 月	The 90 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© <u>Yagami T</u> , Yamamoto Y, Koma H, Nishii S.	1-O-41	
15. 15-Deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ impaired memory retrieval via suppressing PI3 kinase in hippocampus	共同発表	2017 年 3 月	The 137 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Koma H, Yamamoto Y, Nishii S, <u>Yagami T</u> .	25PB-am090	
16. The mechanism of 15-Deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ of the cell migration on renal cell carcinoma	共同発表	2017 年 3 月	The 137 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Nishii S, <u>Yagami T</u> .	25PB-am184	
17. Heat shock protein 70 抗体の神経細胞死誘導メカニズムの解析	共同発表	2018 年 10 月	第 67 回 日本薬学会近畿支部総会・大会	©山本泰弘、高馬宏美、矢上達郎	I-10-2	
18. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ inhibits cell migration on renal cell carcinoma via down-regulation of focal adhesion kinase signaling	共同発表	2018 年 3 月	The 138 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	28PA-pm360	
19. Anti-14-3-3 δ / ξ antibody inhibits caspase 3, down-regulates accumulation of ubiquitinated proteins and induces neuronal cell death	共同発表	2018 年 3 月	The 138 th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	26PA-pm223	
20. VDAC 阻害剤は 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ の神経細胞毒性を亢進する	共同発表	2018 年 10 月	第 68 回 日本薬学会近畿支部総会・大会	©熊谷宏昭、山本泰弘、高馬宏美、矢上達郎	P-PM194	
21. 15-デオキシ- $\Delta^{12,14}$ -プロスタグランジン J ₂ とトポイソメラーゼ阻害剤との併用による腎臓癌細胞遊走抑制作用の解析	共同発表	2018 年 10 月	第 68 回 日本薬学会近畿支部総会・大会	©米田有里、山本泰弘、高馬宏美、*矢上達郎	P-PM174	
22. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ exhibited neurotoxicity via suppressing phosphoinositide 3-kinase	共同発表	2019 年 3 月	The 92 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	1-P-047	

23. Identification of novel protein targets for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in plasma membranes of renal cell carcinoma	共同発表	2019 年 3 月	The 139th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Nishii S, Yagami T.	23P0-pm315	
24. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ enhances anticancer activities independently of VHL status in renal cell carcinomas	共同発表	2019 年 3 月	The 139th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Koma H, Yamamoto Y, Yagami T.	23P0-pm316	
25. Anti-neuron specific enolase antibody-induced neuronal cell death was accompanied with caspase3 activation and caspase1 inactivation	共同発表	2019 年 3 月	The 139th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	21P0-am138	
26. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ inhibits cell migration of renal cell carcinomas independently of PPAR γ and CRTH2	共同発表	2020 年 3 月	The 93th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	©Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	3-P-345	
27. Novel protein targets for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ were identified in neuronal plasma membranes	共同発表	2020 年 3 月	The 93th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	2-P-194	
28. The expression of collapsin response mediator protein 2 in neuronal cell and tumor cell	共同発表	2020 年 3 月	The 140th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yamamoto Y, Koma H, Nishii S, Yagami T.	28P-am103	
29. An antibody against voltage-dependent anion channel attenuated the neurotoxicity of 15-deoxy - $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂	共同発表	2020 年 3 月	The 140th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Koma H, Yamamoto Y, Yagami T.	28P-am104	
30. The migration inhibitory effect of anti-collapsin response mediator protein 2 antibody on the renal cell carcinoma	共同発表	2021 年 3 月	The 94th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	©Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	3-P1-34	
31. Collapsin response mediator protein 2 was one of targets for 15-deoxy - $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂	共同発表	2021 年 3 月	The 94th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	2-P2-43	
32. 15-deoxy - $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ -induced neuronal apoptosis was suppressed by an antibody against voltage-dependent anion channel	共同発表	2021 年 3 月	The 141th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Koma H, Yamamoto Y, Yagami T.	28P02-141	
32. Thiol reducing agents enhanced the neurotoxicity of anti-neuron specific enolase antibody	共同発表	2021 年 3 月	The 141th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	©Yamamoto Y, Koma H, Yagami T.	28P02-140	
33. Anti-HSP70 antibody-induced neuronal cell death was accompanied with caspase3 activation and caspase1 inactivation	共同発表	2021 年 3 月	The 141th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	28P02-142	

34. 5-Lipoxygenase inhibitors suppressed the neurotoxicity of secretory phospholipase A ₂	共同発表	2022 年 3 月	The 95 th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	3-P-205	
35. A Snake venom group IA secretory phospholipase A ₂ induced neuronal cell death via apoptosis	共同発表	2022 年 3 月	The 142th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	28P08-am2-13	
36. Neuroprotective effects of leukotriene receptor blockers on the secretory phospholipase A ₂ -induced neuronal apoptosis.	共同発表	2022 年 12 月	The 96th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y, Koma H.	3-B-P-223	
37. L-type voltage-dependent calcium channel was involved in the Non-mammalian phospholipase A ₂ -induced neuronal cell death.	共同発表	2023 年 3 月	The 143th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yagami T, Yamamoto Y	26P1-pm1-152	
38. Are leukotrienes involved in the secretory phospholipase A ₂ -induced neuronal apoptosis?	共同発表	2023 年 12 月	The 97th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society	© Yagami T, Yamamoto Y	1-B-P-056	
37. NMDA receptor was involved in the non-mammalian phospholipase A ₂ -induced neuronal cell death, but not in the mammalian phospholipase A ₂ -induced neuronal cell death	共同発表	2024 年 3 月	The 144th Annual Meeting of Japanese Pharmaceutical Society.	© Yagami T, Yamamoto Y	31P-am242	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1992 年 4 月～現在	日本薬理学会 評議員
2016 年 1 月～現在	日本薬学会 会員
1995 年 4 月～2016 年 3 月	日本神経科学会 会員
2012 年 4 月～現在	兵庫県立神戸高校 サイエンス・アドバイザー
2016 年 4 月	兵庫県薬剤師会/第 17 回 西播・姫路医療セミナー 座長
2016 年 11 月	卒後教育セミナー 講師 および座長
2017 年 7 月	兵庫県高等学校教育研究会科学部会・生物部会 2017 年 講師

Ⅴ 学内における主な活動

2007 年～現在	動物実験委員会委員（学内）
2013～2016 年	評議員（学内）
2014 年～2020 年	第三者評価担当委員（学部）
2017 年～2019 年	教務委員（学部）
2013 年～2018 年	ハラスメント委員（学部）
2018 年～現在	動物実験施設管理運営委員会委員長（学部）

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	柳澤振一郎	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ベイズ統計学入門用ソフトを用いた 医学検査理解に関する工夫	2004 年 6 月	公衆衛生学実習での感度、特異度、偽陽性、偽陰性の理解のための教材として活用。ベイズの公式を用いた陽性予測値、陰性予測値の理論的理解を促す。感度の高い検査は、陰性のとき除外診断に有用であるとする、いわゆる SnNout の理解と、特異度の高い検査は、陽性のとき確定診断への可能性を高めることに有用であるとする、いわゆる SpPin の理解に貢献した。
教育・実践用 EBM 支援文献検索データベースシステムを用いた PICO 理解に関する工夫	2005 年 1 2 月	情報科学の実習で文献検索のための、データベースとして活用。EBM では、直面している臨床上の問題において、患者固有の問題を明確にし、検索可能な形式に翻訳する為の定式化が必要となり、最適な検索を行う為に PICO 思考が推奨されている。（P：患者の問題、I：介入、C：対照、O：アウトカム）本システムは、PICO 思考に基づくキーワードを具体化し、検索式を作成する一連の手順を学習するのに利用した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
ベイズ統計学入門用ソフトの開発	2004 年 6 月	現状ではさまざまな疫学的研究手法が導入されているが、その中でベイズ統計学は、今までにも薬物副作用の因果関係評価、薬物血中濃度モニタリングやメタアナリシスなどに活用されており、教育による同概念の理解や研究による応用発展が望まれている。今回、ベイズの公式を用いて、有病率と陽性予測値、陰性予測値のグラフを表示し、感度・特異度と有病率の取る値を変動させることによりグラフがどのような形を取るかを視覚的に理解することができるソフトの開発を行った。（日本社会薬学会第 23 年会で発表）
教育・実践用 EBM 支援文献検索データベースシステムの開発	2005 年 1 2 月	本研究では、EBM（根拠に基づく医療）の実践を支援することを目的とした EBM 支援情報システムの試験的開発を行った。これは、文部科学省による COE プログラム「糖尿病をモデルとしたシグナル伝達病拠点」の下で実施された研究「糖尿病の EBM 科学確立を目指すエビデンス・アウトカム情報組織化に関する教育研究」の成果の一部である。本システムは、糖尿病に特化した形ではあるが、EBM 実践の最初のフレームとなる PICO 思考の普及をはかる教育的意義を持つ。また、日本語での操作により海外論文の検索を可能にし、日本人にとって実践的な有用性を持つと考えられる。（第 25 回医療情報学連合大会で発表）
薬学生のための薬剤経済学， 廣川書店，2009	2009 年 8 月 初版	講義科目「医療経済学」（専門科目，3 年次配当，半期，必修 2 単位）において 2009 年から 2010 年まで使用。薬剤経済学の分析手法を解説した網羅的な教科書がなかったため、共同で教科書として使用できる書籍の作成を行った。 担当部分：4 章 薬剤経済分析の方法と実施（P153～P171. 内担当ページ：P153～P166）B5 版全 171 頁

詳説 薬剤経済学, 京都廣川書店, 2011	2011 年 8 月 初版 2013 年 8 月 第2版 2017 年 3 月 第3版 2023 年 3 月 第4版	「医療経済学」において 2011 年より使用。社会保障制度等のデータ更新が必要となり、新たに作成した。学生により深い理解を促すために、経済学の理論を新たに含め、経済評価分析のより詳細な解説を行った。また、書籍の構成として、社会保障制度に加え療養担当規則の項目を充実させた。初版作成以降、解説等をわかりやすくするための修正を加えながら版を重ねている。 初版担当部分：第4章 薬剤経済分析の方法と実施, 1 節経済学的な基礎知識～2 節薬剤経済評価の方法論(P133～P165). 第5章 演習編 (P183～P193) B5 版 全 193 頁 (初版)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
医療薬学大学院教育としてのディベート演習を用いた医薬情報評価学教育の試み－アンケート調査による医薬情報発信能力育成度の評価－	2005 年 2 月	医療薬学大学院教育としての医薬情報評価学教育に対し、グループ間ディベートによる討論形式の採用により、科学的根拠に基づく医薬情報の発信・発信能力の強化育成を試みてきた。その成果としての医薬情報収集・発信能力育成の程度を、第三者評価と自己評価によりアンケート調査を実施し、教育方法の利点と問題点を具体的に検討した。 論文発表：大塚誠、多河典子、加藤史恵、松山賢治、大塚邦子、柳澤振一郎、鎌江伊三夫. 医療薬学 31 (2), pp. 136-145, 2005.
2018 年 薬学と社会教科担当教員会議でのモデル講義の実施	2018 年 10 月	薬学教育協議会が開催した、薬学と社会教科担当教員会議にて、「本学における医療経済学講義の紹介」と題し、医療経済学のモデル講義を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
「神戸大学 阪神・淡路大震災 10 周年事業メモリアル医学系学術シンポジウム」で講演し、シンポジストとして議論に参加	2004 年 11 月	「震災後 10 年：何が変わったか？これから目指すべきものは何か？」をテーマとしたシンポジウムにて「都市生活と健康リスク」と題する講演をすると共に、シンポジストとしてシンポジウムに参加。
「SYMPOSIUM DISASTER MANAGEMENT SYSTEMRELATED TO HEALTH AND ENVIRONMENT ASPECT IN INDONESIA」で講演し、シンポジストとして議論に参加	2005 年 3 月	インドネシア Gadjah Mada 大学で開催された学生を対象とした教育シンポジウムで、「The Need for Health Risk Communication - Lessons learnt from the Great Hanshin-Awaji Earthquake.」と題する講演をとおして、これから目指すべきものは、住民自身によるリスク管理と合理的意思決定のためのリスクコミュニケーションであることを伝えた。また、シンポジストとしてシンポジウムに参加し議論を行った。
「The Third International Seminar. Management of Health Problems Caused by Disaster」で講演し、シンポジストとして議論に参加	2006 年 2 月	前年に引き続き開催されたインドネシア Gadjah Mada 大学での学生を対象とした教育シンポジウムで、「Priority Setting for Life Saving in Health Care Interventions and Disaster Preparedness.」と題する講演をとおして、救命にも費用効果分析の手法が必要となることを伝えた。また、シンポジストとしてシンポジウムに参加し議論を行った。
「第2回 西播・姫路医療セミナー」で講演	2008 年 12 月	「市民生活と健康リスク」と題する講演をとおして、市民自身の危機管理はこれから、不可欠になっていくことを示すとともに、このような難しい問題に対し、一般の市民の方の身近で相談相手になれるのは薬剤師ではないかと提案を行った。これからの薬剤師は、市民との関わりにおいて、健康リスクに対する危機管理がキーワードになり得ることを示した。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・著者 共著	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 薬学生のための薬剤経済学	共著	2009 年 8 月	廣川書店	奥村勝彦, 黒田和夫, 恩田光子, 亀井美和子.他	pp. 153-166	再掲
公衆衛生学 I	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学教育学部通信教育課程	西郷勝康, 柳澤振一郎, 川井眞子, 炬口真理子	pp. 6-55, pp. 109-116	
公衆衛生学 II	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学教育学部通信教育課程	西郷勝康, 柳澤振一郎, 川井眞子, 炬口真理子	pp. 1-33, pp. 117-127	
スタンダード薬学シリーズ 9 薬学と社会 第3版	共著	2010 年 9 月	東京化学同人	日本薬学会編 (領域担当編集責任者: 白神誠)	pp. 166-192	
ヘルスサイエンスのための 医薬経済学用語集	共著	2011 年 4 月	医薬出版センター	監訳: 鎌江伊三夫	用語翻訳の分担と校閲編集を担当	翻訳本
詳説 薬剤経済学	共著	2011 年 8 月初版 2013 年 8 月 第2版 2017 年 3 月 第3版 2023 年 3 月 第4版	京都廣川書店	恩田光子, 砂川雅之, 森脇健介, 柳澤振一郎	第1章と第4章を分担 (第3版以降は第1章と第5章を分担)	再掲
薬学用語辞典	共著	2012 年 3 月	東京化学同人	日本薬学会編 (編集委員長: 原 博)	医療経済学に関する9単語担当	
医療技術の経済評価と公共政策	共著	2013 年 4 月	じほう	鎌江伊三夫, 林良造, 城山英明, 森田朗, 土井修, 福田敬, 柳澤振一郎, 他	pp. 315-325	
【論文】 Reply to Concerning The number needed to treat needs an Associated odds estimation.	共著	2004 年 4 月	Journal of Public Health 26(4).	Aino H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 400-401	
糖尿病治療の医療経済	共著	2004 年 5 月	Geriatric Medicine 42(5)	鎌江伊三夫, 西村邦宏, 柳澤振一郎	pp. 624-628	
医療薬学大学院教育としての ディベート演習を用いた 医薬情報評価学教育の試み ーアンケート調査による 医薬情報発信能力育成度の評価ー	共著	2005 年 2 月	医療薬学 31(2)	大塚誠, 多河典子, 加藤史恵, 松山賢治, 大塚邦子, 柳澤振一郎, 鎌江伊三夫	pp. 136-145	
患者 QOL を考慮した抗うつ薬 パロキセチンの費用対効果の分析	共著	2005 年 11 月	新薬と臨床 54(11).	鎌江伊三夫, 柳澤振一郎	pp. 46-63	
Computer-Simulated Assessment of Methods for Transporting Severely Injured Individuals in Disaster- Case Study of Airport Accident.	共著	2006 年 3 月	Computer Methods and Programs in Biomedicine. 81,	Inoue H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 256-265.	
Clinical Epidemiologic Evaluation of BSE	共著	2006 年 5 月	Kobe Journal of Medical Sciences 52(3):	Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 49-59.	

Screening Tests in Japan.						
Cost-effectiveness Analysis of Influenza and Pneumococcal Vaccinations among Elderly People in Japan.	共著	2006年6月	Kobe Journal of Medical Sciences 52(4):	Cai L, Uchiyama H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 97-109.	
The logistic regression and ROC analysis of group-based screening for predicting diabetes incidence in four years.	共著	2006年9月	Kobe Journal of Medical Sciences 52(6)	Takahashi K, Uchiyama H, Yanagisawa S, Kamae I.	pp. 171-180.	
A Comparison of the Technical Quality of American and Japanese Ranitidine Tablets.	共著	2007年8月	Dissolution Technologies, Vol. 14(3),	M Otsuka, Y Akizuki, K Otsuka, S Yanagisawa, I Kamae, James A Jorgenson.	pp. 22-28	
The efficacy of reboxetine as an antidepressant: a meta-analysis of both continuous (mean HAM-D score) and dichotomous (response rate) outcomes	共著	2008年6月	Kobe Journal of Medical Sciences 54(2)	G Chuluunkhuu, N Nakahara, S Yanagisawa, I Kamae.	pp. 149-158.	
Cost-Effectiveness Analysis of Oseltamivir for Influenza Treatment Considering the Virus Emerging Resistant to the Drug in Japan	共著	2009, 12	Value in Health, 12(Supplement 3),	Hiroko Nagase, Kensuke Moriwaki, Maki Kamae, Shinichiro Yanagisawa, Isao Kamae.	pp. S62-S65	
Cost-effectiveness of alendronate for the treatment of osteopenic postmenopausal women in Japan.	共著	2013, 2	Journal of Bone and Mineral Research, Volume 28, Issue 2,	K. Moriwaki, H. Komaba, S. Noto, S. Yanagisawa, T. Takiguchi, H. Inoue, T. Toujou, M. Fukagawa, H.E. Takahashi.	pp. 395-403	
酸化ストレス度評価(d-ROMsテスト)からみた禁煙治療の有効性の検討	共著	2015, 6	人間ドッグ Volume 30, Number 1,	堀江弘子, 岩切龍一, 黒木茂高, 岩本英里, 古賀さやか, 田代貴也, 小野尚文, 江口尚久, 中村隆典, 柳澤振一郎, 駒田富佐夫, 江口有一郎	pp. 30-37	
Salbutamol inhibits ubiquitin-mediated survival motor neuron protein degradation in spinal muscular atrophy cells.	共著	2015, 10	Biochemistry and Biophysics Reports, 4	Nur Imma Fatimah Harahap, Dian Kesumapramudya Nurputra, Mawaddah Ar Rochmah, Ai Shima, Naoya Morisada, Toru Takarada, Atsuko Takeuchi, Yumi Tohyama, Shinichiro Yanagisawa, Hisahide Nishio.	pp. 351-356	

Telomeric Region of the Spinal Muscular Atrophy Locus Is Susceptible to Structural Variations.	共著	2016,6	Pediatric Neurology, 58	Yoriko Noguchi, Akira Onishi, Yuji Nakamachi, Nobuhide Hayashi, Nur Inma Fatimah Harahap, Mawaddah Ar Rochmah, Ai Shima, Shinichiro Yanagisawa, Naoya Morisada, Taku Nakagawa, Kazumoto Iijima, Shimpei Kasagi, Jun Saegusa, Seiji Kawano, Masakazu Shinohara, Shinya Tairaku, Toshio Saito, Yuji Kubo, Kayoko Saito, Hisahide Nishio.	pp. 83-89	
Gender Effects on the Clinical Phenotype in Japanese Patients with Spinal Muscular Atrophy.	共著	2017,10	Kobe Journal of Medical Sciences 63(2),	Ar Rochmah M, Shima A, Harahap NIF, Niba ETE, Morisada N, Yanagisawa S, Saito T, Kaneko K, Saito K, Morioka I, Iijima K, Lai PS, Bouike Y, Nishio H, Shinohara M.	pp. E41-E44	
B. I. T. -Development of a dynamic visualization tool for Bayesian inference on various types of normal distributions for medical decision-making and education-.	共著	2019年11月	Niigata Journal of Health and Welfare. 2019 Nov; 19(1).	Inoue H, Uchiyama H, Moriwaki K, Yanagisawa S, Nishimura K.	pp. 24-36	
【その他】 Monte-Carlo Validation of Delta-K Method for Sample-Size Calculation in a Cost-Effectiveness Trial.	共著	2004年5月	Value in Health 7(3),	Nakajyo K, Cai L, Kamae I, Nakahara N, Aino H, Washio K, Yanagisawa S.	p. 301	
Economic Evaluation of the Stepped Versus Ordinary Care for Prevention of Type-2 Diabetes in The JDPP.	共著	2004年10月	Value in Health 7(6),	Yanagisawa S, Shimaya M, Nakahara N, Kamae I, Kuzuya H.	pp. 738-739	
スマトラ沖大地震・津波災害に対する医学系分野からの復興支援活動—環境保健に関する災害マネジメントシステムのシンポジウム:インドネシア現地報告—	共著	2005年3月	神戸大学都市安全研究センター研究報告 9,	柳澤振一郎、鎌江伊三夫	pp. 171-177.	
米国における救急救命医療を担うヘリコプターによる患者搬送に関する現状と課題	共著	2005年3月	神戸大学都市安全研究センター研究報告 9,	大塚邦子、柳澤振一郎、鎌江伊三夫	pp. 165-169.	
疫学教育のための二項分布のベイズ推論視覚化ツールの開発	共著	2005年9月	第 64 回日本公衆衛生学会総会	井上弘樹、柳澤振一郎、鎌江伊三夫		
教育・実践用 EBM 支援文献検索データベースシステムの開発	共著	2005年11月	第 25 回医療情報学連合大会	鎌江伊三夫、柳澤振一郎、井上弘樹、島屋真希、白石直樹、		

				高宮 健仁		
第 I 相臨床試験におけるコンピュータ支援による動的安全性評価の新手法	共著	2005 年 11 月	第 25 回医療情報学連合大会	伊東秀崇、井上弘樹、柳澤振一郎、鎌江伊三夫		
Outcomes and Costs of Generic and Trade Ranitidine Use in the United States and Japan	共著	2006 年 3 月	ISPOR 2nd Asia-Pacific Congress.	Yanagisawa S, Kamae I, Odera GM, Otsuka M, Jorgenson J, Otsuka K, Brimmer D.		
疫学教育のための、正規分布のベイズ推測視覚化ツール.	共著	2007 年 10 月	第 66 回日本公衆衛生学会総会抄録集(1347-8060)	Inoue H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page 235	
疫学教育のための、二つの正規分布の比較のベイズ推測視覚化ツール開発.	共著	2007 年 10 月	薬剤疫学 (1342-0445) 12 巻 Suppl.	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page S56-S57	
A BAYESIAN ADAPTIVE DESIGN FOR EVALUATION OF THE GAP BETWEEN EFFICACY AND ERROR-ADJUSTED EFFECTIVENESS	共著	2007 年 11 月	Value in Health 10(6)	K Moriwaki, I Kamae, S Yanagisawa, H Nagase	Page 451	
THE OPERATIVE INTERVAL OF AN INCREMENTAL COST-EFFECTIVENESS RATIO:A NEW BENCHMARK FOR ASSESSING THE BOUNDARIES ON THE EFFICIENT FRONTIER CURVE	共著	2007 年 11 月	Value in Health 10(6)	I Kamae, K Moriwaki, S Yanagisawa, M Kamae	Page 452	
医学判断のための、三つの正規分布のベイズ推測視覚化ツール開発.	共著	2008 年 1 月	J Epidemiol Vol. 18, No. 1 Supplement,	Inoue H, Yanagisawa S, Nishimura K, Maeda E.	Page 75	
医学判断のための、Dirichlet 分布と多項モデルのベイズ推測視覚化システム.	共著	2008 年 9 月	Health Sciences (ISSN: 0911-7024) Vol. 24, No. 3	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page 317	
局所一様事前分布を用いた、複数のベルヌイ試行のベイズ推測視覚化ツールの開発.	共著	2008 年 10 月	第 67 回 日本公衆衛生学会総会抄録集(1347-8060)	Inoue H, Yanagisawa S, Kamae I.	Page 232	
疫学教育のための、対数 t 分布を用いた対数正規分布のベイズ推測動的視覚化ツール.	共著	2009 年 1 月	J Epidemiol Vol. 19, No. 1 Supplement,	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K, Maeda E.	Page 83	
疫学学習のための、二変量正規分布における相関と回帰のベイズ推測動的視覚化ツール.	共著	2009 年 1 月	J Epidemiol Vol. 19, No. 1 Supplement,	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K, Maeda E.	Page 84	
薬剤疫学のための、二変量正規分布のベイズ推測動的視覚化ツール.	共著	2009 年 2 月	社会薬学 Vol. 27, No. 2,	Yanagisawa S, Inoue H, Uchiyama H, Nishimura K.	Page 81-83	
疫学教育のための、対数正規分布のベイズ推測動的視覚化ツール開発.	共著	2009 年 2 月	社会薬学 Vol. 27, No. 2,	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K.	Page 79-80	
超幾何分布のベイズ推測視覚化ツールの開発と精度管理への応用に対する検討(会	共著	2009. 07	臨床病理(0047-1860) 57 巻補冊	井上弘樹, 内山八郎, 西村邦宏, 柳澤振一郎	Page 299	

議録)						
医学判断における、二つの割合の評価のためのベイズ推測視覚化システム	共著	2009. 8	Health Sciences (0911-7024) Vol. 25, No. 3	Inoue H, Uchiyama H, Yanagisawa S, Nishimura K	Page 216	
疫学学習のための、二変量正規分布の差のベイズ推測動的視覚化ツールの開発	共著	2009. 10	日本公衆衛生雑誌 56 巻 10 号 特別付録 第 68 回 日本公衆衛生学会総会抄録集	Inoue H, Yanagisawa S, Nishimura K	Page 343	
生存モデルのための、Weibull 分布のベイズ推測視覚化ツールの開発	共著	2010. 03	社会薬学 Vol. 28, No. 3,	井上弘樹, 内山八郎, 柳澤振一郎	Page 65-66	
教職員健診、血液疾患症例での酸化ストレス度計測の意義について.	共著	2010. 03	CAMPUS HEALTH 47	西郷勝康、炬口真理子、柳澤振一郎、富士原やよい、池田卓代.	Page 228-230	
A Development of Visualization Software for a Bayesian Signal Detection Method.	共著	2010. 10	The 16th Annual Meeting of JSPE and the 5th ACPE Joint Meeting Abstracts	Inoue H, Uchiyama H, Moriwaki K, Yanagisawa S,	Page 62	
薬剤経済学のための、NNT (治療必要数) のベイズ推測視覚化ツール	共著	2011. 03	社会薬学 Vol. 29, No. 2,	井上弘樹, 森脇健介, 内山八郎, 柳澤振一郎	Page 118-119	
生存モデルのハザード関数に関するベイズ推測視覚化ツールの開発	共著	2012. 01	社会薬学 Vol. 30, No. 2,	井上弘樹, 森脇健介, 内山八郎, 柳澤振一郎	Page 103-104	
Cost-Effectiveness of Alendronate Therapy for Osteopenic Postmenopausal Women in Japan	共著	2012. 06	Value in Health 15(4)	K. Moriwaki H. Komaba, S. Noto, S. Yanagisawa, H. Inoue, T. Takeshi, M. Fukagawa, H. E. Takahashi	Page 46-47	
Cost-Effectiveness of Alendronate Therapy For Corticosteroid-Induced Osteoporosis in Postmenopausal Women With Rheumatoid Arthritis in Japan	共著	2012. 11	Value in Health 15(7)	K. Moriwaki S. Noto, H. Inoue, S. Yanagisawa,	Page 447	
Development and Validation of a Health Economic Model for Corticosteroid-Induced Osteoporosis in Postmenopausal Women With Rheumatoid Arthritis in Japan	共著	2012. 11	Value in Health 15(7)	K. Moriwaki S. Noto, S. Yanagisawa, S. Ito, T. Toujou.	Page 645	
Predicting EQ-5D Utility Values from SF-36 Scores in Patients with Rheumatoid Arthritis in Japan.	共著	2013. 11	Value in Health, Vol. 16, Issue 7,	Moriwaki K, Ito S, Kobayashi D, Noto S, Yanagisawa S, Murasawa A, Toujo T.	Page 568	
Cost-Effectiveness Analysis of Alendronate Therapy for Secondary Prevention of Osteoporotic Fractures.	共著	2013. 11	Value in Health, Vol. 16, Issue 7,	K. Moriwaki, H. Komaba, S. Noto, S. Yanagisawa, T. Takiguchi, T. Toujo, H. Inoue, M. Fukagawa, H. E. Takahashi	Page 571	
職域成人歯科健診の継続受診による効果	共著	2016. 5	口腔衛生会誌 J Dent Hlth 66(2)	時岡早苗, 山本三千子, 柳澤振一郎	Page 98	

				郎, 古森孝英		
兵庫県における妊婦の歯科 口腔保険行動と歯科健診に 関する意識調査	共著	2017. 4	口腔衛生会誌 J Dent Hlth 67(特別号)	時岡早苗, 西尾久 英, 柳澤振一郎, 山本三千子, 古森 孝英	Page 153	
皮膚感染症を予測するパラ メーター検討 Part 2 (各論)	単著	2017. 4	日本臨床皮膚科医会雑誌, 34 (2)	柳澤振一郎	Page 186	
職域歯科健診の継続受信に よる歯周疾患の予防効果に ついて	共著	2018. 4	口腔衛生会誌 J Dent Hlth 68(特別号)	時岡早苗, 西尾久 英, 山本三千子, 柳澤振一郎, 古森 孝英	Page 157	
5 番染色体関連脊髄性筋萎 縮症で認められた臨床症状 の性差	共著	2018. 9	BIO Clinica, Vol.33 (11)	柳澤振一郎, 西尾 久英, 齊藤利雄, 篠原正和	Page 99-103	
脊髄性筋萎縮症:新生児スク リーニングの費用対効果	共著	2020. 3	BIO Clinica Vol.35 (3)	篠原正和, 柳澤振 一郎, 西尾久英, 岡本健太郎, 齊藤 利雄	Page 75-80	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1996 年 2 月～現在	日本疫学会 正員
1996 年 5 月～現在	日本化学療法学 正員
2002 年 9 月～現在	ISPOR (International Society of Pharmacoeconomics and Outcomes Research) 正員
2002 年 9 月～2003 年 9 月	ISPOR 第1回アジア太平洋会議 プログラム委員
2002 年 11 月～現在	日本社会薬学会 正員
2002 年 11 月～2003 年 11 月	第22回 日本社会薬学会 実行委員
2005 年 9 月～現在	日本公衆衛生学会 正員
2005 年 7 月～現在	国際医薬経済・アウトカム研究学会 (ISPOR) 日本部会 役員
2019 年 4 月～2023 年 3 月	姫路市 播磨圏域成長戦略会議 委員
2019 年 4 月～2023 年 3 月	姫路商工会議所 参与
2019 年 11 月～2023 年 8 月	国際観光医療学会 理事
2021 年 7 月～現在	公益財団法人日立財団 日立感染症関連研究支援基金 選考委員

Ⅴ 学内における主な活動

2009 年 4 月～2012 年 3 月	薬学部 広報委員 自己点検・評価委員
2009 年 4 月～2011 年 3 月	薬学部 入学試験委員 入試教科委員・学部選出委員
2012 年 4 月～2016 年 3 月	教育改善実施全学 (FD) 委員会委員
2012 年 4 月～2019 年 3 月	薬学部 就職キャリア委員
2012 年 4 月～2019 年 3 月	全学自己評価委員会委員長
2016 年 4 月～2019 年 3 月	教務部長 教務委員会委員長 評議員
2016 年 4 月～2019 年 3 月	教育改善実施全学 (FD) 委員会委員長
2019 年 4 月～2023 年 3 月	学長
2023 年 4 月～現在	付属図書館長 評議員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教 授	氏名	柳澤 吉則	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑦ 講義における資料の工夫 「実務実習事前特別講義」 「セルフメディケーション論」	2022 年 4 月より継続	アクティブラーニングの実践として、 ・事前レポートによる自主学習 作成にあたりピアラーニングを推奨している。手法として ア. ドバイスを与えた学生に対してはレポート内謝辞で明記 させ加点している。 例2：共同執筆者の筆頭筆者に加点している。 例3：レポートの採点基準を明示し、自己採点としている。 ・ICT（動画）を用いない反転授業 紙媒体の事前レポートの復習を講義でおこなっている。 レポート作成の資料として参考文献、あるいは文献を検索する ヒントを提示し自学の支援を行っている。動画等の事前学習は 学生の「やった気になる」が散見されるが、文章の作成により 学生の真の実践を促している。 ・グループワークの実践（セルフメディケーション論） 初回講義の「一般的に用いられる医薬品名」を想起する課題に 「古今東西ゲーム」を実施することにより、講義への参加意識を 高めるとともに、臨床現場で必要な即答できる力を養っている。 一般用医薬品の来局者対応の課題にロールプレイを実施する ことにより、臨床現場での応用力を養っている。 また、研究に関する基礎力を養うため、 ・書式が論文形式のレポート 「序論」「方法」「結果」「考察」の形式をレポート見本として 提示することにより論文執筆の基礎を学ぶとともに、考察を 必須として思考する習慣をつけさせている。
⑧ 学生実習における学生の集中度 を高めるための工夫 「実務実習事前特別講義」 「セルフメディケーション論」	2022 年 4 月より継続	アクティブラーニングの実践として、 ・講義、レポートの復習としての小テスト 前回講義の内容についての小テストを毎講義冒頭で実施し、 前回講義、レポートの内容を範囲として定着を図っている。 ・小テストのまとめとしての定期試験 小テストの内容を中心に定期試験で問うことを明示して講義 内容全般の復習を促している。 ・上記アクティブラーニングの評価 上記アクティブラーニングはすべて評価対象とし、必要性を 学生に明示している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
「薬学生のための 病院・薬局実務実 習テキスト」	2022 年 1 月 2023 年 1 月	近畿地区を中心に、全国の薬学生および病院・薬局の実習担当薬剤 師に利用されている実習テキストである。2019 年版より改訂薬学 教育モデル・コアカリキュラムに対応している。近畿地区調整機構 委員として編集等に参画している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
学生による授業評価アンケート結果	2022 年 4 月より継続	前述アンケートにより下記の改善を行っている。

における評価に対応した授業改善	・PPT 資料の文字の大きさの拡大 ・講義時の声の大きさの切り下げ
-----------------	--

II 研究活動

【学位論文】

1. Enantioselective electrocatalytic oxidation on TEMPO-modified electrodes by use of chiral base. 1997. Tohoku Univ.

【著書・分担執筆】

なし

【原著】

1. 「新宿区指定避難所地域の要援護者等のリスク低減に向けた研究」坪内暁子, 内藤俊夫, 土屋陽子, 佐藤健, 佐々木宏之, 仲田悦教, 向山晴子, 有賀平, 沖山雅彦, 柳澤吉則, 范家, 佐伯潤, 大槻公一, 丸井英二, 奈良武司, 生存科学, 29(1), 21-43(2018). 査読有.
2. 「NP0・市民・学校・市の協働による落ち葉の堆肥化」柳澤吉則, 深瀬茂雄, 千葉大学公共研究, 3(4), 276-283(2007). 査読有.
3. “Preparative, electroenzymatic reduction of ketones on an all components -immobilized graphite felt electrode.” Y. Kashiwagi, Y. Yanagisawa, N. Shibayama, K. Nakahara, F. Kurashima, J. Anzai, T. Osa, Electrochim. Acta. 42, 2267 - 2270(1997). 査読有(IF: 2018: 5.383, 2017: 5.116, 2016: 4.798, 2015: 4.803, 2014: 4.504).
4. “Preparative, electroenzymatic reduction of NAD⁺ to NADH on a thin poly(acrylic acid) layer-coated graphite felt electrode coimmobilizing ion-paired methyl viologen-cation-exchange polymer and diaphorase.” Y. Kashiwagi, Y. Yanagisawa, N. Shibayama, K. Nakahara, F. Kurashima, J. Anzai, T. Osa, Chem. Lett., 12, 1093 - 1094(1996). 査読有(IF: 2018: 1.485, 2017: 1.625, 2016: 1.801, 2015: 1.550, 2014: 1.230).
5. “Enantioselective, electrocatalytic lactonization of methyl-substituted diols on a tempo-modified graphite felt electrode in the presence of (-)-sparteine.” Y. Yanagisawa, Y. Kashiwagi, F. Kurashima, J. Anzai, T. Osa, J. M. Bobbitt, Chem. Lett., 12, 1043 - 1044(1996). 査読有(IF: 2018: 1.485, 2017: 1.625, 2016: 1.801, 2015: 1.550, 2014: 1.230).
6. “Enantioselective electrocatalytic oxidation of racemic alcohols on a TEMPO -modified graphite felt electrode by use of chiral base(TEMPO=2, 2, 6, 6-tetramethylpiperidin-1-yloxy).” Y. Kashiwagi, Y. Yanagisawa, F. Kurashima, J. Anzai, T. Osa, J. M. Bobbitt, Chem. Commun., 24, 2745-2746(1996). 査読有(IF: 2018: 6.164, 2017: 6.290, 2016: 6.319, 2015: 6.567, 2014: 6.834).
7. “Enantioselective, electrocatalytic oxidative coupling of naphthol, naphthyl ether and phenanthrol on a tempo-modified graphite felt electrode in the presence of (-)-sparteine (TEMPO=2, 2, 6, 6-tetramethylpiperidin-1-yloxy).” T. Osa, Y. Kashiwagi, Y. Yanagisawa, J. M. Bobbitt, J. Chem. Soc. Chem. Commun., 21, 2535 - 2537 (1994). 査読有(IF: 2018: 6.164, 2017: 6.290, 2016: 6.319, 2015: 6.567, 2014: 6.834).
8. “New developments in organic electrochemistry. The effects of chain length of ferrocene moiety on electrical communication of mediators- and enzymes -modified electrodes.” Y. Kashiwagi, Q. Pan, Y. Yanagisawa, N. Shibayama, Z. Ma, T. Osa, 電気化学および工業物理化学, 62, 1240-1246(1994). 査読有(IF: 2018: 1.293, 2017: 1.074, 2016: 0.816, 2015: 0.791, 2014: 1.033).
9. “Electroenzymatic oxidation of alcohols on a poly(acrylic acid)-coated graphite felt electrode terimmobilizing ferrocene, diaphorase and alcohol dehydrogenase.” T. Osa, Y. Kashiwagi, Y. Yanagisawa, Chem. Lett. 2, 367-370(1994). 査読有(IF: 2018: 1.485, 2017: 1.625, 2016: 1.801, 2015: 1.550, 2014: 1.230).
10. “Magnetic circular dichroism of 1,8-naphthalene and 1,8-anthracene-linked cofacial binuclear phthalocyanines.” N. Kobayashi, Y. Yanagisawa, T. Osa, H. Lam and C. C. Leznoff, Anal. Sci. 6, 813-817(1990). 査読有(IF: 2018: 1.618, 2017: 1.355, 2016: 1.228, 2015: 1.174, 2014: 1.394).

【総説・解説】

1. “Oxoammonium salt oxidations of alcohols in the presence of, and on the surfaces of, an electrode, an ion exchange resin, and silica gel.” J. M. Bobbitt, Z. Ma, D. Bolz, T. Osa, Y. Kashiwagi, Y. Yanagisawa, F. Kurashima, J. Anzai, J. E. Tacorante-Morales, Spec. Publ. R. Soc. Chem., 216, 200 - 205 (1998).

【特許】

1. 「医師と病院との求職・求人支援システム」湯浅資之, 内藤俊夫, 蟻塚和申, 柳澤吉則, 特許公開 2015-132971.
2. 「医療情報仲介サーバ、そのプログラム及び医療情報仲介システム。」柳澤吉則, 蟻塚和申, 特許公開 2010-020606.
3. 「圧縮空気を媒体とした車両における風力からの動力供給システム」柳澤吉則, 安西徹, 特許公開 2009-168000.
4. 「営業支援システム、営業支援用データ入出力装置並びに通信装置」蟻塚和申, 柳澤吉則, 特許公開 2009-64402.
5. 「人物評価装置ならびに人物評価システム」蟻塚和申, 柳澤吉則, 特許公開 2008-310787.
6. 「情報提供システム、情報出力装置並びに通信装置」蟻塚和申, 柳澤吉則, 特許公開 2008-276709.
7. 「燃料油組成物」篠田実男, 柳澤吉則, 柳真一, 特許公開 2002-302686.
8. 「燃料油用添加剤、燃焼助剤および燃料油組成物」篠田実男, 柳真一, 柳澤吉則, 特許公開 2002-294259.
9. 「燃料油用添加剤、燃焼助剤および燃料油組成物」篠田実男, 柳真一, 柳澤吉則, 特許公開 2002-294258.
10. 「燃料油添加剤及びそれを用いた燃料油組成物」篠田実男, 柳澤吉則, 柳真一, 清水延晃, 特許公開 2002-080871.
11. 「燃料油添加剤及びそれを用いた燃料油組成物」篠田実男, 柳澤吉則, 柳真一, 清水延晃, 特許公開 2002-080870.
12. 「燃料油組成物」篠田実男, 柳澤吉則, 清水延晃, 柳真一, 特許公開 2001-348580.
13. 「有機エレクトロルミネッセンス素子」池田秀嗣, 古賀英俊, 柳澤吉則, 田上早苗, 特許公開 2001-102172.
14. 「多価アルコールエステル化合物及び該化合物を含む潤滑油組成物」柳澤吉則, 坪内俊之, 特許公開 2000-072715.
15. 「潤滑油組成物」柳澤吉則, 藤浪行敏, 坪内俊之, 特許公開 11-199885.

16. 「三級カルボン酸エステル化合物及び該化合物を含有する潤滑油組成物」柳澤吉則, 坪内俊之, 橋本勝美, 奥田亮一, 特許公開平09-301919.

【口頭発表・ポスター】

1. 「姫路薬剤師会エリアにおける事業継続計画 (BCP) 策定のための薬局被害想定」大淵絢子, 奥浩太, 山本直樹, 浦上文男, 大塚竜太郎, 為則利之, 松岡洋平, 八木智, 泉憲政, 柳澤吉則, 日本薬学会第 143 年会, 28P2-am2-118, 令和 5 (2023) 年 3 月.
2. 「ラミブジン・アバカビル硫酸塩配合錠の先発品と後発品の簡易懸濁法の適用性の比較」松川 美佐子, 矢倉裕輝, 柳澤吉則, 中山優子, 寺岡麗子, 日本薬学会第 141 年会, 28P01-am1-42, 令和 4 (2022) 年 3 月.
3. 「地域における薬剤師会の役割 ～高齢者を対象としたまちかど個別相談会開催の試み (続報 1)～」, 51 回日本薬剤師会学術大会, 高崎潔子, 荒巻永子, 荒賀達子, 加藤学, 川島一夫, 野口智也, 間々田馨子, 柳澤吉則, 中村龍一, 日向章太郎, 金親肇, 平成 30 (2018) 年 6 月.
4. 「地域における薬剤師会の役割 ～高齢者を対象としたまちかどお薬講演会を開催して (続報 1)～」, 49 回日本薬剤師会学術大会, 北神照美, 荒巻永子, 加藤学, 川島一夫, 高崎潔子, 野口智也, 間々田馨子, 柳澤吉則, 山本仁美, 金親肇, 平成 28 (2016) 年 4 月.
5. 「地域における薬剤師会の役割 ー高齢者を対象としたまちかどお薬講演会を開催して」第 46 回日本薬剤師会学術大会, 高崎潔子, 荒巻永子, 小宮山和子, 川島一夫, 小柴浩二, 笹部英士, 野口智也, 柳澤吉則, 古山陽一, 平成 25 (2013) 年 4 月.
6. 「アドヒアランス向上のための薬局薬剤師の患者ケアに関する実証研究」第 18 回ヘルスリサーチフォーラム, 草間真紀子, 五十嵐中, 柳澤吉則, 平成 24 (2012) 年 4 月.
7. 「学生アンケートからみる千葉市版集合・体験実習の評価と課題」黒川よし子, 篠原淳二, 國藤洋昭, 雑賀匡史, 境隆一, 佐藤正至, 平井政彦, 堀田孝俊, 柳澤吉則, 吉松美津代, 久保田洋子, 古山陽一, 日本医療薬学会年会, 21 (0), P-1224, 平成 23 (2011) 年 9 月.
6. "Intensive Education Program by Community Pharmacists to Improve Adherence to Self-Management in Type 2 Diabetes" Kusama M, Yanagisawa Y, Sakakibara M, Igarashi A, Akazawa M. 27th ICPE: International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management. 2011-8.
7. 「(社) 千葉市薬剤師会における長期実務実習への取り組み ーその 2 「集合実習」と「体験実習」ー」篠原淳二, 石井茂樹, 國藤洋昭, 黒川よし子, 境隆一, 佐藤正至, 平井政彦, 丸宗孝, 柳澤吉則, 山本佳久, 古山陽一, 第 43 回日本薬剤師会学術大会, P-333, p. 428 平成 22 (2010) 年.
8. (社) 千葉市薬剤師会における長期実務実習への取り組みーその 1 受入体制の構築ー」久保田洋子, 石井茂樹, 國藤洋昭, 境隆一, 佐藤正至, 篠原淳二, 平井政彦, 丸宗孝, 柳澤吉則, 山本佳久, 古山陽一, 第 43 回日本薬剤師会学術大会, P-332, p. 427, 平成 22 (2010) 年.
9. 「薬学生実務実習受入態勢の整備に向けて - 千葉市薬剤師会の取り組み -」大塚さち子, 石井茂樹, 川口弘子, 國藤洋昭, 久保田洋子, 黒川よし子, 篠原淳二, 神馬綾子, 西野めぐみ, 沼田織恵, 柳澤吉則, 山本佳久, 古山陽一, 金親肇, 日本薬剤師会学術大会, 40th, 402, 平成 19 (2007) 年.
10. 「キラル TEMPO 修飾 GF 電極を用いたアルコール類の S - エナンチオ選択的電解触媒酸化反応」柏木良友, 倉嶋太, 菊池千加良, 柳澤吉則, 安斉順一, 長哲郎, BOBBITT J M, エレクトロオーガニックケミストリー討論会, Vol. 21st Page. 9-10, 平成 9 (1997) 年.
11. 「キラル TEMPO 修飾電極の不活性化機構の解明」倉嶋太, 柏木良友, 柳澤吉則, 長哲郎, 電気化学秋季大会, Vol. 1995 Page. 259, 平成 7 (1995) 年 9 月.
12. 「キラル TEMPO 修飾電極を用いた不斉合成反応」柏木良友, 柳澤吉則, 長哲郎, エレクトロオーガニックケミストリー討論会講演要旨集, Vol. 18th Page. 91-92, 平成 7 (1995) 年 6 月.
13. 「立体選択的酸化反応を目的としたキラル TEMPO 修飾グラファイトフェルト電極の作製とそのマクロ電解合成への応用」柏木良友, 柳澤吉則, 長哲郎, BOBBITT J M, エレクトロオーガニックケミストリー討論会, Vol. 16th Page. 53-54, 平成 6 (1994) 年.
14. 「メディーエーター修飾グラファイトフェルト電極を用いた立体選択的電解触媒酸化反応」柏木良友, 柳澤吉則, 長哲郎, 日本化学会, Vol. 66th Page. 429, 平成 5 (1993) 年 9 月.
15. 「Ferrocene, Diaphorase および Alcohol dehydrogenase 共修飾ポリアクリル酸被覆グラファイトフェルト電極によるアルコール類の酸化反応」, 柏木良友, 柳澤吉則, 長哲郎, エレクトロオーガニックケミストリー討論会, Vol. 15th Page. 49-50, 平成 5 (1993) 年.
16. 「キラル TEMPO 修飾電極のアルコール酸化反応における特性ならびに選択性」柳澤 吉則, 柏木良友, 長哲郎, MA Z, BOBBITT J M, 電気化学秋季大会, Vol. 1992 Page. 91, 平成 4 (1992) 年 9 月.
17. 「Cyclourea を架橋配位子とした白金ブルー錯体の合成, 構造, 抗腫瘍活性, ならびに腎毒性」柳澤吉則, 日野博明, 長哲郎, 荒川順生, 日本薬学会年会, Vol. 112th. No. Pt 2 Page. 254, 平成 4 (1992) 年 3 月.

【招待講演】

1. 「ヘルスケア関連ビジネスの新展開」青葉技術会 (東北大学全学同窓会秋友会登録同窓会) 平成 27 (2015) 年 4 月 24 日.
2. 「認知症のお薬と薬剤師の役割」特定非営利活動法人成年後見のはな なのはな公開セミナー, 平成 26 (2014) 年 6 月 14 日.
3. 「ジェネリック医薬品の現状」第 22 回医療システムデザイン勉強会, 平成 24 (2012) 年 2 月 5 日.
4. 「すんでいいまち, 訪ねていいまち」千葉県生涯大学校, 平成 23 (2011) 年 9 月 13 日.
5. 「安心の住まい方とコミュニティビジネスの可能性」独立行政法人都市再生機構 生活支援ビジネスネットワーク講演会, 平成 23 (2011) 年 3 月 3 日.
6. 「『現代の縁側』地域総合サービスの中心ができるまで」厚生労働省社会的事業者等訓練コース, 人を幸せに・地域を元気にするビジネス科, 平成 23 (2011) 年 2 月.
7. 「お薬の正しい飲み方」千葉市薬剤師会 まちかどお薬講演会, 平成 23 (2011) 年度～計 4 回.

【競争的資金】

1. 「色素類似抗がん剤のナノ粒子化による副作用低減研究」, 柳澤吉則, 橋野宏樹, 姫路市産学協同研究助成, 2022 年 8 月 - 2023 年 3 月.
2. 「大規模水害発生時を想定した地域薬局による事業継続計画 (BCP) 策定と避難所災害救護所への支援に関する基礎調査～姫路市・

福崎町をモデルとして」、柳澤吉則、大沢絢子、JR 西日本あんしん社会財団研究助成 2022 年 4 月 - 2023 年 3 月。 3. 「少子高齢化時代の都市型災害対策 ; Health・Coexistence・Well-being を意識した社会基盤システムの検討」坪内暁子、内藤俊夫、土屋陽子、荒井雄太、小澤明日香、丸井英二、佐々木宏之、有賀平、向山晴子、柳澤吉則、齊藤敦、飯沼清、公益財団法人生存科学研究所 28 年度自主研究事業、平成 28 年(2016)年-平成 30(2019)年。 4. 「集合住宅高齢移動困難者の社会参加促進支援事業」柳澤吉則、栗原裕治、福川裕一、独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成（地域連携活動支援事業）、平成 23(2011)年-平成 24(2012)年。 5. 「アドヒアランス向上のための薬局薬剤師の患者ケアに関する実証研究」草間真紀子、五十嵐中、柳澤吉則、ファイザーヘルスリサーチ財団 平成 21 年度国内共同研究、平成 21 年(2009)年-平成 22(2010)年。 6. 「医療・介護・生活サービス付再生住宅」蟻塚和申、柳澤吉則、平成 20 年度千葉市コミュニティビジネス・モデルプラン、平成 20(2008)年-平成 21(2009)年。
--

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1989 年～現在	日本薬学会会員
1991 年～現在	トライボロジー学会会員
2000 年～現在	環境法政策学会会員
2010 年～現在	生存科学研究所会員
2019 年～現在	日本ヘルスコミュニケーション学会会員
2020 年～現在	在宅薬学会会員
2020 年～現在	社会薬学会、2023 年度評議員
2010 年～2020 年	千葉県薬剤師会 若手フォーラム実行委員
2000 年～現	特定非営利活動法人福祉の街美浜をつくる会 監事
2000 年～現在	訪問介護事業所たすけあい美浜 副代表
2004 年～現在	特定非営利活動法人環境ネット 理事長
2005 年～現在	特定非営利活動法人ほおずき 理事・事務局長
2006 年～2008 年	千葉市薬剤師会 薬学生実務研修委員会 委員
2006 年～2020 年	千葉市薬業会 理事
2010 年～2020 年	特定非営利活動法人千葉まちづくりサポートセンター 運営委員
2008 年～2010 年	千葉県社会福祉協議会ボランティアセンター 相談員
2008 年～2010 年	千葉市薬剤師会 薬学生集合研修実行委員
2010 年～2011 年	千葉市環境基本計画市民懇談会 委員
2010 年～2020 年	千葉市薬剤師会 情報広報委員会 委員
2010 年～2020 年	千葉県薬剤師連盟 評議員
2021 年～現在	兵庫県薬剤師会 薬大支部 支部長

Ⅴ 学内における主な活動

2021 年～現在	長期実務実習委員会 委員
2021 年～現在	OSCE 実施委員会 委員
2021 年～現在	指導薬剤師のためのワークショップ 委員
2021 年～現在	FD 委員会 委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	教授	氏名	山本 直樹	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
姫路獨協大学薬学部での教育学部生・講義	2018-23 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「病態生理学Ⅱ」（必修科目，3 年次配当，半期，2 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 3 年生に開講している病態生理学Ⅱの授業において、中枢系疾患、感覚器系疾患、感染症、悪性腫瘍の様々な治療法について薬理学、病理学を基礎として最新の情報を取り入れて講義を行った。また、テストを作成し学生の理解度を評価しました。
	2018-23 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「診断学」（必修科目，4 年次配当，半期，1 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 4 年生に開講している診断学の授業において、内分泌系疾患、代謝系疾患、尿路・泌尿器系疾患の様々な治療法について薬理学、病理学、薬物治療学を基礎として最新の情報を取り入れて講義を行った。また、テストを作成し学生の理解度を評価しました。
2 作成した教科書、教材、参考書		
姫路獨協大学で作成した資料	2018-23 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「病態生理学Ⅱ」（必修科目，3 年次配当，半期，2 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 3 年生に開講している病態生理学Ⅱの授業において使用するスライド、レジュメ、宿題、確認試験及び定期テストの問題を作成した。また、授業の参考となる参考書の選別を行いました。
	2018-23 年 9-2 月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科の教授として担当の「診断学」（必修科目，4 年次配当，半期，1 単位）において実践した。 姫路獨協大学薬学部の 4 年生に開講している病態生理学Ⅱの授業において使用するスライド、レジュメ、宿題、確認試験及び定期テストの問題を作成した。また、授業の参考となる参考書の選別を行いました。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特になし		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著/別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記 入)	該当頁数	備 考
【著書】 特になし						
【論文】 特になし						

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
第 61 回日本神経化学学会大会 合同 年会	神戸	平成 30 年 9 月 6-8 日	山本直樹、谷田守、鈴木健二、祖父江和哉 レプチンは初代培養アストロサイトのネプリライシン とインスリン分解酵素発現を調節する
第 37 回日本認知症学会学術 集会	札幌	平成 30 年 10 月 12-14 日	山本直樹、祖父江和哉 PKA および PKC 経路とアストロサイトのネプリライシン とインスリン分解酵素発現検討

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

Ⅴ 学内における主な活動

2021 年 4 月～現在	学部長 （その他、役職に伴う併任委員）

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	角山 圭一	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の講義内容の理解度把握	2008 年 10 月～現在	毎回、講義内容から小テストを作成して、試験を実施し、直ちに解答および解説している。その際、学んだことを着実に理解させる目的で、学生自らに採点させ、自分の間違った問題、分からなかった問題を意識させている。また、教員も学生の理解度を把握し、講義内容が全学生に理解できるよう努力している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
学生へのわかりやすい講義概要・資料の作成（配布資料）	2007 年 10 月～現在	1 冊の教科書や参考書だけで講義を進めるのではなく、教官が様々な教科書や参考図書を参考に、学生にとってわかりやすい資料を作成し、毎回の講義で配布している。資料では、教科書に記載された文章を、イラストや図、また、表に作り直し、学生の理解を促すように努力している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
「第 15 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」タスクフォース	2008 年 4 月 26-27 日	兵庫医療大学薬学部にて開催された「第 15 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」にタスクフォースとして参加した。本ワークショップでは、病院（薬局や薬剤部）や保険薬局で働く現場の薬剤師に対して、学生への教育の方法や評価、などグループで話し合いをし、タスクフォースのサポートの下で、その方法を考え出してもらった。
独立行政法人 科学技術振興機構 「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業」（講初大 84003） 「薬理学講座」	2008 年 8 月 29 日	高校生にサイエンスの面白さ、興味を持ってもらうことを目的に、連携先の高校生を対象に、高校生のための「薬理学講座」を開催した。本講座では、まず、はじめに「薬理学とは何か」ということを簡単に説明し、次いで、実験動物を用いて実際に薬学部の薬理学実習で行う実験を行った。本講座の受講をきっかけに、科学、薬学に興味を持ち、本学に入学した高校生がいる。本講座は独立行政法人科学技術振興機構のサポートにより開講した。
出張講義 「高校生のための薬理学講座」	2008 年 12 月 16 日	兵庫県立川西北陵高等学校にて、「高校生のための薬理学講座」の講義を行った。講義では、「薬学部とはどんな学部か」、「薬学部で学ぶことは何か」を説明した後、私が担当している専門科目「薬理学」について説明した。薬理学が薬学部の専門科目であり、高校生には理解しにくい可能性があったため、「身の回りの薬（家庭の薬箱に入っている薬）が体に入って、どの様にして効くか」との内容で、具体的に薬品名を挙げて、理解しやすい工夫をした講義をした。

「第 43 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」 タスクフォース	2009 年 11 月 22-23 日	兵庫医療大学薬学部にて開催された「第 43 回薬剤師のためのワークショップ in 近畿」および「厚生労働省による認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ」にタスクフォースとして参加した。本ワークショップでは、病院（薬局や薬剤部）や保険薬局で働く現場の薬剤師に対して、学生への教育の方法や評価、などグループで話し合いをし、タスクフォースのサポートの下で、その方法を考え出してもらった。
独立行政法人 科学技術振興機構 「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（講座型学習活動）」 (AD092032) 「薬の効果を実感してみよう」	2010 年 1 月 6 日	本講座は独立行政法人科学技術振興機構のサポートにより開講し、本講座は、2008 年 8 月 29 日に次いで、2 回目である。 本講座では、高校生にサイエンスの面白さ、興味を持ってもらうことを目的に、連携先の高校生を対象に、高校生のための「薬の効果を実感してみよう」を開催した。本講座では、まず、薬の効果を研究する学問であり、私が担当している専門科目「薬理学」について、高校生でもわかるように説明し、次いで、実験動物を用いて実際に薬学部の薬理学実習で行う実験を行った。本講座の受講をきっかけに、科学、薬学に興味を持ち、本学に入学した高校生がいる。
出張講義 「薬剤師という職業について」	2010 年 10 月 21 日	姫路市立姫路高等学校にて、「薬剤師という職業について」の講義を行った。講義では、「薬学部とはどのような学部か」、「薬学部で何を学ぶか」、「薬剤師免許の取得について」を説明した。その後、製薬企業、研究所、公務員など多方面で活躍している薬剤師を紹介し、薬剤師の職域を説明した。また、講義の最後に、私が担当している専門科目「薬理学」について、「身の回りの薬（家庭の薬箱に入っている薬）が体に入って、どの様にして吸収され、効果を示すのか」との内容で、具体的に薬品名を挙げて、高校生にも理解しやすい内容で講義をした。
出張講義 「薬剤師という職業について」	2013 年 11 月 18 日	姫路市立姫路高等学校にて、「薬剤師という職業について」の講義を行った。本講義は、2010 年 10 月 21 日に次いで、2 回目である。講義では、「薬学部とはどのような学部か」、「薬学部で何を学ぶか」、「薬剤師免許の取得について」を説明した。その後、製薬企業、研究所、公務員など多方面で活躍している薬剤師を紹介し、薬剤師の職域を説明した。
出張講義 「薬剤師という職業について」	2021 年 3 月 16 日	姫路市立飾磨高等学校にて、「薬剤師という職業について」の講義を行った。講義では、「薬学部とは」、「薬学部で何を学ぶか」、「薬剤師免許の取得について」を説明した。その後、薬剤師の任務や職域（病院、薬局のほか、製薬企業、研究所、公務員など多方面で活躍している薬剤師）を紹介した。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の 名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 ALS と神経栄養因子－新規神 経栄養因子・神経再生因子と しての HGF－	共著	2007 年	BRAIN and NERVE－神 経研究の進歩－、51 巻 10 号	船越洋、大谷若菜、 <u>角山 圭一</u> 、中村敏一	1195-1202	
ALS に対する新しい治療薬と しての肝細胞増殖因子 (HGF) の研究	共著	2007 年	難病と在宅ケア 13 巻 7 号	船越洋、大谷若菜、 <u>角山 圭一</u> 、中村敏一	54-55	
－臨床に必要な神経薬理・化 学－HGF の神経保護作用機序	共著	2007 年	Clinical Neuroscience 25 巻 5 号	船越洋、 <u>角山圭一</u> 、大谷 若菜、中村敏一	500-501	
－臨床に必要な神経薬理・化 学－HGF の神経疾患治療効果	共著	2007 年	Clinical Neuroscience 25 巻 6 号	船越洋、 <u>角山圭一</u> 、大谷 若菜、中村敏一	620-621	
GABA _A 受容体アンタゴニスト による LTP 様疎通の誘発	共著	2009 年	生体の科学 60 巻 5 号	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、谷 口泰造	392-393	
再生因子 (HGF) の神経系にお ける機能と神経再生医療への 展開の可能性	共著	2012 年	人工血液 20 巻 1 号	船越洋、島田 (大谷) 若 菜、 <u>角山圭一</u> 、加藤貴史、 中村敏一、北村和也、中 村雅也、戸山芳昭、岡野 栄之、青木正志	12	
細胞表面受容体 － EphA3 受 容体とシナプス可塑性 －	共著	2013 年	生体の科学 64 巻 5 号	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松 浦健二	474-475	
【論文】 Protein kinase C activates human lipocalin-type prostaglandin D synthase gene expression through de-repression of Notch-Hes signaling and enhancement of AP-2 β function in brain-derived TE671 cells.	共著	2005 年	Journal of Biological Chemistry 280 (18)	Ko Fujimori <u>Keiichi Kadoyama</u> Yoshihiro Urade	18452-18461	
Zebrafish and chicken lipocalin-type prostaglandin D synthase homologues: Conservation of mammalian gene structure and binding ability for lipophilic molecules, and difference in expression profile and enzyme activity.	共著	2006 年	Gene 375	Ko Fujimori Takashi Inui Nobuko Uodome <u>Keiichi Kadoyama</u> Kosuke Aritake Yoshihiro Urade	14-25	
Serum cystatin C levels to predict serum concentration of digoxin in Japanese patients.	共著	2006 年	International Journal of Medical Science 3 (3)	Tsutomu Nakamura Takeshi Ioroi Toshiyuki Sakaeda Masanori Horinouchi Nobuhide Hayashi Kensuke Saito Mitsuro Kosaka Noboru Okamura <u>Keiichi Kadoyama</u> Shunichi Kumagai Katsuhiko Okumura	92-96	

MMP-9 antisense oligodeoxynucleotide exerts an inhibitory effect on osteoclastic bone resorption by suppressing cell migration.	共著	2006 年	Life Science 79 (17)	Osamu Ishibashi Satoru Niwa <u>Keiichi Kadoyama</u> Takashi Inui	1657-1660	
MDR1 T-129C polymorphism can be predictive of differentiation, and thereby prognosis of colorectal adenocarcinomas in Japanese.	共著	2006 年	Biological & Pharmaceutical Bulletin 29 (7)	Tatsuya Koyama Tsutomu Nakamura Chiho Komoto Toshiyuki Sakaeda Mayuko Taniguchi Noboru Okamura Takao Tamura Nobuo Aoyama Takashi Kamigaki Yoshikazu Kuroda Masato Kasuga <u>Keiichi Kadoyama</u> Katsuhiko Okumura	1449-1453	
Hepatocyte growth factor (HGF) attenuates gliosis and motoneuronal degeneration in the brainstem motor nuclei of a transgenic mouse model of ALS.	共著	2007 年	Neuroscience Research 59 (4)	<u>Keiichi Kadoyama</u> Hiroshi Funakoshi Wakana Ohya Toshikazu Nakamura	446-456	
Expression of prostaglandin D ₂ synthase in activated eosinophils in nasal polyps.	共著	2007 年	Archives of Otolaryngology - Head & Neck Surgery 133 (7)	Sawako Hyo Ryo Kawata <u>Keiichi Kadoyama</u> Naomi Eguchi Takahiro Kubota Hiroshi Takenaka Yoshihiro Urade	693-700	
Hematopoietic prostaglandin D synthase and DP1 receptor are selectively upregulated in microglia and astrocytes within senile plaques from human patients and in a mouse model of Alzheimer disease.	共著	2007 年	Journal of Neuropathology and Experimental Neurology 66	© Ikuko Mohri © <u>Keiichi Kadoyama</u> © Takahisa Kanekiyo Yo Sato Kuriko Shimono Yuko Saito Kinuko Suzuki Takashi Kudo Masatoshi Takeda Yoshihiro Urade Shigeo Murayama Masako Taniike (© Co-first author)	469-480	
Cyclosporine から sirolimus への切り替えに際し、sirolimus 血中濃度の一過性上昇を認めた症例	共著	2007 年	TDM 研究 24 巻 2 号	中村任、五百蔵武士、大松秀明、山下和彦、白木孝、堀之内正則、西口工司、福本巧、具英成、岡村昇、 <u>角山圭一</u> 、奥村勝彦、柴田敏之	98-103	
Long term potentiation -like facilitation via GABA _A receptor blockade in the mouse dentate gyrus <i>in vivo</i> .	共著	2008 年	NeuroReport 19 (18)	Shogo Matsuyama Taizo Taniguchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Akira Matsumoto	1809-1813	
姫路獨協大学における早期体験学習前後の学生アンケート調査	共著	2009 年	医薬品情報学 10 巻 4 号	清原義史、大西憲明、 <u>角山圭一</u> 、木下淳、中村隆典、宮本和英、矢上達郎、通山由美、駒田富佐夫、奥村勝彦	273-279	

Quantitative analysis of β -amyloid peptides expressed in human cerebrospinal fluid by an improved method of antibody-assisted time-of-flight mass spectrometry.	共著	2009 年	International Journal of Peptide Research and Therapeutics 15 (3)	Akira Matsumoto Reiko Matsumoto <u>Keiichi Kadoyama</u> Takaaki Nishimoto Shogo Matsuyama Osamu Midorikawa	205-210	
Disease-dependent reciprocal phosphorylation of serine and tyrosine residues of c-Met/HGF receptor contributes disease retardation of a transgenic mouse model of ALS.	共著	2009 年	Neuroscience Research 65 (2)	<u>Keiichi Kadoyama</u> Hiroshi Funakoshi Wakana Ohya Takahiro Nakamura Kunio Matsumoto Shogo Matsuyama Toshikazu Nakamura	194-200	
Use of a phosphosensor dye in proteomic analysis of human mutant tau transgenic mice.	共著	2009 年	NeuroReport 20 (18)	Masaaki Takano Mieko Otani Akiko Sakai <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama Akira Matsumoto Mariko Takenokuchi Miho Sumida Taizo Taniguchi	1648-1653	
SJLB mice develop tauopathy-induced parkinsonism.	共著	2010 年	Neuroscience Letters 473 (3)	Mariko Takenokuchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Shunmei Chiba Miho Sumida Shogo Matsuyama Katsuyasu Saigo Taizo Taniguchi	182-185	
Synaptotagmin1 synthesis induced by synaptic plasticity in mouse hippocampus through activation of nicotinic acetylcholine receptors.	共著	2011 年	Neuroscience Letters 489 (1)	© Takaaki Nishimoto © <u>Keiichi Kadoyama</u> Taizo Taniguchi Masaaki Takano Mieko Otani Tooru Nakamura-Hirota Yabin Lu Akira Matsumoto Shogo Matsuyama (© Co-first author)	25-29	
Phosphoproteome profiling using a fluorescent phosphosensor dye in two-dimensional polyacrylamide gel electrophoresis.	共著	2011 年	Applied Biochemistry and Biotechnology 164 (4)	Mieko Otani Taizo Taniguchi Akiko Sakai Jouji Seta <u>Keiichi Kadoyama</u> Tooru Nakamura-Hirota Shogo Matsuyama Keiji Sano Masaaki Takano	804-818	
Therapeutic potential of hepatocyte growth factor for treating neurological diseases.	共著	2011 年	Current Drug Therapy 6 (3)	<u>Keiichi Kadoyama</u> Kaori Kadoyama Hiroshi Funakoshi Toshikazu Nakamura Toshiyuki Sakaeda	197-206	
The expression changes of EphA3 receptor during synaptic plasticity in mouse hippocampus through activation of nicotinic acetylcholine receptors.	共著	2012 年	NeuroReport 23 (13)	© Tooru Hirota © <u>Keiichi Kadoyama</u> Masaaki Takano Mieko Otani Shogo Matsuyama (© Co-first author)	746-749	

Loss of dopaminoreceptive neuron causes L-dopa resistant Parkinsonism in tauopathy.	共著	2012 年	Neurobiology of Aging 33 (10)	Shunmei Chiba Erika Takada Mamoru Tadokoro Taizo Taniguchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Mariko Takenokuchi Seiya Kato Noboru Suzuki	2491-2505	
Hepatocyte growth factor overexpression in the nervous system enhances learning and memory performance in mice.	共著	2012 年	Journal of Neuroscience Research 90 (9)	Takashi Kato Hiroshi Funakoshi <u>Keiichi Kadoyama</u> Satsuki Noma Masaaki Kanai Wakana Ohya- Shimada Shinya Mizuno Nobutaka Doe Taizo Taniguchi Toshikazu Nakamura	1743-1755	
Proteomic analysis of time-dependent changes in proteins expressed in mouse hippocampus during synaptic plasticity induced by GABAA receptor blockade.	共著	2013 年	Neuroscience Letters 555	Kenji Matsuura Tooru Nakamura-Hirota Masaaki Takano Mieko Otani <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	18-23	
アレルギー性皮膚炎の治療薬ーシコニンの効果ー	共著	2013 年	SMALL ANIMAL DERMATOLOGY 9 (1)	渡邊愛未、七里博章、炬口真理子、宮本和英、 <u>角山圭一</u> 、谷口泰造	60-65	
神経特異的 HGF 遺伝子発現は ALS モデル Tg マウスの運動神経変性とグリオーススを抑制し寿命を延長する	共著	2014 年	日本実験動物技術者協会北海道支部会誌 38	清水範彦、島田（大谷）若菜、 <u>角山圭一</u> 、早川寿行、千葉博信、Sun Woong、中村敏一、船越洋	10-16	
The influence of chronic ibuprofen treatment on proteins expressed in the mouse hippocampus.	共著	2015 年	European Journal of Pharmacology 752	Kenji Matsuura Mieko Otani Masaaki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	61-68	
Lipid A-activated inducible nitric oxide synthase expression via nuclear factor- κ B in mouse choroid plexus cells.	共著	2015 年	Immunology Letters 167 (2)	Masaaki Takano Mami Ohkusa Mieko Otani Kyong-Son Min <u>Keiichi Kadoyama</u> Katori Minami Keiji Sano Shogo Matsuyama	57-62	
Changes in the expression of collapsin response mediator protein-2 during synaptic plasticity in the mouse hippocampus.	共著	2015 年	Journal of Neuroscience Research 93(11)	<u>Keiichi Kadoyama</u> Kenji Matsuura Tooru Nakamura-Hirota Masaaki Takano Mieko Otani Shogo Matsuyama	1684 -1692	
The influence of chronic nicotine treatment on proteins expressed in the mouse hippocampus and cortex.	共著	2016 年	European Journal of Pharmacology 780	Kenji Matsuura Mieko Otani Masaaki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	16-25	

Proteomic analysis of hippocampus and cortex in streptozotocin-induced diabetic model mice showing dementia.	共著	2018 年	Journal of Diabetes Research	Kenji Matsuura Mieko Otani Masaoki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	Article ID 8953015	
Evaluation of absorbability of macromolecular substances in the oral mucosa and skin using a three-dimensional tissue culture model.	共著	2018 年	Biology and Medicine 10 (5)	Mariko Takenokuchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Daisuke Yoshida Shigeki Takaki Ryoma Yamamoto Katsuyasu Saigo Taizo Taniguchi	1000448	
Therapeutic effects of shikonin on skin lesions in mouse models of allergic dermatitis and wound.	共著	2019 年	Traditional & Kampo Medicine 6	<u>Keiichi Kadoyama</u> Mariko Takenokuchi Kenji Matsuura Hiroaki Shichiri Aimi Watanabe Hirotugu Yamaguchi Hisashi Takahashi Hiromi Takano-Ohmuro Taizo Taniguchi	62-70	
Changes in the expression of prefrontal subunit 5 depending on synaptic plasticity in the mouse hippocampus.	共著	2019 年	Neuroscience Letters 712	<u>Keiichi Kadoyama</u> Kenji Matsuura Masaoki Takano Koji Maekura Yukari Inoue Shogo Matsuyama	Article 134484	
Proteomic analysis involved with synaptic plasticity improvement by GABA _A receptor blockade in hippocampus of a mouse model of Alzheimer's disease.	共著	2020 年 (online) 2021 年 (published)	Neuroscience Research 165	<u>Keiichi Kadoyama</u> Kenji Matsuura Masaoki Takano Mieko Otani Takami Tomiyama Hiroshi Mori Shogo Matsuyama	61-68	
Proteomic analysis of hippocampus in relation to effects of yokukansan on diabetic model mice showing dementia.	共著	2021 年	Diabetes Updates 7	Kenji Matsuura Erika Kitajima <u>Keiichi Kadoyama</u> Masaoki Takano Koji Maekura Shogo Matsuyama	1-6	
<i>In vitro</i> and <i>in vivo</i> anti-glycation effects of Connarus ruber extract.	共著	2022 年	Planta Medica 88 (12)	Mariko Takenokuchi Kinuyo Matsumoto Yuko Nitta Rumi Takasugi Yukari Inoue Michi Iwai <u>Keiichi Kadoyama</u> Kazutoshi Yoshida Hiromi Takano-Ohmuro Taizo Taniguchi	1026-1035	
Proteomic analysis of the heart in normal aging mice.	共著	2022 年	The Journal of Medical Investigation 69	Koji Maekura Ryo Yamano Kenji Matsuura <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama Michiko Hamada Masaoki Takano	217-223	

Wild-type and pathogenic forms of ubiquilin 2 differentially modulate components of the autophagy-lysosome pathways.	共著	2023 年	Journal of Pharmacological Sciences 152 (3)	Akiko Idera Lisa M. Sharkey Yuki Kurauchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Henry L. Paulson Hiroshi Katsuki Takahiro Seki	182-192	
【その他 (国際学会発表)】 Hepatocyte growth factor prevents degeneration of facial and hypoglossal motor neurons in a transgenic mouse model of amyotrophic lateral sclerosis.	共同	2006 年 6 月	The 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology	<u>Keiichi Kadoyama</u> Hiroshi Funakoshi Toshikazu Nakamura	Kyoto, Japan	
Parkinsonism induced by tauopathy: Analysis of SJLB mice.	共同	2009 年 8 月	The 22nd Biennial Meeting of the ISN/PSN Joint Meeting	Taizo Taniguchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Mariko Takenokuchi Shunmei Chiba Noboru Suzuki Akira Matsumoto Shogo Matsuyama	Busan, Korea	
Phosphoproteome profiling of human tau with N279K mutation transgenic mice.	共同	2009 年 8 月	The 22nd Biennial Meeting of the ISN/PSN Joint Meeting	Masaaki Takano Mieko Otani Keiji Sano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama Taizo Taniguchi	Busan, Korea	
The choroid plexus epithelial cell line ECPC-4 cells expressed NO Synthases by LPS.	共同	2011 年 8 月	The 23rd Biennial Meeting of ISN/ESN	Masaaki Takano Mami Ohkusa <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama Tooru Nakamura- Hirota Mieko Otani Keiji Sano	Athens, Greece	
Proteomics analysis of the mutant APP ^{ES3Δ} transgenic mice hippocampus and cortex.	共同	2011 年 8 月	The 23rd Biennial Meeting of ISN/ESN	Mieko Otani Masaaki Takano Kouji Maekura Shogo Matsuyama Keiji Sano Taizo Taniguchi Tooru Nakamura-Hirota <u>Keiichi Kadoyama</u> Takami Tomiyama Hiroshi Mori	Athens, Greece	
SJLB; an animal model for Alzheimer disease and L-dopa resistant parkinsonism in tauopathy.	共同	2013 年 4 月	ISN-ASN Biennial Meeting 2013	Taizo Taniguchi Shunmei Chiba Mariko Takenokuchi <u>Keiichi Kadoyama</u> Kazuhide Miyamoto Shogo Matsuyama Masaaki Takano Mieko Otani	Cancun Mexico	
The influence of chronic nicotine treatment on proteins expressed in the mouse hippocampus and cortex.	共同	2015 年 8 月	25th Meeting of the ISN	Kenji Matsuura Mieko Otani Masaaki Takano <u>Keiichi Kadoyama</u> Shogo Matsuyama	Cairns Australia	

【その他（国内学会発表）】 Gene transfer of HGF retards degeneration of facial and hypoglossal motor neurons in a transgenic mouse model of ALS.	共同	2005 年 10 月	第 78 回日本生化学会大会	<u>角山圭一</u> 、船越洋、中村敏一	神戸	
筋萎縮性側索硬化症（ALS）及び ALS マウスの運動ニューロンにおける肝細胞増殖因子（HGF）・活性型受容体（pcMet）の発現機構：ALS 治療戦略の基盤研究	共同	2007 年 5 月	第 48 回日本神経病理学会総会	加藤信介、加藤雅子、大浜栄作、船越洋、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一、青木正志、糸山泰人、平野朝雄	東京	
Reciprocal phosphorylation of tyrosine and serine residues of c-Met/HGF receptor in motoneurons implicates HGF-dependent disease retardation of a transgenic mouse model of ALS.	共同	2007 年 9 月	第 30 回神経科学大会・第 50 回神経化学学会大会・第 17 回神経回路学会大会合同大会（Neuro2007）	<u>角山圭一</u> 、船越洋、大谷若菜、中村敏一	横浜	
早期体験学習前後における学生アンケート調査	共同	2007 年 9 月	第 40 回日本薬剤師会学術大会	清原義史、大西憲明、 <u>角山圭一</u> 、中村隆典、宮本和英、通山由美、矢上達郎、駒田富佐夫、奥村勝彦	神戸	
マウス歯状回における GABA 受容体阻害による長期増強様作用	共同	2008 年 3 月	第 81 回日本薬理学会年会	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、谷口泰造、松本明	横浜	
マウス海馬におけるテタヌス刺激で誘発される長期増強現象により変動する遺伝子群の解析	共同	2008 年 11 月	第 114 回日本薬理学会近畿部会	<u>角山圭一</u> 、西本高明、谷口泰造、松本明、松山正剛	神戸	
SJLB マウスと APP 変異マトランスジェニックマウスにおけるリン酸化プロテオーム解析	共同	2009 年 3 月	第 82 回日本薬理学会年会	鷹野正興、尾谷三枝子、富山貴美、森啓、谷口泰造、 <u>角山圭一</u> 、松山正剛	横浜	
マウス脳内 synaptotagmin1 の発現に対するニコチンの影響	共同	2009 年 3 月	第 82 回日本薬理学会年会	西本高明、 <u>角山圭一</u> 、谷口泰造、松本明、松山正剛	横浜	
タウオパチーにおけるパーキンソン症状：SJLB マウスを用いた検討	共同	2009 年 5 月	第 56 回日本実験動物学会総会	谷口泰造、千葉俊明、 <u>角山圭一</u> 、永田大典、田中昭二、川上知一、鈴木登、佐加良英治、松山正剛	大宮	
Tauopathy induced Parkinsonism: analysis of SJLB mice.	共同	2009 年 6 月	第 52 回日本神経化学会	谷口泰造、 <u>角山圭一</u> 、炬口真理子、西本高明、千葉俊明、鈴木登、松本明、松山正剛	群馬	
認知症モデルマウスにおける移植治療への検討	共同	2010 年 3 月	第 9 回日本再生医療学会総会	千葉俊明、高田えりか、樋山梢、谷口泰造、 <u>角山圭一</u> 、田所衛、鈴木登	広島	
ALS 依存的な HGF による c-Met/HGF 受容体（c-Met）の活性化とその制御機構	共同	2010 年 3 月	第 9 回日本再生医療学会総会	<u>角山圭一</u> 、船越洋、島田（大谷）若菜、中村隆弘、松本邦夫、松山正剛、中村敏一	広島	

GABA _A 受容体阻害剤 bicuculline 投与によるマウス海馬のプロテオミクス解析	共同	2010 年 12 月	第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 (BMB2010)	廣田徹、鷹野正興、尾谷三枝子、 <u>角山圭一</u> 、松山正剛	神戸	
ニコチンによって誘導されるマウス海馬における <i>in vivo</i> LTP 様作用下での EphA3 受容体発現の経時的変化	共同	2011 年 3 月	第84回日本薬理学会年会	廣田徹、 <u>角山圭一</u> 、鷹野正興、尾谷三枝子、松山正剛	横浜 (誌上開催)	
脈絡叢上皮細胞ECPC-4細胞における炎症性タンパク発現とLPSによるその誘導	共同	2011 年 3 月	第 131 年会日本薬学会	鷹野正興、大草真美、松山正剛、廣田徹、 <u>角山圭一</u> 、尾谷三枝子、佐野圭二	静岡 (誌上開催)	
中枢神経における HGF の発現亢進はマウスの記憶・学習機能を向上させる	共同	2011 年 9 月	第84回日本生化学会大会	加藤貴史、船越洋、 <u>角山圭一</u> 、野間さつき、金井将昭、島田(大谷)若菜、水野信哉、土江伸誉、谷口泰造、松山正剛、中村敏一	京都	
アレルギー性皮膚炎に対するシコニンの効果について	共同	2012 年 2 月	JCVIM/JSVCP2012 (日本獣医内科学アカデミー/日本獣医臨床病理学会) 年大会	渡邊愛未、七里博章、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、宮本和英、中村隆典、高橋尚士、大室弘美、岩崎利郎、谷口泰造	横浜	
創傷治癒を阻害しない抗炎症薬を求めて—シコニンとステロイドの対比—	共同	2012 年 10 月	第62回日本薬学会近畿支部総会	七里博章、渡邊愛未、大鐘紗也香、松浦健二、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、宮本和英、谷口泰造	武庫川女子大学	
再生因子 (HGF) の神経系における機能と神経再生医療への展開の可能性	共同	2012 年 10 月	第19回日本血液代替物学会年次大会	船越洋、島田(大谷)若菜、 <u>角山圭一</u> 、加藤貴史、北村和也、中村雅也、戸山芳昭、岡野栄之、青木正志、中村 敏一	旭川	
抗炎症及び抗酸化作用を有する生薬成分シコニンの神経変性疾患 (アルツハイマー病・パーキンソン病) 治療への応用—モデル動物を用いた検討	共同	2013 年 3 月	第86回日本薬理学会年会	谷口泰造、吉田ルシア幸子、七里博章、渡邊愛未、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、宮本和英、大室弘美	福岡	
ニコチン受容体刺激による LTP 様作用発現下でのマウス海馬における CRMP2 経時的発現変化	共同	2013 年 3 月	第86回日本薬理学会年会	松浦健二、 <u>角山圭一</u> 、廣田徹、鷹野正興、尾谷三枝子、松山正剛	福岡	
神経特異的 HGF 遺伝子発現は ALS モデル Tg マウスの運動神経変性とグリオースを抑制し寿命を延長する	共同	2014 年 5 月	日本実験動物科学技術さっぽろ 2014	清水範彦、島田(大谷)若菜、 <u>角山圭一</u> 、Woong Sun、中村敏一、船越洋	札幌	
ニコチン投与によるマウス海馬における長期増強様作用発現下での prefoldin subunit 5 の経時的発現変化	共同	2015 年 3 月	第88回日本薬理学会年会	松浦健二、 <u>角山圭一</u> 、鷹野正興、尾谷美枝子、松山正剛	名古屋	
皮膚アレルギー・創傷に対するシコニンの効果	共同	2015 年 3 月	日本薬学会第 135 年会	齋藤琢也、松浦健二、 <u>角山圭一</u> 、高橋尚士、山口洋嗣、高杉瑠美、谷口泰造	神戸	

糖尿病性認知症モデルマウスの海馬及び大脳のプロテオーム解析	共同	2016 年 3 月	第 89 回日本薬理学会年会	松浦健二、尾谷美枝子、鷹野正興、 <u>角山圭一</u> 、松山正剛	横浜	
ニコチンによるマウス海馬シナプス可塑性発現下での Prefoldin 5 の発現変化	共同	2016 年 10 月	第 66 回日本薬学会近畿支部総会	松浦健二、 <u>角山圭一</u> 、鷹野正興、尾谷三枝子、松山正剛	大阪薬科大学	
紫根（シコニン）の再評価	共同	2018 年 9 月	第 35 回和漢医薬学会学術大会	谷口泰造、 <u>角山圭一</u> 、炬口真理子、大室弘美、井上ゆかり、井戸垣秀聡、高橋尚士	岐阜	
糖化ストレスに起因する認知症予防を目指した亜鉛化合物の効果	共同	2019 年 9 月	第 92 回日本生化学会大会	井上ゆかり、 <u>角山圭一</u> 、吉川豊	横浜	
プレフォルディンサブユニット 5 はシナプス可塑性に必須の分子か？	共同	2019 年 9 月	第 92 回日本生化学会大会	<u>角山圭一</u> 、松浦健二、鷹野正興、前倉孝治、井上ゆかり、松山正剛	横浜	
畜産物由来タンパク質の糖尿病起因による認知症予防の可能性	共同	2020 年 3 月	日本薬学会第 140 年会	井上ゆかり、佐伯玲央、 <u>角山圭一</u> 、吉川豊	京都 (誌上開催)	
老化心臓におけるプロテオーム解析	共同	2020 年 3 月	日本薬学会第 140 年会	前倉孝治、山野亮、松浦健二、 <u>角山圭一</u> 、松山正剛、鷹野正興	京都 (誌上開催)	
因果構造探索を用いた軽度認知障害（MCI）における認知機能低下のメカニズムの解明	共同	2022 年 3 月	第 95 回日本薬理学会年会	松浦健二、 <u>角山圭一</u>	福岡	
Synaptic plasticity improved by GABAA receptor blockade are based on the changed protein expression in hippocampus of a mouse model of Alzheimer ' s disease.	共同	2022 年 3 月	第 95 回日本薬理学会年会	<u>角山圭一</u> 、松浦健二、鷹野正興、富山貴美、森啓、松山正剛	福岡	
【その他（セミナー）】 糖尿病に起因する認知障害について	単独	2018 年 4 月	第 21 回 西播・姫路医療セミナー)	<u>角山圭一</u>	姫路	
【その他（報告書）】 HGF は広範囲（脊髄に加え脳幹）ALS 運動ニューロンに効率よくシグナル伝達し、神経細胞死およびグリオシスを抑制する	共著	2006 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症に対する肝細胞増殖因子を用いた挑戦的治療法の開発とその基盤研究」平成 17 年度総括研究報告書	船越洋、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一、青木正志、糸山泰人、加藤信介、立野勝彦、竹尾聡	14-16	厚生労働省
HGF の ALS 治療薬としての可能性、-HGF の広範囲運動ニューロンに対する機能・作用分子機構解析-	共著	2006 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症に対する肝細胞増殖因子を用いた挑戦的治療法の開発とその基盤研究」平成 15-17 年度 総合研究報告書	船越洋、 <u>角山圭一</u> 、宮澤大介、中村敏一、青木正志、糸山泰人、加藤信介、水上浩明、小澤敬也、宮武伸一、立野勝彦	22-25	厚生労働省

肝細胞増殖因子の筋萎縮性側索硬化症に対する機能解析と疾患治療への適用	単著	2006 年	平成17年度 厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究推進事業・研究報告集	<u>角山圭一</u>	119-124	財団法人長寿科学振興財団
肝細胞増殖因子の筋萎縮性側索硬化症に対する機能解析と疾患治療への適用	単著	2007 年	平成18年度 厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究推進事業・研究報告集	<u>角山圭一</u>	171-175	財団法人精神・神経科学振興財団
筋萎縮性側索硬化症 (ALS) トランスジェニックマウスの肝臓・腎臓・心臓における一過性組織変性からの回復と HGF/活性型リン酸化 cMet (pcMet) システムの調整機構: 変性運動ニューロンに対する HGF 治療の戦略的拠点	共著	2007 年	厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業「筋萎縮性側索硬化症の画期的診断・治療法に関する研究」平成 18 年度総括研究報告書	加藤信介、加藤雅子、船越洋、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一、青木正志、糸山泰人、	40-44	厚生労働省
ALS ストレスに対する自己生存機構: レドックス・HGF/活性型リン酸化 cMet (pcMet) システムの解明と ALS 治療薬の開発までの過程	共著	2008 年	厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業「筋萎縮性側索硬化症の画期的診断・治療法に関する研究」平成 17-19 年度総合研究報告書	加藤信介、加藤雅子、青木正志、糸山泰人、船越洋、大谷若菜、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一、西野武士、阿部靖子、平野朝雄	44-56	厚生労働省
HGF-c-Met system のミクログリアへの機能解析-HGF の発症後 ALS 治療適用の至適化をめざして-	共著	2009 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症の病態に基づく画期的治療法の開発」平成 20 年度総括研究報告書	船越洋、大谷若菜、 <u>角山圭一</u> 、中村敏一	30-32	厚生労働省
ALS 治療に向けた HGF 供給法の検討-遺伝子治療法の可能性について	共著	2011 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症の病態に基づく画期的治療法の開発」平成 22 年度総括研究報告書	越洋、 <u>角山圭一</u> 、島田(大谷)若菜、中村敏一、青木正志、糸山泰人、宮武伸一、COFFIN R.S.、水上浩明、小澤敬也	35-39	厚生労働省
ALS の病態修飾の分子機序解析と再生因子 HGF の治療適用の可能性	共著	2011 年	厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業「筋萎縮性側索硬化症の病態に基づく画期的治療法の開発」平成 20-22 年度総合研究報告書	船越洋、 <u>角山圭一</u> 、島田(大谷)若菜、中村敏一、加藤信介、藤原範子、谷口直之、青木正志、糸山泰人、宮武伸一、COFFIN RS、水上浩明、小澤敬也	50-56	厚生労働省
HGF は生理学的学習能を向上させる	共著	2012 年	厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業・神経変性疾患に関する調査研究班(分科班「病態に根ざした ALS の新規治療法開発」)平成 23 年度研究報告書	船越洋、島田(大谷)若菜、野間さつき、加藤貴史、 <u>角山圭一</u>	32-35	厚生労働省

ニコチンによるマウス海馬シナプス可塑性発現下でのプロテオーム解析とCRMP-2受容体の発現変化	共著	2012 年	平成23年度喫煙科学研究財団研究年報	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、廣田徹、谷口泰造、鷹野正興	795-799	喫煙科学研究財団
ニコチンによるマウス海馬シナプス可塑性発現下でのEphA3受容体の発現変化	共著	2013 年	平成24年度喫煙科学研究財団研究年報	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	715-719	喫煙科学研究財団
変異 APP 発現マウス海馬におけるニコチンによるシナプス可塑性発現に関するプロテオーム解析	共著	2014 年	平成25年度喫煙科学研究財団研究年報	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	655-659	喫煙科学研究財団
シナプス可塑性発現下でPrefoldin subunit 5 の発現変化	共著	2015 年	平成26年度喫煙科学研究財団研究年報	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、鷹野正興	621-625	喫煙科学研究財団
変異タウ発現マウスにおけるニコチンによるシナプス可塑性発現の関与するプロテオーム解析	共著	2016 年	平成27年度喫煙科学研究財団研究年報	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	593-599	喫煙科学研究財団
アルツハイマー病モデルマウスの学習記憶障害に対するニコチンの効果に関する蛋白質の探索同定	共著	2016 年	平成27年度喫煙科学研究財団研究年報	松山正剛、 <u>角山圭一</u> 、松浦健二、谷口泰造、鷹野正興	13-24	喫煙科学研究財団
【その他（特許）】 脳損傷の予後改善薬のスクリーニング方法		特許第 4944173 号	登録日 2012 年 3 月 9 日	裏出良博、江口直美、有竹浩介、佐藤陽、 <u>角山圭一</u> 、谷池雅子		
非ヒトモデル動物を用いたパーキンソン症候群の検査方法		特許第 5558049 号	登録日 2014 年 6 月 13 日	谷口泰造、 <u>角山圭一</u> 、炬口真理子、千葉俊明、澄田美保		
アレルギー性疾患の治療剤および／または予防剤		特許第 5922857 号	登録日 2016 年 4 月 22 日	大室弘美、吉田ルシア幸子、谷口泰造、 <u>角山圭一</u>		
疎水性物質包接剤およびそれを用いた疎水性物質の可溶化方法		特許第 6778359 号	登録日 2019 年 7 月 24 日	谷口泰造、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、坂井和夫、福田勝、鈴木利雄、甲元一也、山本和宏、渡邊愛未		
【その他（特許出願中）】 シコニンまたはシコニン誘導体を有効成分として含有する育毛剤およびそれらの製造方法		2016-121401 2017-222627	出願日 2016 年 6 月 20 日 公開日 2017 年 12 月 21 日	谷口泰造、炬口真理子、 <u>角山圭一</u> 、山本和宏、渡邊愛未、伊中浩治、有竹浩介、裏出良博、田仲広明		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

IV 学会等および社会における主な活動

1995 年 7 月 ～ 2008 年 3 月	日本薬理学会 一般会員
2000 年 4 月 ～ 現在	日本生化学会 正会員
2004 年 7 月 ～ 現在	日本神経科学学会 正会員
2007 年 4 月 ～ 2012 年 3 月	大阪大学大学院医学系研究科 特任研究員
2008 年 4 月 ～ 現在	日本薬理学会 学術評議員
2009 年 11 月 ～ 2022 年 3 月	日本再生医療学会 正会員
2010 年 4 月 ～ 現在	近大姫路大学 (現・姫路大学) 非常勤講師
2011 年 4 月 ～ 2014 年 3 月	宝塚大学 非常勤講師
2011 年 11 月 ～ 現在	研修認定薬剤師
2023 年 4 月 ～ 現在	Review Editor (Frontiers in Molecular Neuroscience)

V 学内における主な活動

2007 年 6 月 ～ 現在	組換えDNA実験安全管理委員会委員
2007 年 10 月 ～ 2009 年 3 月	駅前サテライト運営委員会委員
2013 年 5 月 ～ 2017 年 3 月	学生委員
2013 年 5 月 ～ 2017 年 3 月	奨学生選考委員
2014 年 12 月 ～ 2016 年 11 月	学友会特別会員代表
2014 年 4 月 ～ 2017 年 3 月	動物実験委員会委員
2014 年 4 月 ～ 2021 年 3 月	入試教科委員 (生物)
2015 年 4 月 ～ 現在	DNA実験安全主任者
2017 年 4 月 ～ 2018 年 3 月	動物実験施設管理運営委員
2018 年 4 月 ～ 2019 年 3 月	動物実験委員会委員
2018 年 4 月 ～ 2020 年 3 月	毒物及び劇物管理委員会委員 (委員長)
2018 年 4 月 ～ 2023 年 3 月	附属図書館運営委員
2018 年 4 月 ～ 2020 年 3 月	毒物及び劇物管理委員会委員
2022 年 4 月 ～ 現在	毒物及び劇物管理委員会委員 (委員長)

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	川井真好	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 公衆衛生学Ⅰ（衛生薬学Ⅱ2019～）の理解度向上への工夫	2008年10月～現在	講義内容に関連した練習問題により学生の理解を深めるようにするとともに、写真や図など視覚での理解を深めるためのパワーポイントや講義資料の作成に工夫している。
② 公衆衛生学Ⅱの理解度向上への工夫	2009年4月～2020年3月	環境衛生学を中心とした内容について講義資料を書き込み型にすることによりして、効率的に学習できるように工夫している。
③ 公衆衛生学実習（衛生薬学実習2020～）における理解度向上への工夫	2009年10月～現在	講義で勉強したことを実験で確認し、実測値を用いて計算することにより理解の向上を図っている。実習書やデータシートなどの作成に工夫している。
④ 微生物学の理解度向上への工夫	2010年4月～現在	微生物の基礎的内容について、写真などを用いて視覚からわかりやすく理解できるように工夫している。
⑤ 病原微生物学の理解度向上への工夫	2012年4月～現在	現在話題となっている感染症の話を中心に、基礎微生物学を復習しながら、実践的な内容まで理解できるように工夫している。
⑥ 食品栄養学の理解度向上への工夫	2013年4月～2018年3月	栄養素、食品衛生などについて、身近な事例を用いながら理解できるように工夫している。
⑦ 病原微生物学（看護学部）の理解度向上への工夫	2016年4月～現在	看護師国家試験あるいは看護師として必要と考えられる病原微生物に関する知識を効率よく得られるように工夫している。
⑧ 学生による授業評価の活用	2009年3月～現在	学生からの授業評価アンケートを活用し、板書の文字の大きさ、色などを改良して、より分かりやすい講義になるように工夫している。
⑨ 生物・衛生・生薬系統合演習において理解力向上への工夫	2009年10月～現在	衛生学における社会的現状と問題点を把握するため、本分野に関わる新聞記事を題材として、学生が自発的に調べ、まとめて、伝えることができるように工夫している。
⑩ 病態・薬物治療Ⅲの理解度向上への工夫	2020年4月～現在	抗微生物薬について、新薬も含めて抗微生物薬について実務につなげることを意識して深く理解できるように工夫している。

2 作成した教科書、教材、参考書		
① 「新しい手法による培養困難な細菌の検出と医薬品の微生物管理への応用」に関するスライドを作成し、教材とした。	2005年6月	遺伝子を用いた手法に代表される迅速・高精度な最新の手法の原理、利点、欠点などをまとめたスライドを作成し、これらの手法を医薬品の微生物管理に応用する意義についての教材とした。
② 工場従事者に対する衛生管理に関する教育用のスライドを作成し、教材とした。	2008年2月	①微生物の分類、細菌の形態、性状、生理などの微生物に関する基礎的な事項、②滅菌・消毒など微生物制御法、③現行の微生物管理手法、④微生物汚染の事例などをまとめたスライドを作成し、微生物管理に関する教育の教材とした。
③ 「環境中の微生物と化学物質」に関する教育用スライドを作成し、教材とした。	2009年6月	環境中に存在する微生物、我々の生活と微生物の関わり、また、化学物質への微生物の関わりについてまとめ、基礎的で分かりやすいスライドを作成し、教材とした。
④ 「製薬企業における製品の微生物管理」についてのスライドを作成し、教材とした。	2010年1月	微生物の性状を踏まえた医薬品製品品質確保のための微生物管理の性状と将来像をわかり易くまとめて教材とし、教育講演のスライドとした。
⑤ 近大姫路大学 公衆衛生学Ⅰ 文部科学省通信教育教材を作成した。	2010年4月	近大姫路大学教育学部の通信教育講座に使用するため、公衆衛生における感染症、栄養と健康に関する教材を作成した。
⑥ 近大姫路大学 公衆衛生学Ⅱ 文部科学省通信教育教材を作成した。	2010年4月	近大姫路大学教育学部の通信教育講座に使用するため、公衆衛生における水や大気汚染など環境衛生に関する教材を作成した。
⑦ 「製薬企業における製品の微生物管理の現状と課題」についてのスライドを作成し教材とした。	2010年5月	製薬企業における製品の微生物学的な品質管理の現状について説明し、将来像についてまとめた教材を作成した。
⑧ 「製薬企業における製品の微生物管理の現状と課題」についてのスライドを作成し教材とした。	2011年5月	製薬企業における製品の微生物学的な品質管理の現状について実例を用いて説明し、今後の方向性と課題についてまとめた教材を作成した。
⑨ 「製薬企業における製品の微生物管理の現状と課題」についてのスライドを作成し教材とした。	2012年5月	製薬企業における製品の微生物学的な品質管理の現状について実例を用いて説明し、今後の方向性と課題についてまとめた昨年の教材を改良し、さらに理解しやすいものにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
① 「新しい手法による培養困難な細菌の検出と医薬品の微生物管理への応用」についての教育講演	2005年6月	新適塾「21世紀の薬箱」第65回会合における講演。
② 工場従事者に対する衛生管理に関する教育	2008年2月	医薬品製造工場の工場従事者に対する教育。
③ 「環境中の微生物と化学物質」についての教育講演	2009年6月	近畿職業能力開発大学校における講演。

④ 「製薬企業における製品微生物管理」についての教育講演	2010 年 1 月	大阪大谷大学 5 年生に対する教育講演。
⑤ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2010 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑥ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2011 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑦ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2012 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑧ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2013 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑨ 「からだを守る免疫と環境のいい関係」の中で「身近な微生物と感染症」に関する教育講演	2014 年	教員免許の更新のための講演
⑩ 「製薬企業における製品の微生物管理と現状」に関する教育講演	2015 年 5 月	大阪大学大学院薬学研究科における 5 年生および大学院生への教育講演。
⑪ 「病原体としての微生物」	2018 年 7 月	日本薬科大学における 2 年生への教育講演
⑫ 「微生物のしなやかな生存戦略」に関する教育講演	2019 年 10 月	姫路獨協大学 シニアオープンカレッジ
4 その他教育活動上特記すべき事項		
大阪大学大学院薬学研究科 招へい准教授	2014 年 4 月～2019 年 3 月	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・ 共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名 称	編者・著者名 (共著の場合のみ 記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
① 公衆衛生学Ⅰ	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学 教育 学部通信教育課程	西郷勝康、柳澤振 一郎、◎川井真 好、炬口真理子		
② 公衆衛生学Ⅱ	共著	2010 年 4 月	近大姫路大学 教育 学部通信教育課程	西郷勝康、柳澤振 一郎、◎川井真 好、炬口真理子		
③ 製薬用水の品質管理と設 備/設計・バリデーションノウ ハウ集	共著	2011 年 5 月	技術情報協会	◎川井真好、小高 秀正、小林一三、 高木肇、高橋淳 吉、布目温、人見 英明、村上大吉郎		
④ 第 16 改正 図説 日本薬 局方微生物試験法の手引き	共著	2012 年 3 月	文教出版	◎川井真好、小田 容三、片山博仁、 加藤はる、見理 剛、近田俊文、鈴		

⑤ 第 17 改正 図説 日本薬局方微生物試験法の手引き	共著	2016 年 3 月	文教出版	木里和、小橋せい子、清水信夫、城野久美子、関口道子、竹田智子、高岡文、中川恭好、鳴瀧荘次		
⑥ ベーシック薬学教科書シリーズ 微生物学・感染症学(第 2 版)	共著	2016 年 3 月	化学同人	◎川井真好、太田垣寛、越智充佐、河合充生、見理剛、坂上吉一、清水信夫、鈴木里和、高岡文、竹田智子、田中暁典、近田俊文、鳴瀧荘次、原田敏和、村松由貴、山崎健一		
7 衛生試験法注解・2020 年版	共著	2020 年 3 月	金原出版			
8 第 18 改正 図説 日本薬局方 微生物試験法の手引き	共著	2022 年 3 月	文教出版	◎川井真好、河合充生、見理剛、坂上吉一、鈴木里和、北川剛史、竹田智子、近田俊文、鳴瀧荘次、張紅燕、村松由貴、山崎健一、山本明典		
9 ベーシック薬学教科書シリーズ 微生物学・感染症学	共著	2024 年	化学同人			
【論文】						
① Bacterial population dynamics and community structure in a pharmaceutical manufacturing water supply system determined by real-time PCR and PCR-denaturing gradient gel electrophoresis.	共著	2004 年 12 月	J. Appl. Microbiol. 97(2); 1123-1131	Kawai M, Yamagishi J, Yamaguchi N, Tani K, and Nasu M	6 頁	
② Cell-wall thickness: possible mechanism of acriflavine resistance in methicillin-resistant	共著	2009 年 3 月	J. Med. Microbiol. 58:331-336.	Kawai M., Yamada S., Ishidosiro A., Oyamada Y., Ito H., and Yamagishi J.	6 頁	

<i>Staphylococcus aureus</i>						
③ Mechanisms of action of acriflavine: electron microscopic study of cell wall changes induced in <i>Staphylococcus aureus</i> by acriflavine	共著	2009年6月	Microbiol. Immunol. 53, 481-486	Kawai M., and Yamagishi J.	6頁	
④ 自然環境中のストレスで強くなる細菌	単著	2010年11月	ファルマシア, 46(11), 9-10	川井真好	2頁	
⑤ 世界文化遺産 姫路城の桜花由来の天然酵母による地酒の開発	共著	2016年	兵庫自治学, 22, 109-114	朴 杓汝、中村隆典、更家信、川井真好	6頁	
⑥ 産学共同研究事業の新たな展開によってさらなる地域活性化をめざす ～「姫路城さくら酵母のお酒」を開発商品化したその後の取り組み～	共著	2018年3月	兵庫自治学, 24, 81-85	朴 杓汝、中村隆典、更家信、川井真好	5頁	
⑦ 極限環境で生育する古細菌がヒトに常在する	単著	2018年7月	ファルマシア, 54(7), 716	川井真好	1頁	
⑧ Culture Independent Approach Reveals Domination of Human-oriented Microbes in a Pharmaceutical Manufacturing Facility	共著	2019年9月	European Journal of Pharmaceutical Science 137 104973	M. Kawai, T. Ichijo, Y. Takahashi, M. Noguchi, H. Katayama, O. Cho, T. Sugita, M. Nasu	6頁	
(依頼総説) ① 蛍光染色法を用いた微生物迅速測定法による医薬品の微生物管理	単著	2011年3月	医薬品医療機器 レギュラトリーサイエンス 42(3), 191-197	川井真好	7頁	
② 高精度モニタリング手法による医薬品製造環境の微生物学的評価	単著	2022年1月	薬学雑誌 142 巻1号	川井真好		
【その他】						
(国際学会発表) ① Bacterial population dynamics and community structure in a pharmaceutical manufacturing water supply system.		2004年5月	104 th General Meeting of the American Society for Microbiology	Mako Kawai, Jun-ichi Yamagishi, Nobuyasu Yamaguchi, Katsuji Tani, and Masao Nasu		
② Electron microscopic analysis of the antiseptic-resistance mechanism of methicillin-Resistant <i>Staphylococcus aureus</i> strain KT24.		2006年9月	The 16 th International Microscopy Congress	Sakuo Yamada, Mako Kawai, Ai Ishidoshio, Sachiyo Ohmori, Masanobu Ohuchi and Jun-ichi Yamagishi		
③ Novel mechanism of antiseptic resistance in		2006年12月	10 th Western Pacific Congress on	Mako Kawai, Sakuo Yamada,		

methicillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> .			Chemotherapy and Infectious Diseases	and Jun-ichi Yamagishi		
④ Possible Mechanisms of Cell Wall Thickness induced in Staphylococcus aureus by Quaternary Ammonium Compounds of Antiseptic Agents		2011 年 5 月	111 th General Meeting of the American Society for Microbiology	Mako Kawai, Sakuo Yamada, Kazuya Morikawa and Jun-ichi Yamagishi		
⑤ Antiseptic Susceptibility and Morphological Changes for Metallo-Beta-Lactamase NDM-1 Producing Multidrug-Resistant <i>Escherichia coli</i>		2011 年 9 月	International Union of Microbiological Societies 2011 Congress	Mako Kawai, Katsuko Okuzumi, Akira Hishiyama, Sakuo Yamada, Kenji Fukutsuji, and Jun-ichi Yamagishi		
⑥ Resistance Mechanism of Triclosan in Staphylococci		2014 年 5 月	114 th General Meeting of the American Society for Microbiology	Mako Kawai and Jun-ichi Yamagishi		
⑦ Bioburden and environmental microbiome in a pharmaceutical manufacturing facility		2018 年 7 月	Microbiology of the Built environment Gordon Research Conference	Mako Kawai, Tomoaki Ichijo, Takashi Sugita, Masao Nasu		
⑧ Human Microbes Dominate in a Pharmaceutical Manufacturing Facility as a Model of Space Habitat (講演など)		2019 年 6 月	Joint Symposium: 32nd ISTS & 9th NSAT	Tomoaki Ichijo, Mako Kawai, Takashi Sugita, Masao Nasu		
① 黄色ブドウ球菌 KT24 株の 消毒薬耐性機構の解析		2005 年 9 月	第 17 回微生物シンポ ジウム	川井真好、石徹白 愛、山田作夫、山 岸純一		
② 製品の微生物管理と迅速 測定法		2006 年 2 月	第 21 回 GMP とバリデ ーションをめぐる諸 問題に関するシンポ ジウム	川井真好、納田浩 司		
③ 微生物迅速測定法と医薬 品の微生物管理		2008 年 12 月	第 2 回西播・姫路医療 セミナー	川井真好		
④ 水の衛生微生物管理		2009 年 5 月	第 3 回姫路食品技術 研究会	川井真好		
⑤ 蛍光染色による細菌数の 迅速測定法－微生物管理 への応用と関連事項－		2010 年 7 月	第 81 回薬事エクス パート研修会	川井真好		
⑥ 環境でたくましく生きる 微生物		2013 年 10 月	サイエンスカフェは りま	川井真好		
⑦ 花由来の野生酵母を用い た地酒の開発		2016 年 5 月	平成 28 年度「油化学 関連シンポジウム in 姫路～「大学発研究成 果を商品へ」	川井真好		
⑧ 宇宙居住モデル環境とし て医薬品製造施設におけ る衛生微生物学的検討		2017 年 2 月	第 10 回大気バイオエ アロゾルシンポジウ ム	川井真好、高橋佑 治、松田昭、水野 真人、野口美也 子、片山博仁、那		

⑨ 宇宙居住モデル環境として医薬品製造施設における衛生微生物学的評価	2018年3月	日本薬学会第138年会 シンポジウム	須正夫、一條知昭 川井真好		
⑩ 高精度モニタリング手法による医薬品製造環境の衛生微生物学的評価	2021年3月	日本薬学会第141年会 シンポジウム	川井真好		
(国内学会発表) ① 臨床分離 MRSA に対する消毒薬耐性メカニズム	2004年6月	第52回日本化学療法学会総会	石徹白愛、川井真好、小山田義博、伊藤秀明、山岸純一		
② 臨床分離 MRSA の消毒薬耐性メカニズム	2004年12月	第52回日本化学療法学会西日本支部総会	石徹白愛、川井真好、山田作夫、山岸純一		
③ 臨床分離 MRSA の消毒薬耐性メカニズムの検討	2005年4月	第78回日本細菌学会総会	石徹白愛、川井真好、山田作夫、山岸純一		
④ 黄色ブドウ球菌KT24株の消毒薬耐性機構の解析	2005年5月	第53回日本化学療法学会総会	川井真好、石徹白愛、山田作夫、山岸純一		
⑤ 黄色ブドウ球菌KT24株の消毒薬耐性機構に関する顕微科学的解析	2005年9月	第50回日本ブドウ球菌研究会	山田作夫、川井真好、石徹白愛、大森幸代、大内正信、山岸純一		
⑥ 黄色ブドウ球菌KT24株の消毒薬耐性機構の解析	2006年3月	第79回日本細菌学会総会	川井真好、石徹白愛、山田作夫、山岸純一		
⑦ 黄色ブドウ球菌の消毒薬耐性メカニズム	2006年5月	第54回日本化学療法学会総会	川井真好、山田作夫、山岸純一		
⑧ 黄色ブドウ球菌KT24株の消毒薬耐性メカニズム	2006年5月	日本防菌防黴学会第33回年次大会	川井真好、山田作夫、山岸純一		
⑨ マクロライド耐性ブドウ球菌の特徴ある超微形態	2007年3月	第80回日本細菌学会総会	兵行義、山田作夫、川井真好、山岸純一、大内正信、原田保		
⑩ 黄色ブドウ球菌に対する消毒薬の殺菌作用と形態変化	2008年12月	第56回化学療法学会西日本支部総会	川井真好、山岸純一		
⑪ アクリフラビンによる黄色ブドウ球菌の細胞壁肥厚化	2009年3月	第82回日本細菌学会総会	川井真好、山岸純一		
⑫ 黄色ブドウ球菌に対する消毒薬の抗菌作用と形態変化	2009年3月	第82回日本細菌学会総会	山岸純一、川井真好		
⑬ 黄色ブドウ球菌の細胞壁肥厚化メカニズム	2010年3月	第83回日本細菌学界総会	川井真好、山岸純一		
⑭ 環境中に生息するブドウ球菌属の消毒薬抵抗性	2010年11月	第58回日本化学療法学会西日本支部総会	川井真好、山岸純一		
	2011年3月	日本薬学会第131年	山岸純一、川井真		

⑮ 環境中に存在するブドウ球菌属の消毒薬抵抗性			会	好		
⑯ 本邦初 NDM-1 産生多剤耐性大腸菌の消毒薬感受性		2011 年 3 月	日本薬学会第 131 年会	川井真好、奥住捷子、菱沼昭、山田作夫、山岸純一		
⑰ NDM-1 産生多剤耐性大腸菌の消毒薬感受性		2011 年 6 月	第 59 回日本化学療法学会総会	川井真好、奥住捷子、菱沼昭、山田作夫、山岸純一		
⑱ 健常人の鼻腔より分離した細菌の薬剤感受性		2012 年 3 月	日本薬学会第 132 年会	細野昌弘、小島和久、渥美元樹、裏丸直人、斉藤博、霜島正浩、川井真好、賀来満夫、山岸純一		
⑲ 臨床分離アシネトバクターのキノロン感受性とプラスミド性キノロン耐性遺伝子の検出		2012 年 3 月	日本薬学会第 132 年会	賀来奈那子、松崎利恵子、細野昌弘、及川雄太、霜島正浩、川井真好、賀来満夫、山岸純一		
㉔ ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム		2013 年 3 月	第 86 回日本細菌学会総会	駒津和葵、山岸純一、川井真好		
21 蛍光染色を用いた細菌数測定法の多様な医薬品への適用		2013 年 3 月	日本薬学会第 133 年会	佐野彩香、山口進康、川井真好		
22 ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム		2013 年 6 月	第 61 回日本化学療法学会総会	川井真好、山岸純一		
23 蛍光染色法による細菌数測定法の医薬品原料への適用		2013 年 10 月	第 63 回日本薬学会近畿支部例会	佐野彩香、藤尾実穂、更家信、山口進康、川井真好		
24 ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性		2014 年 2 月	第 29 回日本環境感染症学会総会	川井真好、山岸純一		
25 蛍光染色を用いた細菌数迅速測定法の固形医薬品原料への適用		2014 年 3 月	日本薬学会第 134 年会	藤尾実穂、佐野彩香、更家信、山口進康、川井真好		
25 ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム		2014 年 6 月	第 62 回日本化学療法学会総会	川井真好、更家信、山岸純一		
26 蛍光染色による油状基剤からの生菌の迅速単離		2014 年 10 月	第 64 回日本薬学会近畿支部例会	更家信、川井真好		
27 コアグラゼ陰性ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム		2015 年 2 月	第 30 回日本環境感染症学会総会	川井真好、更家信、山岸純一		
26 コアグラゼ陰性ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム		2015 年 3 月	日本薬学会 135 年会	小林宥吾、更家信、山岸純一、川井真好		
				川井真好、通山由		

27	<i>Staphylococcus aureus</i> の好中球に対する抵抗性の変化	2015 年 5 月	第 62 回生化学会近畿支部例会	美		
28	コアグラゼ陰性ブドウ球菌属のトリクロサン抵抗性メカニズム	2015 年 10 月	第 65 回日本薬学会近畿支部例会	小林宥吾、清水愛、更家信、山岸純一、川井真好		
29	臨床分離キノロン耐性 <i>Acinetobacter baumannii</i> の消毒薬感受性	2016 年 3 月	日本薬学会 136 年会	川井真好、清水愛、寺尾涼、山岸純一		
30	<i>Staphylococcus aureus</i> の温度刺激による抵抗性の変化	2016 年 5 月	第 63 回生化学会近畿支部例会	川井真好、通山由美		
31	消毒薬グルコン酸クロルヘキシジンが <i>Bacillus</i> 属に与える影響	2016 年 10 月	第 66 回日本薬学会近畿支部例会	寺尾涼、迫谷有希子、川井真好		
32	<i>Staphylococcus warneri</i> のトリクロサン抵抗性メカニズム	2016 年 10 月	第 66 回日本薬学会近畿支部例会	清水愛、迫谷有希子、川井真好		
33	医薬品製造施設の高精度微生物モニタリング	2017 年 3 月	日本薬学会 137 年会	高橋佑治、川井真好、那須正夫、一條知昭		
34	高温処理 <i>Staphylococcus aureus</i> の生存能力の獲得	2017 年 5 月	第 64 回日本生化学会近畿支部例会	川井真好、泉谷優衣、炭村一樹、迫谷有希子、通山由美		
35	高温処理 <i>Staphylococcus aureus</i> の生存能力の獲得	2017 年 8 月	微生物生態学会	川井真好 迫谷有希子 通山由美		
36	<i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィーム形成能に影響する環境刺激	2017 年 10 月	第 67 回日本薬学会近畿支部例会	泉谷優衣 迫谷有希子 川井真好		
37	温度刺激による <i>Staphylococcus aureus</i> の薬剤感受性の変化	2017 年 10 月	第 67 回日本薬学会近畿支部例会	炭村一樹 迫谷有希子 川井真好		
38	紫外線が <i>Bacillus subtilis</i> 芽胞に及ぼす影響	2017 年 10 月	第 67 回日本薬学会近畿支部例会	池上啓泰 迫谷有希子 川井真好		
39	高温処理による <i>Staphylococcus aureus</i> の生存能力への影響	2018 年 5 月	第 65 回日本生化学会近畿支部例会	川井真好 通山由美		
40	飲料水および水源中に存在する古細菌の現存量解析	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部例会	坂本智史、大野悠子、川井真好		

41 温度刺激を受けた <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィルム形成		2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部例会	藤浦翔矢、大野悠子、川井真好		
42 清酒醸造工程のバイオペーデン		2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部例会	黍原正安、大野悠子、川井真好		
43 花由来 <i>Saccharomyces cerevisiae</i> の探索およびその利用		2019 年 10 月	第 69 回日本薬学会関西支部総会・大会	畠中悠耶、大野悠子、川井真好		
44 <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィルム形成に関わる環境要因の解析		2019 年 10 月	第 69 回日本薬学会関西支部総会・大会	本庄雄太、大野悠子、川井真好		
45 姫路市の飲用水源に存在する細菌および古細菌の解析		2019 年 10 月	第 69 回日本薬学会関西支部総会・大会	阪本雄大、大野悠子、川井真好		
46 <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィルム形成に関わる環境要因		2020 年 2 月	第 93 回日本細菌学会総会	大野悠子、吉住香菜、本庄雄太、川井真好		
47 <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィルム形成に関わる環境要因		2020 年 3 月	日本薬学会第 140 年会	吉住香菜、大野悠子、川井真好		
48 クロルヘキシジンに曝露した <i>Acinetobacter baumannii</i> の抗菌剤交差耐性		2022 年 3 月	日本薬学会第 142 年会	川井真好、山下明華、安田好美、山岸純一		
49 クロルヘキシジンに曝露した <i>Acinetobacter baumannii</i> の抗菌薬交差耐性メカニズム		2022 年 6 月	第 70 回日本化学療法学会総会	川井真好、山岸純一		
50 酒粕由来細菌による <i>Staphylococcus aureus</i> のバイオフィルム形成阻害		2022 年 10 月	第 72 回日本薬学会関西支部総会	浪平豪、竹中貴彦、安田好美、川井真好		
51 塩化ベンザルコニウムに曝露した <i>Acinetobacter baumannii</i> の薬剤感受性の変化		2022 年 10 月	第 72 回日本薬学会関西支部総会	長谷川竣、安田好美、山岸純一、川井真好		
52 消毒薬耐性 <i>Acinetobacter baumannii</i> の抗菌薬交差耐性機構		2023 年 3 月	第 96 回日本細菌学会総会	川井真好、安田好美、山岸純一		

53 酒粕由来細菌による Staphylococcus aureus のバイ オフィーム形成阻害		2023年3月	第96回日本細菌学会 総会	浪平豪, 安田 好美, 川井真好		
54 微生物試験法 細菌およ び真菌の菌叢解析法		2023年3月	日本薬学会第143年 会	川井真好、菊池 裕、北村壽朗、高 松宏治、千葉隆 司、野本竜平、杉 田隆		
55 消毒薬クロルヘキシジン に曝露したアシネトバクター 属の多剤交差耐性機序 ー排出ポンプおよびポーリン の発現解析を中心としてー		2023年11月	第71回日本化学療法 学会西日本支部総 会・第93回日本感染 症学会西日本地方会 学術集会 合同学会	川井真好、山崎聖 司、西野邦彦、山 岸純一		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

1990年2月～現在	日本薬学会会員
1991年2月～現在	日本細菌学会会員
1999年11月～現在	American Society for Microbiology 会員
2004年3月～現在	日本化学療法学会会員
2015年4月～現在	日本環境感染学会会員
2014年4月～2016年3月	ファルマシアトピックス編集委員
2018年4月～現在	日本薬学会環境衛生部会 衛生試験法 生物試験法委員会 委員

Ⅴ 学内における主な活動

2008年10月～現在	労働安全衛生委員会委員
2010年4月～2016年3月	全学自己評価委員会委員
2012年4月～2018年3月	毒物及び劇物管理委員会委員
2017年4月～2019年3月	ハラスメント人権委員会委員
2019年4月～2021年3月	学生委員
2023年4月～現在	学習支援センター運営委員
2024年4月～現在	学生委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	兒島 憲二	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑨ 講義における資料の工夫	2021 年度前期以降	「分析化学Ⅰ」では、分析法についての理解促進のために、板書することで知識の流れを意識して理解させるように心がけた。また、分析で使用する物品で持参できるものは講義中に実物を示し、分析機器など持参できない物は極力インターネット上で見つけた画像を資料に載せ、分析法を頭の中でイメージできるように工夫した。 「物理・化学系統合演習（PBL）」で取り扱っている医薬品の確認試験では、学生が調査した試験法を、文書だけでなく実物を見てもらおうと、目の前で確認試験を実演してみせることで、理解が深まるように工夫した。授業評価では、実際にこの実演により理解が深まったとのコメントが寄せられていた。
⑩ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2021 年度前期以降	「分析化学実習」では、常時、各実験台を巡回し、適宜学生に声掛けを行うことで、実習に集中するように促した。授業評価では、声掛け時に褒められたことで実習に対する意欲が上がったとのコメントがあった。
2 作成した教科書、教材、参考書		
「分析化学Ⅰ」における復習課題プリント	2021 年度前期以降	知識の整理を目的に、毎回講義毎にその日の講義内容の「復習課題プリント」を作成・配付し、解答・提出させた。その解答から学生個々の理解度などを知り、その後の講義や指導に役立てた。また、採点した答案は、コメントを添えて返却し、学習意欲を向上させるとともに定期試験前の勉強に役立てることができるようにした。
「蛋白質構造機能学」・「ゲノム創薬学」における講義資料	2021 年度前期以降	6 年次までに様々な専門科目で学んできた基礎的な知識の整理・関連付けと、アドバンス教育としての最新のトピックの紹介を両立できるように、オリジナルの講義資料を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
実務実習サポート 「薬局実習」、「病院実習」	2021 年度前期以降	薬学部実務実習の一環として、初回訪問・中盤訪問等で担当学生の実習先を訪れ、実習先の先生方と打合せを行い、実習における学習効果を促進した。
姫路市男女共同参画推進センター “あいめっせ” 主催 2021 理工チャレンジ事業「ひめじリコチャレ応援 2021」第 2 回日程	2021 年 8 月 19 日	姫路市内の中学校に通う女子生徒 15 名を招いて「新型コロナ禍のニュースによく出てくる『PCR 検査』ってなんだろう？」というテーマで、ミニ講義および体験学習を実施した。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著・刊	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 第7章 第3節 酵素精製の手法と最適化	単著	2022年11月	(株)技術情報協会、 バイオプロセスを用いた 有用性物質生産技術		470頁～ 476頁	
【論文】 Solvent engineering studies on recombinase polymerase amplification	共著	2021年2月	Elsevier, Journal of Bioscience and Bioengineering (131巻, 2号)	©Kenji Kojima, Kevin Maafu Juma, Shihomi Akagi, Kaichi Hayashi, Teisuke Takita, Ciara K O' Sullivan, Shinsuke Fujiwara, Yukiko Nakura, Itaru Yanagihara, Kiyoshi Yasukawa	219頁～ 224頁	
Insight into the collagen-degrading activity of a serine protease in the latex of Ficus carica cultivar Masui Dauphine	共著	2021年2月	Oxford University Press, Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry (85巻, 5号)	©Kosaku Nishimura, Keisuke Higashiya Naoki Ueshima, Kenji Kojima, Teisuke Takita, Tatsuya Abe, Toru Takahashi, Kiyoshi Yasukawa	1147頁～ 1156頁	
Insight into the mechanism of thermostabilization of GH10 xylanase from Bacillus sp. strain TAR-1 by the mutation of S92 to E	共著	2021年2月	Oxford University Press, Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry (85巻, 2号)	©Manami Suzuki, Teisuke Takita, Kohei Kuwata, Kota Nakatani, Tongyang Li, Yuta Katano, Kenji Kojima, Kimihiko Mizutani, Bunzo Mikami, Rie Yatsunami, Satoshi Nakamura, Kiyoshi Yasukawa	386頁～ 390頁	
Improvement of Moloney murine leukemia virus reverse transcriptase thermostability by introducing a disulfide bridge in the ribonuclease H region	共著	2021年4月	Oxford University Protein Engineering, Design and Selection, (34巻)	©Yutaro Narukawa, Mako Kandabashi, Tongyang Li, Misato Baba, Haruka Hara, Kenji Kojima, Kei Iida, Takayoshi Hiyama, Sho Yokoe, Tomomi Yamazaki, Teisuke Takita, Kiyoshi Yasukawa	記事番号 006	
Optimization of reaction condition of recombinase polymerase amplification to detect SARS-CoV-2 DNA and RNA using a statistical method	共著	2021年6月	Elsevier, Biochemical and Biophysical Research Communications (567巻)	©Kevin Maafu Juma, Teisuke Takita, Kenji Ito, Masaya Yamagata, Shihomi Akagi, Emi Arikawa, Kenji Kojima, Manish Biyani, Shinsuke Fujiwara, Yukiko Nakura, Itaru Yanagihara, Kiyoshi Yasukawa	195頁～ 200頁	
Modified uvsY by N-terminal hexahistidine tag addition enhances efficiency of recombinase polymerase amplification to detect SARS-CoV-2 DNA	共著	2022年1月	Springer Nature, Molecular Biology Reports (49巻)	©Kevin Maafu Juma, Teisuke Takita, Masaya Yamagata, Mika Ishitani, Kaichi Hayashi, Kenji Kojima, Koichiro Suzuki, Yuri Ando, Wakao Fukuda, Shinsuke Fujiwara, Yukiko Nakura, Itaru Yanagihara, Kiyoshi Yasukawa	2847頁～ 2856頁	

Recombinase polymerase amplification using novel thermostable strand-displacing DNA polymerases from <i>Aeribacillus pallidus</i> and <i>Geobacillus zalihae</i>	共著	2023 年 4 月	Elsevier, Journal of Bioscience and Bioengineering (135 巻, 4 号)	©Kevin Maafu Juma, Eisuke Inoue, Kengo Asada, Wakao Fukuda, Kenta Morimoto, Masaya Yamagata, Teisuke Takita, <u>Kenji Kojima</u> , Koichiro Suzuki, Yukiko Nakura, Itaru Yanagihara, Shinsuke Fujiwara, Kiyoshi Yasukawa	282 頁～ 290 頁	
Application of recombinant human pyruvate kinase in recombinase polymerase amplification	共著	2023 年 11 月	Elsevier, Journal of Bioscience and Bioengineering (136 巻, 5 号)	© <u>Kenji Kojima</u> , Kenta Morimoto, Kevin Maafu Juma, Teisuke Takita, Kazuki Saito, Itaru Yanagihara, Shinsuke Fujiwara, Kiyoshi Yasukawa	341 頁～ 346 頁	
Increase in the solubility of uvsY using a site saturation mutagenesis library for application in a lyophilized reagent for recombinase polymerase amplification	共著	2024 年 2 月	Springer Nature, Molecular Biology Reports (51 巻)	©Kenta Morimoto, Kevin Maafu Juma, Masaya Yamagata, Teisuke Takita, <u>Kenji Kojima</u> , Koichiro Suzuki, Itaru Yanagihara, Shinsuke Fujiwara, Kiyoshi Yasukawa	記事番号 367	
【国内学会発表】 カイコガ前胸腺刺激ホルモンレセプターTorsoの安定発現細胞株の樹立	共同	2021 年 5 月	第 67 回日本生化学会近畿支部例会	今井寛人, 石垣悠里, <u>兒島憲二</u> , 齋藤一樹		
ブレビバチルス分泌発現系で得られる複数分子種の組換えカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH の円二色性スペクトル解析	共同	2021 年 5 月	第 67 回日本生化学会近畿支部例会	平田康祐, <u>兒島憲二</u> , 石垣悠里, 下田佳苗, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH の定量的活性評価に向けたそのチロシンキナーゼ型レセプターTorso の自己リン酸化アッセイ法の確立	共同	2021 年 5 月	第 67 回日本生化学会近畿支部例会	網田遼, 今井寛人, 石垣悠里, 中道祥子, 横田紗代子, 山端裕真, 平田康祐, <u>兒島憲二</u> , 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH の組換え体分子種間のジスルフィド架橋構造の差違 ～ LC-MS および LC-MS/MS を用いた検討～	共同	2021 年 5 月	第 67 回日本生化学会近畿支部例会	小松侑記, 岡屋林, 平田康祐, 下田佳苗, 石垣悠里, <u>兒島憲二</u> , 齋藤一樹		
ブレビバチルス分泌発現系で調製したときに生じるカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH 組換え体の 4 つの分子種	共同	2021 年 11 月	第 94 回日本生化学会大会	<u>兒島憲二</u> , 岡田歩実, 平田康祐, 小松侑記, 岡屋林, 下田佳苗, 石垣悠里, 齋藤一樹		
カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH 組換え体分子種の性状解析	共同	2022 年 3 月	日本農芸化学会 2022 年度大会	<u>兒島憲二</u> , 石垣悠里, 平田康祐, 岡田歩実, 岡屋琳, 下田佳苗, 齋藤一樹		
レセプター阻害薬の探索を指向した生細胞ベース表面プラズモン共鳴測定法の開発	共同	2022 年 3 月	日本薬学会第 142 年会	杉本晃平, <u>兒島憲二</u> , 平田康祐, 石垣悠里, 齋藤一樹		

カイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH をブレバチルス分泌発現系で調製したときに生じる性質の似通った2つの分子種	共同	2022 年 11 月	第 95 回日本生化学会大会	兒島憲二, 石垣悠里, 岡田歩実, 具庸賑, 田頭吉之助, 森藤美帆, 齋藤一樹		
ブレバチルス分泌発現系で得られるカイコガ前胸腺刺激ホルモン PTTH の2つの分子種はジスルフィド架橋構造が異なる	共同	2023 年 3 月	日本農芸化学会 2023 年度大会	兒島憲二, 石垣悠里, 岡田歩実, 田頭吉之助, 齋藤一樹		
ブレバチルス菌で分泌発現したときに得られるカイコガ PTTH の2種類の組換体	共同	2023 年 5 月	第 69 回日本生化学会近畿支部例会	田頭吉之助, 石垣悠里, 森藤美帆, 岡田歩実, 小松侑記, 平田康祐, 兒島憲二, 齋藤一樹		
リガンド刺激に伴うチロシンキナーゼ型レセプターTorso 活性化の検出	共同	2023 年 5 月	第 69 回日本生化学会近畿支部例会	森藤美帆, 兒島憲二, 石垣悠里, 福田雅, 谷口慶樹, 齋藤一樹		
リコンビナントヒトピルビン酸キナーゼのリコンビナーゼポリメラーゼ増幅法への応用	共同	2023 年 10 月	日本農芸化学会中部・関西支部合同大会	森本健太, 兒島憲二, Kevin Maafu Juma, 滝田禎亮, 齋藤一樹, 柳原格, 藤原伸介, 保川清		
ナノディスク作製に向けたカイコガ PTTH レセプター組換体の調製	共同	2023 年 10 月	第 96 回日本生化学会大会	兒島憲二, 石本直大, 松井多暉, 北村洸樹, 谷口慶樹, 福田雅, 今井寛人, 石垣悠里, 齋藤一樹		
Recombinase polymerase amplification using novel thermostable strand-displacing DNA polymerases from Aeribacillus pallidus and Geobacillus zalihae	共同	2023 年 10 月	第 96 回日本生化学会大会	Maafu Kevin Juma, Inoue Eisuke, Asada Kengo, Fukuda Wakao, Morimoto Kenta, Yamagata Masaya, Takita Teisuke, Kojima Kenji, Suzuki Koichiro, Nakura Yukiko, Yanagihara Itaru, Fujiwara Shinsuke, Yasukawa Kiyoshi		
ヒトピルビン酸キナーゼ M1 を ATP 再生酵素とするリコンビナーゼポリメラーゼ増幅法	共同	2024 年 3 月	日本農芸化学会 2024 年度大会	兒島憲二, 森本健太, Kevin Maafu Juma, 滝田禎亮, 齋藤一樹, 柳原格, 藤原伸介, 保川清		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2021 年 4 月～2024 年 3 月	日本農芸化学会関西支部・参与
～現在	日本薬学会・会員
～現在	日本農芸化学会・会員
～現在	日本生化学会・会員

V 学内における主な活動

2021 年 4 月～2023 年 3 月	学習支援センター運営委員会委員
2022 年 4 月～2024 年 3 月	入試教科委員会委員
2023 年 4 月～2024 年 3 月	薬学教育推進委員会委員
2023 年 4 月～2024 年 3 月	薬学部 FD 委員会委員
2023 年 4 月～2024 年 3 月	薬学部 CBT 委員会委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	寺田 一樹	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑪ 講義における資料の工夫 病態・薬物治療学Ⅰ	2021年4月～現在に至る	病態生理学および薬物治療学の講義を行った。講義の中では、薬理学や薬物動態学の基礎知識も並行して解説することで総合的な知識や思考を養う意識付けを促した。
⑫ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫 病態解析学実習	2021年4月～現在に至る	フィジカルアセスメントや臨床検査に関する原理や測定方法、解釈についての実習を行った。また、実際に血糖値や試料を用いて各種検査を行い、得られた検査値から疾患を診断するなどの PBL も行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
「病態解析学実習」実習書		姫路獨協大学にて、血圧や心電図、呼吸器機能などの診断法について実技と解説の実習書を作成した。また実技に関する内容 DVD に収録し学生の教材とした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】						
1. 薬学における放射線・放射性物質の利用	共著	2013年10月	京都廣川書店	長田（赤穂）菜美、加留部善晴、楠田真理子、塩井誠次郎、瀬戸口修一、高田二郎、寺田一樹、松永和久、渡瀬大輔		
2. 放射線・放射性物質の薬学利用	共著	2018年2月	株式会社廣川鉄男事務所	加留部善晴、高田二郎、松永和久、後藤将太郎、瀬戸口修一、寺田一樹、山川博文、渡瀬大輔		
3. 薬学生のための病態検査学	共著	2023年11月	株式会社南江堂	三浦雅一、武橋政則、日塔武彰、多河典子、松永俊之、中川		

				沙織、小迫知弘、木村聡、佐藤友紀、平田尚人、寺田一樹、橋口照人、古川勝敏、町田麻衣子		
【論文】						
1. Low-intensity pulsed ultrasound lessens therapeutically bone loss on overiectomized mice.	共著	2012 年 2 月	Journal of Bone and Mineral Research. 28:111	Kojima Y, Yazawa H, Watanabe T, Terada K, Izumo N, Nishimura Y.		
2. Lactoferrin enhances mineralization on osteoblast like MC3T3-E1 cell.	共著	2014 年 3 月	Lactoferrin 2013. 29-34	Izumo N, Kikuchi S, Ishibashi Y, Terada K, Chiba K, Hidefumi H, Kagaya S, Hoshino T.		
3. Inhibition of nerve growth factor-induced neurite outgrowth from PC12 cells by dexamethasone: signaling pathways through the glucocorticoid receptor and phosphorylated Akt and ERK1/2.	共著	2014 年 3 月	PLoS One. 9(3):e93223.	Terada K, Kojima Y, Watanabe T, Izumo N, Chiba K, Karube Y.		
4. Prediction of inter-individual variability in the pharmacokinetics of CYP2C19 substrates in humans.	共著	2014 年 4 月	Drug Metab Pharmacokinet. 29(5):379-86.	Chiba K, Shimizu K, Kato M, Nishibayashi T, Terada K, Izumo N, Sugiyama Y.		
5. Fluvoxamine moderates reduced voluntary activity following chronic dexamethasone infusion in mice via	共著	2014 年 4 月	Neurochem Int. 69:9-13.	Terada K, Izumo N, Suzuki B, Karube Y, Morikawa T,		

	recovery of BDNF signal cascades.				Ishibashi Y, Kameyama T, Chiba K, Sasaki N, Iwata K, Matsuzaki H, Manabe T.		
6.	Relationship between the acyl chain length of paradol analogues and their antiobesity activity following oral ingestion.	共著	2014 年 7 月	J Agric Food Chem. 62(26):6166-74.	Haratake A, Watase D, Setoguchi S, Terada K, Matsunaga K, Takata J.		
7.	Estimation of Interindividual Variability of Pharmacokinetics of CYP2C9 Substrates in Humans.	共著	2017 年 9 月	<u>J Pharm Sci.</u> 106(9):2695-2703.	Chiba K, Shimizu K, Kato M, Miyazaki T, Nishibayashi T, <u>Terada K</u> , Sugiyama Y.		
8.	Antitumor Effects and Delivery Profiles of Menahydroquinone-4 Prodrugs with Ionic or Nonionic Promoiety to Hepatocellular Carcinoma Cells.	共著	2018 年 7 月	<u>Molecules.</u> 23(7):1738.	Setoguchi S, Watase D, Matsunaga K, Yamakawa H, Goto S, <u>Terada K</u> , Ohe K, Enjoji M, Karube Y, Takata J.		
9.	The Kampo medicine Yokukansan (YKS) enhances nerve growth factor (NGF)-induced neurite outgrowth in PC12 cells.	共著	2018 年 8 月	<u>Bosn J Basic Med Sci.</u> 18(3):224-233.	<u>Terada K</u> , Matsushima Y, Matsunaga K, Takata J, Karube Y, Ishige A, Chiba K.		
10.	Cholinesterase inhibitor rivastigmine enhances nerve growth factor-induced neurite outgrowth in PC12 cells via sigma-1 and sigma-2 receptors.	共著	2018 年 12 月	<u>PLoS One.</u> 13(12):e0209250.	<u>Terada K</u> , Migita K, Matsushima Y, Sugimoto Y, Kamei C, Matsumoto T, Mori M, Matsunaga K, Takata J, Karube Y.		

11. Effects of fluvoxamine on nerve growth factor-induced neurite outgrowth inhibition by dexamethasone in PC12 cells.	共著	2019 年 4 月	<u>Biosci Biotechnol Biochem.</u> 83 (4) :659-665.	Matsushima Y, <u>Terada K</u> , Takata J, Karube Y, Kamei C, Sugimoto Y.		
12. Stimulating muscarinic M ₁ receptors in the anterior cingulate cortex reduces mechanical hypersensitivity via GABAergic transmission in nerve injury rats.	共著	2019 年 2 月	<u>Brain Res.</u> 1704:187-195.	Koga K, Matsuzaki Y, Migita K, Shimoyama S, Eto F, Nakagawa T, Matsumoto T, <u>Terada K</u> , Mishima K, Furue H, Honda K.		
13. Prodrugs for Skin Delivery of Menahydroquinone-4, an Active Form of Vitamin K ₂₍₂₀₎ , Could Overcome the Photoinstability and Phototoxicity of Vitamin K ₂₍₂₀₎ .	共著	2019 年 5 月	<u>Int J Mol Sci.</u> 20(10) :2548.	Goto S, Setoguchi S, Yamakawa H, Watase D, <u>Terada K</u> , Matsunaga K, Karube Y, Takata J.		
14. Sertraline inhibits nerve growth factor-induced neurite outgrowth in PC12 cells via a mechanism involving the sigma-1 receptor.	共著	2019 年 6 月	<u>Eur J Pharmacol.</u> 853:129-135.	Matsushima Y, <u>Terada K</u> , Kamei C, Sugimoto Y.		
15. Effects of geldanamycin on neurite outgrowth-related proteins and kinases in nerve growth factor-differentiated pheochromocytoma 12 cells.	共著	2019 年 7 月	<u>J Pharmacol Sci.</u> 140 (3) :255-262.	Migita K, Matsumoto T, <u>Terada K</u> , Ono K, Hara S.		
16. FF-10501 induces caspase-8-mediated	共著	2019 年 11 月	<u>Int J Hematol.</u>	Matsumoto T,		

apoptotic and endoplasmic reticulum stress-mediated necrotic cell death in hematological malignant cells.			110(5):606-617.	Jimi S, Migita K, <u>Terada K</u> , Mori M, Takamatsu Y, Suzumiya J, Hara S.		
17. Sigma-2 receptor as a potential therapeutic target for treating central nervous system disorders.	共著	2019 年 11 月	<u>Neural Regen Res.</u> 14(11):1893-1894.	<u>Terada K</u> , Migita K, Matsushima Y, Kamei C.		
18. Muscarinic M ₁ receptors stimulated by intracerebroventricular administration of McN-A-343 reduces the nerve injury-induced mechanical hypersensitivity via GABA _B receptors rather than GABA _A receptors in mice.	共著	2020 年 2 月	<u>J Pharmacol Sci.</u> 142(2):50-59.	Migita K, Nishimura A, Eto F, Koga K, Matsumoto T, <u>Terada K</u> , Hara S, Honda K.		
19. Ester derivatives of phyllohydroquinone effectively deliver the active form of vitamin K ₁ topically, owing to their non-photosensitivity.	共著	2020 年 8 月	<u>Eur J Pharm Sci.</u> 155:105519.	Goto S, Setoguchi S, Nagata-Akaho N, <u>Terada K</u> , Watase D, Yamakawa H, Toki E, Koga M, Matsunaga K, Karube Y, Takata J.		
20. Continuous psychosocial stress stimulates BMP signaling in dorsal hippocampus concomitant with anxiety-like behavior associated with differential modulation of cell proliferation and neurogenesis.	共著	2020 年 8 月	<u>Behav Brain Res.</u> 392:112711.	Mori M, Murata Y, Tsuchihashi M, Hanakita N, Terasaki F, Harada H, Kawanabe S, <u>Terada K</u> , Matsumoto T, Ohe K, Mine K, Enjoji M.		

21. Atypical antipsychotic drug ziprasidone protects against rotenone-induced neurotoxicity: An <i>in vitro</i> study	共著	2020 年 9 月	<u>Molecules.</u> 25(18):4206.	<u>Terada K</u> , Murata A, Toki E, Goto S, Yamakawa H, Setoguchi S, Watase D, Koga M, Takata J, Matsunaga K, Karube Y.		
22. Evaluation of Photostability and Phototoxicity of Esterified Derivatives of Ubiquinol-10 and their Application as Prodrugs of Reduced Coenzyme Q10 for Topical Administration.	共著	2020 年 10 月	<u>Biofactors.</u> 46(6):983-994	Setoguchi S, Nagata-Akaho N, Goto S, Yamakawa H, Watase D, <u>Terada K</u> , Koga M, Matsunaga K, Karube Y, Takata J.		
23. Bortezomib enhances G-CSF-induced hematopoietic stem cell mobilization by decreasing CXCL12 levels and increasing vascular permeability.	共著	2021 年 5 月	<u>Exp Hematol.</u> 97:21-31	Matsumoto T, Takamatsu Y, Moriyama H, <u>Terada K</u> , Mori M, Ono K, Migita K, Hara S.		
24. Growth Inhibitory Effects of Ester Derivatives of Menahydroquinone-4, the Reduced Form of Vitamin K2(20), on All-Trans Retinoic Acid-Resistant HL60 Cell Line.	共著	2021 年 5 月	<u>Pharmaceutics.</u> 3(5):758	Yamakawa H, Setoguchi S, Goto S, Watase D, <u>Terada K</u> , Nagata-Akaho N, Toki E, Koga M, Matsunaga K, Karube Y, Takata J.		
25. Oxytocin treatment improves dexamethasone-induced depression-like symptoms associated with enhancement of hippocampal CREB-BDNF signaling in female mice.	共著	2022 年 9 月	<u>Neuropsychopharmacology reports.</u> 42(3):356-361	Mori M, Shizunaga H, Harada H, Tajiri Y, Murata Y, <u>Terada K</u> , Ohe K, Enjoji M.		

26. Delivery of the reduced form of vitamin K2(20) to NIH/3T3 cells partially protects against rotenone induced cell death.	共著	2022 年 11 月	<u>Sci Rep.</u> 12(1):19878	Toki E, Goto S, Setoguchi S, Terada K, Watase D, Yamakawa H, Yamada A, Koga M, Kubota K, Iwasaki K, Karube Y, Matsunaga K, Takata J.		
27. Dynamic Changes of Behavioral Despair, HPA Axis Activity, and Hippocampal Neurogenesis in Male Rats Induced by Social Defeat Stress.	共著	2023 年 2 月	<u>J Integr Neurosci.</u> 22(2):43-43	Harada H, Mori M, Murata Y, Kawanabe S, Terada K, Matsumoto T, Ohe K, Enjoji M.		
28. Bortezomib Increased Vascular Permeability by Decreasing Cell-Cell Junction Molecules in Human Pulmonary Microvascular Endothelial Cells.	共著	2023 年 6 月	<u>Int J Mol Sci.</u> 24(13):10842	Matsumoto T, Matsumoto J, Matsushita Y, Arimura M, Aono K, Aoki M, Terada K, Mori M, Haramaki Y, Imatoh T, Yamauchi A, Migita K.		
29. Rectification of ATP-gated current of rat P2X2 and P2X7 receptors depends on the cytoplasmic N-terminus.	共著	2023 年 10 月	<u>Biochem Biophys Res Commun.</u> 25;688:149213	Migita K, Oyabu K, Terada K.		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2018 年 4 月～現在に至る	日本薬理学会 学術評議員
------------------	--------------

2018 年 4 月～現在に至る	欧州神経精神薬理学会 会員

V 学内における主な活動

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	原野 雄一	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
①数学を基礎とした薬学的課題への対応法	2018年9月～12月	中学・高校数学を用いて薬学の課題を理解する方法を解説した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
基礎数理 薬学を学ぶための数学補講	2016年3月1日 2014年4月1日	リメディアル教育としての数学基礎 薬学で用いる数学のまとめ
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・者の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】						
【論文】“Glycosaminoglycan Binding and Non-endocytic Membrane Translocation of Cell-permeable Octaarginine Monitored by Real Time In-cell NMR Spectroscopy” .		(2017)	Pharmaceuticals, 10, 42 .	Y. Takechi-Haraya, K. Aki, Y. Tohyama, Y. Harano, T. Kawakami, H. Saito, E. Okamura		
“ Water based on a molecular model behaves like a hard-sphere solvent for a nonpolar solute when the reference interaction site model and related theories are employed” .		(2016)	J. Phys.: Condens. Matter, 28, # 344003 .	T. Hayashi, H. Oshima, Y. Harano, M. Kinoshita		
“An Accurate and Efficient Computation Method of the Hydration Free Energy of a Large, Complex Molecule” .		(2015)	J. Chem. Phys., 142, # 175101 .	T. Yoshidome, T. Ekimoto, N. Matubayasi, Y. Harano, M. Kinoshita, M. Ikeguchi		

“Does water drive protein folding?” . “A morphometric approach for the accurate solvation thermodynamics of proteins and ligands” .		(2013) (2013)	Chem. Phys. Lett., 581, 85-90 . J. Comput. Chem., 34, 1969-1974 .	Y. Maruyama, Y. Harano Y. Harano, R. Roth, S. Chiba,		
【その他】						

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

--	--

Ⅴ 学内における主な活動

--	--

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	山中 理央	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義概要の作成とパワーポイントの援用	2007 年 9 月～現在	指定教科書の内容を凝縮し、さらに教科書にはない内容を細くした講義用資料をパワーポイントによって作成し、レジメとして学生に配布して授業を進行している。整理されたパワーポイントとレジメにより授業の内容を明確に提示することができ、学生が授業の流れをフォローしやすいように工夫している。
2. 学生の理解度のチェック	2007 年 9 月～現在	学生の理解度を高める目的で、適宜小テストを行ったり、レポート課題を課している。レポートに関しては、課題についてだけでなく、講義全体の内容で理解できなかった点を質問として記させ、学生の理解度の把握に努め、授業の進行速度や方法の改善に役立てている。また、質問にはできるだけ丁寧な解説をつけて答え、インターラクティブになるようにしている。
3. グループ制による学習の意欲向上と効率化	2009 年 4 月～現在	効果的な授業スタイルは、科目によって多少異なると思われる。薬学英語の講義においては、実用面を考え、知識を与えるだけの授業にならないように、学生に積極的に発表や作業をさせるように仕向けている。そのために、学生同士のグループワークを取り入れ、ある課題に対してディスカッションをさせ、答えを導かせるようにしている。学生の講義への参加意欲を高める意味でも効果的な方法であると思われる。
4. 「学生による授業評価アンケート」の活用	2008 年 4 月～現在	学生の講義に関する意見を参考に、次年度以降の授業内容、方法の改善に役立てている。
5. 中間テストの実施	2010 年 11 月～現在	有機化学Ⅲの講義では、全講義日程の中間で、一度まとめを行うことにより理解度を高めることを目的として実施している。
6. 講義・実験動画の作成	2020 年 4 月～現在	2020 年度、2021 年度前期は、オンライン授業に対応するために活用した。2021 年度後期以降は、講義の予習復習用の補助教材として活用している。
7. 実験の演示	2023 年 4 月～現在	リメディアル科目である「実感する化学」にて、講義のテーマに関連する簡単で安全な実験を演示し、学生の理解度を高める工夫を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 基礎化学講義プリント	2008 年 4 月～現在	専門職の養成学部であることを意識し、薬学コアカリキュラムに合わせるために、指定教科書の内容を凝縮し、さらに教科書にはない内容を細くした講義用資料をパワーポイントによって作成し、レジメとして学生に配布している。
2. 基礎化学講義動画	2020 年 4 月～現在	2020 年度、2021 年度前期は、オンライン授業に対応するためにパワーポイントのアニメーション機能を利用し、さらに音声を追加した講義動画を作成した。また、2021 年度後期以降は、講義の予習復習用の補助教材として適宜動画を更新して、利用している。
3. 有機合成化学（有機化学Ⅲ）講義プリント	2009 年 9 月～現在	専門職の養成学部であることを意識し、薬学コアカリキュラムに合わせるために、指定教科書の内容を凝縮し、さらに教科書にはない内容を細くした講義用資料をパワーポイントによって作成し、レジメとして学生に配布している。

4. 有機合成化学（有機化学Ⅲ）講義動画	2020年9月～現在	2020年度、2021年度前期は、オンライン授業に対応するためにパワーポイントのアニメーション機能を利用し、さらに音声を追加した講義動画を作成した。また、2021年度後期以降は、講義の予習復習用の補助教材として適宜動画を更新して、利用している。
5. PBL 用有機化合物の構造決定(MS 及び IR) プリント	2009年10月～現在	問題解決型授業(Problem-based learning)用として、その課題を解くのに必要となる基礎知識について解説したプリントを作成し、事前講義の資料として用いている。
6. PBL 用有機化合物の構造決定(MS 及び IR) 講義動画	2020年9月～現在	PBLの講義プリントに沿った動画をいくつか作成し、オンライン講義で使用した。また、2022年度以降は、実習の予習復習用の補助教材として適宜動画を更新して、利用している。
7. 有機化学実習書	2009年4月	有機化学実習の際に用いる手引として、実験の操作手順の詳細を記した実習書を作成した。
8. 有機化学実習—実験操作動画と講義動画	2020年6月	2021年度は、オンライン実習に対応するために実験操作を撮影し、字幕や音声を追加した実験動画を作成した。また、2022年度以降は、実習の予習復習用の補助教材として適宜動画を更新して、利用している。
9. 応用演習Ⅰ（有機化学）講義プリント	2015年9月～現在	三年生に対して行っている応用演習Ⅰの問題演習用プリントを作成し、講義のレジメとして配布している。
10. 応用演習Ⅰ（有機化学）講義動画	2020年10月	応用演習Ⅰの講義プリントに沿った動画をいくつか作成し、オンライン講義で使用した。
11. 総合演習Ⅱ（有機化学）講義プリント	2015年4月～現在	六年生に対して行っている総合演習Ⅱのプリントを作成し、講義のレジメとして配布している。
12. 総合演習Ⅱ（有機化学）講義動画	2020年5月	総合演習Ⅱの講義プリントに沿った動画をいくつか作成し、オンライン講義で使用した。
13. 有機化学Ⅲ練習問題プリント①	2015年9月	有機化学Ⅲの講義の問題演習用に作成し、配布している。（講義の前半用）
14. 有機化学Ⅲ練習問題プリント②	2015年11月	有機化学Ⅲの講義の問題演習用に作成し、配布している。（講義の後半用）
15. 有機化学Ⅲ補充問題プリント①	2015年9月	有機化学Ⅲの講義の自習用に問題演習プリントを作成し、配布している。（講義の前半用）
16. 有機化学Ⅲ補充問題プリント②	2015年11月	有機化学Ⅲの講義の自習用に問題演習プリントを作成し、配布している。（講義の後半用）
17. 総合演習Ⅱ（有機化学）基礎有機化学補充問題プリント	2016年4月～2019年6月	六年生に対して行っている総合演習Ⅱにおいて、有機化学の基礎事項（共鳴、混成軌道、反応機構）の復習用の問題演習プリントを作成し、配布している。
18. 応用演習Ⅲ（有機化学）講義プリント	2018年9月～現在	4年生に対して行っている応用演習Ⅲの問題演習用プリントを作成し、講義のレジメとして配布している。
19. 応用演習Ⅲ（有機化学）講義動画	2020年11月	4年生に対して行っている応用演習Ⅲの講義のレジメに沿った動画をいくつか作成し、オンライン講義で使用した。
20. 基礎実験（化学）実験動画	2021年12月～現在	2021年度は、オンライン実習に対応するために実験操作を撮影し、字幕や音声を追加した実験動画を作成した。また、2022年度以降は、実習の予習復習用の補助教材として適宜動画を更新して、利用している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

論文

(共著)

Nucleotide sequence context influences HIV replication fidelity by modulating reverse transcriptase binding and product release

Rio Yamanaka and John Termini, *Bioscience Trends*, 1, 52–61(2007)

Asymmetric Reduction of Ketones with a Germinated Plant

Matsuo, K.; Kawabe, S.; Tokuda, Y.; Eguchi, T.; Yamanaka, R.; Nakamura, K. *Tetrahedron: Asymm.* 19, 157–159(2008)

Recent progress in biocatalysis for asymmetric oxidation and reduction

Tomoko Matsuda, Rio Yamanaka, and Kaoru Nakamura, *Tetrahedron: Asymm.* 20 (5), p.513–557 (2009)

Mutagenic potential of DNA glycation: miscoding by (*R*)- and (*S*)-N²-(1-carboxyethyl)-2'-deoxyguanosine.,

Wuensche GE, Tamae D, Cercillieux A, Yamanaka R, Yu C, Termini J.

Biochemistry, 49(9):1814–21 (2010)

Reduction of exogenous ketones depends upon NADPH generated photosynthetically in cells of the cyanobacterium *Synechococcus* PCC 7942.

Yamanaka R, Nakamura K and Murakami A

AMB Express, 1:24(8 pages) (2011)

Photobiocatalyzed asymmetric reduction of ketones using *Chlorella* sp. MK201.

Itoh K, Nakamura K, Aoyama T, Matuba R, Kakimoto T, Murakami M, Yamanaka R, Muranaka T, Sakamaki H, Takido T.

Biotechnol Lett. 34:2083–2086 (2012)

Selective synthesis of cinnamyl alcohol by cyanobacterial photobiocatalysts, Yamanaka R, Nakamura K, Murakami M, Murakami A, *Tetrahedron Lett.* 56, 1089–1091 (2015)

Asymmetric visible-light photobiocatalytic reduction of β -keto esters utilizing the cofactor recycling system in *Synechocystis* sp. PCC 6803. Shusei Tanaka, Hideo Kojima, Satomi Takeda, Rio Yamanaka, Tetsuo Takemura, *Tetrahedron Lett.* 61, Article 151973 (2020)

Effect of organic solvents on asymmetric reduction of β -keto esters using *Synechocystis* sp. PCC 6803. Shusei Tanaka, Hideo Kojima, Satomi Takeda, Rio Yamanaka, Tetsuo Takemura, *Tetrahedron Lett.* 77, Article 153249 (2021)

著書

(共著)

Stereoselective Synthesis of Drugs and Natural Products

Andrushko, V, Andrushko, N (eds) Wiley-Blackwell

Biocatalytic Asymmetric Reduction of C=O and Activated C=C Bonds in Stereoselective Synthesis

Matsuda T, Yamanaka R, Nakamura K

(2013)

Chapter 11. Enzymatic Asymmetric Reduction of Carbonyl Compounds

Tomoko Matsuda, Rio Yamanaka, Kaoru Nakamura

In Green Biocatalysis, Ed. R. N. Patel, Wiley & Sons, p 307–330 (2016)

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2004年4月～現在	アメリカ化学会会員
2008年6月～現在	有機合成化学協会会員
2009年2月	有機合成化学協会 研究企画賞（住友化学）受賞
2015年1月～現在	日本農芸化学会会員
2018年12月～現在	姫路市自然保護審議会委員
2023年7月～現在	姫路市新産業創出支援補助金事業評価委員

Ⅴ 学内における主な活動

2007年4月～2010年3月	全学自己点検評価委員会委員
2007年4月～2010年3月	全学FD委員会委員
2008年6月	トライアルウィーク（植物を利用した化学実習・カメレオンボール） 広嶺中学
2008年12月～2010年3月	全学リメディアル委員会委員
2008年12月	出前講義（右と左の化学） 兵庫県立生野高校
2010年4月～2014年3月	薬学部 CBT 委員
2010年4月～2018年3月	生命倫理委員会委員
2011年10月～	企画委員
2012年4月～2016年3月	セクシュアル・ハラスメント人権委員会委員
2014年4月～2015年3月	卒試委員
2017年4月～現在	共通機器管理委員
2017年7月	オープンキャンパス体験実習（植物を利用した化学実習・カメレオンボール）
2020年4月～現在	薬学教育推進委員
2021年4月～2023年3月	教務委員、全学共通科目実施委員会委員
2023年8月	たつの 夏のリコチャレ（医薬品の合成と分析）
2023年8月	オープンキャンパス体験実習（ルミノールの発光実験）
2024年3月	姫路市 中学生のためのサイエンスラボ（医薬品の合成と分析を体験しよう！）

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	山本 泰弘	大学院における研究指導担当 資格の有無（ 無 ）
----	--------------	----	-----	----	-------	-----------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 学部実習における実践 ①生化学実習における蛋白質解析実習	2009 年 9 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、生化学実習（全 8 回）を担当した。蛋白質の定量法として Bradford 法、蛋白質の分離・精製法として SDS-PAGE およびウエスタンブロッティングの技術的な指導を行った。得られたデータの解釈について、学生が自ら考えて考察できるための問題提起をし、考えながら実験を行うことの重要性を学ばせた。
②基礎生物学実習における基礎的生物学実験手法の指導	2009 年 11 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、基礎生物学実習（全 4 回）を担当した。生物学実験を行うために必要な技術であるピペット操作、各種測定機器の原理ならびに実験動物の取り扱いについて指導を行った。また、生命科学における実際の生物を材料として扱うことの意義と重要性を、実習全般を通して学生に認識させた。
③生理学実習におけるヒトおよびラットの生理学実験の指導	2009 年 11 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、生理学実習（全 8 回）を担当した。自らが被験者となつて行う腎機能、感覚機能実習と、実験動物を用いた各臓器の機能形態、血液学実習の指導を行った。教科書で学ぶ知識について、実際の実習を通して五感で体験することにより、深く理解できることを目的とした。
④薬理学実習における平滑筋作用薬物を用いた薬理学実験の指導	2010 年 5 月 ～2011 年 5 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、薬理学実習（全 8 回）を担当した。平滑筋に作用する薬物の種類と作用様式について、実験動物から得た腸管に作動薬および拮抗薬を適用し、収縮反応を観察することによって学ばせた。実験の合間には関連する薬物についての口頭試問を課し、なるべく多くの薬物の理解を促した。
⑤模擬薬局実習における散剤実習	2010 年 9 月～11 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、模擬薬局実習（全 35 回）を担当した。主担当として散剤の計量調剤実習を担当した。実際の医療現場で汎用される器具や機器を用いて、調剤の概念と方法について体験させた。また、基本的な手法であるが、実際の医療現場では少なくなりつつある薬包紙の手分包についても体験させ、どのような状況にでも対応できる薬剤師を目指すことの重要性を認識させた。
(2) 学部講義における実践 ①生理学 II における講義内容の工夫	2012 年 4 月～2023 年 3 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、生理学 II 講義（全 10 回）を担当した。従来の教科書輪読、板書に加えて、Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。また、スライド中のいくつかの重要語句を空欄にした、穴埋め形式による講義を行い、学生の積極的な聴講を促した。
②新薬論における講義内容の工夫	2012 年 4 月～2014 年	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、新薬論講義（全

③実用薬学英語 IV における講義内容の工夫	8 月 2012 年 9 月～2023 年 3 月	15 回)を担当した。近年の新薬の紹介に先だって、関連領域の従来医薬品の薬理作用の復習を行い、新薬との相違点が明確に理解できるような講義とした。講義スタイルは Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。
④機能形態学における講義内容の工夫	2013 年 9 月～現在	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、実用薬学英語 IV 講義 (全 8 回) を担当した。専門英語の読解には専門英単語の知識が不可欠であるため、授業内での専門英単語の暗記の時間を設けた。また英単語の小テストを毎講義にわたり行った。
⑤薬理学における講義内容の工夫	2018 年 9 月～2019 年 3 月	姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科において、機能形態学講義 (全 15 回) を担当した。講義においては従来の教科書輪読、板書に加えて、Microsoft Power Point を用いたアニメーションを多用したスライドショーによる講義を行い、学生の視覚に訴えた講義を展開した。また、スライド中のいくつかの重要語句を空欄にした、穴埋め形式による講義を行い、学生の積極的な聴講を促した。各講義時間の冒頭に前回までの講義内容に関する記述式の小テストを行い、知識を定着させることを促した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1) 生理学 II 講義資料	2012 年 4 月～2023 年 3 月	生理学 II の講義資料 (PowerPoint 配布資料、演習問題)
(2) 新薬論講義資料	2012 年 4 月～2014 年 8 月	新薬論の講義資料 (PowerPoint 配布資料、演習問題)
(3) 実用薬学英語 IV 講義資料	2012 年 9 月～2023 年 3 月	実用薬学英語 IV の講義資料 (PowerPoint 配布資料)
(4) 機能形態学講義資料	2013 年 9 月～現在	機能形態学の講義資料 (PowerPoint 配布資料、演習問題)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・ 者別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記 入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 1. Connective tissue growth factor induces cardiac hypertrophy through Akt signaling.	共著	2008 年 3 月	Biochem Biophys Res Commun. 2008 May 30;370(2). Epub 2008 Mar 28.	Nozomi Hayata, Yasushi Fujio, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tomohiko Iwakura, Masanori Obana, Mika Takai, Tomomi Mohri, Sinpei Nonen, Makiko Maeda, Junichi Azuma	274-278	
2. Atrogin-1 ubiquitin ligase is upregulated by doxorubicin via p38-MAP kinase in cardiac myocytes.	共著	2008 年 3 月	Cardiovasc Res. 2008 Jul 1;79(1). Epub 2008 Mar 17.	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Yuki Hoshino, Takashi Ito, Tetsuro Nariai, Tomomi Mohri, Masanori Obana, Nozomi Hayata, Yoriko Uozumi, Makiko Maeda, Yasushi Fujio, Junichi Azuma	89-96	
3. Fibroblast growth factor 2 induces apoptosis in the early primary culture of rat cortical neurons.	共著	2010 年 8 月	Exp Cell Res. 2010 Aug 15;316(14).	Tatsurou Yagami, Kenkichi Takase, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Keiichi Ueda, Nobuo Takasu, Noboru Okamura, Toshiyuki Sakaeda, Masafumi Fujimoto	2278-2290	

4. Proteomic identification of protein targets for 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ in neuronal plasma membrane.	共著	2011 年 3 月	PLoS One. 2011 Mar 18;6(3).	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Kenkichi Takase, Junji Kishino, Megumi Fujita, Noboru Okamura, Toshiyuki Sakaeda, Masafumi Fujimoto, Tatsuro Yagami	e17552	
5. 15-deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ enhanced the anti-tumor activity of camptothecin against renal cell carcinoma independently of topoisomerase-II and PPAR γ pathways.	共著	2011 年 7 月	Biochem Biophys Res Commun. 2011 July 8; 410(3).	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Megumi Fujita, Hiromi Koma, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura, Tatsuro Yagami	563-567	
6. Cytotoxicity of troglitazone through PPAR γ -independent pathway and p38 MAPK pathway in renal cell carcinoma.	共著	2011 年 12 月	Cancer Lett. 2011 Dec 22; 312(2).	Megumi Fujita, Tatsuro Yagami, Miki Fujio, Chiaki Tohji, Kenkichi Takase, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Kyoko Sawada, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura	219-227	

7. Involvement of the mevalonate pathway in anti-proliferative effect of zoledronate on renal cell carcinoma, ACHN.	共著	2012 年 5 月	Oncol Rep. 2012 May;27(5)	Megumi Fujita, Chiaki Tohji, Kyoko Sawada, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tsutomu Nakamura, Tatsuro Yagami, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura.	1371-1376	
8. Maternal deprivation in the middle of a stress hyporesponsive period decreases hippocampal calcineurin expression and causes abnormal social and cognitive behaviours in adult male Wistar rats: relevance to negative symptoms of schizophrenia.	共著	2012 年 6 月	Behav. Brain Res. 2012 Jun 15;232(1)	Kenkichi Takase, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tatsuro Yagami	306-315	
9. Cytotoxicity of 15-Deoxy- $\Delta^{12,14}$ -prostaglandin J ₂ through PPAR γ -independent Pathway and the Involvement of the JNK and Akt Pathway in Renal Cell Carcinoma.	共著	2012 年 9 月	Int. J. Med. Sci. 2012; Sep 9(7)	Megumi Fujita, Chiaki Tohji, Yoko Honda, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tsutomu Nakamura, Tatsuro Yagami, Motohiro Yamamori, Noboru Okamura	555-566	
10. L-type voltage-dependent calcium channels as therapeutic targets for neurodegenerative diseases.	共著	2012 年 10 月	Curr Med Chem. 2012; Oct 19(28)	Tatsuro Yagami, Hiromi Kohma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	4816-4827	

11. L-type voltage-dependent calcium channel is involved in the snake venom group IA secretory phospholipase A2-induced neuronal apoptosis.	共著	2013 年 3 月	Neurotoxicolgy. 2013 35C	Tatsuro Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Kohma, Tsutomu Nakamura, Nobuo Takasu, Noboru Okamura	146-153	
12. Leukotriene receptor antagonists, LY293111 and ONO-1078, protect neurons from the sPLA2-IB-induced neuronal cell death independently of blocking their receptors.	共著	2013 年 9 月	Neurochem. Int. 2013 63(3)	Tatsuro Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Kohma	163-171	
13. Treatment of etoposide combined with 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 exerted synergistic antitumor effects against renal cell carcinoma via peroxisome proliferator-activated receptor- γ -independent pathways.	共著	2014 年 3 月	Mol. Clin. Oncol. 2014 Mar;2(2)	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Hiroki Hiramatsu, Misa Abe, Kazunori Murakami, Asako Ohya, Tatsuro Yagami	292-296	
14. Hydrogen peroxide mediated the neurotoxicity of an antibody against plasmalemmal neuron-specific enolase in primary cortical neurons.	共著	2015 年 7 月	Neurotoxicolgy. 2015 Jul;49	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Tatsuro Yagami	86-93	
15. Localization of 14-3-3 ζ on the neuronal cell surface.	共著	2015 年 11 月	Exp. Cell Res. 2015 Nov 1;338(2)	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Tatsuro Yagami	149-61	
16. 15-Deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 induced neurotoxicity via suppressing phosphoinositide 3-kinase.	共著	2016 年 10 月	Neuropharmacology. 2016 Oct 19;113(Pt A)	Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Ayaka Nisii, Tatsuro Yagami	416-425	

17. Synergistic effects of 15-deoxy Δ 12,14-prostaglandin J2 on the anti-tumor activity of doxorubicin in renal cell carcinoma.	共著	2017年3月	Biochem. Biophys. Rep. 2017; 9	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Takehiro Yamamoto, Hiromi Koma, Ayaka Nishii, Tatsuro Yagami	61-66	
18. Anti-heat shock 70 kDa protein antibody induced neuronal cell death.	共著	2017年6月	Biol. Pharm. Bull. 2017; 40	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Sayaka Nisii, Tatsuro Yagami	402-412	
19. 15-deoxy- Δ 12, 14-prostaglandin J2 enhances anticancer activities independently of VHL status in renal cell carcinomas.	共著	2019年7月	Biochem. Biophys. Rep.	Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Tomonari Fujita, Tatsuro Yagami	100608	
20. 4,4-Diisothiocyanatostilbene Disulfonic Acid Enhanced 15-Deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2-Induced Neuronal Apoptosis.	共著	2019年11月	Biological and Pharmaceutical Bulletin vol.42 No.11	Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiroaki Kumagai, Tatsuro Yagami	1913-1920	
21. 15-deoxy- Δ 12, 14-prostaglandin J2 inhibits cell migration on renal cell carcinoma via down-regulation of focal adhesion kinase signaling.	共著	2020年1月	Biological and Pharmaceutical Bulletin vol.43 No.1	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Tatsuro Yagami	153-157	
22. Anti-Neuron-Specific Enolase Antibody Induced Neuronal Cell Death in a Novel Fashion.	共著	2020年5月	Molecular Neurobiology. 2020 May;57(5)	<u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma, Tatsuro Yagami	2265-2278	

23. A plausible involvement of plasmalemmal voltage - dependent anion channel 1 in the neurotoxicity of 15 - deoxy - Δ 12,14 - prostaglandin J2.	共著	2020 年 12 月	Brain and behavior 10 (12)	Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Noboru Okamura, Tatsurou Yagami	e01866	
24. タウリンの腎臓癌細胞に対する抗腫瘍作用 【総説】	共著	2023 年 9 月	タウリンリサーチ, 9 巻 1 号, 2023 年 9 月	<u>山本泰弘</u> , 高馬宏美, 矢上達郎	26-28	
1. Arachidonate Cascade in the Intensive Insulin Therapy for Critically Ill Patients with Sepsis: Roles of Prostaglandins on Hyperglycemia-Impaired Immunity	共著	2012 年 7 月	Letters in Drug Design & Discovery, 2012; 9 (6)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> Hiromi Koma, Kenkichi Takase	557-567	
2. L-type voltage-dependent calcium channels as therapeutic targets for neurodegenerative diseases	共著	2012 年 10 月	Curr Med Chem. 2012 Oct 19(28)	Tatsurou Yagami, Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	4816-4827	
3. The Role of Secretory Phospholipase A2 in the Central Nervous System and Neurological Diseases	共著	2014 年 4 月	Mol Neurobiol. 2014 Apr;49(2)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> Hiromi Koma	863-76	
4. Pathophysiological Roles of Cyclooxygenases and Prostaglandins in the Central Nervous System	共著	2016 年 9 月	Mol Neurobiol. 2016 Sep;53(7)	Tatsurou Yagami, Hiromi Koma, <u>Yasuhiro Yamamoto</u>	4754-71	
5. 15-deoxy- Δ 12,14-prostaglandin J2 in neurodegenerative diseases and cancers	共著	2017 年 1 月	Oncotarget 2017; 8(6)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma	9007-9008	
6. Physiological and pathological roles of 15-deoxy - Δ 12,14-prostaglandin J2 in the central nervous system and neurological diseases	共著	2018 年 3 月	Mol Neurobiol. 2018 Mar;55(3)	Tatsurou Yagami, <u>Yasuhiro Yamamoto</u> , Hiromi Koma	2227-2248	
7. Pathophysiological Roles of Intracellular Proteases in	共著	2019 年 5 月	Mol Neurobiol. 2019 May;56(5):	Tatsurou Yagami,	3090-3112.	

Neuronal Development and Neurological Diseases.				<u>Yasuhiro Yamamoto,</u> Hiromi Koma		
【翻訳】 1. ラットの行動解析ハンドブック	共著	2015 年 10 月	西村書店	高瀬堅吉，柳井修一，山口哲生 監訳	79-87	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2002 年 10 月～現在	日本薬理学会会員
2012 年 2 月～現在	日本薬学会会員
2023 年 1 月～現在	国際タウリン研究会会員
2012 年 7 月 15、16 日	第 61 回 認定実務実習指導薬剤師のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ）in 近畿においてタスクフォースを務める
2013 年 7 月 14、15 日	第 67 回 認定実務実習指導薬剤師のためのワークショップ（薬学教育者ワークショップ）in 近畿においてタスクフォースを務める
2016 年 4 月 21 日	西播姫路医療セミナーにおいて講師を務める
2016 年 11 月 23 日	第 5 回姫路獨協大学薬学部卒後教育セミナーにおいて講師を務める
2017 年 8 月 27 日	兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会連携 1 周年記念大会において講師を務める

Ⅴ 学内における主な活動

2011 年 9 月～現在	薬学共用試験 CBT 委員
---------------	---------------

所属	薬学部 医療薬学科	職名	准教授	氏名	若林 千里	大学院における研究指導担当 資格の有無（ ）
----	--------------	----	-----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑬ 講義における資料の工夫	2023 年 4～7 月	調剤学の講義では、各講義の終わりに小テストを実施し、特に正解率が低かった問題については次回の講義の冒頭に復習を行うことで、知識の定着を図るようにした。
⑭ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2023 年 6 月	処方解析 PBL は例年、各班ごとに異なる 1 つの課題を配布して班ごとに調べて発表を行い、自分の班の課題だけに取り組んで終了、という形式であった。本年は他班が取り組んだ症例についても各自で調べさせ、模範解答を配布して実習終了後に各自の解釈との比較を行わせることで、さまざまな症例に対する理解を深めさせた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
		なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
		なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		
		なし

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
1. Possible involvement of Interleukin-17A in the deterioration of prepulse inhibition on acoustic startle response in mice.	共著	2023 年 6 月	Wiley, Neuropsychopharmacol Rep.43(3) .	Wakabayashi C, Kunugi H.	pp. 365-372.	
2. 当帰四逆加呉茱萸生姜湯及び桂枝茯苓丸がマウスの行動試験に与える影響について		2023 年 10 月	第73回日本薬学会関西支部総会・大会	中島 穂香、 若林 千里		ポスター

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

学会	活動
第 73 回日本薬学会関西支部	第 73 回日本薬学会関西支部総会・大会ポスター発表優秀賞審査員

Ⅴ 学内における主な活動

教育推進委員	薬学総合演習 II, III の作問取りまとめ、4 年生 CBT 対策補講の実施、6 年生模擬試験フォローアップ補講の実施、国家試験過去問冊子作成・配布
薬学共用試験 OSCE	OSCE 委員、ステーション責任者

所属	薬学部 医療薬学科	職名	講師	氏名	加藤 史恵	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑮ 講義における資料の工夫	2021 年 6 月～	「薬剤管理指導学」や「処方解析学」において、PowerPoint を用いて講義資料を作成している。各疾患の概要や治療法について、最新のガイドラインの内容を取り入れている。また、新薬についてもできるだけ取り入れるようにしている。 資料は、講義の 2～3 日前にクラスルームに PDF 形式でアップロードしている。講義までに予習をするよう、資料の一部（主に薬理作用）を括弧抜きとしている。 講義後に Google フォームを用いて課題を出題し、自己学習（復習）ができるようにしている。 学生による授業評価アンケートをもとに、講義方法や講義資料を改善している。
⑯ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	1998 年 4 月～	①神戸薬科大学 製剤学実習 顆粒剤・錠剤の製造、製剤試験、院内製剤および無菌製剤の調製を行った。実際の製剤機器を使用することにより授業の復習も行うことができた。院内製剤の調製では実際に医療現場で使用されている製剤（フィルム剤、坐剤、注射剤）を調製し、添加剤や医薬品の剤形の特徴について理解が深まるようにした。
	2018 年 5 月～2	②医療法人社団医仁会ふくやま病院 病院実務実習 認定実務実習指導薬剤師として、実習生の指導を行った。病院実習開始後、早期より病棟、各種カンファレンス、院内の勉強会、他部署見学等に参加させ、学生のモチベーション向上に繋がった。
	2021 年 9 月～	③姫路獨協大学 模擬薬局実習 主に、座学、計量調剤実習を担当している。座学（演習）では問題発見・問題解決能力を育成することを目的として PBL 形式を取り、臨床現場で遭遇する症例を用いて課題についてグループで討議し、発表を行っている。計量調剤では、繰り返し練習をすることで、スムーズに調剤が行えるようにしている。計量調剤に関する計算問題を作成し、繰り返し問題を解くことで理解度の向上につながった。
2 作成した教科書、教材、参考書		
薬剤管理指導学 処方解析学	2021 年 6 月～ 2021 年 9 月～	講義ごとに資料を作成し、学生に配布している。 資料は印刷物を配布、もしくは、クラスルームに PDF ファイルをアップロードし、学生の学修スタイルに応じて選択できるようにしている。
薬学応用演習 薬学総合演習	2021 年 9 月～ 2021 年 9 月～	演習問題および解説用資料を作成している。問題を解いた後、講義時間内に解説を行っている。
模擬薬局実習	2021 年 9 月～	計量調剤実習の実習書および座学の説明用資料を配布している。計量調剤の手技動画（散剤、水剤、軟膏剤）を作成してクラスルームにアップロードし、学生がいつでも視聴できるようにしている。

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿におけるタスクフォース	2022 年～現在	「認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿」にタスクフォースとして参加し、認定実務実習指導薬剤師の養成に関わっている。

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・者の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】 できる薬剤師とよばれるために 上手に使いたい薬学ナレッジ101	共著	2021 年 12 月	じほう	北河修治、加藤史恵 他	35-50、 143-149	
【学会発表】 頸部食道癌の難治性神経障害性疼痛に対し、メサドンとタペンタドールの併用が有効であった一例	共同	2019 年 6 月	第13回日本緩和医療薬学会年会	荒木優子、中村由紀、弘津理子、中山智恵、加藤史恵、西村明子、平田朗子、新家治子、譜久山仁		学会発表
緩和ケア病棟を持つ病院の薬剤師の役割～ニーズに合わせた勉強会の開催～	共同	2019 年 6 月	第13回日本緩和医療薬学会年会	西村明子、荒木優子、中村由紀、弘津理子、中山智恵、加藤史恵		学会発表
心アミロイドーシスに起因する心不全の咳嗽にヒドロモルフォンが著効した一例	共同	2020 年 8 月	第25回日本緩和医療学会学術大会	西村明子、中山智恵、中村由紀、弘津理子、荒木優子、加藤史恵、前田たず、藤井恵美、新家治子、譜久山博子、譜久山仁		学会発表
薬学生と薬局薬剤師との間における簡易懸濁法の有用性に関する認識の相違	共同	2023 年 7 月	日本医療薬学会フレッシュ・カンファレンス	中山七海、平大樹、横井正之、清水岳人、宇野光裕、神森浩司、加藤史恵、蓮元憲祐		学会発表

III 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

IV 学会等および社会における主な活動

1998 年 4 月～2006 年 3 月	日本薬学会 会員
1998 年 4 月～2006 年 3 月	日本薬剤学会 会員
1998 年 4 月～2006 年 3 月	粉体工学会 会員
2002 年 4 月～現在	日本医療薬学会会員

2006 年 4 月～現在	日本薬剤師会・兵庫県薬剤師会 会員
2015 年 7 月～現在	日本病院薬剤師会・兵庫県病院薬剤師会 会員
2015 年 9 月～現在	日本緩和医療薬学会会員
2016 年 4 月～現在	公認スポーツファーマシスト
2018 年 2 月～現在	がん哲学外来明石メディカルカフェ主催
2018 年 3 月～現在	がん哲学外来市民学会 会員
2018 年 3 月～2024 年 3 月	認定実務実習指導薬剤師
2018 年 5 月～現在	がん患者グループ ゆずりは明石 会員
2023 年 10 月～現在	がん哲学外来市民学会第 12 回大会 in 京都 実行委員会 委員

V 学内における主な活動

2021 年 6 月～現在	OSCE 実施委員会 委員
2021 年 6 月～2023 年 3 月	長期実務実習委員会 委員
2022 年 4 月～現在	指導薬剤師養成のためのワークショップ 委員
2023 年 4 月～現在	薬学部自己点検・評価委員会 委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	講師	氏名	酒井伸也	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義（身体の科学および分子生物学の授業について）	2013 年 4 月～現在	各講義は指定教科書に沿って行うが、全てを網羅するのではなくテーマごとに要点を絞って講義内容が学生に理解しやすいように授業を行っている。講義はパワーポイント資料を用いて実施し、内容の理解と記憶の定着のため、各単元のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。講義内容に沿った演習を取り入れて、学生の関心・理解度を高めるように工夫している。
2. 小テスト・課題レポートによる学生の講義内容の理解度把握	2013 年 4 月～現在	講義済みの内容については、復習テストとして各単元の講義内容についての小テストを行っている。また、重要な概念や術語については課題レポートにより知識の定着を促すようにした。このように学生の学力評価を適宜おこなう事により、学習効率の向上を図るとともに学生の理解度を把握し迅速に講義内容・方法にフィードバック出来るように工夫している。
3. 「学生による授業評価」の活用	2013 年 4 月～現在	毎学期の後半に行われる授業評価アンケートの結果に基づいて授業が適切に行われているかどうかの判断を行い、全学生が授業を理解し学習効果を向上させるべく、次学期以降の講義内容・方法の改善に役立てている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1. 身体の科学および分子生物学の授業の補助教材作成（ワークノート、小テスト）	2013 年 4 月～現在	講義内容の理解と記憶の定着のため、各講義では授業のまとめプリント（穴埋め式のワークノート）を作成し配布している。また、講義済みの内容の復習として小テストを適宜行っている。
2. 分子生物学実習書	2013 年 4 月～現在	実験内容の立案、計画および予備実験による条件検討を行うとともに、実習書や配布資料などの教材を作成し配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数	備 考
論文						
VEGF-C/Flt-4 axis in tumor cells contributes to the progression of oral squamous cell carcinoma via upregulating VEGF-C itself and contactin-1 in an autocrine manner.	共著	2018	Am J Cancer Res.	Shigetomi S, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Fujii R, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Shimoda M, Kameyama K, Ozawa H, Tomita T, Ogawa K.	8:2046-63.	
Lipopolysaccharide-induced inflammation or unilateral ureteral obstruction yielded multiple types of glycosylated Lipocalin 2.	共著	2016	J Inflamm (Lond).	Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Fujimura A, Koshimizu TA.	3:7.	

Identification of protein arginine N-methyltransferase 5 (PRMT5) as a novel interacting protein with the tumor suppressor protein RASSF1A.	共著	2015	Biochem Biophys Res Commun.	Sakai N, Saito Y, Fujiwara Y, Shiraki T, Imanishi Y, Koshimizu TA, Shibata K.	467:778-84.	
Subcellular localization and internalization of the vasopressin V1B receptor.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	765:291-9.	
Pharmacological lineage analysis revealed the binding affinity of broad-spectrum substance P antagonists to receptors for gonadotropin-releasing peptide.	共著	2015	Eur J Pharmacol.	Arai K, Kashiwazaki A, Fujiwara Y, Tsuchiya H, Sakai N, Shibata K, Koshimizu TA.	749: 98-106.	
Restoration of E-cadherin expression by selective Cox-2 inhibition and the clinical relevance of the epithelial-to-mesenchymal transition in head and neck squamous cell carcinoma.	共著	2014,	J Exp Clin Cancer Res.	Fujii R, Imanishi Y, Shibata K, Sakai N, Sakamoto K, Shigetomi S, Habu N, Otsuka K, Sato Y, Watanabe Y, Ozawa H, Tomita T, Kameyama K, Fujii M, Ogawa K.	33:e40.	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2011 年 11 月～現在	米国生化学分子生物学会会員
2012 年 10 月～現在	日本分子生物学会会員
2012 年 11 月～現在	日本薬理学会会員

Ⅴ 学内における主な活動

2013 年 4 月～2017 年 3 月	入試問題作成教科委員（化学）
2014 年 4 月～2016 年 3 月	生命倫理委員会委員
2014 年 4 月～2017 年 3 月	駅前サテライト運営委員会委員
2014 年 4 月～2017 年 3 月	動物実験施設管理運営委員
2014 年 4 月～現在	バトミントン部部长

所属	薬学部 医療薬学科	職名	講師	氏名	田畑 裕幸	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
①口頭試問による生化学領域の学力向上への工夫	2014年9月～2019年 11月	生化学の基礎的な問題から成る「生化学Ⅱ復習レポート」を2年次学生に提示し、学生が作成したレポートについて、学生自身が本当に理解できているか、口頭試問により個別に確認した。問題の解答は敢えて示さず参考書で学生自身に調べさせた。不合格者には学習期間を与え、再度口頭試問を行った。教員による口頭試問までに学生同士で班分けを行い、練習会を開催するように促し、互いに基礎学力の向上および確認を行う機会とした。
②小テスト実施による生物系領域の学力向上への工夫	2014年9月～現在	生化学Ⅱ（2014年9月～）では毎回の講義で、小テストを実施した。小テストの実施により、学生の自主学習への取り組みを促した。また、小テストの結果は、講義内容への理解度を把握するために活用した。
③E-ラーニングシステムを利用した自主学習の習慣化を促すための工夫	2019年9月～現在	生化学Ⅱ（2014年9月～）では毎回の講義で、紙媒体の演習問題を配布し、次回の講義までに取り組むよう指導した上で、演習問題の模範解答を学生向けの掲示板に後日掲示していた。しかし、模範解答をそのまま転記する学生が後を絶たなかった。そこで、2019年度から薬学部に新規導入されたE-ラーニングシステムへ、演習問題をアップデートした。また、E-ラーニングシステムの画面上で学生が解答した後に模範解答が表示されるように設定した。E-ラーニングシステムでの解答期限は、各回の講義終了後3日以内とした。自主学習の進捗状況はオンラインで適時確認し、未解答者については、個別メールで連絡し、解答するように促した。これにより、学生の自主学習の習慣化を促した。
④Google Classroom を活用した課題添削	2020年4月～現在	薬学部1年次学生を対象とした身体の科学Ⅰおよび薬学部2年次学生を対象とした生化学Ⅱにおいて、Google Classroom を活用した課題添削を行った。学生が授業当日にGoogle Classroom 上で提出した課題について、解答を添削し、システム上で適宜指導を行った。

2 作成した教科書、教材、参考書		
①生化学Ⅱ講義資料の作成	2014年9月	生化学Ⅱの講義で使用するパワーポイント資料を作成した。教科書の理解が困難な学生が自主学習に取り組めるように、イラストやブランク（穴埋め）および暗記用の表を盛り込んだ。
②生化学Ⅱ演習問題の作成	2014年9月	生化学Ⅱの講義に関連する合計48問の演習問題を作成し、各回の講義に対応する演習問題を分割して学生に配布した。
③身体の科学Ⅰ講義資料の作成	2017年4月	身体の科学Ⅰの講義で使用するパワーポイント資料を作成した。教科書の理解が困難な学生が自主学習に取り組めるように、イラストやブランク（穴埋め）および暗記用の表を盛り込んだ。
④身体の科学Ⅰ演習問題の作成	2017年4月	身体の科学Ⅰの講義に関連する合計60問の演習問題を作成し、各回の講義に対応する演習問題を分割して学生に配布した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	著・者の別	発行または発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【著書】						
【論文】 Complement dependent TNF α production in neutrophil-like HL60 cells.	共著	2023年7月	Biochemistry and Biophysics Reports 34, 101465 (2023)	田畑裕幸, 森田寛之, 香山賢一, 通山由美		
【論文】 Vacuolar-type proton ATPase is required for maintenance of apicobasal polarity of embryonic visceral endoderm.	共著	2021年9月	Scientific Reports Vol. 11, Article number: 19355 (2021)	和田(孫) 戈虹, 田畑裕幸, 和田洋		
【論文】 Syk facilitates phagosome-lysosome fusion by regulating actin-remodeling in complement-mediated phagocytosis.	共著	2020年12月	Scientific Reports Vol. 10, Article number: 22086 (2020)	田畑裕幸, 森田寛之, 加地弘明, 通山薫, 通山由美		
【論文】 KIF20A, highly expressed in immature hematopoietic cells, supports the growth of HL60 cell line.	共著	2018年11月	International Journal of Hematology Vol. 108 (6) pp. 607-614 doi:10.1007/s12185-018-2527-y	森田寛之, 松岡亮仁, 木田潤一郎, 田畑裕幸, 通山薫, 通山由美		
【その他】 [学会発表] マウス低分子量GTPase Rab7の初期胚発生における機能解析	共同	2013年10月	第63回日本薬学会近畿支部総会・大会 (同志社女子大学)	◎川村暢幸, 森田梨紗, 殿村真優, 田畑裕幸, 和田洋, 和田(孫) 戈虹		

プロトンポンプV-ATPase G2 アイソフォーム遺伝子欠損マウスの作製とその表現型	共同	2013年10月	第63回日本薬学会近畿支部総会・大会 (同志社女子大学)	◎信真美里, 寺井唯, 竹内美智, 川村暢幸, 田畑裕幸, 和田洋, 和田(孫)戈虹		
Kinesin family member 20A (KIF20A) の多核化と細胞分裂への関与	共同	2015年12月	第88回日本生化学会大会 (神戸国際会議場)	◎森田寛之, 福井彩乃, 小山可奈子, 有馬太陽, 田畑裕幸, 通山由美		
Kinesin family member 20A (KIF20A) のHL60における細胞機能の検討	共同	2016年9月	第89回日本生化学会大会 (仙台国際センター)	◎森田寛之, 有馬太陽, 佐々木彪曜, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美		
白血球細胞株, HL60 における KIF20A (Kinesin family member 20A) の機能の解析	共同	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪薬科大学)	◎有馬太陽, 森田寛之, 松本隆太郎, 田畑裕幸, 通山由美		
SMN (Survival motor neuron protein) のヒト神経芽線維腫細胞における機能の解析	共同	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会 (兵庫医療大学)	◎千崎 智暁, 森田寛之, 森田寛之, 田畑裕幸, 西尾久英, 通山由美		
好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成機構に関わる新規シグナル分子の解析	共同	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会 (兵庫医療大学)	◎千杉谷 朋美, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美		
チロシンキナーゼ Syk によるファゴソームの酸性化と殺菌能の調節	共同	2017年12月	第90回日本生化学会大会 (神戸ポートアイランド)	◎田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美		
食細胞 (好中球様・マクロファージ様細胞) における Protein S100-A8, Protein S100-A9 の機能解析: 好中球様・マクロファージ様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 による検討	共同	2018年9月	第91回日本生化学会大会 (京都国際会議場)	◎田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美		
食作用依存性の MPO 活性化におけるチロシンキナーゼ Syk の機能解析 —好中球様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 による検討—	共同	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会 (姫路獨協大学)	◎岸伸彦, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美		

好中球の Neutrophil Extracellular Traps (NETs) 形成における Protein S100-A8 の機能解析	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総会・大会 (姫路獨協大学)	◎西川達也, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美		
ファゴソーム形成プロセスにおけるチロシンキナーゼ Syk の機能解析 —マクロファージ様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 による検討—	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総会・大会 (姫路獨協大学)	◎大野華子, 森田寛之, 田畑裕幸, 通山由美		
早期臨床体験における医療施設見学と学生がイメージする薬剤師像変化の可視化へ試み	共同	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総会・大会 (姫路獨協大学)	◎河野奨, 田畑裕幸, 炬口真理子, 白木孝		
感染防御に重要なファゴソームの成熟機構 — チロシンキナーゼ Syk からのアプローチ —	共同	2018 年 12 月	第 21 回西播・姫路医療セミナー (姫路商工会議所)	◎田畑裕幸		
チロシンキナーゼ Syk によるファゴソーム成熟機構の調節	共同	2019 年 5 月	第 66 回日本生化学会近畿支部例会 (京都大学宇治キャンパス宇治おうばくプラザ)	◎田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美		
チロシンキナーゼ Syk はファゴソーム膜における F-アクチン形成を調節する	共同	2019 年 9 月	第 92 回日本生化学会大会 (パシフィコ横浜)	◎田畑裕幸, 森田寛之, 通山由美		
CRISPR-Cas9 を利用したシグナル分子ノックアウト細胞の構築と TNF- α 産生への影響 —ヒト白血病細胞株 HL60 を用いた検討—	共同	2019 年 10 月	第 69 回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸薬科大学)	◎柴田知明, 田畑裕幸, 通山由美		
Syk Plays an Essential Role in Phagosome-Lysosome Fusion By Facilitating Actin-Remodeling in Complement-Mediated Phagocytosis	共同	2019 年 12 月	ASH2019 第 61 回米国血液学会議 61st American Society of Hematology (ASH) Annual Meeting and Exposition (米国・オーランド・Orange County Convention Center)	◎通山由美, 田畑裕幸, 通山薫		
Protein - Tyrosine Kinase, Syk Accelerates Phagosome Maturation by Depolymerizing F - Actin in Complement - Mediated Phagocytosis	共同	2020 年 4 月	ASBMB2020 米国生化学・分子生物学会議 American Society for Biochemistry and Molecular Biology (ASBMB) Annual Meeting (米国・サンディエゴ・San Diego Convention Center) 新型コロナウイルス感染症拡大のため、誌上開催 (The FASEB Journal	◎田畑裕幸, 通山由美		

			34(S1):1-1)			
好中球様細胞における補体刺激依存的な TNF- α 産生-ヒト白血病細胞株 HL60 細胞を用いた検討-	共同	2021 年 5 月	第 67 回日本生化学会近畿支部例会 (奈良先端科学技術大学院大学: WEB 会議ツール (Zoom) によるオンライン開催)	◎田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美		
SMN(Survival motor neuron protein) のヒト神経芽腫細胞 (SK-N-BE(2)c) における機能の解析	共同	2021 年 10 月	第 71 回日本薬学会近畿支部総会・大会 (近畿大学: WEB 会議ツール (Zoom) によるオンライン開催)	◎田中葉月, 田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美		
補体受容体刺激による炎症性サイトカイン TNF- α 産生機構の解析 -ヒト白血病細胞株 HL60 による検討-	共同	2021 年 10 月	第 71 回日本薬学会近畿支部総会・大会 (近畿大学: WEB 会議ツール (Zoom) によるオンライン開催)	◎境あかり, 田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美		
S100A8、S100A9 の発現制御と細胞外放出機構の解析: 好中球様に分化したヒト白血病細胞株 HL60 における検討	共同	2021 年 11 月	第 94 回日本生化学会大会 (Web 開催)	◎香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美		
S100A8、S100A9 の NETs 形成における機能の解析	共同	2022 年 5 月	第 68 回日本生化学会近畿支部例会 (滋賀医科大学)	◎香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美		
補体刺激は好中球様細胞に TNF- α を産生させる -ヒト白血病細胞株 HL60 細胞を用いた検討-	共同	2022 年 5 月	第 68 回日本生化学会近畿支部例会 (滋賀医科大学)	◎田畑裕幸, 香山賢一, 通山由美		
脊髄性筋萎縮症 (spinal muscular atrophy: SMA) モデル細胞の作製 ヒト神経芽細胞腫 (SK-N-BE(2)c) を用いた検討	共同	2022 年 10 月	第 72 回日本薬学会関西支部例会 (摂南大学)	◎松井啓斗, 香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美		
57. 好中球様に分化した HL60 細胞における S100A8 および S100A9 の機能の解析	共同	2022 年 11 月	第 95 回日本生化学会大会 (名古屋国際会議場)	◎香山賢一, 田畑裕幸, 通山由美		

58. SMA モデル細胞を通した SMN の機能の検討：ヒト神経芽腫細胞株 SK-N-BE(2)-C における検討	共同	2023 年 5 月	第 69 回日本生化学会近畿支部例会（京都大学）	◎香山賢一，田畑裕幸，通山由美		
59. 好中球様に分化した HL60 細胞における S100A8、S100A9 の機能及び制御の解析	共同	2023 年 11 月	第 96 回日本生化学会大会（福岡国際会議場）	◎香山賢一，田畑裕幸，通山由美		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2000 年 5 月～現在	日本生化学会
2005 年 5 月～現在	日本薬学会
2008 年 5 月～現在	日本細胞生物学会

Ⅴ 学内における主な活動

2015 年 4 月～2016 年 3 月	国試対策卒試委員会委員
2016 年 4 月～2017 年 3 月	国試対策委員会委員
2016 年 4 月～2018 年 3 月	オープンキャンパス委員
2015 年 4 月～現在	組換え DNA 実験安全管理委員会委員
2016 年 4 月～2019 年 4 月	薬剤師国家試験問題検討委員会委員
2016 年 4 月～2019 年 3 月	入試対策委員
2016 年 4 月～2022 年 3 月	早期体験実習委員会委員
2017 年 4 月～2023 年 3 月	学習支援センター運営委員
2017 年 4 月～2020 年 3 月	薬学教育推進委員会委員
2018 年 4 月～2023 年 3 月	国際交流センター委員
2020 年 4 月～現在	薬学部入試広報委員
2021 年 4 月～現在	入試教科委員（生物）
2021 年 4 月～2023 年 3 月	ホームページ検討委員
2023 年 4 月～現在	薬学部教育改善実施（FD）委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	中山 優子	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	-------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
⑰ 講義における資料の工夫	2021 年-現在	・薬学部3年次での「薬剤学」ではWeb クラスを開設し講義終了後に振り返りを目的としグループフォームにて確認問題及び講義アンケートを当日中に実施することで学生の自己評価を促すとともに知識の定着を目的としている。確認問題の解説とまとめの資料については次回の講義で配付し講義冒頭での導入時間を設けている。 ・「日本薬局方」では毎回の講義で確認問題・解説を行い前半及び後半クールに練習問題・解説を配付し復習時間の確保に努めている。 講義資料についてはカラーA4 冊子（2 スライド/1 ページ）とし余白を設けることで記入し易い形式を採用した。
⑱ 学生実習における学生の集中度を高めるための工夫	2021 年-現在	・薬学部4年次での「薬剤学実習」「模擬薬局実習」ではWeb クラスにて手技動画を視聴できる環境を整えている。「薬剤学実習」では少人数のグループとし実施期間中に取組む実習項目数を適切にすることで学生の集中度を高めている。「模擬薬局実習」では振り返り自己評価（日誌）に手書きでコメントを添え質疑応答やアドバイスを丁寧に行うことで学生の意欲向上を図った。
⑲ 発表会等における工夫	2013-2018 年 ^(*) 2021 年 ^(*)	実務実習報告会 ^(*) 及び卒業研究発表会 ^(*) において、学生発表の準備段階ではスケジュール管理、要旨冊子の作成、発表練習会でのフィードバックを行った。発表会当日では、発表学生のマイク準備、聴衆の順路確保やポスターが見やすいよう配置するなど、学生間の討議がスムーズに行えるよう座長を務めた ^(*) 。
2 作成した教科書、教材、参考書		
	2021 年-現在	本学での講義及び実習等に関する講義資料を作成 1 年次「薬学概論」（2023 年のみ、1 コマ） 3 年次「薬剤学」13 コマ「日本薬局方」5 コマ 4 年次「薬学応用演習」「薬剤学実習」「模擬薬局実習」 5 年次「実習中の復習講義（薬剤）」 6 年次「薬学総合演習」「卒業研究」
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンス	2013 年-2015 年	実施分担者
病院・薬局実務実習（5 年次）	2013 年-現在	薬学部実務実習に伴う初回～終盤訪問
日本薬学会近畿支部総会・大会	2018 年 10 月	第 68 回日本薬学会近畿支部総会・大会（姫路獨協大学主催）
1 Day University 東洋大附属中学校・高等学校講義	2021 年 7 月	実施協力者
FD 活動	2021 年-現在	薬学部におけるカリキュラム改正
2021 年度姫路獨協大学卒後教育セミナー		第 10 回卒後教育セミナー（製剤学研究室主催）

薬学共用試験 CBT 新入生歓迎会 OSCE 実施委員 ワークショップ・会議	2022 年 2023 年 5 月 2023 年-現在 2023 年 5 月 2023 年 7 月 2023 年 8 月	第 17 期薬学共用試験 CBT 問題作成 実施責任者 ステーション副責任者、サポートスタッフ 第 108 回薬剤師国家試験問題検討委員会（薬剤：徳島文理大学） 第 118 回認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿（大阪医科薬科大学） 薬剤学教科担当教員会議（薬剤：静岡県立大学）
---	---	---

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【論文】 Induction of epithelial-mesenchymal transition via activation of epidermal growth factor receptor constitutes to sunitinib resistance in human renal cell carcinoma cell lines.	共著	2015	J. Pharmacol. Exp. Ther. (355・2)	Atsushi Mizumoto, Kazuhiro Yamamoto, Yuko Nakayama, Kohji Takara, Tsutomu Nakagawa, Takeshi Hirano and Midori Hirai.	152-158	
The interaction between oral melphalan and gastric antisecretory drugs Impact on clinical efficacy and toxicity.	共著	2016	Mol. Clin. Oncol. (4・2)	Fumiaki Kitazawa, Yoko Kado, Kumi Ueda, Takatoshi Kokufu, Shin-ichi Fuchida, Akira Okano, Mayumi Hatsuse, Satoshi Murakami, Yuko Nakayama, Kohji Takara, Chihiro Shimazaki.	293-297	
Combination of lenalidomide and low-dose dexamethasone therapy promotes the anticoagulant activity of warfarin in patients with immunoglobulin light-chain amyloidosis.	共著	2017	Oncol. Lett. (14・1)	Fumiaki Kitazawa, Shin-ichi Fuchida, Fumitaka Ise, Yoko Kado, Kumi Ueda, Takatoshi Kokufu, Akira Okano, Mayumi Hatsuse, Satoshi Murakami, Yuko Nakayama, Kohji Takara, Chihiro Shimazaki.	475-479	
Pharmacokinetic interaction between tacrolimus and fentanyl in patients receiving allogeneic hematopoietic stem cell transplantation.	共著	2017	Ann. Transplant. (26・22)	Fumiaki Kitazawa, Shin-ichi Fuchida, Yoko Kado, Kumi Ueda, Takatoshi Kokufu, Akira Okano, Mayumi Hatsuse, Satoshi Murakami, Yuko Nakayama, Kohji Takara, Chihiro Shimazaki.	575-580	
Analysis of time-to-onset and onset-pattern of interstitial lung disease after the administration of monoclonal antibody agents.	共著	2018	Yakugaku Zasshi (138・12)	Fusao Komada, Yuko Nakayama, Kohji Takara.	1587-1594	
Induction of Cross-resistance to ABCB1 Substrates in Venetoclax-resistant Human Leukemia HL60 Cells.	共著	2021	Anticancer Res. (41・9)	Yuko Nakayama, Kohji Takara, Tetsuya Minegaki, Kazuhiro Yamamoto, Tomohiro Omura, Ikuko Yano.	4239-4248	
Molecular Characteristics of Everolimus-resistant Renal Cell Carcinoma Cells G	共著	2023	Anticancer Res. (43・10)	Yuko Nakayama, Daichi Enomoto, Kazuhiro Yamamoto, Kohji	4349-4357	

enerated by Continuous Exposure to Everolimus.				Takara.		
医薬品情報学掲載論文からみた医薬品情報学に関する研究動向の解析	共著	2012	医薬品情報学 (14・1)	木下淳, 中山優子, 駒田富佐夫	26-34	
デキサメタゾンの投与量が乳がん患者に対するドセタキセルおよびシクロホスファミド療法の皮膚毒性に及ぼす影響	共著	2017	医療薬学 (43・6)	北澤文章, 藤田佳史, 角陽子, 上田久美, 中山優子, 高良恒史, 国府孝敏	313-319	
同種造血幹細胞移植時に発現する口腔粘膜炎の重症度に影響を与えるリスク因子	共著	2018	日本病院薬剤師会雑誌 (54・9)	北澤文章, 片山実佳, 村山和子, 森本拓也, 上田久美, 中山優子, 高良恒史, 佐原敏之, 淵田真	1126-1130	
モノクローナル抗体医薬品による血液に対する有害事象の発症時期ならびに発症パターンに関する調査	共著	2018	医薬品情報学 (20・2)	駒田富佐夫, 中山優子, 高良恒史	72-80	

【その他】

・国際学会 一般講演

1. Yuko Nakayama, Kohji Takara, Tetsuya Minegaki, Kazuhiro Yamamoto, Ikuko Yano: Molecular characteristics of human leukemia cell line after the long-term exposure to the Bcl-2 inhibitor ABT-199. The 2nd International Cancer Research Symposium of Training Plan for Oncology Professionals, Osaka, Japan, 2019

・国内学会 一般講演

1. 中山優子, 高橋 稔, 中村 任, 奥村勝彦, 高良恒史, ヒト腎癌由来 Caki-2 細胞株に対するエベロリムス長期曝露の影響、第 33 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪、2012
2. 中山優子, 高良恒史, 高橋 稔, 奥村勝彦, エベロリムスで長期曝露したヒト腎癌細胞株由来 Caki-2 の細胞特性、日本薬学会第 132 年会、札幌、2012
3. 高橋 稔, 高良恒史, 中山優子, 奥村勝彦, ヒト由来癌細胞株の DNA メチル化と抗癌剤感受性の関連性、日本薬学会第 132 年会、札幌、2012
4. 中山優子, 高橋 稔, 奥村勝彦, 高良恒史, エベロリムスの長期曝露がヒト腎癌細胞株に及ぼす影響、第 62 回日本薬学会近畿支部総会・大会、西宮、2012
5. 水本篤志, 山本和宏, 宇田篤史, 中山優子, 高良恒史, 中川 勉, 平野 剛, 平井みどり, MAPK-STAT3 シグナル変動解析によるマルチキナーゼ阻害薬治療アルゴリズムの確立、日本薬学会第 134 年会、熊本、2014
6. 岩切悦子, 植村尚久, 橋本夏実, 菊地晴久, 大島吉輝, 瀬谷和彦, 古川賢一, 中山優子, 高良恒史, 木下淳, 駒田富佐夫, マウス胚由来腫瘍細胞から拍動心筋細胞への分化に及ぼす分化誘導剤の併用効果の検討、日本薬学会第 134 年会、熊本、2014
7. 中山優子, 宮本優治, 高橋 稔, 高良恒史, 分子標的治療薬エベロリムスの長期曝露が抗癌剤感受性に及ぼす影響、日本薬学会第 134 年会、熊本、2014
8. 水本篤志, 山本和宏, 高良恒史, 中山優子, 中川勉, 平野剛, 平井みどり, 腎臓癌におけるアキシチニブとスニチニブの EMT に及ぼす効果の比較－戦略的な RCC 治療を目指して－、第 64 回日本薬学会近畿支部総会・大会、京都、2014
9. 松尾実菜, 矢野賢明, 小林有希子, 石田陽栄, 中山優子, 高良恒史, 菊地晴久, 大島吉輝, 木下 淳, 駒田富佐夫, 心筋細胞分化誘導物質 Br-DIF-1 のアルキル側鎖が心筋細胞への分化に及ぼす効果、日本薬学会第 135 年会、神戸、2015
10. 山本彩佳, 峯垣哲也, 棚橋真実, 宮本恵輔, 荒木 悠, 稲垣恵未, 林 絵里, 伊藤 恵, 吉本咲貴, 中山優子, 高良恒史, 辻本雅之, 西口工司, Poly (ADP-ribose) polymerase 阻害剤 Veliparib 耐性ヒト乳癌細胞株の樹立とその特性、日本薬学会第 135 年会、神戸、2015.
11. 中山優子, 山本和宏, 峯垣哲也, 木下 淳, 高良恒史, アキシチニブで長期曝露したヒト腎臓癌由来 Caki-2 の細胞特性、日本薬学会第 135 年会、神戸、2015

12. 水本篤志、山本和宏、高良恒史、中山優子、中川 勉、平野 剛、平井みどり、腎細胞癌におけるスニチニブ不応性および耐性メカニズムの探索、日本薬学会第 135 年会、神戸、2015
13. 中山優子、深澤郁也、木下 淳、峯垣哲也、山本和宏、高良恒史、アミノ酸トランスポーターを標的としたシスプラチン耐性の克服、第 25 回日本医療薬学会年会、横浜、2015
14. 峯垣哲也、荒木 悠、稲垣恵未、林 絵里、山本彩佳、松本彩夏、森山由美、和田明莉、伊藤恵、吉本咲貴、棚橋真 実、宮本恵輔、中山優子、辻本雅之、高良恒史、西口工司、Poly (ADP-ribose) polymerase 阻害剤耐性乳がん細胞株の樹立とその耐性メカニズムの解明、日本薬学会第 136 年会、横浜、2016
15. 水本篤志、山本和宏、七里博章、中山優子、高良恒史、中川 勉、平井みどり、腎癌細胞株のスニチニブ不応性・耐性に対する EGFR 阻害薬の効果、日本薬学会第 136 年会、横浜、2016
16. 中山優子、木下 淳、峯垣哲也、山本和宏、高良恒史、アミノ酸トランスポーターの発現と抗癌剤耐性との関連性、日本薬学会第 136 年会、横浜、2016
17. 中山優子、木下 淳、峯垣哲也、山本和宏、高良恒史、ABCB5 発現抑制によるシスプラチン耐性の誘導、日本薬学会第 136 年会、横浜、2016
18. 北澤文章、淵田真一、伊勢文孝、角陽子、上田久美、国府孝敏、岡野晃、初瀬真弓、村頭智、中山優子、高良恒史、島崎千尋、AL アミロイドーシス患者のワルファリン抗凝固活性に及ぼすレナリドミド/低用量デキサメタゾン療法の影響、第 41 回日本骨髄腫学会学術大会、徳島
19. 北澤文章、藤田佳史、角陽子、上田久美、中山優子、高良恒史、佐原敏之、国府孝敏、乳がんでのドセタキセル/シクロホスファミド (TC) 療法による皮膚毒性に及ぼすデキサメタゾン投与量の影響、第 27 回日本医療薬学会年会、千葉、2017
20. 中山優子、大西晃、山本成人、峯垣哲也、山本和宏、高良恒史、抗癌剤耐性細胞におけるアミノ酸トランスポーターの発現解析、日本薬学会第 138 年会、金沢、2018
21. 宗野鷹仁、峯垣哲也、坂井朋代、棚橋真美、宮本恵輔、荒木悠、稲垣恵未、林絵里、山本彩佳、北野美鈴、齊藤愛子、中山優子、辻本雅之、高良恒史、西口工司、DNA 損傷修復能に着目した PARP 阻害剤耐性機序に関する検討、日本薬学会第 138 年会、金沢、2018
22. 吉越静香、北澤文章、村山和子、森本拓也、上田久美、中山優子、高良恒史、佐原敏之、淵田真一、島崎千尋、同種造血幹細胞移植時の口腔粘膜炎の発現および重症度に及ぼす前処置の影響、第 28 回日本医療薬学会年会、神戸、2018
23. 中山優子、高良恒史、峯垣哲也、山本和宏、矢野育子、新規 Bcl-2 選択的阻害剤の長期間曝露がヒト白血病細胞株に及ぼす影響、日本薬学会第 139 年会、千葉、2019
24. 中山優子、高良恒史、山本和宏、大村友博、矢野育子、消化管上皮細胞モデルにおける ABCB1 発現・機能に及ぼすエベロリムス長期曝露の影響、日本薬学会第 141 年会、広島、2021
25. 松川美佐子、小山紗矢、谷田佳香、白木孝、黒田英津子、竹内敦子、都出千里、中山優子、寺岡麗子、患者宅で保存される注射剤混合高カロリー輸液の安定性評価ーエルネオハ輸液に混合した塩酸メトクロプラミドの保存安定性ー、第 31 回日本医療薬学会年会、名古屋、2021
26. 北澤文章、中山優子、高良恒史、佐原敏之、辻川正彦、イキサゾミブ/レナリドミド/デキサメタゾン (IRd) 療法と制酸薬の薬物間相互作用ーIRd 療法の抗腫瘍効果を 減弱させる可能性ー、第 31 回日本医療薬学会年会、名古屋、2021
27. 橋本佳奈、大澤祉恩、榎本大智、中山優子、高良恒史、消化管上皮及び肝細胞モデルでの漢方薬による薬物動態制御因子の発現変動、第 73 回日本薬学会関西支部総会・大会
28. 山内瑠七、青木沙樹、榎本大智、中山優子、高良恒史、クリゾチニブ長期曝露による A549 細胞の耐性獲得とその細胞特性、第 73 回日本薬学会関西支部総会・大会
29. 寺岡麗子、竹内敦子、都出千里、松川美佐、中山優子、ブロムヘキシシン塩酸塩注射液の安定性に関する検討、33 回日本医療薬学会年会、仙台、2023
30. 中山優子、紙川幸子、中島大智、三木豪人、成田朱里、増田智先、腎全摘後の tacrolimus 負荷による腎間質線維化モデルラットの作成、日本薬学会第 144 年会、横浜、2024

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2012 年 4 月-現在	日本薬学会会員
2013 年 4 月-現在	日本医療薬学会会員

Ⅴ 学内における主な活動

2021 年 4 月-現在	OSCE 実施委員
2022 年 10 月	選挙管理委員
2023 年-現在	薬学教育推進委員
	薬学教育支援室（協力員）
	薬剤師国家試験問題検討委員会委員（薬剤）
	労働安全衛生委員
	生命倫理委員
	毒物及び劇物管理委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	村重 諒	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦)年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
① 講義・実習内容の質的向上への工夫	2012年4月～現在	・講義では構造式を明快に大きく記載したプレゼン資料を作成し、板書でも同様に記述することを心がけている。 ・講義中の口頭での説明では、重要な内容を何度も繰り返し説明することを心がけている。 ・実習では実験装置の概要や操作手順をわかりやすく図示することで、学生の理解度の向上と円滑な実習進行に寄与した。
② 講義内容の理解度向上への工夫	2012年4月～現在	・時間の制約上、講義中の説明が不十分であったり、追加すべき点について完結に整理した補助プリントを作成し、配布した。
③ 学生による授業評価の活用	2012年4月～現在	・本学が実施している授業評価アンケート閲覧と続く自己点検評価を通じて、学生のニーズと講義での問題点を把握し、次年度へのフィードバックを行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特筆すべき事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・編者	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】 特筆すべき事項なし						
【論文】 ① Asymmetric and efficient synthesis of homophenylalanine derivatives via Friedel-Crafts reaction with trifluoromethanesulfonic acid	共著	2008年9月	Tetrahedron Letters, 49(46), 2008	Y. Hayashi, M. Hashimoto	6566-6568	
② Effective synthesis of optically active trifluoromethyldiaziriny Homophenylalanine and Aroylanine derivatives with the Friedel-Crafts reaction in triflic acid.	共著	2009年6月	Bioscience, Biotechnology and Biochemistry, 73(6), 2009	Y. Hayashi, Y. Hatanaka, M. Hashimoto	1377-1380	

③ Comparisons of <i>O</i> -acylation and Friedel-Crafts acylation of phenols and acyl chlorides and Fries-rearrangement of phenyl esters in trifluoromethanesulfonic acid: Effective synthesis of optically active homotyrosines	共著	2011年1月	Tetrahedron, 67(3), 2011	Y. Hayashi, S. Ohmori, A. Torii, Y. Aizu, Y. Muto, Y. Murai, Y. Oda, M. Hashimoto	641-649	
④ Genotoxicity-suppressing effect of aqueous extract of <i>Connarus ruber</i> cortex on cigarette smoke-induced micronuclei in mouse peripheral erythrocytes	共著	2015年9月	<i>Genes and Environment</i>	T. Nakamura, Y. Ishida, K. Ainai, S. Nakamura, S. Shirata, K. Murayama, S. Kurimoto, K. Saigo, S. Tsuda, Y. F. Sasaki	37:17	
⑤ Versatile synthesis of 3,4-dihydroisoquinolin-1(2 <i>H</i>)-one derivatives via intra-molecular Friedel-Crafts reaction with trifluoromethanesulfonic acid	共著	2015年2月	<i>Tetrahedron Lett.</i>	Y. Ohtsuka, K. Sagisawa, M. Shiraishi	3410-3412	
⑥ Detection of in vitro genotoxicity of pro-mutagens using the comet assay under human and rat liver S9 fractions	共著	2018年7月	<i>MOJ Toxicol.</i>	S. Kawaguchi, T. Nakamura, S. Tsuda, <u>R. Murashige</u> , Y. F. Sasaki	255-261	
⑦ 人工的なクロスリンク形成による細菌の細胞壁アーキテクチャ再構築	単著	2021年4月	ファルマシア	<u>村重 諒</u>	228	
⑧ Genotoxicity-Suppressing Effect of <i>Sophora japonica</i> L. Aqueous Extract	共著	2022年1月	<i>Journal of Complementary and Alternative Medical Research</i>	Yuki Tahara, Satomi Hayashi-Shita, Takanori Nakamura, <u>Ryo Murashige</u> , Kayoko Yamasaki, Katsutoshi Matsumoto, Akira Hasegawa, Takayuki Saito, Kumiko Sato, Tetsuo Honma, Ayumi Yamamoto, Hirotsada Arai, Yoshihiro Kadoma, Satomi Kawaguchi, Yasuaki Kikuchi, Kazuyuki Furuy, Yu F. Sasaki	16-26	
【その他】 特筆すべき事項なし						

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2008 年 4 月～現在	公益社団法人日本化学会
2009 年 1 月～現在	公益社団法人日本薬学会
2011 年 4 月～現在	社団法人有機合成化学協会

Ⅴ 学内における主な活動

2011 年 12 月～2013 年 10 月	第 25 期、26 期 学友会特別会員代表
2012 年 4 月～2017 年 3 月	毒物及び劇物管理委員会委員
2017 年 4 月～現在	危険物管理委員
2018 年 12 月～現在	学友会運営委員

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	安岐健三	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
物理化学実習	2020 年 6 月 25 日	遠隔授業のための実験を行い、内容が理解しやすい写真を撮影した。
基礎実験	2020 年 9 月	遠隔授業のための実験を行った。
物理・化学系統合演習	2020 年 11 月 15 日	PC を使った発表資料の作成の補助をした。
分析化学実習	2021 年 1 月 27、2 月 2 日	NMR 装置に概要を解説した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・ 者別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数	備 考
【著書】						
【論文】 1. Real-time in-situ ^1H NMR of reactions in peptide solution: preaggregation of amyloid- β fragments prior to fibril formation 2. Side-chain conformers to allow conversion from normal to isoaspartate in age-related proteins and peptides 3. Isomerization of aspartyl residue in amyloid beta fragments: The kinetics by real-time ^1H NMR under neutral and basic conditions	共著	2020 年 8 月 2020 年 11 月 2020 年 10 月	Pure and Applied Chemistry (92) BBA-Proteins and Proteomics (1868) J. Soln. Chem. (49)	E. Okamura, K. Aki K. Aki, E. Okamura	1575-1583 (9) 140483 1293-1303	
【その他】						

III 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等

IV 学会等および社会における主な活動

--	--

V 学内における主な活動

--	--

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	内田和彦	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1. 学生へのわかりやすい講義の工夫、 ならびに資料の作成（分子生物学 I、 分子生物学実習、生命倫理）	2020 年 4 月～現在	講義内容の要点を明確にして、全学生が誤解なく理解できるように、用語の定義や意味を明確にするような授業を行っている。プリントやパワーポイントといった復習や自己学習しやすい教材を活用し、また概念図、模式図、自身が撮影した写真、動画を用いて解説し、加えて歴史的な説明を行うことで、知識的、感覚的に受け入れやすい工夫を行っている。
2. データ「学生による授業評価」の 活用	2020 年 4 月～現在	2020 年度から 2022 年度まで、コロナ禍のため遠隔講義などの特殊な形式で講義が行われた。このとき本学が実施したアンケート結果と、2023 年度の通常講義時のアンケート結果の比較を通じて、長所、短所を深く理解し、以降の講義に備えている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
授業、実習の補助教材作成補助	2020 年 4 月～現在	授業及び実習の円滑な進行のために、各講義の資料やプリント、実習書を印刷、配布して、学生全体にいきわたるようにしている。分子生物学 I、分子生物学実習、生命倫理の担当分に関しては独自のパワーポイント用スライドを作成している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著の別	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数	備 考
【論文】						
Kinetochore stretching-mediated rapid silencing of the spindle-assembly checkpoint required for failsafe chromosome segregation.	共著	2021	Curr Biol	Uchida KSK, Jo M, Nagasaka K, Takahashi M, Shindo N, Shibata K, Tanaka K, Masumoto H, Fukagawa T, Hirota T	31: 1581-91	
Prolonged mitosis causes separase deregulation and chromosome nondisjunction.	共著	2021	Cell Rep	Shindo N, Otsuki M, Uchida KSK, Hirota T	34: 108652	
Cdk1-mediated DIAPH1 phosphorylation maintains metaphase cortical tension and inactivates the spindle assembly checkpoint at anaphase.	共著	2019	Nat Commu	Nishimura K, Johmura Y, Deguchi K, Jiang Z, Uchida KSK, Suzuki N, Shimada M, Chiba Y, Hirota T, Yoshimura SH,	10: 981	

				Kono K, Nakanishi M		
HP1-assisted Aurora B kinase activity prevents chromosome segregation errors.	共著	2016	Dev Cell	Abe Y, Sako K, Takagaki K, Hirayama Y, Uchida KSK, Herman JA, DeLuca JG, Hirota T	36: 487-97	
CAMP (C13orf8, ZNF828) is a novel regulator of kinetochore-microtubule attachment.	共著	2010	EMBO J	Itoh G, Kanno S, Uchida KSK, Chiba S, Sugino S, Watanabe K, Mizuno K, Yasui A, Hirota T, Tanaka K	30: 130-44	
Kinetochore stretching inactivates the spindle assembly checkpoint.	共著	2009	J Cell Biol	Uchida KSK, Takagaki K, Kumada K, Hirayama Y, Noda T, Hirota T	184: 383-90	
Dynamics of novel feet of fast-moving Dictyostelium cells.	共著	2004	J Cell Sci	Uchida KSK, Yumura S	117: 1443-55	
Myosin II contributes to the posterior contraction and anterior extension during the retraction phase in migrating Dictyostelium cells.	共著	2003	J Cell Sci	Uchida KSK, Kitanishi-Yumura T, Yumura S	116: 51-60	
Novel cellular tracks of migrating Dictyostelium cells.	共著	1999	Eur J Cell Biol	Uchida K, Yumura S	78: 757-66	
【その他】 (総説)						
染色体分配：マルチステップに進む姉妹染色体の分離	共著	2018	実験医学 (増刊)	内田 和彦、 広田 亨	36 巻、 135-41	
Spindle assembly checkpoint: its control and aberration.	共著	2016	DNA replication, recombination, and repair (Springer Japan)	Uchida KSK, Hirota T	429-48	

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2022 年～現在	日本薬理学会
2016 年～現在	日本分子生物学会

Ⅴ 学内における主な活動

特筆すべき事項なし	
-----------	--

所属	薬学部 医療薬学科	職名	助教	氏名	香山賢一	大学院における研究指導担当 資格の有無（無）
----	--------------	----	----	----	------	---------------------------

I 教育活動

教育実践上の主な業績	(西暦) 年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
生化学実習 実習準備、実習用試薬等作成 プレ実験データの作成 実習期間中の学生への指導	2019. 9 ～ 現在	ブラッドフォード法によるタンパク質の定量、SDS-PAGE による各細胞溶解サンプルの振り分けと CBB 染色による解析、ウエスタンブロットティングによる目的タンパク質の解析について。学生が混乱せずわかりやすいように心がけて、機材の配置や試薬等の用意をしている。また、実際に実習に取り組んでもらう際に、分け隔て無く全員に、興味を持ち実習してもらえる様意識してアドバイスなどを行っている。
基礎実験（生物顕微鏡の使い方） 実習準備 実習期間中の学生への指導	2019. 11 ～ 現在	顕微鏡による白血球の観察及びスケッチ、顕微鏡による細胞分裂の確認及びスケッチについて。実際に実習に取り組んでもらう際に、分け隔て無く全員に、興味を持ち実習してもらえる様意識してアドバイスなどを行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特筆すべき事項なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特筆すべき事項なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特筆すべき事項なし		

II 研究活動

著書・論文等の名称	著・共著/編	発行または 発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	備考
【論文】 Structure of the EndoMS-DNA Complex as Mismatch Restriction Endonuclease	共著	2016	STRUCTURE 24(11)	Setsu Nakae , Atsushi Hijikata , Toshiyuki Tsuji , Kouki Yonezawa , <u>Ken-Ichi Kouyama</u> , Kouta Mayanagi , Sonoko Ishino , Yoshizumi Ishino , Tsuyoshi Shirai	1960-1971	
In vivo level of poly(ADP-ribose)	共著	2018	Challenges	Masanao Miwa , Chieri Ida , Sachiko Yamashita , <u>Kenichi Kouyama</u> , Yasuhito Kuroda , Takayuki Eguchi, Narumi Ohta , Teruaki Sato , Masataka Tsuda , Masakazu Tanaka	9 巻:23 (論文番号)	
Single-particle analysis of full-length human poly(ADP-ribose) polymerase 1 (全長human poly(ADP-ribose) polymerase 1 の電子顕微鏡単粒子解析)	共著	2019	Biophysics and Physicobiology 16 巻 (2019)	<u>Kenichi Kouyama</u> , Kouta Mayanagi, Setsu Nakae, Yoshisuke Nishi, Masanao Miwa, Tsuyoshi Shirai	59-67	
Complement dependent TNF α production in neutrophil-like HL60 cells	共著	2023	Biochemistry and Biophysics Reports Volume 34	Hiroyuki Tabata , Hiroyuki Morita , <u>Kenichi Kouyama</u> , Yumi Tohyama	101465	
【学会発表】 Preparation of quantities of recombinant human poly (ADP-ribose) polymerase 1 for structural analysis	共同	2011	第 34 回日本分子生物学会年会	<u>Koyama K</u> , Eguchi T, Morita H, Sakai T, Kamemura K, Nishi Y, Miwa M		
組み替え human poly(ADP-ribose) polymerase 1 の精製とその立体構造解析	共同	2012	第 35 回日本分子生物学会年会	<u>香山 賢一</u> 、 江口 貴之、 森田 寛之、 亀村 和生、 西 義介、 三輪 正直、 白 井 剛		

組み替え human poly(ADP-ribose) polymerase 1 の精製と予備的構造解析 著者	共同	2013	第 86 回日本生化学会大会	香山 賢一、 江口 貴之、 森田 寛之、 亀村 和生、 西 義介、 三輪 正直、 白井 剛		
human poly(ADP-ribose) polymerase 1 の精製と予備的構造解析	共同	2013	第 51 回日本生物物理学会年会	<u>Kenichi Koyama</u> , Kouta Mayanagi, Takayuki Eguchi, Hiroyuki Morita, Kazuo Kamemura, Yoshisuke Nishi, Masanao Miwa, Tuyosi Shirai		
S100A8、S100A9 の発現制御と細胞外放出機構の解析：好中球様に分化したヒト白血球細胞株 HL60 における検討	共同	2021	第 94 回日本生化学会大会	<u>Kenichi Kouyama</u> , Hiroyuki Tabata , Yumi Tohyama		
S100A8、S100A9 の NETs 形成における機能の解析	共同	2022	第 67 回日本生化学会近畿支部例会	<u>Kenichi Kouyama</u> , Hiroyuki Tabata , Yumi Tohyama		
好中球様に分化した HL60 細胞における S100A8 および S100A9 の機能の解析	共同	2022	第 95 回日本生化学会大会	<u>Kenichi Kouyama</u> , Hiroyuki Tabata , Yumi Tohyama		
SMA モデル細胞の作製を通じた SMN の機能の検討：ヒト神経芽腫細胞株 SK-N-BE (2) -C における検討	共同	2023	第 69 回日本生化学会近畿支部例会	<u>Kenichi Kouyama</u> , Hiroyuki Tabata , Yumi Tohyama		
好中球様に分化した HL60 細胞における S100A8、S100A9 の機能及び制御の解析	共同	2023	第 96 回日本生化学会大会	<u>Kenichi Kouyama</u> , Hiroyuki Tabata , Yumi Tohyama		

Ⅲ 研究・研究業績活動（※芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員用）

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等
特筆すべき事項なし			

Ⅳ 学会等および社会における主な活動

2019 年～現在	生化学会会員
-----------	--------

Ⅴ 学内における主な活動

特筆すべき事項なし	
-----------	--